

季題別 高澤良一全句集

目次

■ 一月	1	■ 九月	295
■ 二月	33	■ 十月	339
■ 三月	48	■ 十一月	390
■ 四月	70	■ 十二月	407
■ 五月	112	無季	459
■ 六月	133	季題索引	463
■ 七月	187	あとがき	511
■ 八月	272	著者略歴	512

凡例

当集は左記十二の句集の全句に対して季題別に配列した。

「ねずみのこまくら」(三五八句) 「ももすずめ」(四七五句) 「さざなみやつこ」(七五九句) 「ぱらりとせ」(八四三句) 「鳩信」(六六〇句) 「燕音」(九〇六句) 「宿好」(一、〇一八句) 「随笑」(一、三六〇句) 「寒暑」(一、三二〇句) 「素抱」(一、八三四句) 「石鏡」(一、二三四句) 「暮津」(一、四四五句)。総句数 一一一、二〇二句

集中、「ねず」は句集「ねずみのこまくら」、「もも」は句集「ももすずめ」、「ちん」は句集「さざなみやつこ」、「ぱら」は句集「ぱらりとせ」の略。

季語の分類と配列は博友社「俳句月別歳時記」の「月別」季語分類に準拠した。

前書き、註のあるものはこれを付した。前書き、註が複数句にわたる場合、第一句目のみにそれを付した。

一句に複数の季語が認められる場合、複数の季語にわたって句を収録した。

無季の句（一〇三句）は有季の句群の後に一括して掲載した。

分類された見出し季語は凡そ一、七九二語。

なお、小生の勝手に下記の措置をとった。

新季題として「一ツ火」「薄念仏会」「面掛行列」「高山宵祭」を採用。

季語「あめふらし」の項に「海牛」を含める。季語「雪溪」の項に「氷河」を含める。「蜺蝶」を秋季にいれる。「風入れ」と「虫干」、「花水木（北米原産）」と「水木

の花（アジア原産）」を別季語扱いとする。



好調と云はるる年でありたかり  
神鈴を一つがらんと年歩ます  
落柿舎の年初の苔の常みどり  
平日の氣息確かな年とせん  
待望の景気上向く年ならず  
年男さすれば龍となり舞はん  
年明けの定年といふ大海原  
龜のごと氣長氣儘に年過ごさむ  
年頭の雲一つなき美濃に入る  
喜んで孫に振り回さるゝ年  
年祝ぐに洒落てのむ酒ジンライム  
元日 元朝 歳旦 おおあした 大旦

ばら 燕音 燕音 燕音 燕音 宿好 宿好 随笑 随笑 随笑 素抱 石鏡 かも さも さざ 鳩信 宿好

元日の湯花透く日のあら尊たむと  
宵の年 初昔  
こんな句が先師にありて初昔  
初三十日  
完熟の蜜柑手にせる初三十日  
元旦  
歳旦吟二三打出の小槌より  
歳旦吟何処となく腹座らざり  
宝刀の切字を頼む歳旦吟  
誌上  
歳旦吟古風当風張り合うて  
力んだりするから額縁歳旦吟  
歳旦吟作り今からそんな莫迦な  
新年号用俳句を求められて  
歳旦吟言葉飾らぬ生地の佳さ  
歳旦やからかひ心大事とし  
歳旦吟踏まえ所が大事なり  
歳旦吟大き活字で無難なり

寒暑 燕音 燕音 燕音 素抱 さざ さざ さざ 鳩信 鳩信 鳩信 ばら 燕音 燕音 宿好 宿好 宿好 随笑

回顧詠ばかりに尽きぬ歳旦吟  
歳旦吟それらしく詠む其処が駄目  
むらぎもの据わり処を歳旦吟  
ザラ紙に鉛筆とりて歳旦吟  
銀鼠に空の整ひ大旦  
我が起てる埃の見ゆる大旦  
あべこべに肌着着たるか大旦  
元旦の日が降りてくる鎖樋  
元朝の煙草を買ひにボテボテ着

随笑 随笑 随笑 随笑 寒暑 石鏡 石鏡 石鏡 石鏡 ねず 暮津

走り根と一問一答初雀  
参道に見るべきものは初雀  
初声  
みやうみやうと海はるかより初声す  
安房(保田 嵯峨山 江月)  
フェリー接岸初声の飛び交へる中  
初明り  
六十年寝起きの一問初明り  
初日  
高梢に寄生木昇り初日受く  
初日乗せベコ千両の振分け荷  
淡海を初手に染め上げ大日如来さん  
初日影取り込むソーラーハウスかな

随笑 暮津 暮津 かも かも かも 燕音 燕音 暮津 宿好 宿好 宿好

初鴉 近江八幡  
おめでとうさんと安土の田鳥に  
初鴉安土の田んぼをとんとんと

燕音 燕音 燕音

寒晴  
寒晴れにああと鴉も諾ひて  
寒晴れの飛行物体ジュラルミン  
寒晴れの鼻梁に海の風少し

宿好 宿好 宿好

初雀波切の路地をひゅんと抜け  
初雀トコトコトツと石畳  
初雀羽音を残し消えてをり

燕音 宿好 随笑

宿好 随笑

寒晴れの隣家に来意告げみたる  
寒晴れに正体晒すものばかり

宿好

八郎湯  
やおろちのうみの初東風萱鳴らし

もも

### 初晴

初晴や立枯松にあまねき日

もも

### 初波

初東風に伊勢の神々耳すませ

燕音

初晴れにひとつ体操でもせんか

暮津

楽浪の志賀に初波立ちにけり

燕音

### 初景色

初山河

暮津

### 淑気

初山河大いに羽根を伸ばしけり

随笑

踏みしめて淑気みなぎる御所畳

燕音

じっくりと厠窓より初景色

石鏡

### 乗初

初電車

古亀の池を見渡す初景色

暮津

乗初のディーゼル音に熟睡せり

ばら

### 初富士

白妙の富嶽相模の風表

さざ

乗初の車中キャラメルかほるなり

ばら

### 初筑波

初比叡

さざ

乗初の胸震ひせる高速艇

鳩信

初比叡洛中半分日当りて

燕音

乗初の安房へフェリーの始動音

寒暑

あらまあこのゑに吞まるゝ初筑波

暮津

乗初めのフェリーのうねり臍の浮く

寒暑

### 初東風

初東風

ねず

### 初詣

初社

初東風にそらまめの茎ぐらつけり

ねず

頂へ道の集まる初詣

ねず

樺にも器量のありて初社

さざ

丹沢山系新らの雪置きだるま市

寒暑

初詣羽田航空神社かな

鳩信

だるま市行きの増発バスぎうぎう

寒暑

初に詣でて土の宮風の宮

燕音

市の日が眩し目無しの達磨にも

寒暑

初詣空がずんずん進むなり

宿好

### 歳徳神

年神

人波に旨く乗りけり初詣

宿好

千里眼年神霞む野に立てり

宿好

初詣参道だだつびろきかな

石鏡

### 恵方詣

えほうまいり

こんな日がいつまで続く初詣

暮津

大蘇鉄とは大らかな恵方寺

暮津

蘇鉄の実手にして戻る初詣

暮津

### 七福神詣

### 破魔矢

浅間さん詣で破魔矢を高かかげ

ばら

七福神巡りのバスが停まる寺

寒暑

破魔矢持ち膳所で降りたる夫婦かな

燕音

年賀用生菓子鶴亀しつとりと

石鏡

八幡宮破魔矢握りて五十段

素抱

### 御慶

賀詞

段葛破魔矢と破魔矢すれ違ふ

暮津

恐竜的存在として賀詞述ぶる

ばら

銀髪に破魔矢いとよく映えにけり

暮津

### 年玉

お年玉

### 福達磨

達磨市

青空に銀嶺走るだるま市

寒暑

### 賀状

年賀状

お年玉大尽と街闊歩せり

もも

賀状来て曰くぼちぼちやつてます

もも

屠蘇

大幅に賀状絞るか思案月

鳩信

屠蘇の酔ひ「吉原雀」聞きながら

ばら

ひとまわり上の辰年賀状の主

燕音

年酒

年賀状ああこの人のこの癖字

宿好

舌鼓はらわた鼓打ち年酒

さざ

寿げる墨の光沢年賀状

随笑

膝に来る日差しに年酒出来上がり

ばら

賀状来ぬテレビをテレヴィと書く世代

寒暑

年酒して赤熊のごとく目がすわり

宿好

旧賀状取り出し偲ぶその字面

石鏡

雑煮

初刷

初刷の極彩版は妻子占む

ねず

投函にぶらりと出づる雑煮腹

ねず

滑つこき初刷を取り落としけり

もも

軸物のえびす見下ろす年の膳

もも

庭に富士膝に初刷手に眼鏡

燕音

箸つけて雑煮ケ浦の煤け餅

ぱら

初刷を発利と車中に響かせて

燕音

食積

寝床にて初刷バリと鳴らし読む

寒暑

食積のまづ柔らかきものつまむ

宿好

わが町の航空写真初刷に

素抱

一まめ

手の空く妻今初刷をまどめ読み

素抱

古女囃めば歯ぐきに当りちらしけり

さざ

初刷を寝床に引き込み読めるなり

暮津

数の子

数の子を一ト度噛めば一ト昔

さざ

歯活けて年入れ替る坊廂

門松 松飾

新橋の似たやうな路地松飾り

寒暑

咳こだまりヨウメンシダの林にて

さざ

カーフェリー船首にいつぽん松飾

石鏡

木曾殿の塚に裏白侍らしめ

燕音

飾 輪飾

輪飾も既に六日の乾びやう

随笑

毛むくじやら歯朶打つ暖雨生々し

素抱

船室のノブの輪飾り風に鳴り

寒暑

櫟にしゃきつと朝が来たりけり

燕音

飾海老 伊勢海老

伊勢海老の伊勢を向うに島泊り

鳩信

福寿草自適の日々が待たれけり

宿好

注連飾

石山寺郵便局の大根注連

燕音

春著の子まるぼちやの手を膝の上に

さざ

託る注連・松・牛蒡忘れまじ

宿好

屯せる春著に聳ゆ二万噸

さざ

鏡餅

鏡餅ことし奮発したりけり

宿好

春小袖二人連れなる巴塚

燕音

鏡餅不景気の年重ねけり

宿好

三年坂連れ立ちのぼる春小袖

燕音

宿泊簿記す傍ら鏡餅

寒暑

春小袖うつせる五十鈴川の水

燕音

春著着て乗合自動車内宮前

燕音

別嬪な鳥が来てゐる二日の木

さざ

手毬

橘寺垣を低めに手毬唄

ねず

屑籠に二日の日差し移りけり

宿好

追羽子 羽子

さざ

二日から甲羅干しせる池の亀  
亀の首二日の空へ差し伸べて

暮津

本紅の色に羽子つき了へし空

さざ

書初 筆始

暮津

歌留多

掌が飛んで来るなり歌留多取

宿好

芭蕉に「天津繪に筆の始めは何仏」の句あれば  
購へり筆の始めの追分繪

燕音

万歳

持ちのよきラジオより洩れ御万歳

寒暑

筆始め要らぬところに力入れ

宿好

笑初

日当りに南天の実の笑初

さざ

読初めの今は昔の天竺部

もも

笑ひ初め円空さんのナタバツリ

随笑

玄孫弟子亜浪序文を読初めに  
血湧き肉おどるト伝読初めに

燕音

泣初 初泣

初泣のわつと車中を通りけり

さざ

円空の出遁読み初め「畸人伝」

随笑

二日

ピーナッツつるりとむける二日かな

さざ

使ひ初  
ほうこんな本が出たかとメモ始め

ばら

姫始め

言葉にも嬌め方があり姫始め

宿好

初湯浴ぶ熱きは痒きことと知る

随笑

初漁 漁始

漁始めインターネットてふ海に

随笑

初湯して考えごとは何だっけ

随笑

売初 初売 初商

窯主が湯呑みまけ呉れ初商

鳩信

初湯舟湯口近くに身を沈め

寒暑

二年坂初商の水打てり

燕音

ほうと息大きくついて初湯舟  
湯の里に遊ぶ正月湯三昧

寒暑

角つこの三文駄菓子屋初商

燕音

山の温泉に骨抜きとなる三ケ日

寒暑

初商円空さんのまがひもの

随笑

初湯殿ふぐりすうすうしたりけり

寒暑

初商温泉まんじゅう湯気しゅっしゅ

寒暑

初湯舟五體の透けて捨いろ

寒暑

初売のすずらん通りころりんしゃん

暮津

青年が湯壺へどんと初湯波

寒暑

初商量り売りせる紹興酒

暮津

初湯してうすばんやりとおもふこと  
うる覚え唱歌張り上げ初湯殿

素抱

買初

買初めの色のほのほの五色豆

燕音

初鏡

うろ覚え唱歌張り上げ初湯殿

石鏡

初荷

初荷積む土間凸凹のデコ屋敷

さざ

いつぼんの白長睫毛初鏡

寒暑

初湯 初湯殿

御所に来る尾長を愛でて初座敷

燕音



彈初

弾き初めに瞽女もたらせしおけさ節

随笑

初芝居梅沢某の股旅もの

寒暑

初吟行

美濃衆と駄で落合ひ初吟行

随笑

初芝居苦節云十年の面

寒暑

逗子 小坪  
初吟行鉛筆もて指す洋上富士

暮津

初句会

壁に杖立てかけてあり初句会

宿好

さきざきに富士を眩しむ旅始め

ばら

初句会確かむ紙の裏おもて

随笑

知多半島 篠島行  
心臓の直しが利きて旅始め

鳩信

俳句莫迦ばかり集り初句会

随笑

宮津昭彦さん  
地図好きの方と初旅して三河

鳩信

初燈

手探りの根本中堂初燈明

燕音

何の生簀かんの生簀と知多初旅

鳩信

箒川べりの湯宿の初灯

寒暑

年頭の旅はいつもの顔ぶれで

宿好

初飛脚

膳所泊り夢に行き交ふ初飛脚

燕音

初伊勢

初伊勢や腰の曲がるも何のその

燕音

懐旧  
初飛脚通路も埋まる映画館

素抱

詣で日の天氣がようてお伊勢さん

燕音

初芝居

初伊勢やをろがむ顔も魚のごと

燕音

お伊勢さま詣での多びす顔続々

燕音

初夢に昔のヨイトマケの唄

初伊勢の玉砂利鳴らし往路帰路

燕音

お白州に詰めあるところで初夢覚め

寒暑

お伊勢さん詣で人出のえらき道

燕音

だいそれた初夢をもう見ること無し

暮津

初伊勢の点り初めたる常夜燈

燕音

初夢は尿意に断たれ跡かた無し

暮津

春著着て乗合自動車内宮前

燕音

初寢覚

初伊勢や官憲筋の五六人

燕音

まあまあとみなされてゐて初寢覚

燕音

初伊勢や鳩のくぐもりごゑの中

燕音

三日

宝船ツアーといふはなかりけり

燕音

ふだん着で通し三日も過ぎにけり

もも

初夢

輦れんた台に乗れる初夢大井川

燕音

川床の藻のたゆたひも三日経て

ばら

力在るものと格闘初夢に

燕音

洗ひ場に水走り込む三日かな

ばら

初夢の思ひ出せずにゐる科白

燕音

三日果て金海鼠きんこ色なる鳥羽の空

鳩信

死んでゆく身故の花鳥風月とよ

宿好

遊び田のうすらひつつく三日かな

寒暑

初夢のマンボウ何と畳大

随笑

湯の町の明けて三日の川床鳴る

寒暑

初夢の途中駄目だと思ひけり

随笑

雲蒐むところ三日の風の不二

暮津

三ケ日

腫れものも湯に温もりて三ケ日  
山の温泉ゆに骨抜きとなる三ケ日  
三ケ日おだやか四日風吹いて

寒暑

隆起せる傷跡撫づる寒の入  
さうなのよけふから寒の入なのよ

鳩信  
燕音

四日

ひよろろんと雨の四日のとんびかな  
換気して四日の風に生きづきぬ  
紙幣きつ出す音四日のキャッシュデュイスペンサー  
三ケ日おだやか四日風吹いて  
風出入り四日の旅行代理店

鳩信

告別の膝折る寒の百合の前

風生に「大寒と敵のごとく対したり」の句あれば

ねず

六日祭

奥の間に花奪はい祭の花造り

ばら

湧水の川を養ふ寒日和  
湧水の気泡びびび寒日和  
湧水の川を養ふ寒日和  
供花絶えず絶やさず寒の巴塚  
でかしたる丈艸の墓つつむ寒

暮津

鼻莫迦になるまで寒の通勤路

ばら

出初 梯子乗

次なるは「帆掛」でござい梯子乗  
梯子乗富士へ乗り出す膝八艘

随笑

叡山の寒を背に阿耨多羅

燕音

寒の入

山鳩のごとく身を揉み寒ん払ふ

宿好

火の用心命用心寒最中

宿好

青蓮院(粟田御所)  
掌を打てるどころへ寒の御所の鯉

ぎっくり腰悪寒は馳のやうにくる

寒暑

寒鯉の叡智めぐらすごとくなり

燕音

水差しに水満ちゆける音も寒

暮津

寒鯉を封づ氷の曇りけり

随笑

猫がまだ己押さへて寒の日々

暮津

寒鯉の鰭あほりたる水くろ玄き

素抱

寒中を咲き通す花物好きや

暮津

寒鯉は黎明の色つと動く

暮津

鏡開

新橋の飲屋の鏡開かな

寒暑

寒釣のこつちも見ずに釣れねエと

石鏡

寒の水

寒最中厠で使ふ水の音

暮津

七種 七草

石鏡

寒泳

寒泳者浪子の海を前にせり

ばら

惟然も亦七種摘みけむ七器山

ばら

寒卵

ぶつつける力が余り寒玉子

随笑

七草の朝湯あとから利いてくる

寒暑

お茶碗と同質のおと寒卵

素抱

齋なすなの日髭をたたいてあたりけり

素抱

寒鯉

寒鯉の水押す力鈍りたる

鳩信

齋病床空想 二句の國響郡の俎村

ばら

齋生ふ朝日將軍墓所御前

燕音

隣り村べんぺん草の畦往けば  
寒暑  
なずな季田沼の通夜は泊りがけ  
石鏡  
犬の尿べんぺん草の枯れし穂に  
石鏡

人日

人日の耳搔きの塗り剥けてゐる  
石鏡

鶯替

亀戸天満宮  
頭上を雀ひゆんひゆん鶯替日和かな  
暮津

鶯替や破格の鶯が先づ売れて  
暮津

ひようきんな目をした鶯の替えらるる  
暮津

懐に滑り込ませぬ木彫鶯  
暮津

これみんな鶯替を待つ人の列  
暮津

鶯替の列の後尾はここですか  
暮津

納め鶯大小よくも並べたり  
暮津

携帯の懐中鶯も売られをり  
暮津

十日戎

本覚寺  
初戎 福笹  
暮津

薨見え十日戎の寺はそこ  
暮津

初戎乾びし風が吹きにけり  
暮津

福笹に当り矢紛れなかりけり  
暮津

福笹の大福帳が風に舞ひ  
暮津

偽小判出回る世にして初戎  
暮津

福笹に吊らるゝもののおもしろや  
暮津

真つ赤か十日戎の日暮れ雲  
暮津

初弁天

いやはやの島の階きざはし初弁天  
燕音

初寅

初寅へ車村道飛ばし来ぬ  
さざ

初閻魔

閻魔詣  
道服のだぶだぶ閻魔詣でけり  
随笑

臨濟宗 建長寺派 円応寺  
転読のこゑは肝より初閻魔  
随笑

鎌倉 円応寺  
初閻魔眼光通らぬところ無し  
石鏡

初閻魔鼻腔より息出し入れす  
石鏡

初閻魔凍みを振り切る大木魚  
石鏡

かんばせに転読の風初閻魔  
石鏡

初閻魔転読僧の夷こゑ  
石鏡

餅花 繭玉

餅花に財布の紐のゆるみがち  
寒暑

コンビニの繭玉一寸つつきみぬ  
暮津

松の内

ひととほり読み通さねば松の内  
ばら

地下街は何處へも通ず松の内  
寒暑

松納 松取る

朝からの雀のこゑや松とれて  
さざ

松とれて太田胃散もなべて暇  
素抱

左義長

とんど どんど おんべ  
ねず

飾焚く 爆竹  
三浦半島・長沢、左義長  
孟宗の雄こゑおんべの火中より  
暮津

ふぢづるをきりりとおんべの胴くびれ  
もも

魂消たりおんべの胴の大破裂  
もも

おんべの灰ゆらりと鴉立つごとし  
もも

手負ひめきおんべどしりと崩れけり  
もも

大とんど崩れ腹中覗かする  
ねず

ぶすぶすりとんどに火の手あがりけり  
さざ

とんど火のあやふく立つてをりにけり  
さざ

とんど火の先づは松葉を炙る音  
ばら

とんど火の爆せて肉声聴くごとし  
ばら

ひよつてし  
火 男の踊れるごとくとんどの火  
随笑

とんど火の最初パチパチやがてバン  
寒暑

逗子消防第七分団とんど守る  
暮津

顔そむけどほしとんどの火の壁に  
暮津

どんど焚く中でも松の爆ぜる音  
随笑

鳶口が何本も出でどんど焼き  
暮津

竹鳴るは節破る音どんど焼き  
暮津

左義長の煙の黄竜立ち昇り  
燕音

左義長の心棒燃えて炎々たり  
随笑





日本橋雪が舞ひ来てえらい降り	燕音	屋台倉に屋台眠らせ積もる雪	随笑
泉岳寺粉雪じゃんじゃん降りにけり	宿好	雪積んで陣屋米蔵ねずこ草	随笑
美濃紙の美濃を雪降る頃訪ふて	随笑	雪このまま積もれば音をあく庭の木々	随笑
高山の雪降る街の消火栓	随笑	はやばやと旭岳より積雪報	暮津
雪降りりくつがへらんとする鯉に	随笑	真昼間の山雪のうへ蜘蛛あるく	燕音
雪大降り小降り何処まで読んだっけ	随笑	昼過ぎて雪は本腰入れにけり	随笑
本降りと教へられけりけさの雪	随笑	腸 <small>はらわた</small> が古びん昼の雪ちらちら	随笑
降り甲斐のある雪巨いなる松に	随笑	昼の雪ますます粗くなりけり	随笑
急がねばならぬ暮雪の降りやうや	随笑	湯上りの牛乳昼の雪見つゝ	素抱
雪降れば湯気倍にして饅頭屋	寒暑	舞へる雪津軽こぎんの花つこのやう	ばら
降り出して脇目もふらぬ雪となり	暮津	ふらふらと湯中りに似て舞ふ雪も	素抱
降る雪の意地を失くして水雪に	暮津	雪払ふ音のぶるぶる陣屋前	随笑
難題をもたらせるごと宵の雪	随笑	南天は雪に負ける木払ひやる	随笑
共同湯木目がうれし宵の雪	素抱	なまはげの出る夜を雪の降りしぶる	もも
雪つもる時間たつぷりありにけり	さざ	どぶろくの上澄み雪は夜に入りて	随笑
平橋に続き反橋雪積める	さざ	夜に入りて雪はしぶとさ見せにけり	随笑
太注連の形 <small>かた</small> に波打ち積もる雪	随笑	くらがりに変貌を遂ぐ夜の飛雪	随笑

簡単に了はらぬ年よ除夜も雪	暮津	二階より顔を突き出し雪といふ	さざ
叡山の雪気太肉締めつけぬ	燕音	稀の雪矢鱈せはしくなりにけり	さざ
叡山の雪気柱の朱を剥ぎに	燕音	葉に雪の付ける頃合ありにけり	さざ
顔擦って川原の雪気野天風呂	寒暑	何と雪ワライカワセミ渋い貌	さざ
野天風呂晨 <small>あき</small> の雪気も何のその	寒暑	目覚めては紙と木の家牡丹雪	ばら
雪捨つる雪気に頬の鳴るごとし	素抱	目の前を大きな嘘のやうな雪	ばら
国民休暇村一斉に雪霽	ねず	直ぐなるは直ぐなるままに庭木へ雪	ばら
沙羅の枝に水晶玉の雪霽	ばら	白樺のいつぽん交じる雪景色	ばら
向う三軒睦まじげなる雪霽	随笑	一飛雪 <small>塩原行</small> ひゆうと川面をよぎりけり	鳩信
雪霽光を光追ふ如く	随笑	川端の鴨の口々雪来ると	鳩信
画狂老人真筆雪中笥狩	燕音	暮雪の軸雪村八十二歳筆	鳩信
<small>雪中水芭蕉</small>	燕音	吹雪く町門付三味線剥げるまで	燕音
がしと雪踏みしめ見入る水芭蕉	燕音	太棹に津軽が見える雪んこ見ゆ	燕音
白樺の生の色しかと雪中に	随笑	藪巻に雪まじり雨比叡より	燕音
<small>妙雲寺</small>	寒暑	三年坂「雪やろ」「さうやと思ひます」	燕音
雪中の堂縁近く牡丹の木	随笑	豪雪の爪跡芽木に残りけり	燕音
お白州の格子窓より雪明り	随笑	霰にも雪にもならず唯の雨	宿好
雪明りして岩風呂の岩の相	寒暑		
大雪に竹たちたちとなりけり	随笑		







つられ立つふくら雀の一羽かな  
ひいふつと枝を離るる寒雀  
郡上のなあふくら雀も春駒を  
檻抜けておこぼれ頂戴寒雀

さざ  
さざ  
ばら  
鳩信

暮れてなほ母艦遊びや青木の実  
青木の実神域しんと澄みわたり  
青木の実つやつや銭形平次の碑

素抱  
暮津  
暮津  
暮津

千両 千両の実

千両の実付きのわるき年逝かす  
千両に祝がるる年を重ねけり  
実家から千両貰ふを習ひとす  
千両もて玄閑飾り立てにけり  
千両にいい値がついて街師走

もも  
ばら  
宿好  
宿好  
石鏡

年金にて妻のやりくり冬珊瑚  
こぢんまりした家ばかり冬珊瑚  
閑日に馴れ親しみて冬珊瑚  
見通せるほどに庭透け冬珊瑚  
冬珊瑚鰐暮らしも板につき

宿好  
随笑  
随笑  
素抱  
暮津

万両

万両の向うを通る水のこゑ

宿好

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる  
枝ぶりに齡歴たる寒牡丹

ねず  
もも

藪柑子

木漏れ日の間々差すことも藪柑子

ばら

葉並びの間合又よき冬ぼたん  
口々にこれはこれはの冬ぼたん  
冬ぼたん風に正せるみどりの葉

ばら  
ばら  
ばら

青木の実

顎引いて冬のぼたんを撮る構え  
離れ寄りためつすがめつ冬ぼたん  
手焙に五指峙そばだてて牡丹見る  
火桶より火桶の見ゆる牡丹園  
三箇所に火桶設え牡丹園  
遠近の牡丹に目遣り火桶に手

素抱  
素抱  
素抱  
さざ  
暮津  
暮津  
暮津

冬菊をいとほしむ眼を誰もせり  
冬薔薇ふゆそうび  
バラ枯れて玉簪を遣しけり  
冬そうび虚空を統べて気韻さへ  
冬薔薇妥協なき色不二の白

素抱  
随笑  
随笑  
随笑

遠近の牡丹に目遣り火桶に手

暮津

水仙の初花一本目の香氣

ねず

葉牡丹に父逝きし夜の明けにけり

ねず

水仙の香のつきぬけてゐる夜空

ねず

葉牡丹小ぶりになぶん景気振はずよ

宿好

水仙の葉の尖りくる怒濤音

ねず

葉ぼたんの意気軒昂を買ひ来たる

石鏡

水仙の葉に水仙の葉影凍み

ねず

一二枚落葉挾める葉水仙

もも

ざいと入り水仙季の瑞泉寺

さざ

寒菊 冬菊

冬菊のいちめんそれも麴色  
臍物の如き朝刊取りに冬  
冬菊を前に病ひに勝てるひと  
剪り惜しむ冬菊にして丈長し  
冬菊に佇てばすぐ来る夕べかな

鳩信  
鳩信  
宿好  
素抱  
素抱

ざいと入り水仙季の瑞泉寺  
水仙をぎうと鳴らして活けにけり  
水仙花湊手錠の形して  
水仙の袴の着付け具合かな  
土管坂土管の端に水仙花

さざ  
さざ  
さざ  
ばら  
鳩信

鋸南町

水仙の里を名乗りて旗標

燕音

冬草のあをさ裏返してみても

さざ

水仙花泉下にあまた眠るもの

宿好

たうたうと冬草色して川ながれ

さざ

水仙を四柱に束ね花御堂

随笑

冬青草根こそぎにして発掘溝

随笑

庭先に劍襖の葉水仙

随笑

龍の玉 はずみ玉

随笑

水仙の避けやうもなき潮飛沫

随笑

足音の往き来にふとる龍の玉

さざ

水仙に句帖をひらく男かな

寒暑

龍の玉識れるは龍の玉ばかり

ばら

水仙は今年早くてその見頃

寒暑

龍の玉なんぞ詠む季来たりけり

ばら

校庭の水仙しんと授業中

寒暑

手を入れて見れどまだまだ龍の玉

ばら

大風にうち負かされし水仙花

素抱

本復はまだ先のこと龍の玉

燕音

浦風にあびせ倒さる水仙花

素抱

龍の玉なんぞありそな館とも

宿好

きしきしと水仙畑を過ぐ羽音

石鏡

龍の玉ここはどっこい正念場

随笑

水仙に富士を配せる入賞作

石鏡

龍の玉龍太語録が生きてをり

寒暑

ぴんしゃんと背筋を立てゝ水仙花

暮津

籠る間も時移りをりはずみだま

素抱

水仙は起立国語の授業中

暮津

寒海苔

水仙にばったり倒れ込む波濤

暮津

出刃持つて小柴の寒海苔叩き

素抱

冬の草 冬草 冬青草

なまくら出刃もつて寒海苔叩くかな

素抱

寒海苔を肴に酒はまだ飲むぞ

暮津

初天神

石蓴

冬麗の石蓴浄土を踏みゆけり

随笑

大島紬でんと着込みて初天神

暮津

ひとり来て冬の石蓴の海つぺた

素抱

菅公にゆかりの諸々初天神

暮津

沖を見てゆけば石蓴に足とられ

素抱

太鼓橋こぞりわたれる初天神

暮津

石蓴搔だぶつき気味のゴム胴着

素抱

控えゐる巫女一並び天神花

暮津

大寒 極寒 酷寒

日脚伸ぶ

大寒の底光りせる檜青葉

宿好

草亀の一投足に日脚伸ぶ

石鏡

大寒の蛇口の水のすとすと

随笑

早梅

通り過ぐ木々が陰しく見ゆ大寒

暮津

早梅の芳香よどんではならぬ

素抱

何たること大寒の酒切らすとは

暮津

臘梅

大寒の夜を閉づビロード地のカーテン

暮津

臘梅の嫌ふ日向をきらひけり

ねず

敵寒

極寒をこくと一つ醤油の音

宿好

臘梅に夫婦二組佇める

ねず

酷寒に打たれて覺めぬ梅の性

宿好

臘梅の角ばる花の分光器

さざ

酷寒と蛇口ひねればさう聞こゆ

暮津

祖師堂まで臘梅いろの雨の径

さざ

臘梅も了りと曇れしこゑにいふ  
臘梅のつりがね花に落ちゆく日  
替る替る臘梅に鼻持つてゆきぬ

臘梅の実におやおやと人の倚る  
臘梅の花くたくたになつてをり

とつきの寒紅梅に足止めぬ

### 探梅

もういちまい余分にはおり探梅行

探梅の探しあてたる一二輪

即吟派遅吟派梅を探らんと

早過ぎることは承知の上の探梅

探梅の手土産鳩の豆落雁

探梅といふにはあつさり戻り来ぬ

探梅にうつつを抜かす顔ぶれば

探梅のはてこの道でよいのやら

### 冬桜 寒桜 寒緋桜

ややこしき坂の熱海の寒桜

寒ざくらぱつと咲かせてこの陽気

すいと来て頬赭き鳥寒ざくら

ここ河津緋寒桜の田舎咲き

三度見て三度炎のいろ寒桜

熱海まで見にゆくことに寒桜

寒桜ほつと腕組みながら

彩どりは京劇の赤寒緋桜

ごはんつぶほどのあかるさ冬ざくら

思はずの縁切寺の冬ざくら

冬ざくら花の漂着せる如く

冬ざくら花は直下に零れけり

冬ざくら雨にまみるる外はなく

冬桜風が間引きし花の隙

冬ざくらひとつひとつの花の向き

今着きしばかりの日差し冬桜

妻もまた気がついてをり冬ざくら

冬桜花の手薄なところかな

青空を伝ひくる冷え冬ざくら

ともすれば消え入りさうな冬桜

### 寒椿

痛み分けてふ語がふつと寒椿

寒椿落ちねば心に落としみぬ

### 侘助

侘助の自足の花とおもひみる

### 寒木瓜

鮮しき切り口一つ寒木瓜に

寒木瓜咲き窯元家裏相似たり

巴塚寒木瓜弾け一二輪

寒木瓜の一輪発句を吐くごとし

### 室咲

### 青々忌

室咲きの地味であて興そる花

思ひ及ぶところをずいと青々忌

### 春待つ

春を待つ淡海に心預けんと

待春の肱付き椅子の深さかな

袖の雲脂指で弾きぬ春遠し

春隣向き合うて立つカンガル

春近む音の一つにしづり雪

カテーテル検査にて入院

测温測圧検尿採血春隣

看護婦の大き叱声春隣

大部屋に一つ空き出来春隣

まんぼうはまんぼう泳ぎ春隣

じつとしてやりすごす冬もう少し

走り根にも瘤もつ櫛春近し

伸び縮む鳩の瑠璃首春隣  
春そこに通草細工の鳩車

素抱  
石鏡

僧正のそらそらと豆撒く手  
年の豆日差しに紛れてしまひけり  
大銀杏隆と曙豆を撒く

宿好  
宿好  
宿好  
宿好

節分

みしと来て葉欄に節分まへの雨

石鏡

豆撒きの淡谷のり子のこゑの張り

宿好

明日節分雨草木をうるほして

石鏡

豆撒きの赤鬼さんと青鬼くん

宿好

節分興行びん助一座かつぼれを

石鏡

鬼は外はつきり言おうはつきりと

随笑

挟持ちミス鎌倉の福まねき

石鏡

豆撒けり天下禅林天空に

石鏡

追儼 鬼やらひ

鬼やらひ鬚も凜々しく武蔵丸

宿好

厄落 厄詣

追儼法要転読海東法窟に

石鏡

厄詣帰りの飯店古老肉食ぶ

暮津

びびびびと追儼会の燭伸び縮み

石鏡

二月

法堂に太鼓どんどろ追儼寺

石鏡

春 三春

豆撒 鬼の豆 年の豆 福は内

ねんねこに当つて跳ねる鬼の豆

ばら

春の地震白鷄百羽揺すりたる

ねず

関取の手を放れたる年の豆

ばら

山羊髭の人類学者春を語る

ねず

赤ん坊の笑ひ初めなり福は内

宿好

愛すべき春の擗のその全て  
蛸の木の根の遣り場なき室の春

もも  
さざ

一睡のゆめに磯長の春かもめ

ばら

うたた寝の風太郎にも隅田の春

寒暑

半島のももいろがかる春雑木

ばら

春の瀬戸原付バイクでタタタタと

寒暑

すっかり春我等がビルも霞に入る

ばら

渡し賃七十五円よ瀬戸の春

寒暑

春を感じ来してふ朝の顔に遇ふ

ばら

瀬戸内のおむすび大の春の島

寒暑

醜男のぶの面持ちの春不鯛

ばら

瀬戸内を雑貨など積み春の船

寒暑

心臓の戸口の直し春にせむ

ばら

道後の湯頭まで浸かりおらが春

寒暑

春は華やく音色即興曲岩木

燕音

夫婦して啜るや春のざるぶっかけ

寒暑

大津繪の春さきどりの藤娘

燕音

曇り空春は何處かで足踏みして

素抱

春擗ゆとりをもつて眺めけり

宿好

樹々にこゑ懸けて廻れる春そこに

素抱

俳人諸氏口を揃えて春の詠

随笑

三春のここに始まる濤の音

素抱

馬頭尊春は名のみ野辺の風

随笑

介護バス来るを婆待つ春なれや

素抱

春や春蕪村の武陵桃源圖

随笑

春告げに来る風今か今かとも

素抱

春鴟がやがやフェリーターミナル

寒暑

来る筈の春が何處かで道草す

素抱

房総の春の襖を引きにけり

寒暑

鳴蹴つて水裏返る春なりし

素抱

餃子リヤンコと注文入れる春の飯店

寒暑

春なれや土搏つ雨の返点

素抱

やつと春やつと水皺頭てる池

寒暑

宝籤春の陽気に乗せられて

素抱

銭洗弁天春は巳の日の験あらな

寒暑

名ばかりの春嘯いて反れる月

素抱

立春のいつか過ぎをる机かな

ばら

はたきなどばたばた春の楽器店

素抱

鳩の眼のくりくりけふは春立つ日

宿好

春なれや見上げてチャンチンモドキの木

素抱

立春のリビング・ルームに鳥影さす

宿好

まなかひに礼文近みて春かもめ

素抱

立春の日に当たりたく庭に出づ

宿好

フェリー利尻島追ふ春の鷗の数減りて

素抱

立春の肉屋の前を通りけり

宿好

留萌川留萌本線春景色

素抱

春立てる空に闕のあるごとし

随笑

春になり雀鳥と名の付く草

素抱

立春の半島へ発つ踊子号

随笑

翻車魚の肝和え春と思ふべな

素抱

立春の一語を以て押し切られ

素抱

春招く和菓子「ぎざはし」段葛

石鏡

半島の山に春来とやって来ぬ

素抱

雛飾る孫二人目の春なりけり

石鏡

安房へ船立春を経て海大人し

石鏡

「国芳 曉斎なんでもこいつ展だー」展  
荒ぶ世の春をどっこい曉斎展

暮津

立春の洋上に我解き放つ

石鏡

平潟湾ある時は吹雪くが如く春鷗

暮津

立春を相変はらずの坊主山

石鏡

立読みの春の園芸雑誌かな

暮津

春が来る港鷗のモニュメント

石鏡

立春 春立つ 春来る

二月

立春の夜を馳すバスは光の函

さざ

赴任告ぐ便り二月のワルシヤワより

燕音

日まみれの梢立春過ぎてゐし

ばら

杭打ちて二月の蚯蚓驚かす

宿好

寒明 寒明く

大楯の幹のざらりと寒明くる

さざ

えいほうと松も春めく東海道

ばら

雑木山百度鳴りて寒明けぬ

石鏡

春めくと家路半ばにして思ふ

宿好

寒明と探りを入れるやうな眼を

石鏡

春めくと探りを入れるゝごとき日差し

宿好

シベリヤを食せばいよいよ寒明くか

石鏡

腰痛の抜けず日差しは春めけど

寒暑

寒明けとふんぎりつけるやうに云ふ

暮津

一寸だけ春めく山の花きぶし

寒暑

雨水

こんにやくのさしみふるふる雨水かな

素抱

クロツカス一輪春めく日も一輪

素抱

魚氷うそひに上る

魚氷に上りつらきめに遇ひにけり

さざ

鳩日比谷公園を見て憩ふ視線も春めけり

素抱

先達の魚氷に上る句を鏡

素抱

遠浅の海と聞くさえ春めきて

素抱

早春 春さき

春さきのテッポウウオの口捌き

ばら

浅春のカクテル光線エノケンに

ばら

春先の風邪こじらせてああしんど

燕音

浅春の男波女波をおっぺして

鳩信

春先の牡丹の手入れもくもくと

宿好

浅春の闇のとりもつ睡りかな

鳩信

春めく

浅春の櫂に鶉のむかう向き

宿好

浅春の横にひろがる濤の音  
春は未だ浅く塔婆の前のめり  
玻璃に風どすんとばかり春浅き

素抱  
素抱  
石鏡

その中に新の鳥居も一の午  
午まつり氏子ら煎餅座布団に

宿好  
宿好

睦月

信念の重み睦月の一家集

燕音

針供養 針納  
貴女まあお変わり無くてと針納め

宿好

睦月に逝き世の寸法に合はぬ人

随笑

つつみ紙楚々と開きて針納め

宿好

悼みごと重ねて睦月如月と

随笑

この道で生活立て来し針供養

宿好

しろがねに著莪は睦月の日を返し

暮津

まなうらにミシン踏む母針納め

宿好

旧正月 旧正

旧正のはつかに拳がる沖つ波

ばら

鼻の上にちよこんと眼鏡針納め

宿好

旧正の髻を振り振り鯉寄り来

寒暑

雪解  
雪解山降り注ぐ日は天蚕糸

ばら

旧正の妻の手を借りぎっくり腰

寒暑

雪割れの雪を山毛櫨の根受け止めて

宿好

二月尽

手を遣りし先に首筋二月盡

石鏡

残雪  
残雪と越後訛りが耳元で

宿好

初午 一の午 午祭

八幡宮官司を上座午まつり

宿好

燕音

残雪の引っ掻き傷めく羅臼岳

燕音

眼鏡のつる擦れし一处寒戻り

石鏡

林に雪田に雪村に残る雪

寒暑

春寒

宿好

町木はヤチダモ残雪うち敷きて

素抱

月あるも寒さしぶとき戻り道

宿好

道北の残雪退いて里青む

素抱

利尻町春寒灯の入る赤提灯

素抱

隈笹に残る雪見て最北端

素抱

春寒の家押す風の音どすん

石鏡

雪間

畑隅の雪間の桐のつくねんと

燕音

十二神将一体修復中余寒

もも

戸隠山の裏手雪間の露のしゅうとめ

燕音

素破こそとばかり余寒は詠むべかり

さざ

山毛櫨描くコンテさくさく雪間とき

宿好

安直楼余寒車軸を流す雨

鳩信

人間にくびるゝところ雪間の温泉

宿好

祖光浄稔信士と余寒の掌になぞる

燕音

家ぽんと置いて名寄の雪間かな

素抱

出勤の一人一人の余寒顔

宿好

薄氷

うすらひをつつとと鷺浄瑠璃寺

ねず

ぶらんこの下の余寒の水たまり

寒暑

遊び田のうすらひつつく三日かな

寒暑

川明り余寒明りと云ふべきや

素抱

冴返る 寒戻る

同じ道黙し戻れば冴え返る

素抱

春一が蒲団落としてゆきにけり

さざ



控え目になほ控え目に花かたかご  
かたくりの花のまだ咲く鄙曇り  
かたくりの花のむつり右衛門かな  
かたくりの花の貧乏揺すりして  
ほくり咲き秋田支藩の武家屋敷

雛菊 デージー

このところデージーに凝る庭の主

春菊

仕事かたし来て春菊のごまよごし

菠薐草 はうれんさう

ほうれん草

さんざんな日の食卓にほうれん草

菠薐草妻奨めればそと箸

好き嫌ひ直らぬ齡はうれん草

谷戸冷えてはうれん草に甘味増す

茹であげてこれっぱかりのほうれん草

洲浜草 雪割草

雪割草風透き通るこの辺り 宿好

節分草

節分草節分草と尋め歩き 素抱

蒔の臺 ふき たう

かたまつて仏の裾のふきのたう ねず

雪溪の端まで二三歩ふきのたう さざ

ふきのたう月例会に持ち込めり 宿好

地酒酌むばっけの佃煮肴とし 寒暑

和寒の防雪林横ふきのたう 素抱

ふきのたう全島まかなふ発電所 素抱

クレソン

クレソンの根方素通りせる水音 燕音

海苔 海苔拾ふ

海苔巻のすこし乾ける遅日かな さざ

海苔拾ふ海苔の如くに漂ふて 素抱

逆光に海苔掬ふこと百万遍 素抱

海苔育つ海は広いな大きいな 素抱

海苔拾ひなどに精出し二月の日々 素抱

ぞんぶんに海苔拾ひして手近な海 素抱

流れ海苔鴉のごとく翔けるあり 素抱

梅 梅林 白梅 野梅

早咲きも早咲き明王院の梅 もも

園の梅何分咲きかと確かむ風 さざ

真向より烈風を受け咲ける梅 さざ

梅は了り杏咲きそめ桃半ば さざ

曇日の目許ぼんやり梅咲けり ばら

五分咲きの梅と聞きしが嘘ばかり 宿好

咲くときは一緒と梅の賑やか好き 寒暑

頃合ひを見計らひ咲く梅律義 素抱

梅咲かせて廻る美風吹く日なり 石鏡

梅咲いて方代無心を乞ふた寺 暮津

おてんと様通して畑の梅咲ける 暮津

幕山梅の里 重心を移してみるや梅の花 燕音

梅の花スケッチ型染作家かな 燕音

をみならの眉のほとりの梅の花 素抱

城郭の一部をなせる梅の花 石鏡

実時の文庫跡地梅早し 暮津

梅早し紅葉が谷といふところ 暮津

寄り道の官幣中社の梅早し 暮津

梅林を歩いて見むかもう少し もも

梅林をざつと見て来ぬ鼻つ風邪 もも

梅林は荅ばかりで素っ気なし 宿好

梅林に缺と鋸の剪定音 宿好

梅林の剪定済めば鴉が来 宿好

一通り梅林を見て引き返す 宿好

極上の烏梅を産す梅どころ 寒暑

梅林を一巡りして退場す 素抱

狂歌堂真顔の歌碑に梅の風 素抱



平日の梅林に人こんなにも	素抱	ぬかるみに嵌り其処より梅を見る	もも
梅林に吹き募る風尽きるなし	素抱	鎌倉の梅がよかると連れ立ちて	さざ
ともかくも交通不便この梅林	素抱	海東 <small>建長寺</small> の法窟の梅心当て	さざ
刮 <small>こそ</small> げ落とす梅林の土しぶときを	石鏡	まんまると梅の苔を誉むるこゑ	さざ
白加賀の老来ますますかほる花	寒暑	梅かをるをみなの引目鉤鼻に	さざ
白加賀に長居豊後に又長居	素抱	その梅は豊後と告ぐる破裂音	さざ
白梅の薬ばつちりと雨後の山	ねず	天神の梅に祝詞 <small>のりと</small> の出だしかな	さざ
紅梅の上白梅をわたりし風	ねず	かつかつと寿福金剛禅寺の梅	さざ
白梅の日向を開き呉れるごとし	ばら	事旧れど杉田の梅を偲ぶべう	さざ
白梅のはたと膝打つ明るさに	鳩信	叡尊の鎌倉下向も梅の頃	さざ
白梅の客気頼さす風の中	素抱	好意ありがたく綻ぶ梅のなか	ばら
そつけなき彩の白梅晒に	石鏡	巨福山 <small>建長寺</small> 梅は五百木 <small>いお</small> に先立ちて	ばら
風邪に臥す一日梅の光りさま	ねず	下曾我 <small>下曾我 流鏑馬</small> の梅皚々の方十里	鳩信
巨福山 <small>こく</small> 梅の活潑潑地かな	ねず	老梅の老梅たる枝苔生す枝	燕音
清湘老人呼びに遣りたき里の梅	ねず	新平家書き継ぎし部屋梅の影	燕音
風の中梅の徒長枝日を恋へる	もも	枝ぶりも宜しく古梅範を垂れ	燕音
つまさきだち緑萼梅を嗅ぐ男	もも	山の梅疾うに匂ひの飛んでをり	燕音
とつつきの梅の一輪嗅ぎみたり	宿好	おにぎりの包解く音梅ひとり	石鏡
酷寒に打たれて覺めぬ梅の性 <small>しょう</small>	宿好	界限 <small>小松屋石材店</small> で一、二の容姿石屋の梅	暮津
梅汚れ番の目白来ずなりぬ	宿好	亡き主の目利きのよくて石屋の梅	暮津
梅ふむむ月も半ばのこゑきけば	随笑	<b>梅見 観梅</b>	
尋めるなら何處そこの梅囲み記事	素抱	梅を見て廻る歩幅となりみたり	さざ
寺町の梅の遅速を見て歩かむ	素抱	風すこし出できぬ梅見切り上げむ	さざ
江戸に名を挙げし杉田の梅の裔 <small>妙法寺</small>	素抱	梅見 <small>観梅</small> の余生などとはとんでもない	宿好
烈風もものは梅の狭気かな	素抱	梅見客熱海の見番うち過ぎて	随笑
強情な野梅の枝と見て過ぎし	素抱	観梅におもむく一団前を行く	素抱
魁の梅好き者の一団か	素抱	癌 <small>通りすがりの人の云へる</small> といふ爆弾抱え谷戸梅見	石鏡
梅好む齢となりて佇めり	素抱	梅を見に人出ぬうちの瑞泉寺	暮津
梅の上に聳ゆ富嶽も相模ぶり	素抱	<b>紅梅</b>	
鎌倉五山一位 <small>建長寺 節分会</small> 禅林の梅固し	石鏡	紅梅にもつとも近く女こゑ	ねず
梅万蕾爆けて「天下禅林」に <small>扁額</small>	石鏡	紅梅の上白梅をわたりし風	ねず
少しもの足らぬ花数ハケの梅	石鏡	紅梅の中へ一步の夕ころ	ねず
梅汚れぬ頃ならむ瑞泉寺	石鏡	紅梅を見合のごとく見てをかし	ねず

紅梅の下土踏めばほこほこと	もも	紅梅に侍りて一言あるべきか	素抱
しぶしぶと煤け紅梅咲き出せり	もも	箸置に箸鶯の幼なごゑ	ねず
紅梅に紅梅のとるよき間合	さざ	うぐひすの笛方雀の囀子方	ばら
黒髪に吹きつける風紅梅へ	さざ	うぐひすのこゑの又せり坊隣り	燕音
眼の馴れてつまらぬ彩の紅梅よ	さざ	久遠寺の南無妙鶯ほうほけ経	燕音
紅梅に赤坂小梅顎引き	さざ	鶯の伝来のこゑ破綻なし	素抱
紅梅の雨滴とろりと枝をつたひ	さざ	鶯の啼くや母音を先立てゝ	素抱
紅梅の雪洞咲きに遍き日	ばら	湯島天神女坂下うぐひす来	暮津
紅梅の一二輪ほど好意に似て	ばら	眼白 目白	
老紅梅能う限りの花付けて	ばら	笛子来と云へば目白と正さるる	ねず
紅梅に寄りくるひとりふたりかな	鳩信	目を止めし目白の側に目白ゐて	さざ
紅梅は生菓子ほどの湿りもて	宿好	逆しまに止まる目白を目白見て	さざ
紅梅のいろの飛びたる訪問着	随笑	目白捕る繭をコツコツ叩きをり	さざ
紅梅の蒼ぼこぼこ鉛筆描	素抱	梅汚れ番の目白来すなりぬ	宿好
紅梅に佇めば土ふかふかと	素抱	目白翔ち目にも止まらぬ一を引く	素抱
紅梅を丹念にみる夫婦もの	素抱		

一通り見せ呉れ目白の軽業芸

山茱萸の花

パツパツとさんしゅゆの黄を振撒ける	もも	日に痴れし山茱萸日々の眺めとし	寒暑
蒼解くさんしゅゆ雨を心待ち	もも	山茱萸の日暮れ惜しまむ片田舎	素抱
山茱萸の黄にむらありて鄙曇	もも	山茱萸の黄が開け放つ朝なりき	素抱
さんしゅゆの鶉色に母屋没しけり	もも	山茱萸が咲いて初陣めける日よ	素抱
さんしゅゆの葉裏に蜂の小さな巢	もも	山茱萸咲く笙・箏の樂あらな	素抱
山茱萸の一昨昨日より咲けるとや	さざ	王道は山茱萸の黄を貫きて	素抱
花さんしゅゆ日差しに斑のありにけり	さざ	山茱萸に日はまだ粗き洗濯物	素抱
花山茱萸いり玉子めき夕日中	さざ	渋さとは恰好よさとは山茱萸咲く	素抱
山茱萸の向ふ側より差し込む旭	ばら	さんしゅゆの持ち味曇れば曇る形	素抱
山茱萸の弾けてぼつと夕日中	宿好	さんしゅゆの花了ふ翳がよぎること	素抱
花つけてとつても寒き日の山茱萸	宿好	帝王学山茱萸明り取り込んで	素抱
さんしゅゆの炒り卵咲き朝の日に	随笑	どうでもよいやうに山茱萸なりにけり	素抱
このところ霞む記憶と山茱萸と	随笑	寢れもう取り繕へぬ花さんしゅゆ	素抱
山茱萸と云へば和菓子の黄味しぐれ	寒暑	さんしゅゆの黄を振り撒くは善意に似て	素抱
		さんしゅゆ見て思ひ当たるは鉦のいろ	素抱
		さんしゅゆの彩させる芽の暮れかかり	石鏡

まんさく 金縷梅 満作 万作

母上に八十八度草萌えて

石鏡

まんさくのカイゼル髯の風そろと

もも

いぬぐり

もも

まんさくに昼の風向きかはりけり

さざ

もろともに路肩と崩れ犬ふぐり

もも

まんさくに四通八達風のみち

さざ

大空のもとの祭典犬ふぐり

随笑

桃・満作咲きてとんとん拍子の春

寒暑

犬ふぐり一寸離れて牛はこべ

随笑

満作の花ろうたげな氣息かな

寒暑

犬ふぐり浴びる旭の真新し

寒暑

満作の昼素通りの郵便夫

寒暑

犬ふぐり屯す郵便受の下

寒暑

満作の小出しに咲ける臆病花

寒暑

犬ふぐり川はなめらか音立てず

素抱

金縷梅の黄色は中華菓子いろ

素抱

犬ふぐり殊勝といふに余りある

素抱

まんさくの隙間だらけの花愛す

素抱

犬陰囊あらぬ文<sub>いぬふぐり</sub>字をあてがはれ

素抱

支那満作風に緩みの見えにけり

素抱

犬ふぐりひとつこひとり来ぬ山に

素抱

満作はお天道様のおかげ咲き

素抱

登り口オオイヌフグリちりばめて

素抱

ヒトラーの雄辯満作前にして

素抱

犬ふぐり心許なき日影得て

素抱

満作の鉤ハケシクローイツ十字靡かせて

素抱

犬ふぐり集落のごと點在す

素抱

万作は微風を糧として漫ろ

石鏡

君子蘭

素抱

下萌 草萌

遣る水をしはっと吸へり君子蘭

さざ

若布 若布汁

若布汁これはやっかい吸ひつく蓋

素抱

きさらぎの暦を切つて落しけり

寒暑

利尻メカブおじやうましよ当店は

素抱

きさらぎのどの顔も皆勝れ見ゆ

石鏡

実朝忌

桃の節句

暮津

大挙して実朝の忌の沖つ波

さざ

如月の簡に過ぎたる見舞状

随笑

碧梧桐忌

お節句に間に合ふやうに桃の咲く

随笑

碧梧桐忌法外な寒ンもたらせり

もも

桃どちのけふは節句と云ひ交し

素抱

鳴雪忌

雑 雛壇 雛飾る 雛あられ

素抱

孫の手が何處にも無くて鳴雪忌

暮津

晴天三日節句を待たず桃ひらく

素抱

■三月

紙雛

さざ

三月

雛の日の入日雑木にさし込める

さざ

人參は三月のいろ煮て和えて

素抱

雛かざる干潟色なる夕日中

さざ

如月

雛段に午前の日差しさし込みぬ

さざ

きさらぎも半ばつると虚子の貌

ばら

表具師の家の黄瀬戸の坐り雛

さざ

きさらぎの鋭さを増す木々の空

燕音

陶雛の肩の釉葉明りかな

さざ

悼みごと重ねて睦月如月と

随笑

男つ気世帯大内雛飾る

ばら

雛調度牛車ぎつしやより誰が降りにつむ

ばら

内裏雛目の付くところに骨董屋	随笑	お茶の間を彩どるものに雛あられ	暮津
雛壇に享保男雛のしやちこぼる	随笑	流し雛 雛流す	
雛飾る日より日差しのはらぎて	随笑	三浦半島 芦名 淡島様 雛流しほつんと来たる鹹き雨	素抱
独りごちつゝ置きゆける雛道具	随笑	雛流し催す宮の五百椿	素抱
玄関に飾られ小物雛ばかり	随笑	雛流し椿の宮の直下より	素抱
雛見つむ雛より細き目つきして	随笑	細れ波ひひな流されゆくわいな	素抱
箸置き <small>の陶のひひなも飾りけり</small>	寒暑	闘牛 牛角力 牛合せ	
雛飾る妻は件の手付きして	寒暑	牛角突き	
さしあたり雛の調度を並べみん	寒暑	虫亀闘牛場 山古志の牛の角突き一番手	寒暑
もう一彩むらさき欲しき雛あられ	素抱	横綱牛幸左衛門に祝儀花	寒暑
紙雛に倒れ易くて金屏風	素抱	横綱牛藤七相手をじろと睨め	寒暑
小物いろいろ殖えし雛を飾るかな	素抱	其の上 <small>かみ</small> の牛の角突き二十ヶ村	寒暑
略式も略式雛飾りけり	素抱	豆虎の怪力見せん牛角力	寒暑
雛壇のありし辺りをかい撫でぬ	素抱	つっかけてごつんと受けて牛角力	寒暑
只横に竝べてひひな飾りけり	石鏡	赤牛が一枚上手牛合せ	寒暑
雛飾る孫二人目の春なりけり	石鏡	牛合せ勝者の赤毛引き回され	寒暑

牛合はせ三才牛の尾にリボン	寒暑	啓蟄や消炭いろの鯉直進	さざ
牛合はせ済めば田植が待ちみたり	寒暑	啓蟄の水蹴破りてドイツ鯉	さざ

春の雪 春雪

きつぱりと春雪あがる挿木畑	ばら	啓蟄の石押し退けて何ぞをる	さざ
小競り合ひしながら春の雪落ち来	随笑	そつとして置いてくれよとだんご虫	鳩信

春の雹

半島の椎楯打ちて春の雹	ばら	啓蟄の好きな活字と嫌いな活字	燕音
		足出して生けるしるしをだんご虫	宿好

春雷 春の雷

質されて子の口ごもる春の雷	ねず	啓蟄の三脚を取り敢えず置く	寒暑
念を押すごとくに春の雷鳴れり	燕音	雑兵のごとく駆け出すわらじ虫	寒暑
春の雷先づは太鼓の小手しらべ	随笑	啓蟄や元の地番を覚えぬて	素抱

啓蟄 地虫

啓蟄の足のぶつかる古机	もも	啓蟄や耳掻き棒の塗剥げて	素抱
掘り出され団子決め込む団子虫	もも	啓蟄の亀現る苔のにはひして	素抱
啓蟄やずいと近寄るぶちの鯉	もも	穴出づる虫の裡なるだんご虫	素抱
啓蟄の茶鼠のコピー再製紙	もも	啓蟄のかさぶた剥がす男の子	石鏡
		でも好きとだんご虫掌に這はせぬる	石鏡
		蟻穴を出づ	
		穴出でし蟻目をこする祠の辺	寒暑

穴出づる蟻を石もて塞ぐ孫

素抱

鷹化して鳩と為る

春の山  
漣こしあぶら採りにそろそろ春の山

随笑

鷹化して鳩となるとは莫迦げたる

随笑

山笑ふ

東風こち

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

ねず

強東風や焦げ目の残る芦の節

ねず

水温む

梅東風に弁財天の膝吹かれ

もも

だいぶ水ぬるんで来たりすつぽん鼈塚

もも

蚕豆まごちの正東風に吹かれ勁き茎

さざ

山椒魚の手足を置ける水温む

さざ

東風吹いてちりめんじゃこの水揚場

鳩信

マナテイ伝説の人魚(海牛目海牛科)の身じろげる水ぬるみそむ

さざ

行く方を定めず東風の吹ける道

随笑

アロワナの腹部をくぐりぬるむ水

ばら

江ノ島の裸弁天東風吹けり

寒暑

定年がもう目の前に水温む

宿好

納税期

水温む池に棒切れ浮いてをり

宿好

納税期鴨は汽水に遊びをり

随笑

水温む水面に顔を持ってゆく

宿好

春の服

耳たぶに岸辺の日差し水ぬるむ

寒暑

春服に鶴のマークのクルー嬢

寒暑

そんなことしなくても水温みけり

素抱

春シヨール

春の水 春水

連れ立ちて仲見世をゆく春シヨール

宿好

ひかりつゝくびれてながる春の水

さざ

草の中鳴りをひそめて春の水

ばら

春子盗る猿は「さうさな十五頭」

ばら

鳴る處見つけて春の水鳴れり

ばら

蝻になの道

ちよろちよるとちよろつと春の水ながる

ばら

判じ物めくなり蝻のけふの道

随笑

さきざきに鳴りてことごと春の水

ばら

蝻の道筋書き見えぬコントに似

随笑

川いっぱい使つて春の水ながる

鳩信

御天道様蝻の道たること證す和島村

寒暑

春の水黙つてゐても春の水

燕音

行先の皆目判らぬ蝻の道

寒暑

春水といふ輝きに不足なし

寒暑

蝻の道思へば遠くへ来たもんだ

素抱

水音みおとまたおろそかにせず春の水

寒暑

蝻の道当てありさうで無ささうで

素抱

小さき段差ありて水鳴る春うたた

寒暑

田螺

春の水鳴るか鳴らぬか身を屈め

寒暑

ひつじ田を田螺のあるく鬼無里晴れ

ねず

春水に河馬のうたた寝四六時中

寒暑

泡吐いて能事終れり大田螺

ばら

庭土に滲み込むまでの春の水

素抱

ボヘミアン田螺の唄が聞こえ来ぬ

ばら

かりそめに春水の翳生れては消ゆ

素抱

日の下に田螺の大愚どぢやうの愚

ばら

春水といふこゑ大きめに出でて

石鏡

水面這ふ虫に田螺の大雁塔

随笑

春水に小鷺の臍の惚れ惚れと

石鏡

蜩

春椎茸 春子

はげちよろの蜩の尻のあつあつ汁

宿好

蜷は朝鰻は午後と漁仕分け

随笑

修二云  
仏都奈良馬酔木が咲けばお水取

寒暑

春休み

お水取近づく空を風の行ぎよう

寒暑

ジャンボ機の胴にミッキー春休

寒暑

水取に少し間のあり鹿せんべい

寒暑

ドラエもん映画ねだられ春休

石鏡

お水取ホカロン売り込む茶屋親爺

寒暑

入学試験 受験

お水取諸注意を先づ奈良県警

寒暑

末つ子の受験に励む太郎月

さざ

水取待つ人の頭かしらのぐらぐらと

寒暑

水草生ふ

お水取肩の火の粉を払ひ呉れ

寒暑

柿田川  
湧水にミシマバイカモ波打てり

随笑

水取といふ営みのとこしなへ

寒暑

があがあと家鴨が鳴いて水草生ふ

素抱

劫初の火劫初の水のお水取

寒暑

畦青む

声つぶる僧の声明お水取

寒暑

横柄な遠野鴉に畦青む

宿好

くらやみのなかの相伝お水取

寒暑

田起しの小田の畦草なまなまと

宿好

お水取矢来を焦がす粗火の粉

寒暑

畦青み雪嶺しざり秩父別ちつぶえつ

素抱

千年の口伝が生きてお水取

寒暑

春の川

行僧のいっしょうけんめいお水取

寒暑

春の川渡りとよもす東横線

石鏡

お水取上堂松明天華とす

寒暑

御水取 水取

お水取耳で観みること覚えけり

寒暑

春場所

浦浪の頭をもたげくる涅槃吹

春場所の土を噛んだるはたき込み

素抱

粗樫の葉に吹きつる涅槃西風

宿好

春場所のとんだ所ではりま投げ

素抱

さんしゅゆの古木ぐらつく涅槃吹

随笑

涅槃 涅槃図 涅槃会

春嵐 春荒 春疾風はやて

涅槃圖を二人がかりで懸けたへぬ

もも

春荒れにとんび揉まれてひようと鳴く

さざ

伊東若冲 野菜涅槃図  
二股のすずしろ涅槃し給へる

ばら

大風のドンと家搏ち春一途  
佐野美智さん

随笑

野菜涅槃図葱の高足侍りけり

燕音

春荒れに転倒せらるかお大事に

素抱

お涅槃の日の青空を鳶ながす

随笑

春荒れの吹っかけ来たる真夜の雨

石鏡

建長寺ご坊雲集お涅槃会

随笑

春荒れの叩きつけてはひっpegがす

石鏡

涅槃会の杳音巡る御仏殿

随笑

春荒れがつつかけ来りて家が鳴る

石鏡

涅槃会の腹の底より楞嚴神呪りよんじしゆう

随笑

春疾風聞きある我が身がらんどう

石鏡

常盤木の青勝る日の涅槃講

随笑

春疾風それに倍する花吹雪

暮津

涅槃図に坐り直して魅入る人

随笑

春塵 春の埃

鳩信

横たはる様は涅槃の自然生じねんじよう

随笑

杉本寺  
春塵の分厚く赤茶け煤仁王

鳩信

涅槃図にたるむ処無し増上寺

素抱

子規堂の電燈の笠春の埃

寒暑

涅槃西風 涅槃吹

霾つちかゝる

身勝手な戦の行方つちふれり

素抱

倒れたるまゝの一杖彼岸講

ねず

鳥帰る 鳥雲に

鳥雲にインターネット日和かな

ばら

雨闇に紛れ降るなり入彼岸

随笑

鳥雲に年金のこと生活のこと

宿好

預けおく彼岸団子を帰るさに

さざ

鳥雲に直武描きし人體圖

宿好

枝垂桜 糸桜 紅支垂

さざ

鳥帰る電気自動車走る世も

随笑

いとたやすく花の抜け落つ糸ざくら

さざ

足型に三種類あり鳥雲に

寒暑

身延詣での紅支垂

燕音

鳥雲に性懲りもなく戦すか

素抱

糸櫻糸よりかけて身延山

燕音

鳥雲に人は葬り葬られ

素抱

白妙の昇竜となり糸櫻

燕音

些少の借り皆持ち合はせ鳥雲に

石鏡

腕によりかけてこれより糸桜

宿好

春の鴨 残る鴨

のほほんとしてあし鴨の残されし

素抱

角館郵便局の糸桜

宿好

帰る雁 雁帰る

雁引くや荒布色なる島の子ら

ねず

香煙を掬ふ手ぬつと御開帳

ばら

雁ゆかせ津軽よされの高調子

燕音

人混みよりわが身抜き取る出開帳

ばら

彼岸 彼岸入

開帳寺門前臨時郵便局

ばら

出開帳頭の間のご本尊

ばら

やまももの巨木なるほど温暖な

修二会 お松明

板東者我ら修二会に参じたり

寒暑

あたたかや寺門に並める通用門

さざ

修二会见物茶屋の親爺が先導す

寒暑

来し闇もドアのノブも暖かく

さざ

チヨロ松明が三本上がる二月堂

寒暑

浜に出てほんわかあったかさうな雲

ばら

修二会僧大松明をぶん廻し

寒暑

海渡りさくら咲かせに一暖雨

ばら

老若の目鼻ふすぼるお松明

寒暑

七抱大楠たつぷり暖雨吸ふ

ばら

お松明拜火教徒にあらねども

寒暑

恰幅よき蘇鉄に朝の一暖雨

ばら

お松明招福火の粉撒き散らし

寒暑

暖くなりて砂場の砂いじり

宿好

火の粉浴び修二会警護のおまわりさん

寒暑

心臓の温み掌移し賓頭廬さま

素抱

暖か

膠釜あたたかく年送るかな

ねず

毛むくじやら歯朶打つ暖雨生々し

素抱

これ食うて茶をのめと〇あたたかや

ねず

訛り暖かガイドは礼文高校出

素抱

暖雨去りうぐひす餅のやうな島

ねず

初蝶をエイゼンシュタイン流に撮れ

ばら

三椏の暖雨まみれに岐るゝ枝

さざ

初蝶のいとたをやかに舞ひ出しぬ

宿好

ダチュラ咲き当地至つて温暖な

さざ

雉のこゑ天気予報をくつがへし

さざ

雉子の目のやうな水輪を冬泉  
三浦勲氏一周忌 富士岳麓 本門寺  
うらうらと雉子歩まんか汝の忌日  
三浦夫妻同墳にねむれば  
裾野駈く雉子に夫あり妻子あり

ばら  
随笑  
随笑

かすめゆきしものつばくろでありにけり  
つばくろは鏝絵の速さ内子町  
内子座の前でつばくろとんぼきる  
甲斐駒岳を前にのけぞる乙鳥  
塩田平  
乙鳥に乙鳥いろの朝鮮人參小屋  
三嶋大社  
乙鳥飛び海道筋の大社  
燕来ぬ海の玄関横浜に

さざ  
寒暑  
寒暑  
さざ  
ばら  
随笑  
さざ

### 雲雀

雲雀落ち尽し河口の高曇り

ねず

長良川朝風乙鳥吹き上げて

ばら

隔たりて同じ雲雀を見てゐたり

さざ

大潮の日と聞く燕ふりあふぎ

ばら

昼過ぎの雲雀のこゑの中弛み  
だる

さざ

泥運ぶ燕律儀に栢山村  
尊徳生地

随笑

田雲雀の揚りどうしに喉乾く

随笑

燕くる畑毛温泉湯はぬるめ

さざ

天空へ喉のすりへるまで雲雀

寒暑

燕来と先に云はれてしまひけり

ばら

燕 乙鳥 つばくろ つばくろ

寒暑

燕くる畑毛温泉湯はぬるめ

鳩信

初燕 燕来る

ねず

燕と先と宿の燕がとんぼ切る

随笑

つばくろめこゑの徹れる看護婦来て

ねず

ようこそと宿の燕がとんぼ切る

随笑

路面電車ひよいと除けゆくつばくろめ

寒暑

峡燕群れていちにち暮れにけり

随笑

つばくらの眼を借り天橋立図

寒暑

燕の糞掃きて湯宿の番頭さん

随笑

つばくろめカレーの市民の頭上越え  
西洋美術館

寒暑

旅の衆朝が来たよと峡燕

随笑

亜浪生家跡つばくろの真かがやき

ねず

旅の衆朝が来たよと峡燕

随笑

金比羅参り燕出入りの一服茶屋

寒暑

春雨に濡るる石手寺石手川

出雲崎燕街道貫けり

寒暑

土佐鶴に籠の湯晒し春の雨

寒暑

其の上の金の荷揚げ路燕抜け  
かみ

寒暑

春驟雨船端叩く川蝦漁

寒暑

観音の胸元よぎる初燕

素抱

四万十の橋四万十の春の雨

寒暑

遠刈田郵便局に入る燕  
野毛大道祭

素抱

春雨にぐにやりと曲る土讃線

寒暑

大道芸立見燕が頭を掠め

石鏡

突き立てしシャベルにしとど春の雨

素抱

逗子駅前ああやっぱりと燕見き

石鏡

### 春泥

素抱

湯本 弥次喜多の湯とや燕に軒を貸し

石鏡

春泥をぬぐひて詣つばたもち寺

ねず

夕燕揚げて時報は「箱根山」

石鏡

春泥をぶつぶつ云ひつ脱しけり

ばら

後生掛の燕挙げをり地獄谷

石鏡

### もの芽

さざ

燕ゆく方が海なり逗子銀座

暮津

ものの芽に大きくなりぬ雨の音

さざ

### 海豹

素抱

家々の立つる物音ものの芽に

ばら

あざらしの腹の上なる春入日  
宗谷岬

素抱

ものの芽どきその辺歩いてくるといふ

燕音

### 春雨

ばら

もの芽も盛岡弁ももそもそと

宿好

春雨のほろつと零るゝところをみる

ばら

面白うなりて社の万の芽  
上ノ芽

随笑

総領事ハリス出府圖春の雨

鳩信

豆の芽のどれも万歳してゐたる

石鏡



芍薬の芽

目立ちたがる芍薬赤芽雨催ひ

ねず

ぐりぐりの夕顔の種蒔きにけり

もも

蕙の芽

蕙若芽爬虫類館蔽ひけり

ねず

蒔きものを鳥ほじくる正受庵

燕音

コスモスの種を蒔きをり細目して

石鏡

馬鈴薯植う

蕙の芽のあかあかおつつけ降り出さむ

もも

馬鈴薯を植え了へはたく手がかさかさ

暮津

春の土

球根植う

ワラビーの前脚春の土突きて

さざ

球根を植え込みし掌の皺みゐて

暮津

鉢小物持出し春の土いじり

宿好

球根を姿勢正しく植えて遣り

暮津

すつてんと転んで掴む春の土

宿好

菊根分 菊植う

蟻喰いのそはそは春の土を嗅ぎ

寒暑

食う菊もありてよきもの一株植う

暮津

種物 種袋

菊の苗

箱蒔きの花種うんともすんともや

ばら

買手つく菊の苗より虻立たせ

ばら

種袋振り回しつゝ喋々と

ばら

挿木

種袋裏に記しある発芽率

暮津

きつぱりと春雪あがる挿木畑

ばら

アサガオと鉛筆書きの種袋

暮津

苗札

花種蒔く

苗札もびしよびしよに水遣りにけり

宿好

木の芽

芽吹く 芽木 芽立ち

木の芽風 木の芽山

もも

木々芽吹きトビケラも羽化忙しき

随笑

警策音飛んで瑞鹿山芽吹き

もも

榛の木の芽吹きまだまだ天塩川

素抱

起請文累々芽吹く杜にて

ばら

榛芽吹き神居古潭の川景色

素抱

色合ひも野暮な櫨の芽吹きかな

ばら

里山の見馴れたる景芽吹けるか

石鏡

付け足しにそこらの小木も芽吹山

ばら

いつ見ても櫨の芽吹きへんてこりん

石鏡

芽吹かんと樹皮を寄る辺の洞櫨

ばら

先づこんなところ櫨の芽吹きとは

暮津

柿芽吹き蟹の缺のやうな芽を

ばら

句ひ立つ芽木突風の過ぎし闇

ねず

庭木芽吹く頃となりをり下女詰所

鳩信

豪雪の爪跡芽木に残りけり

燕音

凡庸な芽吹きの色でありにけり

燕音

羽ばたいて桜の芽立ち促せる

鳩信

朴芽吹き谷川の水段きた為して

燕音

木の芽風吹きつさらしに猿の面

もも

白櫨の芽吹き朝日に眩くごと

燕音

先つぽに多羅の若木の芽がひとつ

もも

芽吹くなら櫨パッとパッととな

宿好

にはとこのふためき出づる木の芽道

さざ

芽吹く山見てゐて画法朦朧体

宿好

見習ひのガイド訥々木の芽どき

ばら

漫然と櫨は芽吹き初めにけり

宿好

襟立てて越後湯沢の木の芽どき

燕音

似通った彩して芽吹くみな雑木

随笑

山巻金沢八景 野島山いて有象無象の雑木の芽

随笑

接骨木の芽のもし囁くなら平語  
横須賀の海に張り出す木の芽山  
とろとろと木の芽明りの甘茶仏  
つつかけに銭湯を出づ芽出し雨  
黒ずめる連翹の芽に雨つめた  
にはとこの出臍のごとき芽の並び

未完なる塔にしぶけり櫂の芽

馥郁ともくれんの芽のかぶり物

### 芽柳 柳の芽

濠柳芽吹く向うに新聞社

二重橋交番脇の柳の芽

ここに來て天気足踏み柳の芽

### 穂の芽 たららの芽

厳しく鹿爪らしくたららんの芽

まんずまんず寄つてたんせとタラの芽売る

### 山椒の芽 さんしょう

石鏡

石鏡

石鏡

ねず

もも

さざ

ばら

随笑

随笑

素抱

素抱

ばら

宿好

山椒の芽午後から降らなきやいのねえ

しぐれ聞きちりめん山椒一トつまみ

笹正宗鯨山椒にすすみけり

酒酌むや鯨山椒に会津つぼ

### 青饅 せむた

青饅にはつと気付ける親不孝

### 菜飯

菜飯食ぶ子にまづまづの志望校

### 白子干 しろすぼし 白子

大マスクとつて白子の味見せり

### 干鰯

炎昼の干鰯の茶漬かつ込めり

干鰯など水に戻してとる昼餉

### 蒸鯿 むしかたて

貴人のごとく箸付け蒸鯿

### 鮎並

燕音

宿好

素抱

石鏡

さざ

ねず

ねず

寒暑

素抱

随笑

葉山行  
鮎並でありし覗かせ貰ふ魚籠

### ほっけ

礼文沖ほっけを追ふか木っ葉舟

須古頓の風に揉まれてほっけ干す

父ちゃんと母ちゃん居酒屋焼ほっけ

活ホタテ開きほっけに地酒酌む

### 海松 みる

干潟現る順序がありて海松の海

### 椿 山椿 落椿 藪椿 紅椿

玉椿 赤椿 白椿 椿咲く

一飛鳥椿林をすり抜けて

喋々と鳥語椿の林なす

五百椿林寒潮音を断ち

泳へ性足らぬ椿のまた墮つる

弥次馬のやうに転がる椿見て

法窟の椿ころがる其処彼処

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

さざ

さざ

宿好

随笑

もも

もも

さざ

あほむくもうつむくもよし山椿

階攀ず足許を見て椿見て

乗さんは椿落つるを篤と見て

落椿展観幕府滅亡史

椿落つ小坪の蟹の横這い径

椿落ち載り損ねたる石畳

藪つばき他所者を見る目付して

岬なればこその日溜り藪つばき

これと云ひ見るもの無き中藪椿

藪椿こんなところで径途切れ

盗み見をしてゐるやうな藪椿

男鹿 椿 五ツ六ツいやもうひとつつばき咲く

パツと明るくショウタイムてふ紅椿

しつとりとリップステイクてふ椿

この坂道これあるかなの玉椿

茅ヶ崎 氷室椿庭園  
洋椿和椿椿園巡る

宿好

宿好

随笑

素抱

暮津

暮津

ねず

鳩信

素抱

素抱

石鏡

もも

さざ

さざ

燕音

宿好



春霞富士はうたたね決め込めり  
渡り来ししまなみ十橋昼霞

随笑  
寒暑

先達てお目に掛かれり佐保姫に  
春意

さざ

紫雲出山瀬戸に霞をもたらせり  
雪舟の水と霞の勝景図

寒暑  
寒暑

水輪生み継ぐ雨以て春意とす  
踏青 青きを踏む

素抱

野寒布と宗谷の間の昼がすみ  
利尻島霞もやもや引き出せり

素抱  
素抱

青き踏む一遍遊行の地なりけり  
心臓にも運動療法青き踏む

ねず  
鳩信

突き進む船首礼文は霞みづめ  
海上に利尻全容霞切れ

素抱  
素抱

踏青の三時となれば風冷え来  
相模野の青きを踏み来て手ぶらかな

宿好  
宿好

海上に霞める利尻その内着く  
昼霞天然ガス積む船の影

石鏡  
素抱

野遊びにクロワツサンのやうな雲  
野遊びの服を叩いて起ち上がり

ぱら  
ぱら

団子虫団子いびつに陽炎へり  
のらくらと陽炎主宰月旦評

ばら  
燕音

野遊びに女はあてにせずにおこ  
野遊びの帰り支度か服叩き

ぱら  
素抱

陽炎を掻き分け掻き分け釜石線  
大道芸なべて陽炎ふ自由席

宿好  
寒暑

摘草の人のくつつき離れたり  
摘草の籠はとみれば野かんぞう

石鏡  
素抱

佐保姫

摘草

石鏡

嫁菜

ゼンマイと云ひかけコゴミと云ひ直す

石鏡

坂がかり円空堂へ嫁菜みち  
蓬

素抱

芹 芹摘む 芹田 田芹  
芹の水 根芹

もも

蓬萌え太鼓の胴のやうな道  
土筆

ばら

手つかずの芹の森あり川向ふ  
摘むのは芹ですかえゝまあたんぽぽも

さざ

爪弾くつくしの頭よりばと煙  
土筆打ちたたき出したる青煙

もも  
燕音

寒芹をこづき湧水馳せゆけり  
水くびれひろがり流れ芹の森

ぱら  
随笑

土筆摘む音のつくづく真昼かな  
土筆土筆ガウデイーの塔ここに建つ

燕音  
宿好

足許を先づは築きて田芹摘  
芹摘む婆一つ大きく伸びをして

随笑  
随笑

土筆ぼかんとしてゐるうちに命日過ぐ  
呆ける土筆と待てる釜石線

宿好  
宿好

柿田川根芹に直にあたる水  
春光を芹に振り撒きゆける水

随笑  
随笑

土筆生えコンセイサマの石ほとり  
蕨

宿好

芹の水女のそれと跳ぶ声す  
芹摘みにこゑ掛け遣れば佳い返事

随笑

干しわらび乗りて会津のわっぱ飯  
真清水に蕨の塩抜き湯治宿

素抱  
素抱

ばちよばちよと水の流るる芹田かな

素抱

薇

素抱

素抱

芹摘の中腰に耐え切れずして起つ  
芹の水覗き込むにも先づ足場  
芹引けばたらたらと水一縷  
晩酌に摘む芹これだけあれば佳し  
芹摘の一人ひよっこり頭を擡げ

### 防風

半島のかかと辺りの防風摘む

### 葦 葦草

修那羅峠

針通神の薄目にすみれぐさ  
門前の小僧のタチツボスミレかな  
幼子に葦のいろを言はせをり  
年々にたちつぼすみれ淡きかな  
庭の土瘦せて葦のいぢけ咲き

### 蒲公英

たんぽぽ

摘むのは芹ですかえゝまあたんぽぽも  
たんぽぽに村内放送よく通る

絮たんぽぽ肺活量は人並み以下  
宿好

云うてみてトウカイタンポポ佳き名なり  
随笑

たんぽぽの絮の一つを壊しみる  
随笑

### 紫雲英

見そめたるごとくげんげの辺に踞む  
随笑

### 苜蓿

うまごやし

クローバー 白詰草

クローバを分けくるダックスフンドかな  
さざ

白詰草いちめん水上バス乗り場  
燕音

赤詰草白詰草に勝る丘  
寒暑

苜蓿に憩へるハーレーダヴィトソン  
寒暑

白詰草真つこと冷たかりけるよ  
素抱

八景島 シーパラダイス  
素抱

蜜月の真つ只中の白詰草  
素抱

若者の手をとりあるく白詰草  
素抱

遊船の波切り進む白詰草  
素抱

うまごやしスキーヒュッテを取り囲み  
素抱

### 藜藿

はしすち はこべ

土いじりするりと抜けてはこべの根  
宿好

八十路の母はこべら提げて立話  
随笑

犬ふぐり一寸離れて牛はこべ  
随笑

大地より温泉の湧く鼓動はこべ草  
寒暑

### 薺の花

なすな 三味線草

ぺんぺん草

咲きさうな処に咲きぬ三味線草  
鳩信

小粋とは物は云ひやうぺんぺん草  
燕音

田の隅にぺんぺん草の丈を得て  
燕音

合いの手に潮騒浜の三味線草  
宿好

退屈でぺんぺん草の撥こづく  
随笑

鉛筆でつついて示すぺんぺん草  
寒暑

ぺんぺん草奏づる風が出て来たり  
素抱

花なづなぺんぺん草の名を厭ひ  
素抱

### 酸葉

すいば

すかんぼ

遠野の子手っこつないですかんぼ道  
宿好

午報告ぐ酸葉に雀の鉄砲に  
随笑

絮たんぽぽ肺活量は人並み以下  
宿好

云うてみてトウカイタンポポ佳き名なり  
随笑

たんぽぽの絮の一つを壊しみる  
随笑

### 紫雲英

見そめたるごとくげんげの辺に踞む  
随笑

### 苜蓿

うまごやし

クローバー 白詰草

クローバを分けくるダックスフンドかな  
さざ

白詰草いちめん水上バス乗り場  
燕音

赤詰草白詰草に勝る丘  
寒暑

苜蓿に憩へるハーレーダヴィトソン  
寒暑

白詰草真つこと冷たかりけるよ  
素抱

八景島 シーパラダイス  
素抱

蜜月の真つ只中の白詰草  
素抱

若者の手をとりあるく白詰草  
素抱

遊船の波切り進む白詰草  
素抱

うまごやしスキーヒュッテを取り囲み  
素抱

### 藜藿

はしすち はこべ

すかんぼや女はとかくがやがやと  
石鏡

### 虎杖

いたどり

山麓の溶岩隠り虎杖摘  
さざ

虎杖をへし折りゆけり鬼無里の子  
燕音

大深温泉 湯治小屋錆び虎杖のその向う  
寒暑

後生掛の湯治棟見ゆ虎杖越し  
石鏡

### 茅花

つばな

茅花咲き自由乗降区間なり  
ばら

茅花どき旅の一つもせよと云ふ  
寒暑

茅花茅花と茅花の戦ぐやうに云ふ  
暮津

### 喇叭水仙

らっぱすいせん

喇叭秘め喇叭水仙答めるよ  
もも

湯ぼてりの顔はいびつかダツフォディル  
ばら

アポロンのラツパ手喇叭水仙は  
ばら

### 土佐みづき

日向水木

黄は黄でも日向水木の薄黄好き  
ばら

土佐水木枝は木臘の光ゲ持ちて 宿好 花ミモザライオン色に太陽は  
日向水木連翹の黄を貶めて 寒暑 花ミモザ黄み搔き立てて咲けるなり

木五倍子きぶしの花 花木五倍子

修験道生五倍子の連珠飛び散れり ねず 行きずりのこれある哉の花ミモザ  
九十九折木五倍子の上に人のこゑ かも 結構なミモザと云ひて仰ぎをり  
糠雨に垂るゝ木五倍子の寸足らず もも 貝母ばいもの花 花貝母

木五倍子きぶし咲く道を大仏方面へ さざ 何と手の混める貝母の花の裡  
突然の雨に木五倍子の華やげる さざ 判らぬはこの手の花よ花貝母

雨脚の忽ち千筋花きぶし 燕音 女共とやかく云へる花貝母  
せせらぎに木五倍子そろそろ花を垂れ 燕音 づけづけともの云ふひとや花貝母

木五倍子咲く時分の山と分入りぬ 随笑 老人の指図けむたし花貝母  
花木五倍子簪に似て「よーいやさ」 随笑 山葵わさび 山葵田 山葵漬

これも咲く裡かと見上ぐ花きぶし 随笑 わさび田をはずかひに馳す水ありぬ  
一寸だけ春めく山の花きぶし 寒暑 わさび田を素通る水の垣間見ゆ

こどもごゑ生々木五倍子生ふ山に 石鏡 音もなく葉わさび潜る水の暮れ  
ニモザの花 花ミモザ わさび田の小流れ夕日返しけり

わさび田の水を束ねる處あり ばら 日永人  
山葵の旬水入れ替はり立ち替はり ばら 永き日の郵便受に余るもの

山葵田の小石に当る水の音 ばら 永き日の寺に石工の手弁当  
わさび沢わさび養ふ水鳴れり 燕音 永日のマイクにあうあうアシカショー

土産さて静岡駅の山葵漬 石鏡 永日のそもそも何でこの病ひ  
青竜の如き山葵の擦り下ろし 石鏡 永日の馬体に鞭を一の射手

其角忌 ばら 永日の一机据えあり絵島の間  
俳諧の腕力振るへ其角の忌 ばら 通院 永日の欠伸百度して待たされ

四月 ばら 永日の河童に逢ひにカップ淵  
春の日 春日はるび 永日の袋イソメに逃げられし

双眼鏡あたたむ海の春日差 さざ 永日の亀の正字に窮しけり  
血色よき児童が通る春日中 宿好 空つぽの檻も覗きて日の永き

春の日のぼかぼか山陽自動車道 寒暑 日の永く一つ目妖怪困碁打図  
春日中寄り来る鳩の遠慮がち 素抱 泳ぎ来る亀を亀見て日の永し

あざらしの腹の上なる春入日 素抱 好きな時好きな事して日の永し  
宗谷岬 日の永しラジオは禿げを話題にし

日永 永日えいじつ 永き日 日永し 暮津

園児等に鼻振り上手日永象	ねず	皇居前東西南北日永人	素抱
日永鰐夢む手足の置きどころ	さざ	皇居前手を振り歩く日永人	素抱
かたわれの函を探せる日永かな	さざ	折り鶴にひとり遊びの日永妻	素抱
日永の亀首伸ばす方何ぞある	宿好	巻きゆるく日永の遣伝子・滑り台	素抱
こんなにも亀がゐるとは日永の池	宿好	遅日	
帰るさも日永の亀の甲羅干し	宿好	海苔巻のすこし乾ける遅日かな	さざ
唇の分厚き日永の磨崖仏	宿好	膝を詰め遅日の遠野物語	宿好
砂浜に足投げ出して日永人	宿好	カッパ淵遅日の祠一つ置き	宿好
岩登りかけてその儘日永亀	随笑	ぎっくり腰遅日の電話鳴らせおく	寒暑
日永亀干割れ危ぶむその甲羅	随笑	穀雨	
日永なる仙崖の猫いや虎圖	随笑	睡るとは不覚穀雨の散髪屋	寒暑
甲羅干す亀見て日永いや気長	随笑	春の雲	
弁財天日永巳の日の銭洗ふ	寒暑	張りぼての岩のやうなる春の雲	さざ
日永の土佐路面電車はリスボン製	寒暑	ビスケット色の三つ四つ春の雲	ぱら
ご老體前はばかり日永の湯	寒暑	のんのんと海上に出る春の雲	宿好
日永の湯人足風の男ゐて	寒暑	春の雲見てゐる我も押し移る	石鏡

海へ出てよりの俊足春の雲

石鏡

四月馬鹿達者と云へる褒め言葉

鳩信

麗か 麗日 うらら

遍路

動物園  
麗日のワラビー母子の餌の持ちやう

さざ

石手寺に花は散るのみ徒遍路

寒暑

野毛大道芸  
スキヤキソングうららにワンマンバンドかな

寒暑

潮臭き宿毛の雨に徒遍路

寒暑

長閑 のどけし

海鳥啼きお遍路マップ備ふ宿

寒暑

長閑な昼煙草はラッキーストライク  
古老懐古  
一銭貰うて湯銭五厘の湯の長閑けし  
子規堂  
子規筆記幾何学の本のどけしや

寒暑

初桜  
皇居の櫻  
一滴の雨にも遇はず初ざくら

鳩信

のどけさは五家宝噛みしあとの兒  
何でも綴ず孫のホチキス音長閑  
長閑なる日和と顔に画いてあり  
のどけしや平たく生きて平たき句

素抱

初桜風来れば又そはそはと  
一滴の雨にも遇はず初ざくら  
彼の若木よくぞここまで初桜

随笑

四月馬鹿 エープリルフル

新社員

もも

万愚節  
句集序文賜はる  
エイプリルフルと序文締めくくられ  
カテール検査入院  
食器には皆蓋のあり万愚節

もも

新社員交へて今朝の昇降機  
新社員夢あらばこそ「王将」を  
新社員世渡り吉良の仁吉たれ

寒暑

山葵の花

二年ものわさびの花に穂高の日  
蝶追うてわさびの花も飛びさうに

ばら  
ばら

矮鶏が木に上手に登り三鬼の忌

ねず

義士祭

春大根

目に見えて体力戻る春大根

鳩信

高張を所要所に義士祭

鳩信

鶯餅

おもたせの鶯餅に雨の客

ねず

桃畑

桃の花 花桃 緋桃 桃の村

暖雨去りうぐひす餅のやうな鳥

ねず

花桃のやいのやいのと日表に

ばら

ひよいひよいと鶯餅を包み呉れ

さざ

花桃は田舎娘の器量佳し

宿好

それではとうぐひす餅に手をつけぬ

さざ

花桃のおたふく美人笑ひづめ

素抱

鶯餅つまむに作法あるごとし

ばら

ぶつかり合ひふとる仔豚や桃ひらく

ねず

うぐひす餅それだと話促せり

宿好

冷つこき雨にいきなり桃咲ける

もも

桜餅

桜餅芳香うれしき限りかな

随笑

梅は了り杏咲きそめ桃半ば

さざ

椿餅

ほんたうの処濁して椿餅

随笑

二三日降ればその内桃咲いて

ばら

三鬼忌

郷土史家愉しむ桃の源平咲き

随笑

指栗車窓に桃の咲くを見て

素抱

他所者のほえられあたり桃の村

ねず

桃の咲く畑の縁に道付いて

石鏡

土器出づる山を拓きて桃畠

ねず

気安く咲き気安く散りし桃なりき

石鏡

杏は桃に一足先にと云うて散る

宿好

枝いっぱい賑やか好きな桃の花

さざ

春や春蕪村の武陵桃源圖

随笑

桃の花時間どんどん経ちにけり

さざ

杏の花

もも

桃の花想ひ凝らさばポツティチエリ

ばら

偶にくる鳥があんずの花散らす

もも

からからに乾く畑土桃の花

ばら

昼日中あんずつまらなさうに散り

さざ

阿呆陀羅經極意は桃の花に聞け

ばら

梅は了り杏咲きそめ桃半ば

さざ

その場でふ空気が大事桃の花

燕音

杏咲く情に溺るるごとくなり

宿好

もめごと一段落し桃の花

宿好

杏は桃に一足先にと云うて散る

宿好

福島は桃桃桃の花霞

宿好

李の花

宿好

桃の花噂話に終止して

随笑

べんべんと昼のすももの花散るも

さざ

直に聞くことは佳きこと桃の花

素抱

すもも咲く信濃白鳥たもとほる

燕音

桃の花鄙びごころを大切に

石鏡

林檎の花

燕音

緋桃の緋畑の空にぶちまけて

ばら

花林檎

もも

緋の桃に近寄り過ぎぬ心拍音

燕音

山麓に日色を湧かせ花りんご

ばら



同齡のりんご若木の花連ね

ばら

沈丁花 丁字

原木のあかとき色の花りんご

ばら

今もある文房具店丁字の香

素抱

りんごの飛花あれよあれよと千曲川

燕音

辛夷 花辛夷

サイクリングりんごの花の高さゆく

燕音

はくれむに似たれど辛夷で押し通す

ねず

月くりくりりんごの花の薄闇に

燕音

花こぶし花混み合ふてうるさかり

ばら

あつぱれなりんごの花の八分咲き

燕音

花辛夷はたきづかれし思ひかな

ばら

雪山に沿ふてりんごの花街道

燕音

花こぶし少し荒んで吹かれをり

ばら

三極の花 花三極

みつまたのやうに時間を使ひたし

もも

辛夷より翔ち損ねしや残り花

ばら

三極の花の空けに日の闕くる

もも

辛夷吹き天地の間を抜ける風

宿好

みつまたの荅おつとり日の射せる

もも

花辛夷飛び込んでくる田沢湖線

宿好

薄ら日に三極密語交しをり

もも

一花だに咲きたためらへる辛夷無し

随笑

みつまたの夕づく荅思慮深げ

さざ

花辛夷風納まって物足らず

随笑

三極と見しがまさしくさうであり

宿好

青空に辛夷ととんび大揺れに

随笑

日の差せば浮き上がり来る花三極

宿好

いい加減咲いて辛夷の花散らす

随笑

三極に日照時間伸びて来し

寒暑

はためける辛夷に千軍万馬の風

寒暑

耳聾す風天空に花こぶし

素抱

もくれんの蠢立つ冬芽こんなにも

辛夷の芽躍らす風のひつきりなし

石鏡

だらしなさ小児に同じ紫木蓮

燕音

木蓮 紫木蓮 白木蓮

はくれん

紫木蓮滝ノ口にも腰越にも

宿好

月高みはくれむ浮力のつくごとし

ねず

紫木蓮もくもくと日を送るのみ

石鏡

はくれむに似たれど辛夷で押し通す

ねず

吹き降りの白木蓮を横なぐり

もも

花仕度了へてはくれむ待機せり

さざ

おてだまを抛りあぐごと白木蓮

さざ

はくれむに吹いて一層強き風

さざ

快活に道問ふ青年白木蓮

宿好

こんもりとはくれむ咲かす家殖えて

さざ

白木蓮すつくと晴夜疑はず

随笑

はくれむに放送衛星巡るかな

さざ

夕冷えの白木蓮に翅音絶え

随笑

はくれむをほぐしにかかる朝の雨

さざ

月交え白木蓮の夜の宴

随笑

はくれむに雨吹っかけて来たりけり

さざ

東横線すれすれに咲く白もくれん

寒暑

月浴びて夜叉のはくれん突つ立てる

随笑

近寄る程白木蓮の生の色

寒暑

夜気帯びてはくれん百羽発たんとす

随笑

拾ひあぐ木蓮一片雨くさき

もも

もくれむの散り下手堀の内と外

ねず

連翹 いたちはぜ

もくれむの凍む枝に雨のぬくとからむ

もも

忘れもの妻の追ひくる連翹垣

ねず

連翹のハハハと又ハハハと  
 連翹の枝の跳ね出せる道普請  
 連翹の葉がちとなりぬ投票日  
 れんげうに笑ひかけらる日も近し  
 れんげうの葉をもこと解く天気雨  
 連翹の今を盛りに誰も来ず  
 れんげうのざつくばらんな枝を四方に  
 ほころびて垣の連翹味噌つ歯めく  
 やみくもに連翹の芽をつけたがる  
 連翹も微苦笑年金にも課税  
 つかぬこと伺ひますがと連翹越し  
 日向水木連翹の黄を眨めて  
 灼かれても青葉が綺麗いたちはぜ

木瓜の花 花木瓜  
 飛びつ切り上等の旭が花木瓜に  
 木瓜みんな咲いてしまへり馬鹿陽気

ねず  
 ねず  
 もも  
 もも  
 もも  
 さざ  
 さざ  
 さざ  
 宿好  
 宿好  
 寒暑  
 暮津  
 ねず  
 ねず  
 もも  
 もも  
 もも  
 さざ  
 さざ  
 さざ  
 宿好  
 宿好  
 寒暑  
 暮津

てうちてうちははと緋木瓜咲きにけり  
 更紗木瓜三弦商の庭さきに  
 木瓜の花もつてまはらぬ俳句好し

郁李の花  
 郁李の咲けば出がけに立寄りて  
 是しきの雨に郁李散れるなり  
 郁李は見る人に見ゆそんな花  
 郁李や早め早めとなる起居

紫荊 蘇枋の花  
 喪の知らせまたありさうよ紫荊  
 独りごつ男蘇枋の花を過ぐ  
 おづおづと寄りまじまじと蘇枋見る  
 悪相の紫荊雨まみれなる  
 ぱつとせぬ天気つづけり紫荊  
 このところ変な陽気に蘇枋咲く  
 紫荊噴ける蒼の笹棒な

さざ  
 さざ  
 さざ  
 もも  
 もも  
 もも  
 さざ  
 さざ  
 さざ  
 宿好  
 宿好  
 寒暑  
 暮津

紫荊己を通す色見たり  
 不景気をぼやいてみても紫荊  
 紫荊不景気づらをする勿れ  
 指圧師の家の蘇枋の花盛り  
 だうもかうも天気外れて紫荊  
 紫荊嘘で固めた戦して  
 紫荊一方的に非を難じ  
 紫荊戦はアラ一の思し召し  
 住職は頑固なお人紫荊

枸橘の花  
 花からたちこころ疎にしてそこは密

接骨木の花  
 接骨木のこんな花かときささるる  
 接骨木のおおどじ踏んで咲きにけり  
 接骨木の花まぎれんとしてゐたり  
 接骨木の芽の付き方は唯杜撰

燕音  
 随笑  
 随笑  
 随笑  
 随笑  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 暮津  
 さざ  
 さざ  
 さざ  
 宿好  
 燕音  
 宿好

既にして接骨木の芽の出臍程  
 接骨木のこちらに少し増しな花  
 接骨木咲くぼつぼつ旅に出るのもよき

黄楊の花  
 黄楊の花小雨あかるく降りにけり

春暁 春の曙  
 春暁の川波びよんとびよんと立つ  
 この齢になりて春暁てふものを  
 春は曙けふあれすべくこれすべく

春昼 春の昼  
 患者食済みし春昼箸洗ふ  
 春昼をきうと年取る魔法瓶  
 裁ち物の音のぞりぞり春の昼  
 ゲートボール春昼をなほ単調に

春の暮  
 戒名をノートに控え春の暮

随笑  
 随笑  
 随笑  
 随笑  
 随笑  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 暮津  
 さざ  
 さざ  
 さざ  
 宿好  
 燕音  
 宿好

春の宵

春宵の胸撫でおろすやうな灯よ

随笑

枝々にうるみ初めたる春の星

ばら

春の夜 春夜

春の夜のまなぶた閉じて患者たり

鳩信

洗濯物掲げ出づれば春の星

石鏡

体温計鳴り出す春の夜のとばり

鳩信

春の月 春月

春の夜の手術痕撫で寝入るまへ

鳩信

大いなる春月母子寄る方に

ねず

春の夜を看護婦消灯触れ廻る

鳩信

幹照らす春月チャンチンモドキの木

ばら

春夜尿りて体外へ出す造影剤

鳩信

良性の雲のはらわた春の月

ばら

野毛山の春の夜浅く辻楽士

素抱

朧 朧夜

販売機春夜連なる灯の區劃

素抱

ビルと云ふ直方體の夕おぼろ

もも

春燈 春灯

大部屋の消灯までの春灯

鳩信

鳥好きの人と聞きぬる家朧

さざ

熱川の宿てふ宿の春灯

鳩信

夕おぼろ入湯十訓声にして

ばら

春宵の胸撫でおろすやうな灯よ

随笑

三亀松のようはあやうの朧にて

ばら

春の夕焼

遠景の暮れてゐるなり退紅空

石鏡

大部屋の患者寢息の朧なる

鳩信

おぼろ夜のしば天踊り余興の座

寒暑

点滴の終りを告ぐる朧ごゑ

鳩信

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

悪路王籠りし達谷窟おぼろ

宿好

おぼろ夜のしば天踊り余興の座

寒暑

ふるぶると顔を震はせ蝌蚪浮上

もも

おぼろ夜のしば天踊り余興の座

寒暑

蝌蚪に見る定年といふピリオッド

宿好

おぼろ夜のしば天踊り余興の座

寒暑

棒切れをずると滑り蝌蚪の紐

宿好

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

水中の蝌蚪の紐揺り止まぬ風

随笑

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

蝌蚪探す野蒜摘みには飽きたと見え

寒暑

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

子と探すおたまじゃくしの密集地

寒暑

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

芹の水干上がる窪地に蝌蚪蝟集

寒暑

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

蝌蚪の國腕白どもに伏せておく

素抱

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

ペット屋におたまじゃくしの御玉哉

素抱

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

金魚掬ひおたまじゃくしも入り交り

素抱

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

田の底の朽葉に蝌蚪の身を寄せて

石鏡

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

ユスリ蚊の柳を好む別派かな

ばら

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

風流の始め柳に佇むは

寒暑

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

大道芸川端柳吹かる辺に

石鏡

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

柳

柳

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

柳

柳

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

柳

柳

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

柳

柳

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

柳

柳

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

寒暑

柳

柳

二重橋柳丸々松亭々

石鏡

花の間尾長が通り過ぎしのみ

寒暑

花 花の山 花の昼 花の鳥

鳥ごゑに輿行き深き花の山

ばら

花堤 花の風 花明り

だっこしてまたおんぶして花の山

随笑

他愛なく花を見てゐる旅ごころ

燕音

花の山絶えず子供のこゑがして

寒暑

花なんぞ見向きもせざる畑鴉

石鏡

上からも下からも人花の山

素抱

花見むと来しリハビリに気散じに

暮津

見通して輿行のある花の山

素抱

花咲くと鳥もすつかりその気になり

燕音

禽ごゑのひろがりすばまり花の山

素抱

早咲きの花のいたづら心かな

寒暑

花の山騒がしにくる目白かな

素抱

勘違いして咲く花に相違なき

寒暑

鳥よりも人よく遊ぶ花の山

素抱

花ほつほつ咲き出す山に悪路なし

寒暑

精米所横よりのぼる花の山

素抱

可借花散らしその形大き鳥

もも

いぶりがつこキザミがつこに花の昼

宿好

鶉飛来花散るからに散るからに

鳩信

花の昼茶毘に附す間の腹ごしらえ

石鏡

花散らす風の無理強ひしたりけり

素抱

垂直に上枝に移る花の鳥

燕音

酔どれのそれそれと散る花を

暮津

来年も又来ておくれ花の鳥

燕音

花の間鴨広がりて広がりて

随笑

花の鳥あれこれいふを聞き遣りぬ

燕音

花の間を何処まで飛翔長き鳥

随笑

間近に来目許くりくり花の鳥

随笑

枝移りして花の鳥こゑ大きく

素抱

ほころぶと告ぐる言葉の花より浮く

ばら

すいと来てこんどは小柄花の鳥

素抱

花の風鯉の背鰭を吹きにけり

ばら

何事かまくし立てたり花の鳥

素抱

鉛筆を走らす花鳥諷詠漢

ばら

桧木内川高堤いま花堤

宿好

言語野に射して言の葉花明り

ばら

花堤万の莖を敷き詰めて

宿好

当たりぬし山の日を花逸したり

ばら

花堤さてとこころで折り返そ

寒暑

雨ありし上野の山の花の首尾

ばら

飛来せる一羽花間へもぐり込む

もも

花揺るゝは船酔に似て昼日中

ばら

花房に縫れる鳥の紡錘形

もも

何もつて本復巷は花の頃

鳩信

首伸ばしすくめつ鶉の花食める

もも

花に浮かれ来たる奴に高遠城

鳩信

鳥の尾の上下頻々花隠り

もも

藩校の教場抜けて花の風

鳩信

花を発つ鳥の胴より翼出で

もも

一雨に花崩れたり北の丸

鳩信

木を替へて花ついでばめる鳥営々

もも

真つ白な花に群がる風一目

鳩信

雨に風加はり花を駄目にする

もも

その説に服しぬ花よ鳥よと詠む

燕音

花このまゝ仏生会までもたせし

さざ

折角の花が霞んで仕舞ひけり

燕音

一体に海岸ぷちの花早し

さざ

ゆとりより生るゝものに花の風

燕音

ときめける花に湿りをくれに雨

さざ

藤右衛門さんのはちまき花談義

燕音

花乏し降られづめなる鶉に

さざ

花も又花を了へたら一服す

燕音

花噴いてぼこんぼこんの桜の幹	燕音	花つきのよき木とあふぐ二人連れ	随笑
花開くまでいろいろな事があり	燕音	朝夕の殊に夕べの花の相	随笑
気ふさぎの重たき花となりにけり	燕音	花眩しむ人を眩しみ通たり	随笑
花を押す南アルプスよりの風	燕音	花は花楸は楸にて押し通す	随笑
花の下先師のおはち頭かな	燕音	宴蘭けて花びらいろの貫主さま	随笑
老若の一切を度す花の風	燕音	花は葉に東鑑にのる社	随笑
対岸の花を肴に枕流亭	宿好	花の情一入なれば酒にせん	寒暑
<small>割烹</small>	宿好	花は今高知の城下に来てみいや	寒暑
清衡が夢みし花の仏国土	宿好	かんばせに靖国神社の花の風	寒暑
花は楚々岩は恢々嚴美溪	宿好	<small>靖国神社</small>	寒暑
魁 <small>さきかけ</small> の一花百花の気概もて	宿好	えらき坂の花の靖国神社かな	寒暑
花照る中チンパンジーは何誇示す	随笑	御社に花の東京の標準木	寒暑
白隠の書画踏み破る花ごころ	随笑	満開のけふを逃して何とする	寒暑
この先も斯うした花の日和あれ	随笑	無理強いをして花奪ふ風の暴	寒暑
むさき身を花の押照る中に入れ	随笑	大鴉姿くらます花の奥	寒暑
花暈なはり大観の朦朧体	随笑	動くもの一物もなき花の景	寒暑
かんばせに受けて花吹き余る風	随笑	走り根の傍へが花の死に処	寒暑
花房へすうつと鳥の首が伸び	随笑	一昼夜風に揉まれて花濃くす	寒暑
五人百姓花に広ぐる風流傘	寒暑	日曜画家絵筆に含ます花のいろ	暮津
称名寺古図には無かり花の布置	寒暑	花の下ベルのよく鳴る三輪車	暮津
さきほどの花も佳けれど此も佳し	素抱	十日程花遅れたり建長寺	暮津
さゑずりのありかは花の奥の奥	素抱	沿線の花に急かされゆくごとし	暮津
<small>大岡川 観桜</small>	素抱	いちにち雨心に烟る花を観て	暮津
おしどりに吹雪ける花の余り風	素抱	空耳に盈ち盈つ花のせりふかな	暮津
棒切れで地図を描ける花の許	素抱	花時 桜時	
<small>野毛花見</small>	素抱	祖師 <small>身延山</small> さまの山へのぼらん桜どき	燕音
花愛づる毛唐の大首横濱絵	素抱	この人のかうゆう句が好きさくら時	宿好
横濱の花を観るなら掃部山	素抱	さくら時堤ゆく人豆粒大	宿好
花愛でて今様本田平八郎	素抱	銭湯の熱くて痒し桜どき	随笑
花啄まむと鴨身をひねり	素抱	花どきの鴨のうわまえはね雀	随笑
かるめ焼きなど賞味して花の人	素抱	花どきの乳首の脇へ聴診器	寒暑
花の蜜くすねに来たる大き鳥	石鏡	里山の下り口三つさくら季	石鏡
しばし居る木椅子は花のつめたさに	石鏡	花冷	
花の日々御飯ふつくら炊きあがり	暮津	花冷の河馬の図体ただよへる	ねず
写生の眼花と画帖を往き来して	暮津		
花奪ふ風に尻尾のあるごとし	暮津		

増上寺

花冷えの此の鐘撞かば木更津まで

もも

幹に花咲かせてさくらはちきれさう

ばら

花冷えの青天井に及びをり

ばら

海渡りさくら咲かせに一暖雨

ばら

身延山花冷からかね灯籠に

燕音

宿毎に伊那路のさくら愛でゆくも

鳩信

もくもくと花冷えどきの樺細工

宿好

怪童の腕かいなのやうなさくらの枝

鳩信

花冷えのコンドル無垢の襟巻す

随笑

夫婦して見にゆくさくらありにけり

鳩信

達磨圖にべたと花冷え花押かな

随笑

戻りてさくらに彩の戻るなり

鳩信

花冷えの坊ちゃん列車待機せる

寒暑

名庭園ならんとさくらの木も努める

燕音

花冷えのしんしん山鳥黙すとき

石鏡

人間が構つてやつて咲くさくら

燕音

花冷えの底出棺の釘打たる

石鏡

もう十年程ご一緒にさくらの世

燕音

花守 桜守

わからんと云ひて笑へり櫻守

燕音

奥山のさくらは白く春づける

燕音

桜 朝桜 夕桜 夜桜 大桜

鳥入れてさくらのうつらうつらかな

ねず

北国の餅肌いろのさくら咲く

宿好

追ひ追ひに池の廻りのさくら咲く

さざ

をととひのさくらがふつと浮かびくる

素抱

野毛山横浜絵のさくら馬上おろしやに魯西亜人

さざ

人ひとけごゑが近みさくらがそはそはす

素抱

曙のさくら一鳥抱へをり

ばら

平日の山のさくらを一人占め

石鏡

大石の昼行燈にさくらは似

暮津

貸道後公園し練炭貸し莫蔭夜桜真つ盛り

寒暑

枝張りも根張りも石割大桜

宿好

夜桜の冷え込み上着一枚分

寒暑

山中に達者なりけり大桜

随笑

夜ざくらを口あんぐりと開けみる児

暮津

山中に何時かは亡ぶ大桜

寒暑

夜桜の雪洞高くここ低く

暮津

根っこより見上げ端山の大桜

石鏡

たんたんと咲く夜ざくらに飛行音

暮津

朝の気の漲る石割桜是

宿好

夜ざくらに酔ふて地に置く紙コップ

暮津

北上川の朝の水勢さくら満つ

宿好

夕風に揉まるる桜ここから帰路

暮津

この静寂しじま破るものなく朝ざくら

素抱

人の出も日増しにソメイヨシノかな

ばら

墨堤の浮浪者に湧く朝ざくら

石鏡

ひよひよと大島桜吹かれをり

ばら

蛇口より水迸り朝ざくら

石鏡

鳥らいそいそ河津桜の原木へ

ばら

朝桜禽掻い潜り掻い潜り

暮津

幹ずんと押し出しのよき里桜

ばら

夜桜にあがる焰の二夕柱

さざ

行水所コヒガンザクラ明りして

鳩信

夜桜に誘つてみてはと付け足せり

鳩信

長官横須賀安浦 旧鎮守府長官官舎愛づ櫻なりきと顎引く

鳩信

夜桜もぼんぼりの灯もほたほたと

宿好

鎮守府の櫻の上に海展け

鳩信

夜桜の雪洞尽きるところまで

宿好

なかなかの櫻と幹に手を掛けて

鳩信

夜桜の人に混じりて華やがん

寒暑

満開の心を一に濠桜

鳩信



桜葉ばかりの赭き木となれり	ばら	東京の花見がてらの通院日	寒暑
桜葉降らすや三嶋大明神	随笑	花見支度し居れば雨や肩すかし	寒暑
樹下にゐて雀もさくら葉浴めり	寒暑	お花見のおあづけとなる朝の雨	寒暑
良寛像足許埋む桜しへ	寒暑	腰どんと地べたに据えて花見かな	寒暑
桜葉降らせて雨の粗くなる	暮津	濠端の花見に夏目金之助	寒暑
		<small>松山中学校跡</small>	
<b>花見</b> 花見客 桜狩 桜見に		花見客もう百段に顔見合はせ	寒暑
花筵		称名寺鴨も花見と洒落にけり	素抱
昼下り自転車来てさくら狩	燕音	その頃となれば花見に徒心	素抱
当山の門徒ならねど桜狩	燕音	花見弁当ひらけば鳩の優しく寄る	石鏡
桜狩たふんと水筒背に鳴りて	石鏡	沿線の花見切符を撫しながら	石鏡
地下街で稲荷購ひ桜狩	石鏡	米寿まで生きたついでの花見せむ	石鏡
花を見る心ええならええ花見	燕音	<small>母の云へる</small>	暮津
花見客杖を忘れし身延線	燕音	花見衆持ち込む小ぶりの瓦斯ボンベ	暮津
ネクタイをして花見とは上野山	宿好	花見客に唸る屋台のバッテリー	暮津
出来れば近場妻との花見何處にせん	宿好	かわず掛け河津が郷のさくら見に	ばら
川沿ひにセスナ機飛んで花見時	宿好	楽しんでよるひるさくらあさざくら	燕音
		夜ざくらを見にゆく元氣既になし	燕音

花は佳し桜しべまで見尽して 燕音 花人にはいごめんよと上り駕籠

まどろんで先師が花に遊べる凶 燕音 花人の足腰問はる象頭山

人間の勝手放題花を見る 燕音 明日雨の予報に繰り出す花の人

根っからの浜っ子野毛の桜見に ホテル 燕音 花疲

花巡り今日の泊りは武蔵坊 宿好 大仏を割愛したる花疲れ

花筵抱え挨拶交しをり 随笑 花疲れまくりしシャツの袖おろす

花を見る目配りにさへお人柄 寒暑 落花 花散る 散る花 花吹雪

花を見て花の生み継ぐ風を見て 寒暑 花屑 花の塵 飛花 花筏

沿線の桜見ながら羽田まで 寒暑 散るさくらタイムカプセル埋めし地に

花筵てふ大仰なもの持たず 素抱 称名寺殿の頭に花散れり

靴脱げる処が玄関花筵 暮津 \*北条実時銅像。重時は極楽寺殿、

走り根の出っ張り避けて花筵 暮津 時頼は最明寺殿と称されれば

**春落葉** 一卷の終りの花の水に散る 燕音

磊落な榊の落とせる春落葉 宿好 海浜の雨は曲者花散らす 燕音

**花人** はなびと 堤より花の散り込む遊び舟 宿好

墨堤に花人となる足慢ろ 寒暑 あとは散るばかりの花にふふむ酒 随笑



けふあたり出向きおかねば散る花ぞ	寒暑	花吹雪雪洞にまだ吹き足らず	素抱
朝風に流離流離と花散るも	寒暑	花吹雪小公園を突っ切りて	素抱
石手寺に花は散るのみ徒 <sup>むぢ</sup> 遍路	寒暑	谷戸住みの醍醐味は是花吹雪	石鏡
山鳥の呂律に合はせ花の散る	石鏡	花吹雪易者は八卦うち振りて	石鏡
日曜の花散らす雨罪作り	石鏡	春疾風それに倍する花吹雪	暮津
登り詰め櫻吹雪の別天地	燕音	唐破風をつゝと花屑奔りけり	ばら
横目にて象は吹雪ける花を見ぬ	随笑	花屑に小旋毛 <sup>こつむじ</sup> 風立ちぬ愛宕山	燕音
花吹雪次の一ト吹き待ちちるる眼	随笑	走り根に花屑の風堰かれけり	燕音
花吹雪そびらに駆け出したくなりぬ	随笑	蹀のたわたわ花屑踏みつけに	燕音
花吹雪く度に両掌をひらく人	随笑	シーソーの花屑吹いて跨りぬ	燕音
立ちつくしそのまま浴びぬ花吹雪	随笑	花屑の犇めき合へる轍あり	随笑
花吹雪人の話の腰折りて	随笑	花屑の中のひとひら返す風	随笑
吹雪くたびこれはこれはの山ざくら	随笑	夕雀花屑蹴つて発ちにけり	随笑
こんな日が三日続けば花吹雪	寒暑	花屑に風そろそろとたちつてと	素抱
林間を真一文字に花吹雪	寒暑	青空へ一二三と飛花発ちて	燕音
花吹雪こりやまたなんと佳き風情	寒暑	本山の飛花つきあたる堂障子	燕音
花吹雪ぱっぱと金比羅大権現	寒暑	身延山ひたすら空を亘る飛花	燕音

飛花よぎりけり北之坊岸之坊	燕音	飛花舞はす風の一変フォルテッシモ	暮津
繽紛と飛花の舞ふ方衣川	宿好	只管になること落花には如かず	鳩信
溪底の甌穴に飛花あやまたず	宿好	階に池に落花の選り好み	宿好
オオヘビガイ出土貝塚飛花よぎり	随笑	落花ひとひら二本松少年隊	宿好
杖を突く音のぱったり飛花あふぐ	随笑	落花踏み歩む堤よ北上よ	宿好
石畳飛花着地して石のいろ	随笑	高館の落花しづしづ静の舞	宿好
風太郎よこぎる飛花に眼を上げて	寒暑	外人墓地 <sup>クルス</sup> 十字架の間を落花抜け	随笑
鼻先をよぎりて飛花の舞踏団	寒暑	上枝より落花飛脚の発つごとし	随笑
一行に飛花ふるまへり山ざくら	寒暑	落花受く地べた凹凸ありにけり	随笑
腰下ろすところへ飛花の次から次	素抱	落花嗅ぎ年寄る象の浜子さん	寒暑
てのひらに飛花を掬へば浮き立つ彩	素抱	町雀雨の落花を足蹴にす	寒暑
赤塗りのひょうげた仁王飛花よぎり	素抱	赤銅いろ陸上トラック落花馳せ	素抱
飛花の風辺りが透けて見えにけり	素抱	鷲掴み落花放してみせにけり	素抱
飛花当る雪洞舟和の芋ようかん	石鏡	花筏などとはとても云へぬもの	燕音
洪鐘 <sup>おほかね</sup> に飛花の当たりてはたと落つ	暮津	花降れる地べたに雀色動く	燕音
エナメルの靴先に飛花舞ひ込める	暮津	川原石の隙を見つけて花の塵	燕音
とびつきり遠くへとべる飛花一つ	暮津	花筵山の夕冷え払ひけり	寒暑

花筏日を経し彩を泛かべをり  
石組の石を押すなり花筏

石鏡  
暮津

春の波 しゅんなみ  
春濤  
根詰めて汀を打てる春の濤  
東京湾横断フェリー春濤切り  
南房の花摘み濤色スターチス

ばら  
石鏡  
石鏡

花曇 養花天

鈍器もて物を割る音花曇り  
嘴のずんと重たき花曇り

燕音  
燕音

種痘  
茱萸をもぐ女の腕の種痘跡  
六十余年あつといふ間や種痘痕

石鏡  
暮津

養花天選挙合戦空ヲ響き

素抱

桜さくら 緘くわん 桜うぐい

国栖人に腹赤魚の瀬をのぼる

ばら

磯遊び

春の海

大あくび春の海より貰ひけり  
春望の甲板三百六十度

もも  
石鏡

くるぶしの風に乾ける磯遊び  
磯遊び馬穴覗きにくる子かな  
剣崎当りが適當磯あそび

ねず  
寒暑  
暮津

春潮 春の潮

春潮に一艇一艇打たれ鳴る  
春潮にをりをり差せる風の翳

さざ  
ばら

降り出して干潟を蟹のわらわらと  
なまぬるき風を展げて大干潟  
貝ほじくり返し干潟を汚せるも

もも  
さざ  
さざ

内海へ春は潮目もくきやかに

ばら

駆け廻り蟹は干潟のプロデューサー

ばら

春の潮上げてゐるやら退いてゐるやら

素抱

干潟踏みすつくと健康さうな脚

鳩信

ジーパンをたくしあげては浅蜷搔く

干潟踏む素足の白くさみしけれ

燕音

潮に先づ足を浸して浅蜷掘

随笑

浅蜷掘吾れは干潟の南端を

寒暑

黙々と手を運ぶのみ浅蜷掘

寒暑

ぼかと生れ干潟のひよっこりひょうたん島

素抱

浅蜷掘吾れは干潟の南端を

寒暑

干潟現る順序がありて海松の海

素抱

浅蜷掘腰を伸ばして一くぎり

寒暑

しいしいする孫に干潟の広かりき

素抱

浅蜷らの小田原評定鍋の底

寒暑

試し掘り干潟のあちらこちらかな

素抱

搔き当ててゴツと鳴れるや鬼浅蜷

寒暑

小網代湾蟹の棲み分け聞く干潟

石鏡

浅蜷掘る大潮小潮小潮の日

素抱

ロンパリの蟹の目干潟観察会

石鏡

雛あさりぼちよんと波間に擲てり

素抱

汐干狩時間を暫し棚あづけ

素抱

浅蜷居る證しそここ砂ゑくぼ

素抱

脂っ気抜かれ戻れり汐干狩

素抱

浅蜷掘りし手がからからになりゐたり

素抱

汐干狩擡ぐ尿意を如何にせん

素抱

二三箇所試し掘りして浅蜷掘

素抱

蛤

盛り売りの蛤ちゅうちゅうたこかいな  
蛤に舌も納得島遊山 江ノ嶋

ばら  
随笑

手つかずの浅蜷掘り場の無きものか  
浅蜷縞流行りの縞もありぬべし  
浅蜷掘道具倒れと云うがあり

素抱  
素抱  
素抱

浅蜷

浅蜷搔く 浅蜷掘

素抱



二輪草暗緑浄土広がれり  
この谿の落葉に肥ゆる二輪草  
飛んでくる虻真つ黒け二輪草  
私語一つ洩らさぬ二輪草の群れ

翁草 おきなぐさ

徒然なるままにけふ過ぐ翁草

桜草

さくらさう二つ返事で咲きにけり  
さくらさう貯金ちよつぴり利子ついて  
耐寒性さくら草にて花果敢  
桜草植う家いやに殖えにけり  
桜草殖やせり妻の名は陽子

霞草

それはそれで趣ありぬ霞草

チューリップ

八方塞の一方展けチューリップ

随笑

随笑

随笑

寒暑

暮津

さざ

さざ

さざ

鳩信

随笑

素抱

鳩信

随笑

素抱

鳩信

ねず

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

宿好

宿好

寒暑

素抱

暮津

燕音

宿好

宿好

もも

もも

さざ

シクラメンぼかしてポートレート撮る

スイートピー

問診に次いで触診スイートピー

スイートピーつまらぬことは気にせず

シネラリア サイネリア

鉢売の三四十二のサイネリア

看護婦の一語納得サイネリア

パンジー 三色堇

パンジーを植ゑる陽気となりけり

パンジーの好みの彩の固め植ゑ

アネモネ

たつぷりと寝てアネモネの日曜日

茎を曲げ生ふるアネモネ頑に

人参の葉っぱのやうなやつはアネモネ

ストック

風除け籐ストックの香を封じけり

燕音

もも

燕音

さざ

さざ

ばら

随笑

随笑

随笑

ねず

もも

ばら

さざ

さざ

さざ

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

宿好

宿好

寒暑

素抱

暮津

燕音

宿好

宿好

もも

もも

さざ

ストックに顔突つ込んで剪りにけり

ストックの嗚呼このかをりこのかをり

ストックの蒼ほのぼの眠くなる

ストックを剪るやほろほろ虫発たせ

ストックの畑裾蛇口起ち上がる

船室にあらせいとうの香の満てる

あらせいとう三日ばかりをかほる家

和田浦のあらせいとうのかほる径

ハウス物あらせいとうを家苞に

船室の一席とりてあらせいとう

髪に憑くストックの香も安房土産

仏生会 誕生仏 灌仏 かんぶつ

花このまゝ仏生会までもたせし

御本尊どぜう髯もて仏生会

鯉群れて撒餌とり合ふ仏生会

あまたるう空暮れゆけり仏生会

さざ

ばら

ばら

ばら

寒暑

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

石鏡

石鏡

さざ

さざ

燕音

随笑

随笑



親鳥とおもふ頭が見え燕の巢  
山峡の燕巢造りこれからよ

ばら  
素抱

駒返る草  
駒返る草定年を前にして

宿好

春の駒 若駒

春駒の昨日廻りし村に泊つ  
若駒が跳ねて蕪村の南嶺画

随笑  
随笑

雀隠れ  
来てみれば雀隠れの衣川

宿好

春の草

ひんやりと手の甲に当つ春の草  
劉生の習作春の坂の草

燕音  
随笑

ひこばえや集合時間告げられて

さざ

竹の秋

竹の秋の物心より直心  
竹秋の竹林鳴動して止まず

ばら  
鳩信

古草

古草のそこらへ坐り給へと云ふ  
古草の上を鳥の頭行き来せり

ねず  
ばら

春光

春光を芹に振り撒きゆける水  
春光をやはらかに投げ利尻富士

随笑  
素抱

古草を渡り歩きの天道虫

燕音

青麦

青麦の放てる夜気と覚えけり  
あなたなる安土の麦の青霞

ばら  
燕音

古草につらつら安房の日の射せる

石鏡

青む麦こんなに早く逝くなんて

石鏡

菜の花 花菜 油菜

望遠レンズ花菜畑の黄を絞る  
安房花菜日和ずんずん歩きけり

ねず  
さざ

押し移る日翳は見えず花菜畑  
花菜見に足を延ばして江見太海

石鏡  
石鏡

入船荘花菜畑を突つ切りて

さざ

真昼間の生唾のんで照花菜

石鏡

一泊が二泊となりぬ花菜村

さざ

カーフェリー土産売場の安房花菜

石鏡

へんにたかく咲いて月夜の花菜かな

ばら

咲きたくて花菜うづうづしてゐたり

石鏡

いちめんの花菜みつばち見えてくる

ばら

菜の花のきちがひじみしひかりあぶ

さざ

くらくらと花菜の中を歩きけり

燕音

菜の花にずんと展けて安房の海

さざ

船で来て安房の花菜に染まらんと

宿好

菜の花に虻は呪文を唱えけり

ばら

土地人に教はり花菜に沿ふ径

寒暑

菜の花の空ゆく雲も一茶風

燕音

まんぼうの走り廻れる花菜の沖

寒暑

菜の花に北信五岳月夜かな

燕音

畑ほとりより出す花菜の宅急便

寒暑

踏切の傍に菜の花のほほんと

石鏡

男来て三脚降ろす花菜畑

寒暑

遠く見し菜の花を今至近距離

石鏡

押し黙り見居り花菜の虻の所作

素抱

畑の昼菜の花いろの尿をして

石鏡

花菜晴れ漁師は漁に精を出し

素抱

油菜にアゲハ春型かさむりて

さざ

悠久の青空があり花菜の上

石鏡

菜を摘みに車は袖ヶ浦ナンバー

石鏡

浜大根の花

浜大根何處から降りても小網代灣

石鏡

すずめのでつぼう束毎山の田を返す

燕音

この先に径無ささうで浜大根

素抱

田に引ける水音すずめのでつぼうに  
午報告ぐ酸葉に雀の鉄砲に

随笑

大根の花 花大根

色合ひのおとなし過ぎる花大根

ばら

雀の槍生へり英軍墓地の芝

もも

髭草 ちしや レタス

パリパリ感好きでレタスとフランスパン

素抱

雀の槍

雀の槍生へり英軍墓地の芝

素抱

狐の牡丹

キツネノボタンその実みどりの金平糖

素抱

諸葛菜

こんなにも殖えてどうする諸葛菜

もも

髭草 ちしや

かがんぼの脚踏み外す髭草

ばら

諸葛菜晦日の雨に伸び切りて

さざ

種漬花

一茶坊の生地たねつけ花の盛り

燕音

腰越状したためし地の諸葛菜

鳩信

雀の鉄砲

コップに挿すすずめのでつぼう独立祭

ねず

継ぎはぎのその日暮しや諸葛菜  
忍性墓 諸葛菜蒙古退かせし僧の墓

随笑

代掻かれ雀の鉄砲水浸し

ねず

決めた事決めた通りに諸葛菜  
諸葛菜些事より他に無き老後

寒暑

諸葛菜要らぬ戦争引き起こし

素抱

御柱落とす地点へ白き蝶

鳩信

建長寺 回春院 諸葛菜巡らせ尼ぜの起居かな

暮津

マンモスの白歯のやうな岩に蝶

宿好

豆の花 蚕豆の花

そら豆のもう咲いてゐる青入江

ねず

蝶せせる薬わなわなとまんじゆさげ  
紋白蝶とおじやましている引き売女

宿好

そら豆の花の勝手な思ひ込み

燕音

いぶかしみ見て過ぐ蝶の蒐まる木

素抱

豌豆の花

豌豆の花ぬくぬくと砂地畑

ばら

ヅッキーニ実結ぶ蝶の肝煎りで

素抱

蝶 紋白蝶

紋白蝶が仏舎利塔を越えんとす

もも

幽冥の蝶たゆたへり南谷

石鏡

よろよるとじやがたらいもの花へ蝶

もも

捕虫網出会ひ頭の蝶逃がす

石鏡

油菜にアゲハ春型かきむりて

さざ

春風

春風は海を渡りて檳榔樹

さざ

取継る蝶もニッコウキスゲ色

さざ

入り鉄砲 出女 春風 出入りす

燕音

知恵の輪の外るごとく蝶別れ

ばら

風上げの子の渚まで一目散

寒暑

風 遂に風向きとらえたる

寒暑

石鹼玉吹ける側から壊されぬ

素抱

風平衡感覺使ひけり

寒暑

破裂して石鹼のしぶき岩つ角

素抱

風の尾のながながしきを誇りとす

寒暑

ぶるぶると俵形してしゃぼん玉

暮津

砂浜に落ちて砂噛む奴風

寒暑

突き出せる子の掌に大破しゃぼん玉

暮津

風船 紙風船

コスモスの空へ風船離せし子

随笑

女童の立つてふらここ漕ぎ出せり

さざ

紙風船土産に雲の浦を発つ

寒暑

ぶらんこの下の余寒の水たまり

寒暑

紙風船春を手玉にとるごとく

素抱

ふらここは青天井より垂れゐたり

素抱

怪獣ごっこ紙風船にもう飽きて

素抱

朝寝

第六感当り風船逃がしたる

素抱

遠浅の海に遊べること朝寝

ねず

風船より軽き身ごなし大道芸

石鏡

句を案じ暫し朝寝も虚子掌上

さざ

石鹼玉飛ばす子追ひかけ壊せる子

素抱

日曜日大魚籠のごと朝寝せり

ぱら

石鹼玉

一つ一つが三千世界しゃぼん玉

素抱

春眠

まんまるに直りいびつなしゃぼん玉

素抱

春眠曉を覚えずまでゆかず

ぱら

春眠のゴリラの地下足袋めく蹠

寒暑

春眠曉を覚え目覚めぬ大部屋に

鳩信

蛙の目借時 目借時

検査の為の検査蛙の目借時

鳩信

蠅の家の飛距離まだまだ知れたもの

随笑

採血の血管選れり目借時

鳩信

人間も木石の類蠅の子に

素抱

目借時沽券てふ字が書けなくて

鳩信

蠅の子の触りたくなるもの数多

素抱

年金の本など読んで目借り時

宿好

蠅の子の元へ戻つてをりにけり

素抱

干菓子に型俳句にも型目借時

随笑

蠅生る家にぶらぶらしてゐては

石鏡

めかり時映画はシルバー料金にて

寒暑

春の蠅

種あかす手品などみて目借時

素抱

すぐ思いあたる仕種を春の蠅

ぱら

春愁

春愁ふウツボカズラに指入れて

鳩信

春の蠅探せばをりぬ俳諧寺

燕音

春愁ふ吾が骨格を医師と見て

暮津

春の蠅一挙手一投足の妙

燕音

蠅生る 蠅の子

蠅生る磯長の國の磯歩き

ねず

止まらせてなまあたたかき春の蠅

素抱

蠅の子の止まりつぷりも物馴れて

さざ

春の蠅ちんぷいとぞ消えにける

素抱

蠅の子の追はれて次に止まる処

さざ

春の蠅番屋の客に蹤いて来ぬ

素抱



大人しくしてゐる春の蠅でなし

石鏡

柿色に降り注ぐ日に蜂降れり

鳩信

春の蚊

ぷーんと来る春の蚊にしてあな近き

寒暑

ポタージュを蜂嗅ぎつけぬカフェテラス

燕音

虻

コスモスの縁を掴みて虻沈む

さざ

蜂飛来即眼圧といふ言葉

随笑

買手つく菊の苗より虻立たせ

ばら

混浴の蜂の来る湯に今一度

素抱

ホバリングする虻に貌突き出して

宿好

徒組は割喰う旅や蜂を除け

素抱

方向をくると転じ虻の尻

宿好

蜂の巢

もも

虻去るとはつかに石路の独り言

宿好

さんしゆゆの葉裏に蜂の小さな巢

もも

つっじに虻図体あづけ蜜吸へり

随笑

すずめ蜂患部のごとき巢を作り

随笑

虻一匹迷い込みたる音薄暑

寒暑

山門にスズメバチの巢林昌寺

素抱

押し黙り見居り花菜の虻の所作

素抱

蜂の巢の容が風邪の熱の眼に

石鏡

花虻の音聞く限りきかん坊

素抱

逃水

燕音

べこ虻は炭酸ガス好き車中にゐる

素抱

逃水の直路ビートの照り返し

燕音

蜂

あはててはいけない柿を滑る蜂

鳩信

逃水や斜里岳とろけ出しにけり

燕音

岳麓の朝日きびきび山吹に

もも

山吹や川波めくれめくれゆく

もも

宿の灯のくつきり点る濃山吹

もも

朝方の楓翼果に風湧ける

もも

山吹の上の断崖底技けし

さざ

榎榎の花 まるめろの花

もも

ご門前朝の山吹なまなまと

ばら

花まるめろ雨が陽気に降り出して

素抱

山吹の黄を突つ切りて正受庵

燕音

空鳴つて風吹く日なりくわりん咲く

素抱

夕暮を呼び出してゐる白山吹

石鏡

花くわりん夜間飛行の灯のちらちら

素抱

ここ最も奥まる塔頭濃山吹

暮津

積根 けんぼなし

素抱

海棠

海棠の蒼解く風方丈へ

ばら

けんぼなし昨夜の嵐の落としもの

石鏡

海棠に負けぬ笑顔を撮りなされ

随笑

瞬きてあけびの雄花雌花かな

ばら

馬酔木の花

湘子逝く馬酔木も花の鉦打ちて

暮津

花あけび引率の子は上級生

ばら

雪柳

二度咲きの一つこつきり小米花

ばら

花通草物音一つたてぬ村

素抱

雪柳三千世界此処にあり

燕音

葱坊主苞を破りて落慶式

もも

雪柳

雪柳佛花と決めて幾星霜

素抱

葱坊主苞を破りて落慶式

もも

葱坊主

雪柳佛花と決めて幾星霜

素抱

葱坊主苞を破りて落慶式

もも

雪柳佛花と決めて幾星霜

素抱

葱坊主苞を破りて落慶式

もも

雪柳佛花と決めて幾星霜

素抱

葱坊主苞を破りて落慶式

もも

葱坊主越しなる象潟小学校

石鏡

雫切りのぼる太陽金盞花

ねず

春の筍 しゅんじゆん

暮津

篠囲ひして金盞花まだ葉がち

ばら

下駄履きの作務僧春筍抱えくる

暮津

金盞花砂の目潰し喰ひけり

随笑

明日葉

鳩信

日持ちよき安房金盞花仏壇に

寒暑

明日葉の道を巡りて島弘法  
\*島弘法は島内八十八ヶ所にある石仏  
明日葉に子守唄めく冬の潮  
八丈島で夕立のことを斯く云へば  
明日葉を嬉しがらせる所降

鳩信  
燕音  
寒暑

種蒔きに出で退屈の虫退治  
朝顔蒔く  
種蒔きに出で退屈の虫退治

石鏡  
寒暑  
石鏡

蝮蛇草 まむしぐさ

宿好

朝顔蒔く

ばら

山道のここにどっこい蝮蛇草

宿好

朝顔の種蒔く臍を下にして

もも

杉菜

宿好

朝顔蒔く穴ぼこに種子一つづゝ

石鏡

カツパ淵杉菜の青を流しけり

宿好

朝顔種子浸すに休眠するやつも

石鏡

華鬘草 けまんさう

素抱

茶摘 送り主曰く  
茶摘み畑手が回らねばうち捨ておく

ねず

鯛釣草うらはらの世を明るうし

素抱

茶摘籠腰に弾ませ結仲間

ねず

都忘れ

宿好

茶摘み畑手が回らねばうち捨ておく

素抱

世話なしの都忘れの株殖やす

宿好

茶摘み畑手が回らねばうち捨ておく

素抱

金盞花

宿好

蚕

素抱

天蚕いろカーテンに覚む患者なり

鳩信

蛙 山蛙 代蛙 昼蛙 田蛙

鳩信

桑

ばら

蛙合戦 夕蛙 牛蛙

ばら

廃れたり桑と甲源一刀流

ばら

下駄鳴らすごとし古刹の山蛙

ばら

霏といふおほやうなもの桑巻けり

ばら

二タ三搔き股ひろげ浮く山蛙

燕音

大滝村桑が長じてしまひけり

宿好

山蛙聞き駈蕩として長湯

宿好

蔦若葉

宿好

衣川やいのやいのと代蛙

宿好

蔦若葉磨き込まれし芸に似て

素抱

代蛙一雨あつてもよささうな

暮津

蔦若葉吹く風クラブ10カラット

暮津

昼蛙腹の底より啼くが佳し 岩松院

燕音

座禅草

ねず

曲り家の三和土伝ひて昼蛙

宿好

沼尻に雲せり上がり坐禅草

ねず

昼蛙愚の骨頂と啼くなめり

素抱

春深し 春闌く

暮津

田蛙のカララ躰に共鳴す

燕音

病人に個室大部屋春闌けぬ

暮津

北安曇野月夜高吟小田蛙

宿好

夏近し

もも

田蛙聞きうたたね心地畑毛の温泉 湯

随笑

小包の紐切る音も夏近し

もも

田蛙のいかい雲から貌出す富士

随笑

劉生の道の画ばかり夏近し

随笑

足音に蛙の田蛙算を乱し 国分寺

寒暑

甘藪場に甲烏賊の寄る夏近し

石鏡

田蛙の貝摺り合はずごとくなり

寒暑



流れ藻の長短首夏の佐渡航路	寒暑	夏の男鹿すなぶけおどのバスガイド	寒暑
三夏その首夏告げわたる風なりけり	素抱	夏鴉遺跡の丘に何漁る <small>*すなぶけは鰻寄る おどは年寄</small>	寒暑
用足して丸善に寄る東京首夏	素抱	これといふ宿題はなし夏百日	寒暑
青故郷法事一つに繋がりて	さざ	夏といふ概念掴み始めし子 <small>冬は蟬鳴かないよという児の話の耳にして</small>	寒暑
常夏のウツボカズラのサキノホン <small>大船植物園</small>	鳩信	又の旅夏と定めて青富良野	素抱
硝子器に箸の当りて夏の音	鳩信	脛打っていまいましきは夏机	素抱
水槽のホタテでんぐり返る夏	燕音	鼻先に「夏だ！旅だ！」の車中ビラ	素抱
モンスター生まるゝ夏の甲子園	燕音	嬰の寝巻ピエロの水玉模様の夏	素抱
三振を喫す唇鹹き夏	燕音	<small>妻の名は陽子 横浜生れ</small> あけつびろげの 港のヨーコ ヨコハマ 夏	素抱
常夏の島で鍛えしサウスポー	燕音	寄りかかる妻ゐてなにかと助かる夏	素抱
妻の夏吾が夏一つ屋根の下	宿好	夏雀山居倉庫の瓦に跳ね	石鏡
ごろ寐の夏又来て厄介かけまする	随笑	もめごとや野毛坂下の夏の闇	石鏡
硝子の泛子ごろり夏場の大間崎	随笑	品書は天候次第夏魚 <small>茅ヶ崎 地魚料理店 えぼし</small>	石鏡
乗り合はす夏の嘗ての通勤車	随笑	納豆の風味のアボガド出回り夏	暮津
夏鴉開口一番「夜が明けた」	寒暑	往時の逗子サマータイムといふがあり	暮津
夏旅プランお岩木に寄り龍飛に寄り	寒暑	足速き夏の魚は酔でゝて	暮津
パナルジン効き過ぎ水腎症の夏	寒暑	ハーモニカ上手な軍曹シネマ夏	暮津
へたる夏何かと云へば生卵	暮津	五月	
程々に手を抜くことも鎖夏のうち	暮津	髪詰めて童顔もどる五月妻	ねず
岳父の世話そんなこんなで一夏過ぐ	暮津	白帆消ゆ沖に五月の風余し	もも
瘡蓋や一夏過ぎむとしつつあり	暮津	税関のプラス五月の空展け	随笑
夏の日の思い出づくり休暇村	暮津	良寛堂五月雀の屯せり	寒暑
定年後夏はつとめて早起きす	暮津	山車出して風に当てをり祭月	素抱
あつさりと躰抜けゆく夏の水	暮津	グラビヤの五月の暦ガレー船	石鏡
立夏 夏に入る 夏来る		厨より話に加はる五月妻	暮津
夏始まる		愛鳥週間 バードウィーク <small>奥鬼怒川温泉</small>	
けふ夏に入れり櫂の戦ぎぶり	もも	バードウィーク森のみどりに染まるべく	素抱
<small>田淵ひで子さん逝く</small> 訃音告ぐ子の名は穂高立夏経て	ばら	初夏 初夏 夏はじめ <small>しよか はつなつ</small>	
海原は鯤の背隆と夏が来て	ばら	ポポーの木と云ふを植込み夏はじめ	ねず
口癖のえらいえらいの夏始まる	鳩信	跡にはつなつの砂返りけり	さざ
これより夏砂州を舞台の花宴	燕音	はつなつの砂場のままごと遊びかな	鳩信
けふからの夏を向ふに廻したり	随笑	はつなつの尿を所望す泌尿器科	鳩信
良寛の綽名からすの夏迎ふ	寒暑	夏迎ふ駝鳥に片減りしない脚	鳩信

夏は来ぬ焼津の海の魚光り  
屑籠は大きめが佳し夏はじめ  
はつなつの花を絶やさじ新仏

卯浪うなみ

雲の浦昼夜を舍めず卯浪寄す  
左手ゆんでより弥彦山へ寄せて高卯浪

卯浪寄せ佐渡を真正面の宿  
目を据ふる卯浪の果てに佐渡が見え

船室に雑魚寝卯波の為すまゝに

卯波立つ沖へ乗り出すえつさ丸

船窓に高卯浪みて横坐り

佐渡島畳々として照り卯浪

牡丹 ぼうたん 紅牡丹 白牡丹

緋牡丹

ぼうたんの白に浸りてゐる浴後  
ぼうたんの匂ひ薄める風立ちぬ

燕音  
素抱  
暮津

ぼうたんを揉みに揉む風打合へり  
さしかかるぼうたんの名は陽明門  
ぼうたんに疎んぜられて発つ蠅か  
ぼうたんを見限りて風荒吹ける

随笑  
随笑  
随笑

寒暑  
寒暑  
寒暑

大きくて立派な鉢や紅牡丹  
ぼうたんの咲けばついつい嗅いでみぬ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

花あほる風千変す紅牡丹  
まぶしかり雲頂庵の白牡丹

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

緋牡丹の錯乱状態つづくなり

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

日きざはしの牡丹日暮れて風の牡丹かな

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

階の幅員ひろし牡丹寺

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

牡丹圖を杜若圖に掛け替へよ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

真上より覗きて牡丹いびつかな

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

愛染明王示現牡丹の花中より

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

格天井牡丹圖牡丹の頃に来て

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

牡丹吹き通りすがりの巫女を吹き

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

大き蠅牡丹臭さを帯びて発つ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

閑にして寂たり牡丹の間の土

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

真似して嗅ぎ牡丹に顔をそむける子

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

盛りの牡丹危惧する程の雨でなし

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

風絶えぬ一日牡丹の獅子奮迅

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

更衣 衣更ふ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

床ずれのはつかに在りぬ更衣

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

衣更へて手足すうすうする一ト日

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

更衣即ち着古るし作務衣かな

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

緩きもの肌が覚えて更衣

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

衣更へてたよりなき襟掻き合はせ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

更衣首にほくろのある女

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

葉桜

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

葉の混んできたるさくらの幹にほふ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

葉ざくらの候と書き出し本降りに

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

牡丹吹き通りすがりの巫女を吹き

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

大き蠅牡丹臭さを帯びて発つ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

閑にして寂たり牡丹の間の土

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

真似して嗅ぎ牡丹に顔をそむける子

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

盛りの牡丹危惧する程の雨でなし

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

風絶えぬ一日牡丹の獅子奮迅

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

更衣 衣更ふ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

床ずれのはつかに在りぬ更衣

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

衣更へて手足すうすうする一ト日

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

更衣即ち着古るし作務衣かな

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

緩きもの肌が覚えて更衣

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

衣更へてたよりなき襟掻き合はせ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

更衣首にほくろのある女

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

葉桜

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

葉の混んできたるさくらの幹にほふ

寒暑  
寒暑  
寒暑

寒暑  
寒暑  
寒暑

葉ざくらの候と書き出し本降りに

寒暑  
寒暑  
寒暑



夏めく

秋篠寺

梵天の御衣夏めく安佐美止利

さざ

大道芸ネタを小出しに野毛薄暑

石鏡

いちめん夏めく潮路えつさ丸

寒暑

薄暑来て始末の悪きチョコレート  
鰻の肝横目に見て過ぐ街薄暑

暮津

話続け夏めく茶の間に汝が口調

暮津

やみくもにティッシュ渡さる街薄暑

暮津

薄暑 薄暑光

閑取に前歩かるる薄暑かな

ねず

カーネーション 妻母として贈られき

寒暑

むしむしとする日を咲きて夏みかん

もも

母の日

母の日のおかあさんてばおかあさん

随笑

蒸し暑き花掲げたり泰山木

もも

芭蕉巻葉 芭蕉青葉

随笑

ジョージ・グロス回顧展  
ハイル・ヒトラー！ 鷲ペンで描く髭薄暑

宿好

青芭蕉風にはためく湯屋の帰途

暮津

大道芸蒸す日を火噴き男かな

寒暑

雨風にばらけ初めたり青芭蕉

暮津

虻一匹迷い込みたる音薄暑

寒暑

茄子苗

暮津

嗚呼東京駅  
赤帽のポーター 徘徊驛薄暑

寒暑

茄子苗植う穴掘りかけて逝かれけり

暮津

蒸す一夜唄が洩れ来て「碌でなし」

寒暑

三社祭

暮津

ヒザラガイ見るさえ薄暑覚えけり

素抱

角刈の昇き手匂へり三社祭

素抱

だんご虫節々返す薄暑光

素抱

祭 夏祭 御旅所 山車 神輿

素抱

薄暑の野毛髯のチャップリン笑ひ集る

石鏡

祭 夏祭 御旅所 山車 神輿

素抱

夜宮 祭舟 祭の子

射的屋の手持ち無沙汰も夏祭

鳩信

神輿昇く掛声くたびれてはならず

燕音

裸電球杜に巡らせ夏祭

素抱

酒気帯びて男はさうよ神輿昇

素抱

孫預かる故の散財夏祭

暮津

神輿昇道路端にて腹ごしらえ

素抱

御旅所に団扇と扇子語らひつ

さざ

躓きてゴツと夜宮の走り根鳴る

もも

御旅所の氷の下の烏龍茶

素抱

綿飴にぶつかりさうになる夜宮

随笑

山車倉を叩きて榊の荒雫

もも

祭果て巨き夕浪立ちにけり

ねず

はつはつと山車倉の上に鴉鳴ける

もも

祭くる門川に殖ゆ糸みみず

ねず

よれよれとなりて夕日の山車を曳く

もも

わらしべに鯨の吊られて御祭神

ねず

山車獅子の晴れ着の唐草模様も古り

燕音

浦祭藻を出で入りのべらを見て

ねず

山車神楽鉦は痴人愚鈍と

寒暑

鱸の花垂弥次郎兵衛めく祭舟

もも

風流山車出を待つわんこそば屋の前

寒暑

祭の子遊びの町内湯

鳩信

風流山車見返し遠のく刈屋姫

寒暑

足が向き神田古本まつりかな

鳩信

山車出して風に当てをり祭月

素抱

小鯨の前曳祭の子がわーい

燕音

立話山車の引き手の減りしこと

素抱

祭足袋ばたばた御朱印船を曳く

燕音

山車を曳く中に友みて木遣誦す

素抱

祭見の立ちんぼ疲れ馬車道に

随笑

浅草のカツ井色の神輿かな

燕音

横濱にズンタカタツタ祭くる

随笑





若葉 若葉雨 若葉風 山若葉

若葉曇り

若葉雨日照雨にかはる御神域

さざ

析若葉すいと雨滴を奔らする  
熊ノ湯に入るも一興若葉どき

ばら  
燕音

くろもじ若葉雨降ってよし晴れてよし

暮津

若葉風立たす木の名をふうといふ

もも

若葉風若葉雨とが入り乱れ

随笑

播粉木の音のづるづる若葉冷え

随笑

若葉風温泉街に吹き込めり

素抱

連休の若葉曇りの初日かな

随笑

遊園地若葉風切る複葉機

石鏡

真鶴の魚付林の総若葉

随笑

こんもりと煽り甲斐ある樗若葉

もも

甲斐甲斐しく若葉日を撥ね馬刀葉椎

随笑

若葉して樗は杜の明り取

もも

身の内の門外れ若葉の湯

素抱

樗若葉して石畳冷え込めり

素抱

析若葉山の天気恵まれて

素抱

ふる雨に桃の葉並び美しき

もも

湯けむりも樗若葉ももくもくと

素抱

からまつの間の一樹の夕若葉

さざ

連休の二日目若葉曇りかな

石鏡

山若葉こんもり朴の木もあらむ

さざ

若葉して青葉す杜に神在ます

石鏡

碌山のタッチ若葉のやはらかさ

ばら

ヤットウの皇宮警察森若葉

石鏡

うねり出すぶどう若葉のみどりの炎

ばら

若葉して敏達七年噴火の山

石鏡

柿若葉

直木三十五の墓  
墓のうへ瘦せ古柿の柿若葉

暮津

杉落葉

杉落葉積もり旧道絶えだえに

素抱

椎若葉

三浦半島 小網代湾  
馬刀葉椎みどり溶け込む油壺

石鏡

杉落葉惨と散り敷き自刃の地

石鏡

樟若葉

楠若葉神馬のけぞるごとく揺れ

さざ

筍

筍は口を嚙んで掘るべかり

鳩信

照り合うて拝殿おほふ楠若葉

さざ

筍は何處にでも出る度し難し

鳩信

この森の貴公子楠の若葉せり

宿好

画狂老人真筆雪中筍狩

燕音

楠若葉むんむん御成小学校

随笑

筍を例えて云へば男気歎

随笑

献燈は丸亀汽船樟若葉

寒暑

筍飯

樟の花八幡神社鎮めけり

素抱

齢なりに私も頑固筍飯

燕音

楠の花咲いて薄暮を募らしむ

石鏡

蒨

楠の花水屋に水のおふれをり

石鏡

木零の音を聴きゐる華奢な蒨

さざ

常磐木落葉

伽羅蒨をつまむ箸もて「例のほら」

鳩信

露刈のごそつかせゐる羅白露  
山の露なればしつかり灰汁抜けと  
露を先づ湯搔いて春の水仕事  
面白さうに剥く露なれば私にも  
朝の蛾のかぶさる露の葉の一つ  
露を過ぐスクールバスの空車  
新じゃがの入る料理なら何でもよし  
新じゃがの薄皮ほどの幸せも  
賞与の日そら豆が出て湯も沸いて  
そら豆の莢突き出せる島の道  
皺寄らぬやうに蚕豆茹でるコツ  
蚕豆の正東風に吹かれ勁き茎  
突端に来てそら豆の花の道  
そら豆の撓むかたちはダリ好み

燕音

燕音

随笑

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

素抱

ねず

ねず

ねず

もも

さざ

ばら

ばら

そら豆の怪童に遭ふ夢のなか

そら豆をつまめば指の温みほど

俳諧のよしみの酒をそら豆に

剥き甲斐あるそら豆にしてこれっぽっち

剥き売りのそら豆に錆雨後の街

さやゑんどうの摘みどき海の乱反射

絹莢のさして頼りにならぬ蔓

莢透いて海の日とほる豆の部屋

豆飯

豆飯

豆ごはんほつと安堵すその彩に

はんちくな齡を取るまじ豆の飯

何するにも大勢は佳き豆の飯

豆飯の湯気の立つうちいたただかん

芍薬

芍薬の珠日に熱す根本寺

ばら

ばら

随笑

暮津

暮津

ねず

さざ

ばら

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

寒暑

寒暑

寒暑

大船 龍宝寺  
玉繩の一寺手広く芍薬植え  
一休の数ある頓知芍薬玉  
芍薬の一念三千想ひ玉  
敦盛草 蓄弾けば固し固し  
敦盛草母衣らしきもの抱え初め  
海芋  
筒つぼの海芋は雨を蒐む花  
文字摺草 振花  
振花のどれも動力尽きしさま  
文字摺草きりきりしやんと立ちにけり  
振花の翩翩梅雨の中休み  
見染めたるときのときめき文字摺草  
文字摺草一つの他は皆消えて  
おもはゆき振花の辺に汝と坐る  
振花のういういしさがこみあげる

素抱

素抱

素抱

素抱

暮津

素抱

素抱

ばら

ばら

もも

ばら

ばら

随笑

寒暑

寒暑

素抱

素抱

雨脚のぴよんぴよん車前草伝ひなる

蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて

偏見はすこぶるつよし車前草村

車前草に覆はれ堅穴住居の丘

車前草踏み遺跡ガイドのポランテア

車前草に埋もれて道は在るには在る

車前草の穂の逞しく夏送る

車前草の穂の擦り切れし岬みち

擬宝珠

擬宝珠

吉野の日子ぼしの上を通りけり

擬宝珠の花にはじまるお題目

擬宝珠の茎をすりと雨滴馳せ

消息のその後ふつつり花ぎぼし

車前草の花

雨脚のぴよんぴよん車前草伝ひなる

蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて

偏見はすこぶるつよし車前草村

車前草に覆はれ堅穴住居の丘

車前草踏み遺跡ガイドのポランテア

車前草に埋もれて道は在るには在る

車前草の穂の逞しく夏送る

車前草の穂の擦り切れし岬みち

擬宝珠

吉野の日子ぼしの上を通りけり

擬宝珠の花にはじまるお題目

擬宝珠の茎をすりと雨滴馳せ

消息のその後ふつつり花ぎぼし

車前草の花

雨脚のぴよんぴよん車前草伝ひなる

蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて

偏見はすこぶるつよし車前草村

車前草に覆はれ堅穴住居の丘

車前草踏み遺跡ガイドのポランテア

車前草に埋もれて道は在るには在る

車前草の穂の逞しく夏送る

車前草の穂の擦り切れし岬みち

ばら

ばら

随笑

暮津

暮津

ねず

さざ

ばら

ばら

鳩信

鳩信

鳩信

寒暑

寒暑

寒暑

姫女苑 ひめじよをん

ひめぢよをん偶さか雨に搏たれけり さざ  
はるじよおん富士も薄紅帯びて聳つ 随笑  
ひめじよおん朝方一度降ったきり 素抱  
ひめじよおん作り込まない庭が好き 石鏡

ロベリア

液肥与ふペチュニア・サフィニア・ロベリアと 暮津

マーガレット

兔波マーガレットに駆け寄りぬ さざ

罌粟の花 けし

蘇る為の管吸ひ罌粟のゆめ 鳩信  
ICU室

罌粟の昼キュンと音して砂糖溶け 暮津

雛罌粟 ポピー

煽られてポピーフレンチカンカンめく さざ  
雛罌粟のごとき欠伸を内房線 ばら  
せつせつせ雛罌粟咲いてぱらりとせ ばら

花作りホース引き込むポピー畑 寒暑

雛罌粟の苔の考え深げなる 寒暑

欠航にて安房の雛罌粟摘がふい 石鏡

鉄線花 鉄線

鉄線の剪り処ここらと鉄当て もも  
献身は人目につかず鉄線花 暮津

忍冬の花 にんどう すひかづらの花

にんだうの花の自随落雨の底 随笑  
吸呑みのやうな花つけすいかづら 素抱

棕櫚の花 花棕櫚

航海を終へて棕櫚咲く家に居り ねず  
花棕櫚を仰ぎゆつたり坐りけり もも  
棕櫚の花黄昏長う長うせり もも  
まだ借手つかぬ空家の棕櫚咲けり もも  
本堂の畳ざはりや棕櫚の花 もも  
棕櫚の花雨に散けて落ちにけり さざ

棕櫚の花はらはら零れカステラも 鳩信

棕櫚の花生々垂れて負け惜しみ 石鏡

棕櫚の花一寸バナナを思ひ出し 石鏡

桐の花 花桐

口笛に空鮮しや桐の花 ねず

花桐に雲青年に志 もも

咲く桐に一瀉千里の旅ごころ もも

いつぼんの水道局の桐咲けり さざ

雲冷えてひとりごころの桐咲けり さざ

もうひとつ桐の筒花拾ひけり ばら

観音は空に存すや桐の花 鳩信

桐描くには水彩に如くはなし 鳩信

桐の花入れて一景仕上げけり 鳩信

桐咲いてやうやく空がおちつきぬ 鳩信

桐の花程よき距離に立ちてみる 鳩信

職退いて一年経つか桐の花 随笑

花桐のあなたの佐渡は暮れずともよし 寒暑

＊このみやのもりのこしたにこどもらと

あそぶ はるひはくれず ともよし 良寛

桐咲いて鰻の寝床のやうな町 寒暑

国上寺 雲高山国上寺とや桐咲かせ 寒暑

桐の花寺の和尚はむらさき好き 素抱

桐の花ばかんと眺めゐしが去る 素抱

桐の花先代の顔もう忘れ 素抱

桐の咲く民宿で売る遊魚券 素抱

朴の花

指し示すゆびにあつまる朴の花 さざ

目を戻し再び天の朴の花 さざ

朝は朝の智が働いて朴の花 鳩信

葉隠れの朴見んものと一步横 寒暑

何だろと見上げて朴の残り花 石鏡

泰山木の花

門構へ泰山木に負けてをり

ねず

花水木

波羅羯諦はらぎやくてい泰山木の花咲けり

ねず

一新の街路アメリカハナミズキ

もも

泰山木散る滅却といふ言葉

ねず

港区の街路樹ドッグウッドなり

随笑

泰山木拝見磴の端借りて

もも

大山蓮華

泰山木ずりおちさうな花とどめ

もも

上品の大山蓮華咲きにけり

ばら

だしぬけに降られて泰山木の下

もも

薔薇

蒸し暑き花掲げたり泰山木

もも

ありきたりな色でありけり垣の薔薇

もも

葉の混み来てアンリルソ一の泰山木

ばら

老人が出て来て朝の薔薇剪りぬ

さざ

泰山木高みに咲いて月に逢ふ

随笑

立て続け降る雨薔薇を砕きけり

さざ

泰山木花の始末をだうつける

石鏡

黄旧古河庭園の似合ふ薔薇の名札はオクラホマ

鳩信

あらがねの光放てり泰山木

石鏡

薔薇の赤き棘も美観の一つにて

鳩信

椽の花

花了り椽うつさうとして来たり

鳩信

グラビア版カレンダーあり裸婦と薔薇

宿好

胡桃の花

花胡桃

花くるみつめたき雫こぼしけり

さざ

晩年を薔薇に腐心の老大家

宿好

鬼くるみぼつつり芽吹く千曲川

燕音

一政の心頭の薔薇真くれなゐ

宿好

けふと踏む予感当りて薔薇崩る

宿好

木村家 良寛戒語百ばかりありと聞けば  
良寛の戒語空木の花の数

寒暑

色と云ひ隣家の薔薇に遜色なし

随笑

いつ降ってもよささうな空花空木

素抱

鉄テツの音遠くよりして薔薇騒然

寒暑

梅花卯木ほとほと雨の止まざるよ

暮津

芳香茶フレイテイ薔薇の季節にまだ遠く

素抱

団体客箱根空木の紅を愛で

暮津

雨のあと薔薇壊す風ありにけり

素抱

気のせいか箱根空木に雨ぼつり

暮津

奇想曲薔薇にふさはしブッチーニ

素抱

竹植う 竹酔日ちくすいび

もも

ほら見てよ薔薇が奇麗よあんだ達

素抱

庭土が性に合ひたる移し竹

もも

鑑あぶすり摺のヨット馳すなり薔薇の窓

素抱

洒落て詠む気などさらさら竹酔日

寒暑

相応の薔薇の門あり領事館

素抱

卯の花腐しうの花くた

暮津

マタドールレッド激しやカフェの薔薇

素抱

卯の花腐し思案ああでもかうでもなし

暮津

薔薇どきの噴霧器門に置き忘れ

素抱

蝸ざりがて 蝸ざりがて

鳩信

知らぬ間にあらあら薔薇のうどん粉病

素抱

ざりがにのそっくり返るはこけおどし

鳩信

晴れ間縫ひ薔薇に噴霧器鳴らしをり

素抱

ペット屋にざりがに入荷五連休

石鏡

薔薇真つ赤チラシ一切おことわり

素抱

川懐古向うざりがに捕りの金谷かな

石鏡

植木市薔薇前にして施肥講釈

暮津

大井川渡り少年時代 回顧ざりがに採りにゆく

暮津

卯の花 花卯木

蝦しやこ 蝦しやこ

釜茹での蝦蛄に夕映始まれり

随笑

昼寝より覚めてうまづらはぎの顔

ばら

六子

のんのんとウマズラハギが近づき来

ばら

寿司喰いねえ江戸っ子好みの穴子寿司

暮津

皮剥の尾鰭背鰭の鰭拍子

ばら

鱧

ナンヨウハギそんじよそこらにない色で

ばら

島泊り別誂えの鱧料理

ばら

正月顔せる皮剥を賞味せり

鳩信

トラ鱧の薄茶の縞の涼しさう

鳩信

この槽ふねのウマヅラハギでござんすよ

燕音

半分は遊びの鱧の渚釣り

素抱

かははぎの顔を迂闊に造物主

燕音

鱧・鮑・甘海老地物お任せ寿司

暮津

皮剥は天下の珍珠火を熾せ

燕音

いづ

皮剥の小さき鰭振る鎖夏法

随笑

浦祭藻を出で入りのべらを見て

ねず

とぼけたる貌のうまづらはぎの匂

随笑

げんなりと赤べら魚籠に腹を見せ

もも

皮剥の革財布などあらまほし

随笑

皮剥

馬うまづら面剥うまづらはぎ

さざ

馬面剥の外れに外れたり左右の眼

寒暑

初対面紋付剥と申す者

さざ

鯖

およそこの世に与し易きはうまづらはぎ

さざ

水揚げ場鯖鯖の大海港

石鏡

かははぎの目の後退を何とする

さざ

船名入りリヤカーしこたま鯖積んで

石鏡

魚籠の皮剥もうおだぶつの顔したり

ばら

飛魚

八丈島等九句

ねず

にゆうべえと蛸漁の沖見渡して

飛魚跳んで跳んで水平線退る

ねず

にゆうべえと蛸漁の沖見渡して

烏賊

佛俳諧オベ景色(病棟は水槽)

鳩信

帆立貝

烏賊下北路医長やおら脈拍とりにつけり

鳩信

水槽のホタテでんぐり返る夏

燕音

烏賊釣りの漁火鬼の目ん玉大

随笑

活ホタテ開きほっけに地酒酌む

素抱

烏賊と海胆さざぬちりばむ半島絵図

随笑

鮑

下北の一夜干し烏賊星の下

随笑

鮑あわびの上あるく鮑よ一遍忌

ねず

烏賊釣船きんきらきんの百裸灯

寒暑

夜のあわび一枚岩を這ふといふ

ばら

入江より漕ぎ出て朝のカッチキ釣\*カッチキは烏賊の子

寒暑

腕っこき海女の揚げたる大あわび

ばら

一夜干し烏賊のカーテン風岬

石鏡

房総産鮑槽ふねよりひっぺがす

燕音

甘藻場に甲烏賊の寄る夏近し

石鏡

大金のごと磯鮑押しただく

随笑

妻湯浴む間のげそ煮の火を守れり

石鏡

門前のさざえあわびの岩場かな

寒暑

蛸

玄冬の地蛸粗塩すり込まれ

さざ

鮑がね金一丁持って海底へ

石鏡

蛸博士腹式呼吸教授せり

鳩信

鱧・鮑・甘海老地物お任せ寿司

暮津

地のものこのれ一品と云へば蛸

燕音

山女

蛸漁のその大方は朝の内

素抱

青嵐山女魚焼く火を襲ひけり

ねず

蛸漁のその大方は朝の内

素抱

山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき

鳩信

山女釣荒くれ岩をひよいひよいと  
岩魚の瀬すこし上ミ手に山女の瀬  
山女釣れ紅葉に腹を返しけり

麦 麦畑

太陽の三時の色の麦畑  
この丘の麦のツー・トーン・カラーかな

麦畑継ぎ目なく風送るなり  
大旋風つむじ生まるることも麦畑

麦畑を追はれ鴉の減らず口  
停車してホームが足らず麦畑

人焼ける畑麦畑からからに

麦の秋

力要る老いの脱糞麦の秋

穀象

テロ企つ奴は穀象より劣る

柁まきばの花

パレード率て皐月のハーレイダビドソン

越後長岡まで足を伸ばして田草月

早苗ひとり月非登利あ處非そびの旅をして

皐月賞ある日の野毛の酔っ払ひ

はがき書く皐月の水性ボールペン

人怖じせぬ雀皐月の鳩に伍し

メモ書きの押さえに皐月の醤油壺

シンプルがベスト皐月の装身具

花菖蒲 白菖蒲 菖蒲田

ノハナシヨウブ  
めんどくささうに吹かれて花しやうぶ

白菖蒲蓄きりきり鋏めく

ごったがへす菖蒲田の径譲り合ひ

花しやうぶ見つめて風の見えるまで

素っぴん箱根湿生花園のノハナシヨウブに逢ふ水辺

山妻にノハナシヨウブの季ときありし

ほんち捕る子に目つぶしの柁まきば櫃  
柁垣\*ほんちは喧嘩蜘蛛のことうどんこ病のなすがまゝ

安居あんじ

安居寺廁草履のうすべつた

南畝の忌

南畝の忌嘘をまことの種として

■六月

六月

六月の鴉どすと樹頭に降り

六月のピザ生地寝かす雨の昼

六月の自炊棟廊冥く長し

六月の植木鉢をばちばちん

皐月さつき

早苗月 田草月

雑草あらくさとしての勢ひを五月山

磁石の針大きくふれる五月山

谷川の水飛沫して五月空

ねず  
随笑

さざ

もも

鳩信

素抱

石鏡

暮津

ぱら

燕音

燕音

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

さざ

さざ

さざ

ねず

もも

随笑

もも

水捌けの悪きを著莪に好まれて

さざ

新聞売りのおばさんのこゑ明易し

鳩信

野あやめの妹分の著莪咲けり

さざ

明易の己に見えぬそけ髪

寒暑

島の著莪活けて茶店の富士見亭

宿好

明易の言葉は韻きやすきかな

寒暑

著莪に雨たうたう来たねとご住職

宿好

人語なし明易の鳥ひた啼くに

寒暑

御不浄と云ふ語遣れり著莪の花

随笑

明易の誰か蛇口をひねる音

素抱

著莪叢の凄みを増せる不動脇

随笑

水は尿にゆつくり変はり明易し

素抱

著莪に降る雨や雨水のはけ所

寒暑

寝言云ふ孫預かつて明易し

素抱

しるがねに著莪は睦月の日を返し

暮津

雀啼く平屋の家の明易し

暮津

雨癖のこれからつくよ著莪の空

暮津

喪の家の明易ければ鳥のこゑ

暮津

一八 いちはつ

一八のひよいと咲いてるまひるかな

さざ

短夜の體内に水ゆき渡らす

素抱

一八の旺んなる中葬りけり

ばら

短夜を寝ねんとするに肋に手

素抱

短夜 みやすし

明易の顔をふるんと洗ひけり

もも

生保内節短夜の湯に響かせて

石鏡

並べ干す手拭三連明易し

もも

自炊棟短夜明けて煮炊きの火

石鏡

雨音の奥に雨音明易し

ばら

天皇賞走破の馬体湯気揚げて

随笑

競馬

花橘

橘のかをるが如く上木す

さざ

この村の津波避難路栗の花

随笑

蜜柑の花

むしむしとする日を咲きて夏みかん

もも

花椎か薬師の壺か夜を匂ふ

ねず

保養所の庭木のみかん花盛り

燕音

椎の香と云ひかけて顔見合せり

ねず

柿の花

柿の木の前からさし弱き花

さざ

「附子」を觀て椎のにはへる戻り道

もも

柿の花ひとり男が遺されし

暮津

椎の花やたら妄想掻き立てに

随笑

吾が棲みし借家健在柿の花

暮津

椎咲いてむつとするな狸穴坂

素抱

柿の花妻の実家に近く棲み

暮津

椎匂ふ日中友好会館裏

暮津

石榴の花

石榴散り振袖火事の火の粉めく

鳩信

えごの花蛇のお尻の大きこと

寒暑

ざくろ散る凶事相次ぐ世となりて

随笑

水木の花

ざくろ咲き通院かんかん照りの道

素抱

素性よき樹木といはむ花水木

鳩信

栗の花

栗の咲くここまで三陸大津波

随笑

瑞々しき水木花挙ぐ塔ノ沢

石鏡





虫共の鼻も曲らむゼラニウム

暮津

十薬を引き来しと云ふ言無けれど

素抱

鋸草

手に当てて切れ味試す鋸草

素抱

十薬の見目うるはしき立石寺

素抱

矢車草

矢車草風出て潮色急変す

寒暑

徒に十薬引けば梅雨近む

暮津

花殖やす和尚の心根矢車草

素抱

どくだみや皆何處か病み薬漬け

暮津

十薬 じふやく どくだみ

十薬を抜き来てさつぱりしたる顔

もも

萱草を燭と見立てて仏具岩

随笑

十薬に朝の一刻日差しけり

もも

萱草咲く墓地の後を五能線

寒暑

とぼつちりうけて十薬むしらるる

もも

紫蘭

十薬の森の何処より手をつけむ

さざ

風の中紫蘭の内緒話かな

寒暑

うつむいて庭の十薬引一途

さざ

鈴蘭

十薬のむつと一雨ありさうよ

ばら

鈴蘭に横より突き出すむさき顔

随笑

十薬の筒芽棒立ち選佛場

ばら

銀龍草

十薬にも植物園の標示札

素抱

椴松の根方にひよっこり銀龍草

燕音

これなんとかしなくちや十薬はびこる庭

素抱

同音にへエと女ら銀龍草

石鏡

呼ぶこゑに後戻りして銀龍草

石鏡

君の磊落南瓜の花に相通ず

暮津

銀龍草女五人に囲まるる

石鏡

西瓜の花

蚊帳吊草

蚊帳吊草古風な風を送りけり

ねず

よく聴ゆ汽笛西瓜は一番花

ねず

抜きとりて雨のにはひのかやつり草

もも

新橋の飲屋の裏路地走り梅雨

寒暑

手折りみむかやつり草の彼のにほひ

宿好

引つばれば飛び出すティンシュ走り梅雨

素抱

かやつり草背高きは摘み取られけり

宿好

入梅 梅雨入 梅雨の入り

もも

かやつり草翁も泊てし川港

随笑

梅雨に入る樽昂然樽懽然

もも

瓜の花

いつまでもこどもはこども瓜の花

暮津

くろぐろと梅雨入の八ヶ岳の大つむり

もも

南瓜の花

花南瓜尻窄まりの通り雨

ばら

梅雨の葉のこまごまと梅雨に入る

鳩信

頑張りのきくうちが華花かぼちゃ

ばら

梅雨入の鰐逃げしが御用となるニュース

寒暑

いい加減降って止む雨花南瓜

鳩信

使ひ古る座右の辞書と梅雨に入る

寒暑

半島のかぼちゃの花のパツパラ

燕音

梅雨入の八百屋そこそこ品揃え

寒暑

畏くも玉音放送花かぼちゃ

随笑

いないいないバアを決め込む梅雨入富士

素抱

水垢の亀にも年季梅雨に入る  
にゆうべえと蛸漁の沖見渡して  
玉川温泉  
首筋にヒリと梅雨入の酸性湯

素抱  
素抱  
石鏡

ぶるぶると行手をよぎる梅雨雀  
梅雨雀何か追い詰めたる羽音  
梅雨雀乗りて屋外瓦斯ボンベ  
物音をはばかり起きれば梅雨雀

もも  
鳩信  
寒暑

梅雨 青梅雨 男梅雨 荒梅雨

梅雨晴 梅雨湿り

素抱

梅雨雀フェンスを上り下りしをり

素抱

青梅雨に集へる信徒魚族めく

さざ

目の粗きフェンスを潜り梅雨雀

石鏡

青梅雨のくどきチラシにくどき彩

石鏡

梅雨晴間小包ぽんと届きけり

もも

植込みを打ち始めたる男梅雨

さざ

梅雨晴間壁に凭るるぬひぐるみ

さざ

映画館出て馬車路の男梅雨

寒暑

悪たれる鴉を相手梅雨晴間

ばら

男梅雨吉良の仁吉の一節を

寒暑

伸びをする雀の居りて梅雨晴間

随笑

男梅雨おろかに肥ゆる楯大樹

素抱

梅雨晴間うどん粉病をやむ庭木

暮津

楯零砂地をうがつ男梅雨

素抱

梅雨籠りあうむにこゑを奪はるる

ねず

梅雨空の突つかえ棒の外れ月

鳩信

梅雨籠りあうむの与太を飛ばしをり

ばら

これ長子、修学旅行より戻りてもこれもこれも土産よ梅雨暈

ねず

病むわれに声撒きちらし梅雨鴉

ねず

寝そべりてクイズを解ける梅雨暈

素抱

高枝より喧嘩売ること梅雨鴉

もも

しよぼくれし灯に床延べる梅雨暈

石鏡

濡るゝ枝掴み直して梅雨鴉

もも

梅雨鴉けふは出ばつて近所の樹

鳩信

江ノ電はゴトゴトと来ぬ梅雨枕木

宿好

梅の幹くろぐると梅雨待ちみたり

ねず

目次に目あそばせ梅雨の日の読書

随笑

鯉跳ねてどうんと梅雨の水面打つ

もも

紙を切る音のそりそり梅雨一間

随笑

梅雨湿りゴヤの巨人の黒髪も

もも

亀虫の匂ひ持ち込む梅雨の家

随笑

見つめゐる梅雨のシグナルレッドかな

もも

ほつりんと剃り残されし梅雨の髯

随笑

梅雨到来告げて編集後記かな

もも

扱花の翩翩梅雨の中休み

随笑

函強く振つてとり出す梅雨の本

もも

荒雫梅雨ならではの泰山木

随笑

梅雨の月上つてをりぬ家間近

もも

黴ぬやう手の打つてあり梅雨食品

寒暑

まんぼうのやうな梅雨雲沖にあり

もも

梅雨村田英雄逝くなんぞ吹き飛ばす唄皆の衆

寒暑

教会の三人掛の梅雨木椅子

さざ

俳梅雨「人生劇場」高らかに

寒暑

移動せり梅雨の黒雲バツファロー

ばら

梅雨の家居あれもこれもと妻頼み

寒暑

梅雨の浪へこと凹みてたゆたへり

ばら

身の内の退屈の蟲鳴き出す梅雨

寒暑

梅雨大扉入るや洞なす大仏殿

ばら

梅雨の家居おんじま飲食の手間かけまする

寒暑

梅雨といふ辟易月に入りにつけり

鳩信

梅雨の玻璃阿弥籤めく雨滴馳せ

素抱

一通り聞きて入院梅雨海鼠

鳩信

川幅をゆつたりと持し梅雨大河

素抱

梅雨どきの眼ごろごろ使ひ過ぎ

鳩信

横浜駅西口梅雨のアンブレラ

素抱

柄の大きかうもり傘より梅雨雫

宿好

診察室二十番出て梅雨の街

素抱

病廊に外来患者あふれ梅雨	素抱	通行人 こんにちわ上がりましたネ梅雨のあめ	素抱
病院売店にて 商品のお出かけメイトは梅雨の杖	素抱	悼 <small>名古屋章</small> ドンガバチヨの声優梅雨に隠れけり	素抱
梅雨のラジオ早口にしてくだくだし	素抱	とある日の梅雨の合間のコップ拭き	素抱
老眼と乱視ごちやませ梅雨をみる	素抱	梅雨の本ブックエンドに挟まれて	素抱
原色のボディスーツに梅雨のダイバー	素抱	蕎麦ボーロやおやおやこれは梅雨湿り	素抱
梅雨払ふ笠置しづ子のよいわんわ	素抱	梅雨どきの湾岸道路灯の連鎖	素抱
釣人に野暮な問い掛け梅雨を云ひ	素抱	梅雨最中とんだ薬の副作用	素抱
<small>房州 富浦</small> 釣人のにべ無き応えボソと梅雨	素抱	生りものの容歪みて梅雨の果	素抱
梅雨の航連れ添う鷗 <small>ゆう</small> 宜候と	素抱	振り塩の穴の目詰り梅雨長引く	素抱
午後からの梅雨のやつつけ仕事かな	素抱	はおるもの一枚足せと梅雨予報	石鏡
表札の町名旧きまゝ梅雨へ	素抱	だ <small>孫 美雨</small> んご虫愛づる姫君梅雨の庭	暮津
掃除機に追はれて梅雨の部屋を退く	素抱	徒に十葉引けば梅雨近む	暮津
梅雨どきの何處を見据えて金魚の目	素抱	ポツチャンと跳ねしは梅雨の稚魚でした	暮津
徒然に梅雨の抽斗開けてみぬ	素抱	梅雨の湯舟に銀座カンカン娘の唄	暮津
醤油壘押さえに梅雨の置手紙	素抱	自動点滅街灯梅雨の灯を点す	暮津
気まぐれ梅雨降ってきたかと取り込みもの	素抱	荒梅雨にぶつくさ云ひても始まらぬ	暮津

五月雨 さみだれ

五月雨の降り込む椎と榎の間	さざ	遊覧船やませの底を這ひ廻り	随笑
道灌の墓五月雨を聴くばかり	さざ	山峡の稲をいぢめに山背 <small>やませ</small> 風くる	素抱
さみだるゝ尿道造影剤検査	鳩信	黴	
保 <small>も</small> つまいとおもふ空から五月雨	素抱	黴まじく仁王どんぐり眼かな	ねず
出水		黴まじくパイプオルガントツカータ	さざ
		赤黴の自治領蟻が通りけり	ばら
		黴どきの無精が無精生む寢床	鳩信
		黴ぬやう手の打ってあり梅雨食品	寒暑
		黴どきのバイキンマンをやつつける	素抱
		あらあら黴下駄箱の靴搔い出して	素抱

空梅雨 からつゆ

空梅雨の下駄箱の戸をがらがらり	燕音	なまり節喉につかえて万事休す	素抱
あいの風 <small>やひこ</small> 弥彦山の沖浪白らめ吹く	寒暑	十六夜の生節の血合いつつき食ふ	暮津

やませ

林代の浜のやませに身をすくめ	随笑	鰻	
襲ひ来るやませに立往生の松	随笑	蒲焼きなど母に奢ろうかとおもふ	宿好
赤松の美林にやませ忍び足	随笑	鰻召せ長寿の因 <small>もと</small> の鰻召せ	宿好
やませの魔手蠟燭岩に伸びにけり	随笑		

東海道三嶋の宿しゆくのうなぎ食ぶ

鰻喰うて間延びした顔店を出づ

昼餉のあとごろり鰻にでもなるか

蛸は朝鰻は午後と漁仕分け

雨の中漁して鰻の地獄どめ

鰻の香ながす鰻松あな憎し

鰻松に入り来鰻のやうな客

鰻をり光湛えて桶の底

鰻描く腹を真白にたらし込み

鰻屋の主好みの歌麿絵

ご無沙汰の鰻に箸をつけにけり

鰻の肝横目に見て過ぐ街薄暑

なまろ

涼しさは染めつけ鯨向付

こり

雨合羽光らせ鯨のがらびき漁

亀の子 銭亀ぜにがめ

銭亀のいづれ遜色無かりけり

泳ぎ出す亀の子鼻を反らしけり

蓮田べり亀の子ぶかぶかやつてをり

亀の子は首から泛かむこと覚え

甲羅干しなどして亀の子亀之助

亀孵る白砂と御坊指さしぬ

ごり押しの一亀の子岩に乗る

山椒魚

山椒魚の手足を置ける水温む

蟹

気散じの虫首擡げチゴガニ見に

チゴガニの遠目利く中闖入す

チゴガニの百千萬と我对す

チゴガニの応援団の白手套

チゴガニのラジオ体操散開し

随笑

随笑

随笑

随笑

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

暮津

暮津

鳩信

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

さざ

ばら

鳩信

宿好

宿好

宿好

随笑

さざ

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

寒暑

チゴガニの鉄上げ下げボタンコ

チゴガニの踊を真似て去なんとす

チゴ蟹の小心者に芦の風

チゴ蟹の万歳小旗持たせし

鉄抱き磯蟹波をかぶりけり

つままれて脚硬ばらす磯屑蟹

磯屑蟹打ちて雨脚強くなる

道一本引き込みアカテガニの森

小網代の森の育てし赤手蟹

穴掘れり森の隠者の赤手蟹

もくもくと藻屑蟹漁濁り川

旅先の藻屑蟹めく目覚めとも

沢蟹の脚すりぬけて奔る水

沢蟹の桔梗いろの肯を押ふ

沢蟹の歩むその先靴で堰き

沢蟹のとことこ宇津谷地藏盆

沢蟹も雨にもみづる凹凸竄

寒暑

寒暑

石鏡

石鏡

もも

さざ

さざ

寒暑

石鏡

石鏡

随笑

随笑

さざ

さざ

燕音

燕音

宿好

沢蟹のカタンと転けて宇津谷道

待宵の濡れ岩隠り蟹の爪

弁慶蟹葎の葉騒に目を上げぬ

ぶつかつてここは譲れぬ蟹同志

びらびらと蟹の口許南風吹く

蟹横に横に夕日を引摺れる

泥を食ふ蟹を見つめて腹空けり

蟹に眼を凝らして蟹のやうな顔

降り出して干潟を蟹のわらわらと

穴を出て小蟹疾と疾とと駆け出せり

砂蟹の穴に押し入る無理無体

目の遇ひし蟹が脳裡にちらつくも

口もとにぶだう運ぶは蟹めくも

冬灯蟹の甲羅はキチン質

駆け廻り蟹は干潟のプロデューサー

柿芽吹き蟹の鉄のやうな芽を

渡り蟹いろの夕映え額染めて

随笑

ねず

もも

もも

もも

もも

もも

もも

もも

もも

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

来る波に蟹のたじろぐ岩つ角	ばら	渡り蟹甘藻の林はすかひに	素抱
泡の中蟹の何やら策しをり	ばら	わらわらと乾きて蟹の砂だんご	素抱
踊るならタンゴに如かず高脚蟹	ばら	蟹さんの型押し遊び灼け砂に	素抱
蟹と岩を起こして蟹捕る子	鳩信	小網代湾蟹の棲み分け聞く干潟	石鏡
<small>金澤八景 野島海岸</small>	鳩信	コメツキ蟹健啖にして砂団子	石鏡
牧谿猿蟹捕へんと身を乗り出す	燕音	ロンパリの蟹の目干潟観察会	石鏡
<small>室町水墨画展</small>	宿好	冬の虹のこのこ蟹が這ひ出して	石鏡
蟹のいふ事情とやらを聞きやらむ	随笑	椿落つ小坪の蟹の横這い径	暮津
岩畳蟹追いかけて追いかけて	随笑	<b>蝸牛</b> <small>かたつむり</small> ででむし でんでんむし	
岩に手を掛けて退ければきよとんと蟹	随笑	でで虫の止まる広葉に朝が来て	もも
盗み歩きする蟹数多ゐて面白	随笑	早起きをしてでで虫の側にゐる	もも
浄土ヶ浜蟹の称ふるお念仏	随笑	でで虫の当推量が外れけり	もも
藻畳の中にて蟹の目覚むらん	寒暑	でで虫に深淵なせる油壺	もも
蟹奔らせ白南風渡る巾着湾	寒暑	でで虫も其角の墓も傘の内	さざ
芦騒の煽りくらひてコメツキガニ	寒暑	でで虫のでん公雨を呼びにけり	ばら
コメツキガニ穴に脚かけ警戒す	寒暑	でで虫の角のほとりへ寝ぼけ貌	随笑
<small>少年時代、マメコブシ蟹をまんじゅう蟹と呼び親しめば</small>			
韓信の股潜りかやまんじゅう蟹	素抱		

でで虫の大きいなる伸び朝朗	随笑	総領の甚六にして蝸牛	暮津
<small>あさぼらけ</small>		竹木石何でも登る蝸牛	暮津
でで虫の角さえさはれぬ女の子にて	素抱	蝸牛さうださうだと頷けり	暮津
庭中のでで虫蒐め一つ木に	素抱	白塗のバルコン滑る蝸牛	暮津
角つつき子はでで虫の調教師	素抱	でんでん虫雨が当りて角曲げぬ	素抱
でで虫の引つかかる殻さてどうする	素抱	角振りてでんでんむしは唄ふ虫	素抱
巡礼の遠のくやうに蝸牛	ばら	毎日を気楽に気楽にかたつむり	素抱
蝸牛化シテ蛞蝓トナラン今日カラハ	宿好	その殻も薄手に秋のかたつむり	石鏡
<small>カッユ</small>		<b>蛞蝓</b> <small>なめくじり</small> なめくじり	
蝸牛程の私の運動量	素抱	なめくぢら砥石溶かしにかかりけり	もも
竿の上滑り易くて蝸牛	素抱	蝸牛化シテ蛞蝓トナラン今日カラハ	宿好
蝸牛妙な明るさ遺しけり	素抱	なめくぢの請願届き雨三日	随笑
蝸牛そこで迷うて何とする	素抱	蛞蝓に好かれて良寛さんの墓	寒暑
人はローン蝸牛は殻を負ひ晩夏	素抱	鉢退けられあらはづかしのなめくじり	暮津
殻負へる蝸牛より倅せに	素抱	なめくぢの所業リンチに値せむ	暮津
なほ容とどむ朽木に蝸牛	石鏡	なめくぢは極刑草鞋虫は放免	暮津
蝸牛連休出歩く当てもなく	石鏡		
蝸牛課題は生活習慣病	石鏡		

植木鉢取り退けなめくじ狩りにけり

暮津

墓ひきがへる  
蟾ひき

小肥りな躰を伸ばしなめくじり

暮津

踏み外すことが愉快でひきがへる

素抱

一言に気分害しぬなめくじり

暮津

墓見とがめられてはもぐり込む

素抱

蛞蝓の光を溜めて薄笑ひ

暮津

棲みつける墓ものそりと門涼み

素抱

唇のごとくなめくじ歪みけり

暮津

後退る方は当方墓でなし

暮津

蚯蚓みみず

墓荒唐無稽の世に生れて

暮津

祭くる門川に殖ゆ糸みみず

ねず

言の葉のでつくわすとは墓にこそ

暮津

掘り返して団子虫やら蚯蚓やら

さざ

隠棲の仕方を墓に教はりぬ

暮津

洗ひ場の底にうごめく大蚯蚓

燕音

断るに墓の威厳を借りたきもの

暮津

杭打ちて二月の蚯蚓驚かす

宿好

へどもどと墓に遇ひたること申す

暮津

大蚯蚓仏となりて大異変

寒暑

墓が家にわれらが間借りしてゐるやう

暮津

みみず棲むことが上出来腐葉土と

暮津

墓とことん措辞にこだはりて

暮津

恥部を見る顔付きをして蚯蚓見る

暮津

河鹿

紋章のごとく大蚯蚓の轢死

暮津

鬼無里村河鹿謡へり鬼女紅葉

燕音

ぺちゃんこに蚯蚓国道一号線

暮津

時の記念日

時の日

素抱

手を抜けばかうなる見本蚯蚓の死

暮津

時の日や曜日たつきに疎き生活たつきぶり

素抱

さくらんぼ 桜の実 桜桃

団欒の灯のゆきわたりさくらんぼ

ねず

「あゝ、雨」桜桃口へ運びつゝ

暮津

よく食べる子にはさくらんぼが出るぞ

ねず

日和よく山桜桃の花の二三日

もも

アメリカンチェリー一粒底光り

鳩信

愛らしき荅からしてゆすらうめ

素抱

さくらんぼ甲乙丙の丙の味

随笑

李すもも 巴旦杏

暮津

手仕事にふんぎりつけてさくらんぼ

寒暑

けふいちにち裸でとほす巴旦杏

暮津

さくらんぼ狩のツアーのこいつとうさん

素抱

杏子あんず

随笑

さくらんぼ狩の観光バス横付け

素抱

杏の核真つ赤に蟻の総掛かり

随笑

さくらんぼ狩がある日の天童晴れ

素抱

お何と酸っぱ杏に瞞されし

寒暑

試食してピンからキリのさくらんぼ

素抱

実梅 青梅

素抱

さくらんぼ天近きほど甘きとぞ

素抱

裾頒けの実梅の山を三つに盛る

ねず

さくらんぼ熟れし証しの一光点

素抱

青梅のひよわきは落ち転がれる

もも

退け時の一年生過ぐ桜の実

石鏡

梅もぎの擦り傷此処とこことここ

さざ

さくらんぼ片目つぶりてまだ酸しよ

暮津

青梅の真夜の土打つ音ならむ

さざ

けふも又雨かやれやれさくらんぼ

暮津

生りものを包める産毛実梅にも

ばら

さくらんぼ茎を抛るが面白き

暮津

落梅を一つ處に庭そうじ

鳩信

濡縁に落梅三つ四つ寄せてあり  
実梅採る母が長棹えつさつさ

宿好  
寒暑

デザートに枇杷の出で夜を本降りに  
熟れ枇杷の雫ほたほた地をうてり  
ほんのりと枇杷に自祝のおもひあり

ねず  
もも  
さざ

### 紫蘇

庭の紫蘇摘み来て鯨のたたきかな

もも

枇杷にのる色の散漫また降り

さざ

虫喰ひの紫蘇も一緒に吹かれをり

もも

枇杷の木にだらだら雨の始まれり

鳩信

赤紫蘇にお山詣での汗拭ふ

素抱

養生してひととせ経つか枇杷色づく

鳩信

赤紫蘇畑繩文人の棲みし丘  
星野遺跡

素抱

枇杷黄ばむほの明るさに百日忌

燕音

紫蘇漬の紫蘇の粒噛む一人酒

素抱

海明り早生り枇杷は四国一

寒暑

元氣づけ赤紫蘇巻のにぎり飯

暮津

ぎょうさんな実をつけ貧乏症の枇杷

寒暑

### 辣蕒

生身魂だうした訳からつきよ好き

暮津

病人の吐き出す枇杷の種大き

寒暑

### パセリ

とんカツのツマのパセリのやうな日々

石鏡

雨上りわけても枇杷の雨雫

素抱

### 玉葱

喪の家の厨の玉葱発芽して

暮津

出来悪き坊主のやうな路地の枇杷

素抱

### 枇杷

枇杷の種落とせば木の音したりけり

暮津

認知症病みて熟れ枇杷滴らす

暮津

枇杷滴るこんな管ではなき母に  
悼 勝亦年男

暮津

御神域しんと鴉の子育てどき

寒暑

熟れ枇杷や敢へて云ふなら人缺月

暮津

子鴉の姿もやがて樟の森

寒暑

### 楊梅

やまももの巨木なるほど温暖な

さざ

悪態つく子鴉近所の電柱に

寒暑

楊梅の朱ヶ夏落葉方円に

素抱

近所まで出張り鴉の御曹司

寒暑

楊梅の街路樹中華街近し

素抱

杜の子烏通行人を小莫迦にす

寒暑

### 木天蓼の花

またたびに降りだしさうな出羽の空

石鏡

目に余ることも鴉の子育てどき

素抱

### 要の花

要栄ゆ吾が家新築然として

もも

早苗の上農兵節の富士現るる

さざ

### 烏の子

新築の家成りレッドロビン垣  
\*カナメモチの一種

暮津

常念岳の膝下早苗の丈も伸び

さざ

### 要の花

子鴉の分際にして威嚇すか

さざ

山峡の風に黄ばみて余り苗

鳩信

### 烏の子

子鴉の分際にして威嚇すか

さざ

代田に引く水の咳き込むごとくなり

ねず

### 要の花

神木を遊び場にして鴉の子

随笑

張る水はどぶろくに似て代田なる

ばら

威嚇して地を掠め翔ぶ親鴉

寒暑

道祖神巡り代田を迂回して

ばら





くさむらに転げ込んだりほたる火が	さざ	なまなまと葉を透き歩く草螢	随笑
川の音ほたるさつぱり出なくなり	さざ	大螢降下わくわくする子らへ	随笑
山峡を一つほたるの急行便	ばら	竹林螢の宿はこの奥に	随笑
ほたるにも戀の鞘当てありぬべし	宿好	螢臭き掌をおし広げ見せにけり	随笑
ホタルの句書き取る手許如何にせん	随笑	源氏疾うに平家 <small>横浜自然観察の森</small> これから螢谷	寒暑
稔ほたる灯京ほたる連れ立ちて	随笑	この谷戸に月と私と草螢	寒暑
ほたる待つ谷戸にわくわくしてゐたり	寒暑	螢火を団扇に受けて粹な人	寒暑
今日は居ずホタルガイドのボランティア	寒暑	木道をあくる螢の速さかな	寒暑
ほたる火の人に當たるもおかまいなく	寒暑	隠り沼に遅まきながらと出づ螢	寒暑
ときに雄渾ときに可憐に谷戸ほたる	寒暑	さてさてと螢見の腰上げにけり	寒暑
ほたるにも気に喰わぬ風あると見え	寒暑	往き交へる螢大きな方を追ふ	素抱
竹林に発し螢と一川と	もも	螢との交信何を以てせん	素抱
鼻先へすうつと螢臭き風	もも	突如吹く風に螢の灯を落とす	素抱
目の前をずんと明るき螢過ぐ	さざ	螢発つ粹な噂の起つごとく	素抱
トパーズいろサファイアいろの螢とぶ	ばら	棲み分けてここは源氏の螢谷	素抱
よろよると平家螢の草隠り	ばら	迅きこと飛脚のごとき螢なり	素抱
一匹は上ずるやうに飛ぶ螢	随笑	大風に螢あはてゝ落つこちぬ	素抱

風出でて螢の宿の早仕舞ひ	素抱	田亀	水中に田亀もさつと昏れにけり	ばら
草螢そこそこ指さすさき	素抱	蛭	田の蛭にラジオ体操第二番	寒暑
螢の出問ひ合はせれば昨夜五頭	暮津	源五郎	源五郎へへと闇より現はるる	ばら
風の綾捉えて螢上昇中 <small>横浜 自然観察の森</small>	素抱	まひまひ	まひまひの気合ひの入りし一円相	ばら
風絶えて螢の宿は藪臭き	素抱	水馬 <small>あめんぼう</small>	あめんぼう方程式のXなす	ねず
螢狩 螢見	ばら		あめんぼう飛び越しゆるあめんぼう	もも
螢狩知り合ひのあて声かはす	随笑		あめんぼう木屑のごときがやたら跳ね	寒暑
螢見に行かんと軽く腹拵え	随笑		水遁の術もて泛けるあめんぼう	寒暑
螢出る迄の四方山話かな	随笑		沓履きて古刹の秋のあめんぼう	石鏡
螢狩戻りがてらの街明り	寒暑			
通し鴨	石鏡			
己が浮力持て余しをり通し鴨	素抱			
輕鳧の子の一羽後塵押しけり	素抱			
輕鳧の子の入り来るを待つファインダー	素抱			
輕鳧の子の従順なるとならざると	素抱			

図に乗りて蓮に乗り上ぐあめんぼう	暮津	ぎこちなきところ未だあるあめんぼう	寒暑
二タ三掻き樹影を出づるあめんぼう	さざ	仕方なくあめんぼう覗いてゐたりけり	寒暑
あめんぼうの気紛れ歩きぶつかれり	さざ	あめんぼう覗きゐるのみ他意あらず	寒暑
あめんぼう足投げ出して中休み	さざ	あめんぼをぼかんと佇つてみてゐたり	寒暑
あめんぼう脚のさうじにかかりけり	さざ	あめんぼの親玉カヌー漕をすべる	素抱
あめんぼの脚のかしやかしや小競合 <small>こせりあい</small>	ばら	あめんぼううちよつかい出され遣り返す	石鏡
推力の一桁違ふあめんぼう	ばら	あめんぼの鏝迫合の何時果てる	石鏡
頭の内はまだ遊びゐるあめんぼう	ばら	あめんぼのタツプダンサー水叩き	暮津
あめんぼうくみずほぐれつ日の暮るる	ばら	あめんぼの水を踏まえしトウシューズ	暮津
新進のあめんぼ滑り出しにけり	ばら	水馬二つ光輪ぶつけ合ひ	ねず
あめんぼのドンファンぶりも板につき	ばら	水馬総出で水を澄ましをり	ねず
水を掻く仕草も秋のあめんぼう	鳩信	明けわたる水に水馬の鉄脚	ねず
秋雨にひるむどころかあめんぼう	鳩信	空気出して晦日の水馬	さざ
かがよへる水の回廊あめんぼう	鳩信	だしぬけの雨に臆しぬ水馬	さざ
あめんぼう飛ばし過ぎなり乗り上げぬ	燕音	みるからに元気のかたまり水馬	鳩信
たそがれの光帯びつつあめんぼう <small>毛越寺</small>	宿好	水馬雨に追ひ立てられにけり	鳩信
達者なる足腰秋のあめんぼう	随笑	水馬試し走りの朝の池	宿好

水馬つと奔流に打って出ぬ	寒暑	萍の支離滅裂か整然か	素抱
此処にもや時流に乗らぬ水馬	寒暑	萍の收拾つかぬざんざ降り	素抱
水馬未だ埃の大きさに	素抱	萍は破れし穴を繕へる	素抱
菟まつて軍団めける水馬	素抱	萍の仕掛成程斯うなのか	素抱
<b>蓮の浮葉</b> 浮葉		萍の水栽培を厨にて	素抱
蓮巻葉風にほぐれてジャンクめく	さざ	萍に吾が空けし穴もう塞がる	石鏡
背鰭にて浮葉撥ね上げ池の主	燕音	萍は一つから殖ゆその一つ	石鏡
蓮丸葉ついと流るる風起ちて	宿好	<b>浅沙の花</b> あさざ	随笑
源平池 デッサンの浮葉浮葉の間合ひかな	随笑	叩かれて雨にくたんとなる浅沙	随笑
<b>萍</b> ひんばう		<b>河骨</b> かうほね	
萍のつつき方といふがあり	燕音	河骨を掠め流水間断なし	寒暑
萍に鎌倉の昼深きかな	宿好	<b>水芭蕉</b>	
萍のあはひあはひの漆闇	随笑	人拒む色をとほせり水芭蕉	ばら
萍のしんと緑の一帝国	素抱	<small>雪中水芭蕉</small> がしと雪踏みしめ見入る水芭蕉	燕音
萍の隠蔽工作始まれり	素抱	水芭蕉乾きし泥を揉み落とす	燕音
萍をひっくり返しゆく大雨	素抱	水芭蕉そこはゆっくり水流れ	燕音

山水に凱歌を挙ぐる水芭蕉  
水芭蕉山水くびれ流れけり  
水芭蕉林中に水響きけり  
もう一つ顔乗り出しぬ水芭蕉  
水底に倒木透けり水芭蕉  
水芭蕉水に萎ゆ花横たへて

燕音  
燕音  
燕音  
燕音  
燕音  
宿好

パントマイム天使の輪っか夏空に  
ユリの木の花はと街の空を見る  
だんご虫転けて宙搔く脚清ら  
寒風山蹴飛ばしハンググライダー  
夏空馳すアンパンマンは強かりき

寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
素抱

草取 草むしり 草引く

草むしりして来て茗荷の出来云へり  
墓地の草しみみ引きてをりひとり  
蚊を打ちては草引く手順繰り返す  
引く草がみんな露草なららくちん

素抱  
素抱  
暮津  
暮津

夏川の瀬に廻り込む水迅し  
玉堂の昔の川の夏の音  
夏川に手を突っ込んでつめたしと  
旅疲れ夏川に眼を落としみて  
孫六湯前夏川の展けたり  
ほつと湯田 湯本温泉  
夏川のここらが熊の通り道

さざ  
燕音  
宿好  
随笑  
素抱  
素抱

夏の空 夏空

翼打つ音のぼつさり夏空より  
シートベルトかちやりと締めて夏空へ  
夏空が救ひのやうにある日なり  
積まれたる石の放熱夏空に

燕音  
燕音  
燕音  
宿好

当り来た来た来たさくら鮎ならむ  
鮎釣の雨暗に竿納めざり  
菅笠の仰向くは鮎釣れるとき

ばら  
ばら  
ばら

鮎

侠客の鮎にしらじら谿明くる

鳩信

海牛の泳ぎ歩きといふものす

もも

囀鮎漁期も了り近くなり

燕音

比類なきオトメウミウシ捕らへたり

さざ

山峡の風戸で降りて鮎を釣る

宿好

つまみ上げ大海牛の段袋

さざ

鮎どきの佳き風のくる酒匂川

素抱

えんぴつで海牛つつく冬渚

随笑

鵜飼

ひしひしと水の暮れ来て鵜に鵜影

石鏡

海牛のモウモウ歩きしたりけり  
海牛をおいてけぼりに忘れ潮  
海牛の頭上を跨ぎ浅蜷掘

随笑  
随笑  
素抱

あめふらし 雨虎 海牛

遊ばれて磯に置き去りあめふらし  
雨虎花魁道中歩きせり  
あめふらし遊びあかして磯日暮れ  
あめふらし好いた事して潮溜り  
一生を棒にふりたるあめふらし  
装ひも定九郎めくあめふらし  
遠浅の海の牧場にあめふらし  
海牛の二日の波にたゆたへり  
よき浪が来て海牛を泳がしむ

ねず  
さざ  
鳩信  
燕音  
燕音  
随笑  
素抱  
もも

わらしべに鰺の吊られて御祭神  
庭の紫蘇摘み来て鰺のたたきかな  
小柴産地鰺の干物血筋透く

ねず  
もも  
素抱

鰺

鯉 松魚

かつを船滴る陸に戻りけり  
半島に足を伸ばせる鯉季  
天日干し鯉を吹けり時津風  
茹でごごみには鯉節ぶっかけて

ねず  
さざ  
鳩信  
燕音

宿の膳何はさておき姫かつを

寒暑

水槽の隅に大ハタでろりんと

ばら

晚酌の松魚にちよんと擦り生姜

素抱

虎魚おこせ

酒は会津肴は三浦初かつを

石鏡

針深く呑みし虎魚の横つ面

もも

湯上がりの手首の赤し鱈時

石鏡

岩化してダルマオコゼとなる暮春

ばら

ぶん投げられ糶らる鯉のメタリック

暮津

虎魚産み落とせし親もこんな貌

随笑

赤鱈あかえび えい

オニダルマオコゼの口中ちよと動く

素抱

鼻アケアミユージアムつ先エイのフリルを戦がせて

さざ

蘭あ

墨かぶりエイの涼気を曳き来たり

ばら

蘭枕をひよいとつまみて頭かしらに当て

寒暑

クー・クラックス・克蘭団員エイ飛来

ばら

蘭枕を投げ出すそこが仮寝所

寒暑

爆撃の体勢に入るエイを見よ

素抱

雨の水輸出で入りつして細蘭

石鏡

沖ゆくはリマン海流カスベエ干す

素抱

蘭枕に首転がしているうちに

石鏡

堅干しの罌りカスベエ晚酌に

素抱

繕ひの蘭草はヤロウ菊人形

石鏡

ビール酌む礼文カスベエむしりつゝ

素抱

\*ヤロウは蘭草の中でもつとも強靱なもので盛などに使う

たかべ

太蘭

タイル張り魚屋の売る地のたかべ

素抱

須く太蘭青天目指すべし

寒暑

羽太

太蘭見て吾もゆらゆら揺れりたり

暮津

青芒

そよりもせいで巨利の青すすき

もも

もう一声葎切あらぬところより

石鏡

鋭さを内に押さえつ青すすき

燕音

葎切は詭弁を弄す如くなり

石鏡

古戦場こころ一帯青すすき

随笑

翡翠かはせみ

暮津

向日葵の王道青すすきの霸道

随笑

何と雪ワライカワセミ洩い貌

さざ

青すすき道をいつぽん通しけり

石鏡

翡翠の眼力疑ひなかりけり

燕音

青すすき仙石原は風に富み

石鏡

拙宗雪舟展と名乗りし頃のかわせみ図

寒暑

湯けむりの翳這ひゆけり青すすき

石鏡

糸蜻蛉とうしんとんぼ 灯心蜻蛉とうすみ

さざ

葎切 行々子

葎切の長寿長寿と朝朗

さざ

一茎を両手で押へ糸とんぼ

さざ

靴の泥こそぎ落せば行々子

さざ

灯心蜻蛉の尻尾ずんずん目の前を

ばら

葎切の黙ればはたと照りつけぬ

さざ

止まらんと瑠璃糸とんぼ間合詰め

燕音

行々子田夫野人の唄うたふ

燕音

糸蜻蛉進むリズムはピチカート

素抱

葎切の伝法口調に大分慣れ

燕音

糸とんぼ茎に取り付くその角度

素抱

葎切の直談判が続きをり

宿好

燈心蜻蛉は瑠璃一色の針とんぼ

素抱

葎切に念を押されてゐるごとし

寒暑

尻のさき待ち針いろの糸蜻蛉

暮津

川蜻蛉 鉄漿蜻蛉

うしろにも居さうなおはぐるとんぼかな

さざ

蠅叩遺品のごとく扱へる

随笑

つと廻り込んで止まれる川蜻蛉

ばら

脳震盪間違ひなしの蠅叩

寒暑

鉄漿蜻蛉に羽搏ち疲れといふものなし

鳩信

蠅叩持ちつゝ雑談湯治人

寒暑

鉄漿蜻蛉の影おはぐるを追ひゆきぬ

燕音

打ちもらす蠅の行方を追へる顔

さざ

考えの閃く如くおはぐる現る

燕音

蠅が脚長く使へり花八っ手

さざ

川蜻蛉飛んで翅色薄めけり

石鏡

再犯の金蠅なれば許さざり

ばら

蠅生る 蠅の子

素抱

箸取りていちいち蠅を追へるひと

ばら

取り込まる洗濯物に子かまきり

素抱

易々と蠅にたかられ一患者

鳩信

子蠅螂かまって斧を向けらるる

素抱

なうなうと止まるこの蠅不埒なり

鳩信

子蠅螂生意気構ひたくなりぬ

暮津

葉蘭の蠅居場所を二転三転す

燕音

蠅 蠅叩 金蠅

さざ

追ひやれど膝にまたくる島の蠅

宿好

ひさびさに腕が鳴るなり蠅叩

さざ

山小屋の窓辺に蠅の頓死せり

宿好

蠅叩き難ければ肘折り曲げて

さざ

蠅日に日にちからをつけぬその羽音

随笑

必殺を目論む妻の蠅叩

燕音

旧浜離宮庭園  
大き蠅牡丹臭さを帯びて発つ

随笑

蠅叩湯呑巻き添え喰ひにけり

燕音

ぼうたんに疎んぜられて発つ蠅か

随笑

行き過ぎの一つや二つ蠅打てる

随笑

歳時記の蠅の例句も古りにけり

暮津

バスの旅俱にし岩手県の蠅

随笑

蜘蛛 蜘蛛の囿 女郎蜘蛛

芋煮会蠅も仲間に入りたがる

随笑

蜘蛛の糸

二等船室隣より来る夏の蠅

寒暑

蜘蛛の囿を払ふことなく庭掃除

鳩信

アラヨツと蠅の一心太助かな

寒暑

蜘蛛の囿にまんまと懸かる粗忽者

宿好

蠅の死のあつけなかりし脚挙げて

寒暑

蜘蛛の囿が顔に迷惑千萬な

宿好

蠅憎き世の懐かしや畳撫す

寒暑

蜘蛛の囿の顔に懸かるをエイヤツと

宿好

石を替ゆ蠅と退屈同士かな

素抱

蜘蛛の囿の糸端探る目を皿に

宿好

皺苦茶婆貝を剥くやら蠅追ふやら

素抱

乙子祠に稚き蜘蛛囿を張りにけり

寒暑

何處からか蠅の入りくる家なりし

素抱

蜘蛛の囿に病葉二、三ちらし掛け

素抱

板蕎麦を待つ間頭上の蠅を追ふ

石鏡

蜘蛛の囿に捕られし顔の後始末

素抱

追憶の熟れ無花果は蠅呼ぶ木

石鏡

蜘蛛の囿の幾つもあれば破り甲斐

素抱

妻うつかり五月蠅を入れて仕舞ひけり

暮津

蜘蛛の囿もあさみどり帯ぶ芦の間に

素抱

曲がる術知らぬ五月蠅の飛び来たり

暮津

蜘蛛の囿もあさみどり帯ぶ芦の間に

素抱

蠅たかる所をそれとなく見居り

暮津

囿の央に押し出しのよき女郎蜘蛛

素抱

蠅を退け遣るに止どめぬ老の箸

暮津

囿の蜘蛛にさうさう獲物なかりけり

石鏡

蜘蛛の囿の獲物にこれといふもの無く 石鏡  
 蜘蛛の囿に一つの攻防見たりけり 石鏡  
 蜘蛛の糸すすつと見えてすすつと消ゆ ばら  
 糸揺すりやればどう出る女郎蜘蛛 燕音  
 女郎蜘蛛縦の糸張る手順見て 宿好  
 蜘蛛の糸端を宝篋印塔に 随笑  
安養院  
 突っ込んでいやはや蜘蛛のねばる糸 素抱  
 一夜にして自転車捉ふ蜘蛛の糸 素抱  
 女郎蜘蛛朝は黄金に張れる糸 素抱  
 鉛筆で叩いて蜘蛛の糸の端 石鏡  
 蜘蛛の糸こころ辺りとたたつ切る 暮津  
 「さうはどっこい」身ひねりかわす蜘蛛の糸 暮津  
 女郎蜘蛛木の葉外しにかかりけり ばら  
 日の当りながら物食ふ女郎蜘蛛 ばら  
 女郎蜘蛛金龍院の空を降り 鳩信  
 女郎蜘蛛楯円函数論知るや 宿好  
 樹上には明恵 樹下には女郎蜘蛛 宿好  
高山寺  
 藤沢市 長久保植物園  
 女郎蜘蛛あはてふためく様見んと 宿好  
 獲物へと押っ取り刀の女郎蜘蛛 宿好  
 じたばたをぐるぐる捲きに女郎蜘蛛 宿好  
 腰据えて料理に懸かる女郎蜘蛛 宿好  
 手も脚も腹も化粧ふて女郎蜘蛛 随笑  
 所在無き雨日を汝も女郎蜘蛛 素抱  
 江ノ電の踏切女郎蜘蛛見上げ 石鏡  
 女郎蜘蛛屋敷と云ふに躊躇せず 石鏡  
 妖怪の親玉何故か女郎蜘蛛 暮津  
 女郎蜘蛛網繕ひを怠らず 暮津  
 ほんち捕る子に目つぶしの柁柁 ねず  
\*ほんちは喧嘩蜘蛛のこと  
 土蜘蛛の撫でやる腹の珍無類 ねず  
 真昼間の山雪のうへ蜘蛛あるく 燕音  
 厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来 宿好  
 同意なく此処に蜘蛛の巢張るべからず 宿好  
 幾何学を篤と学びし蜘蛛ならむ 素抱  
河鍋曉斎  
 曉斎の蜘蛛出づ月の怪しき夜 暮津

油虫 ぐきかぶり ぐきかぶり

御器嚙追ひ詰めおいて助け呼ぶ さざ  
 ぐきかぶり初太刀二の太刀かいくぐり ばら  
 ぐきかぶりゲストのやうに現はるる ばら  
 ぐきかぶり団子喰らひて御用となる 暮津  
 灯まみれにぐきぶりの子のピーナツ色 もも  
 ぐきぶりを見とがめし妻さあ大変 随笑  
 ぐきぶりを前にわくわくする一打 随笑  
 ぐきぶりをどうしてくれやう丑満刻 随笑  
 ぐきぶりのどうでもよきが髭を振る 随笑  
 ゴキブリ駆除家の隙間といふ隙間 素抱  
 ゴキブリ駆除硼酸だんごをへえとみる 素抱  
 ぐきぶりを打馴れてみて打洩らす 素抱  
 ぐきぶりを追ひ遣る妻は総身もて 暮津  
 ぐきぶり打つ力余りてこの始末 暮津  
 気がつけば形無きまでぐきぶり打つ 暮津  
 髭振りつ次はどうでる油虫 もも  
 油虫に手を施すも出るには出る 素抱  
 油虫触り犯せるものの数 石鏡  
 油虫下見の現場灯さるる 石鏡  
 パソコンの画面を舐めに油虫 石鏡  
 油虫厨をちよろちよろ醤油いろ 暮津  
 守宮 やもり  
 お出ましの守宮と暫しにらめっこ 鳩信  
 階段の壁が遊び場守宮の子 随笑  
 やあ守宮お主とこで何代目 随笑  
 目の合へば少しどぎまぎして守宮 石鏡  
 大玻璃戸守宮の吸盤護謨仕立て 石鏡  
 夜盗虫  
 シマガラスヨトウ嘉せる夏の雨 もも  
 悪食のヨトウガ奴の仕業なり ばら  
 羽蟻

羽蟻墜つ奇妙な夜となりにけり

宿好

蝨ざと

机に稿に羽蟻の落下傘部隊

随笑

利かん気な飛び方をせる蝨一つ

さざ

原稿に降りし羽蟻に迫る指

随笑

蚊 藪蚊 蚊柱

羽蟻また紙に包んで捨てにゆく

素抱

蚊柱がいつぼん立ちぬ党派心

ばら

晝ある限り羽蟻はそこへ落つ

素抱

蚊ばしらの柱を何處へ持つてゆく

随笑

羽蟻退け遣れば又来て小奴めが

暮津

蚊柱の柱のづれを立て直す

素抱

蟻地獄 あとずさり

もも

くるぶしの上より刺せる秩父の蚊

もも

一興の掘り返されてあとずさり

もも

蚊の刺せる辺りぷっくり掻き壊す

素抱

掘り出されまじまじ見らるあとずさり

もも

蚊の刺せる處膨らむ天の川

暮津

蟻地獄扱も根氣の要ることよ

さざ

蚊の刺せる箇所は真つ赤に掻き壊す

暮津

蟻地獄石ころ一つ振舞はん

随笑

大人げなく蚊の刺す処掻き壊す

暮津

蟻まくなぎ

まくなぎ

まくなぎのしつちやかめつちやかかひけり

さざ

打ち水に真顔もて蚊が刺しにくる

暮津

まくなぎのこんちくしょうめ躓ける

ばら

弁慶の泣きどころにて蚊の打たる

ねず

まくなぎの何こじれたる内輪揉め

ばら

藪蚊打つ自ところゑも添ひにけり

随笑

たいがひにせよとまくなぎ打ち払ふ

随笑

断り無く入り来し蚊なれば平手打

素抱

たいがひにせよとまくなぎ打ち払ふ

随笑

打つ前のまだら縞蚊の凄味かな

素抱

蚊を打ちては草引く手順繰り返す

暮津

酔ふたればチャンスとばかり蚊の寄り来

寒暑

快音と共に昇天手打ちの蚊

暮津

蚊の敵機来襲されば返り討ち

寒暑

顔面の蚊打てば眼ちぐはぐに

暮津

喰はれたと妻の差し出すふくらはぎ

寒暑

蚊の奴めまだまだまだよそれと撲つ

素抱

終戦日深くしやがんで廁の蚊

寒暑

蚊を撲つに眼を宙に漂よはせ

素抱

ひっぱたかれぺしゃんこの蚊の垢じみて

寒暑

問題にしをり藪蚊の侵入路

ばら

吾が前を走りゆく蚊に手を出さず

素抱

藪つ蚊の金属音の急降下

鳩信

雨の夜をいやに元気な蚊が出でて

素抱

手に当るものとは見れば藪蚊なり

素抱

充分に引きつけ置いて蚊を叩く

素抱

藪つ蚊の敵機来襲眼を凝らす

素抱

脚つまみ白紙の上へ蚊の骸

素抱

藪つ蚊をまたぞろ誰が引き込みし

暮津

人の吐く炭酸ガスを求めて蚊

素抱

血を吸うてあからさまなる藪蚊の腹

暮津

蚊の止まる耳搏ち据えて耳が莫迦

素抱

藪つ蚊か脛に感じる圧少し

暮津

ひっぱたかれ潰されし蚊を払ひ退け

素抱

草刈らむと踏み込む藪蚊の梁山泊

暮津

蚊除けスプレーたっぷりかけて子を放つ

石鏡

昨夜雨の籠り蚊放つ木曾格子

ねず

搏てる音頼りなければ蚊を逃がす

暮津

腕光則寺 日朗の土牢つぷし強き矢倉の蚊に螫さる

燕音

逃げし後また来てわれを弄する蚊

暮津

ぶつかるは糠蚊のたぐひ払ひけり

随笑

空ら響きして脛の蚊をうち洩らす

暮津

蚊に喰はる妻が夜中にむずと起き

随笑

蚊を入れぬ蚊帳の出入り慣れたもの

暮津

蚊に喰はるところ見せ合ひ母と妻  
蚊の声す急いで何か羽織らねば  
だいぶ夜の更けし厨を蚊のうろうろ  
討ち取らる蚊のべっちゃんこ膝がしら  
妻の指す腿の一箇所蚊の圧死  
孫、美雨  
蚊に喰はる処をさうかさうかと揉み

ひよいと思ひ出したる蚊帳の入り方  
鴨居見て蚊帳の吊り手の懸け方など  
蚊を入れぬ蚊帳の出入り慣れたもの

### 蠅虎

はえしりやぐも

一茶堂蠅虎が戸袋に

燕音

定食屋蠅帳があり勝手にとる

暮津

板塀に蠅虎の岡つ引

随笑

### 蠅取紙

子規庵の戸袋の反り蠅虎

随笑

帰省せり蠅取りボン吊る家に

ねず

俳諧の手ほどき蠅虎より享く

寒暑

じたばたと蠅取紙の蠅の脚

ばら

蠅虎即曉斎のかみつき貌

素抱

蠅取紙詠める世代を同じうし

寒暑

蠅虎稚くも貌老成す

石鏡

蚊遣火 蚊遣香 蚊いぶし

蠅虎雨戸に日和がよささうと

暮津

金魚屋の親爺かたへに蚊遣香

素抱

### 蚊帳

蚊帳潜り出でしところで覚む昼寝

随笑

近頃の蚊いぶし随分いい香り  
蚊遣香背中の方が手薄なり

素抱

蚊遣豚おもしろおかしくこの後も

素抱

かがんぼの暢気な父さん歩きせり

寒暑

捨てゝある湯宿の蚊遣灰白し

素抱

かがんぼの閉じこめられし湯治棟

石鏡

蚊いぶし吸ひ脚をじたばたじたばたす

暮津

かがんぼの空中飛行見下ろせる

さざ

一日の疲れ蚊遣に巻かれるて

暮津

ががんぼのせうことなしに玻璃せせる

さざ

### ががんぼ

蚊蜻蛉 蚊の姥

かがんぼのずりおちさうな後ろ脚

ばら

ががんぼの猿猴宜しくぶるさがり

寒暑

かがんぼの礎石を発てり国分寺

ばら

一人留守おおせつかればががんぼ来

素抱

かがんぼの脚踏み外す髻草

ばら

ががんぼの五體満足暁の棧

素抱

かがんぼ来夜間急患窓口に

鳩信

ががんぼのぶらさがりをり滝不動

素抱

幾そ度かがんぼ吾の採血よ

鳩信

うしみつのががんぼ離る脱衣籠

石鏡

かがんぼの雨やり過ごす葉裏かな

鳩信

卒塔婆に高脚を懸け蚊の姥は

ばら

縋り来るかがんぼに胸貸しにけり

燕音

蚊の姥に留守を頼んで出かけけり

鳩信

かがんぼ斯様に物に掴まり躰寄す

随笑

蚊の姥が雨に追はれて玻璃にくる

素抱

堂縁にかがんぼ縋る五合庵

寒暑

蚊の姥に消灯時間湯治棟

石鏡

かがんぼの交みては飛ぶ複葉機

寒暑

蚊とんぼのやうな神主大祓

素抱

片脚のかがんぼ悪びれてはならぬ

寒暑

蚊とんぼのぶらさがりをる谷地柳

暮津



蝙蝠 かろうり かはほり

蝙蝠の躰鈍れば飛びにけり さざ  
 かはほりに油ッ紙のやうな空 さざ  
 かうもりの翼電動仕掛かな さざ  
 かはほりに問答無用と昏るる空 ばら  
 通り魔の如くかはほり頭を越せり ばら  
 蝙蝠のやうに下りて枯るゝ葉あり 燕音  
 かはほりの妙な飛び方卍飛び 素抱  
 かはほりやなかなか暮れぬ墓地のそら 素抱  
 掩体に蝙蝠巣くふ終戦日 素抱  
 踊りに飽きかはほりのごと闇馳す子 暮津  
 梧桐 あわぎり 梧桐 あわぎり 暮津  
 美丈夫の梧桐の幹打ち据ゑぬ さざ  
 梧桐の幹の葉混みに自若かな ばら  
 南風 なんふう 白南風 しろはえ 南風 みなみ 南風 はえ ばら  
 大南風勇魚の息をつくやうに ばら

大南風躰りしひよこより柔らか ばら

海を揺り山を揺り立て大南風 随笑

大南風途絶えてへなへなヨットの帆 素抱

ややこしくなる前の蔓白南風に ばら

蟹奔らせ白南風渡る巾着湾 寒暑

吹き起こる白南風長淵剛の唄 素抱

白南風埠頭帆船ファンで賑はへり 素抱

ぴらぴらと蟹の口許南風吹く もも

チューリップツリー並木を南風馳せ さざ

タカノハ鯛大きく息す南風の中 燕音

夜又五倍子の青実南風にごつつんこ 燕音

サーファーの臀部凍々しく南風吹く中 宿好

南風に奏づは弁天様にまします歟 随笑

たはむれにモンローウオーク南風のなか 素抱

南風に載せジャズ風ちんどんミュージック 石鏡

南風吹き抜け野毛の縁台将棋かな 石鏡

南風の中パントマイムのはじまりはじまりー

薰風称名寺に仁王の視線やはらげり 寒暑

くろもじの宿す雨滴を南風払ふ 暮津

夏至 海猫の糞透明に夏至明けにけり 石鏡

青嵐 傷跡のこんもり夏至の胸板に 暮津

青嵐山女魚焼く火を襲ひけり ねず

青あらし鯉の英気を養へる ばら

鮎鷹あゆたか 鮎刺 随笑

読み切るとひとり気負へば青嵐 随笑

国上山青嵐湧きくるめく葉 寒暑

鵜 鱒刺の一撃をもてテロありぬ 随笑

鳩も目をくりくりさせぬ青あらし 素抱

ふなばたの湿り鵜舟の出を待てり ばら

青あらし通るところが判りけり 石鏡

海猫 うみねこ ごめ 燕音

つつかける雨に処置なし青あらし 石鏡

羅臼町海猫は女めごゑを曳き曳きて 随笑

街往けば正面からくる青あらし 石鏡

海はもう手ぐすね引いてごめの声 随笑

青嵐煽られし身を立て直す 石鏡

海中に落ちて広がる海猫の糞 随笑

青嵐まだ吹き足らぬまゝ通夜へ 暮津

海猫寺泊のくわいくわい佐渡へ発つフェリー 寒暑

風薫る 薫風 素抱

薫風を捌き疲れて夕櫂 もも

きうきうと海猫鳴く岬カスベエ干す 素抱

風薫じ作務衣で通す日なりけり 寒暑

海猫・鴉\*カスベエは土地言葉でエイのことごちやませ礼文の風に乗り 素抱

海猫退けて埤頭を占むる島鴉  
浪漫あり海猫舞ふフェリーターミナル  
甲板酒田港のウッドチェアーに海猫の糞  
海猫の糞透明に夏至明けにけり

岩燕

自炊棟その間を飛ぶ岩燕

石鏡

郭公の峰三方よ信濃へ下車  
郭公の連呼絶えざる八ヶ岳は好し  
ともかくも郭公を詠みおほせたり  
ケルル作曲「カッコウによるカプリッチョ」  
くわくこうの声出すオルガン奏者かな  
遠郭公うたたねの耳開きけり  
山頭火の本の中から遠くわっこう  
郭公に得したやうな顔をせり  
足どりのどんどん軽くなる郭公  
郭公にぼちぼち起き出す湯治人  
郭公に湯疲れの身を漂よはせ

老鶯

老鶯や起きて欠伸をもうひとつ

さざ

老鶯の間髪入れず玉のこゑ

随笑

老鶯も下北訛恐山

随笑

山巔霧ヶ峰・車山高原に立ち老鶯の気分なり

随笑

老鶯のさうともさうとも珠のこゑ

随笑

時鳥

半島の空をテッペンカタカと

鳩信

二の坂で音ねを上げ聞けり時鳥

石鏡

郭公

青葉木菟

三羽目の青葉木菟の子洞を出で

さざ

青葉木菟ほらほら啼くよたてつづけ

寒暑

相槌を打つごと別の青葉木菟

寒暑

青葉木菟いつしか寺に来ずなりぬ

寒暑

夏木

幹赤く守もり一夏かすの木を画ける

もも

こころもち幹を振りて夏櫂

さざ

吹かれぬる夏の櫂の鉄火肌

随笑

夏けやき戦ぎて耳に盈つ葉音

寒暑

\*何れの処にか蒸炎を消さむ

混浴の真上の大き茂みかな

素抱

独り愛す出田の宮 民々耳に盈つるの蟬

万緑

暮津

冷々林を出づるの風

緑蔭を彼方の人も立つところ

もも

夏木伐る使はぬ筋肉使ひもし

暮津

犬枇杷に沖より旭駈けつけし

もも

犬枇杷

緑蔭

随笑

犬枇杷

緑蔭のベンチあそこが空いてをり

さざ

サイクリスト緑蔭に汗拭へるも

さざ

大緑陰鳩・人・蜥蜴憩はしめ

鳩信

病院は緑陰ナースは白き風

随笑

茂

病院は緑陰ナースは白き風

随笑

緑陰に莫迦げて大き忠魂碑  
緑陰の雀とんとん走り根越え  
緑陰に未練残して去る素振り

随笑  
素抱  
素抱

掛けごゑを専らに登る青葉山  
若葉して青葉す杜に神在ます  
ブナ青葉して鳥海山の保水力

素抱  
石鏡  
石鏡

### 青葉

青葉吹き散らしさしもの颱風も

さざ

舞い込める青葉いちまい自刃の間

石鏡

吉野ぶり青葉時雨に目覚めけり

ばら

五月十七日 義母 新城千代逝去  
青葉青臭しまさかの脳出血

暮津

青き葉も意気のあがらぬ落葉焚

ばら

大往生と云ひて云はれて青葉の夜

暮津

山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき

鳩信

トネリコの微光放てるその青葉

暮津

謡はなむ青葉楓の面目を

鳩信

灼かれても青葉が綺麗なたちはぜ

暮津

家康公御廟きささげ青葉して

鳩信

### 尺蠖

大寒の底光りせる椋青葉

宿好

尺蠖の探り直せる空の奥

素抱

国上山青葉の葉騒鳶挙げて

寒暑

詐欺頻発  
尺蠖や擬態は怪しき商ひにも

暮津

一、二枚青葉飛ばして大夕立

寒暑

### 夏の蝶

揚羽蝶 黒揚羽

ねず

温泉に浮かむ羽虫一匹一青葉

寒暑

武者窓を鳥揚羽のよぎりけり

もも

杜覆ふ青葉の階調宜しけれ

素抱

黒揚羽宙より降れる晋山式

もも

山青葉もつて客人饗す寺

素抱

黒揚羽追ひゆく別の黒揚羽

さざ

ガレ場あり奈落より現る高山蝶

宿好

### 夏草

草臥れて瓦礫に座せばベニヒカゲ

宿好

夏草を手折り夏草搏ちゆけり

さざ

黒揚羽一息入るゝ大樹の根

随笑

夏草を引きちぎっては歩むなり

鳩信

草々の容をなぞり夏の蝶

素抱

夏草のウナギツカミといふを引く

燕音

黒揚羽すと消え飛石あるばかり

素抱

夏草や俳壇に撒く除草剤

燕音

揚羽蝶雨後の路地より発ちゆけり

素抱

屋根草も夏草のうち復原棟

寒暑

強く吹く風に乗り換え碧揚羽

素抱

夏草にかにつりぐさといふがあり

素抱

黒揚羽おつとこちらの道でなし

素抱

夏草の穂先くるくる回す風

素抱

夏蝶の眩しき野合見てあたる

素抱

夏草の丈なす皇居内ポスト

石鏡

黒揚羽おどろに川原毛地獄越ゆ

素抱

夏草に雨横なぐり五能線

石鏡

黒揚羽手離す一茎揺れてをり

素抱

夏草のまた生えくれば同じこと

暮津

夏の蝶 8 の字翔びに興じけり

暮津

北辺の日の未だ高く浜苦菜

燕音

### 夏野

思い立つままに旅して来て夏野

随笑

流木と別の白さのシロヨモギ

燕音

人の手のかからぬものはなし夏野

寒暑

弘法芝弘法麦の族にて

燕音

お岩木は雲のスカート履き夏野

寒暑

一輪の影の揺れづめ浜苦菜

燕音

覚えたてのくさばなにして草の王  
孫六温泉  
黄花のそれコウゾリナとか云ふ草か

随笑  
素抱

酔漿草 かたばみ  
接吻といふ語思へりかたばみに  
かたばみの花捨てて電話に出でにけり  
かたばみの花見るものの無ければ瞰る  
かたばみの花の淋しきかぎりかな

### 草刈

鎌跡の残る草長け吹かれをり

もも

草刈つて海峡に向く一祠

随笑

古口 最上川舟下り  
刈草を抱へて投ず最上川

随笑

快音を谷に響かせ草刈機

寒暑

能舞台脇正面の草刈れり

寒暑

草刈つて蔵王縦断道路脇

素抱

石齧る音も混じれり草刈機

素抱

草刈らむと踏み込む藪蚊の梁山泊

暮津

### 昼顔

ひるがほは時間を湛えゐるごとし

石鏡

昼顔に尽きざるガードレールの白

暮津

### 浜昼顔

老頭児 ろーじゑに浜昼顔が毎日咲き

寒暑

よろよるとじやがたらいもの花へ蝶  
下田稔さんを偲ぶ会 三浦半島剣崎にて  
馬鈴薯の花半島は曇り出す

もも  
燕音

### 馬鈴薯の花

からつきし雨に弱くてたはら麦

素抱

赤泊  
佐渡島至る処に小判草

寒暑

たはら麦程の軽みの一句欲し

素抱

小判草 俵麦  
蛇の髯 じやひげ 竜のひげ

暮津

職退きて今夏で三年竜のひげ

素抱

蛇の髯の花気がつけば雨小止み

暮津

天気予報出掛けに聞いて竜のひげ

暮津

馬鈴薯の花曇日を好みけり

燕音

### 甘野老の花

雫切る手際宜しも甘野老 あまじころ

さざ

### 木苺

乙子祠 おとししの木苺の実を頂戴す

寒暑

参道を少し外れ摘む木苺を

石鏡

### 苺

時かけて苺をつぶす腰痛持

寒暑

デザートに年々大き苺かな

素抱

匙をもち苺をつぶすこと一途

石鏡

匙よりもずんと大きな苺であり

暮津

### 蛇苺

蛇苺採など真似てせぬものぞ

寒暑

### 蛇

ながむし ぐちなは

素抱

青大将  
動物園  
蛇の衣懸けあり蛇の遊び木に

さざ

### 蜥蜴

動物園  
蛇の衣懸けあり蛇の遊び木に

さざ

駐在所前を駈けぬけ青蜥蜴  
 腹這ひに蜥蜴ぬくもる子産石  
 足柄古道よぎる蜥蜴の貌に冬日  
 目を宙に標本擬まがひの大蜥蜴  
 ふふふと地に息かけて蜥蜴出づ  
 大緑陰鳩・人・蜥蜴憩はしめ  
 取り外しきく蜥蜴の尾置いてゆく  
 胡座かく蜥蜴はこうもり安のさま  
 うたた寝すつつじの上の瑠璃蜥蜴  
 身の危険察知蜥蜴のダッシュセリ  
 蜥蜴の腹なんぞ見をればもう昼どき  
 虫籠に蜥蜴を入れて兄貴分  
 雨音に追いかけらるゝ蜥蜴かな  
 虫籠を覗けば何と瑠璃蜥蜴  
 混浴の洗ひ場奔る青蜥蜴  
 青芝を蜥蜴は泳ぐやうにして

ねず  
 ねず  
 もも  
 さざ  
 ばら  
 鳩信  
 随笑  
 寒暑  
 寒暑  
 寒暑  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 石鏡

軟体の蜥蜴は水のごと流れ  
 馬陸やすで  
 ものかげに昼やりすごす大馬陸やすで  
 蹴返せばはらほろひれと馬陸かな  
 悪路王此処に討たれぬ大馬陸  
 百足虫むかで  
 御威光の具足をみする大百足  
 朝顔苗 朝顔の二葉  
 朝顔の双葉本葉と喪の日過ぐ  
 双葉もて百の朝顔翔びさうな  
 これと決む朝顔苗のポリポット  
 青芝  
 青芝を蜥蜴は泳ぐやうにして  
 青芝がぐんぐんボール落点  
 青蔦  
 青蔦や叙事詩展開せるごとく

暮津  
 さざ  
 鳩信  
 宿好  
 随笑  
 暮津  
 暮津  
 暮津  
 暮津  
 暮津  
 石鏡  
 石鏡  
 石鏡  
 暮津

蔦嵬に青龍一頭放たれぬ

暮津

珊瑚樹の花

珊瑚樹の花にあがれる雨飛沫

ばら

女貞の花

ねずみもち咲く辺を妻の往き来せり  
 征桓立交り咲くねずみもち  
 女貞雨に乏しくなりし花  
 ねずみもち花のまはりのまだ昏れず  
 女貞咲かせこの家地味も地味  
 古きよき時代の垣花ねずみもち

ねず  
 もも  
 もも  
 さざ  
 鳩信  
 素抱

木斛の花

木斛咲きじわじわむしむしする日なり

ばら

ガーベラ

ガーベラにプラチナ線のやうな雨  
 南仏料理卓に一輪挿しガーベラ

ばら  
 随笑

サルビア

この家にはこの家の家風おかたのお  
 トラノオのその先霧の粗く飛ぶ  
 虎尾草とらのをの風に払子を振るごとし  
 老人ホームほたるぶくろの道のさき  
 摘まずともほたるぶくろの裡知れり  
 がやがやとほたるぶくろの辺を通る

暮津  
 宿好  
 さざ  
 ねず  
 ねず  
 さざ

螢袋

虎尾草

柵の中螢袋の変電所

鳩信

若竹のそつちは剪りて是残す

暮津

去り状を見て来てほたるぶくろの辺

寒暑

竹落葉 竹散る

ねず

ずぶ濡れの螢袋の一輪挿し

素抱

竹が散るまた散る論されるごとし

ねず

露零す螢袋に道草す

素抱

竹の葉の降るになかなか昏れぬなり

もも

螢袋山土蒸れし香を放ち

石鏡

竹の葉のそそのかさること散りぬ

もも

ほたるぶくろ悼みは時を経て薄らぐ

暮津

竹落葉突つ込むままに氷りけり

ばら

雪の下

鴨足草 虎耳草

暮津

竹の葉散る名利の塵を払ふかに

寒暑

\*乙子神社 炉辺一束の薪

ねず

父試歩より吹かれて戻る鴨足草

ねず

誰か問わん迷悟の跡 何ぞ知らん名利の塵

寒暑

たあいなく風につまづく鴨足草

ねず

竹の葉散る良寛の世を語り草

寒暑

虎耳草石垣沿ひに風の起つ

もも

鞘走る音して竹の葉の降れり

素抱

転勤を小耳に挟むゆきのした

さざ

竹の葉散る奥へ奥へと魅せられて

素抱

もめぐとの外に洩れをり鴨足草

さざ

竹落葉拾へり痴呆軽度の母

暮津

哲学を此処に深めぬ雪の下

宿好

羽抜鳥 羽抜鶏

暮津

若竹 今年竹

暮津

羽抜鶏もんどりうつてスクール来

ねず

筋通すことが第一今年竹

石鏡

気骨あるその歩きぶり羽抜鳥

鳩信

男気の廃れたる世の羽抜鳥

燕音

金澤文庫 称名寺 古書守に暑いと云へばええ暑い

寒暑

おつとりと過ごしてゐては羽抜鳥

素抱

「糞暑いねえ」と自転車行き交へり

暮津

羽抜鳥沽券も意地も疾うに無し

石鏡

白木槿とびきり暑き日とならむ

ばら

羽抜鳥どころか鏡のわが瘦軀

暮津

暑き日の飯粒何處に三分粥

鳩信

外見は一見丈夫羽抜鳥

暮津

暑き日々俳句詠むにも糞ぢから

暮津

青鷺

暮津

先生は暑き日選び逝きなすつた

暮津

青鷺がここにもオホーツク晴天

燕音

青き幹じりじり暑くなりさうな

さざ

青鷺の子つ子に翔べと湖の風

燕音

昨日より暑くなるぞと朝の蝉

燕音

置物のごとき青鷺置く干潟

燕音

どうやらけふは暑くなりさう番茶の香

寒暑

青鷺の嘴を預けし砂州の天

燕音

けふ暑くなること確か斑鯉

素抱

青鷺の八頭身を水鏡

宿好

黄表紙に凌ぐ暑さも峠越す

もも

青鷺の探り歩きの一歩づゝ

宿好

臍切れてよりの暑さと書き添へて

さざ

五月晴

ばら

灸花けふの暑さの如何ばかり

ばら

愚図ついていつになったら五月晴れ

随笑

かの二百合やうやう暑さ納まるか

ばら

赤鼻のピエロ一礼五月空

石鏡

死ぬ程の暑さ人能く生かしけり

随笑

暑さ

暑し 暑 暑気

随笑

洗濯物家に暑さを取り込めり

随笑

夜をうとうと暑さに馴れるまでのこと  
 暑さめと己に言葉ぶつけけり  
 家にごろごろ暑さの持つて行き場なし  
 ふて寝して暑さの通り過ぐを待つ  
 降りて来て二階の暑さ嘆きけり  
 雀の他みんな暑さにやられけり  
 この暑さどうかしているペンキ塗り  
 頭振りけふの暑さを諾へる  
 莫迦げたる暑さに馴るる他なかり  
 寝物語などして暑さ一頓挫  
 なほ猛威ふるふ暑さにはだけ寝る  
 颱風のあとのなんだいこのあつさ  
 顔でも洗ひ直す暑さも極まれれば  
 やりきれぬ暑さと己にこぼすなり  
 この上はごろ寝に如かずこの暑さ  
 よき智慧が泛かばぬ道理この暑さ  
 山妻の暑さ凌ぎはコップ拭き

真綿締め大蛇のごとき暑さとも  
 浴びせかく野次のやうなる暑さとも  
 暑さにも十両級と横綱級  
 やうやうに暑さ収まり厨ごと  
 この暑さ身体を馴らす他なけれ  
 纏はりつく暑さは開き直りても  
 この暑さ躰がついてゆけぬといふ  
 この暑さお手あげ水をのむばかり  
 けふの暑さ鰻のぼりと聞き凹む  
 よく探さないで物云ふ暑さかな  
 仕方なし暑さのがれの昼寝せり  
 のうぜんの宙ぶらりんや糞暑し  
 牛頭馬頭の徘徊暑し恐山  
 家暑し駄菓子にろくなもの無くて  
 暑にかすむ新宿が見え烏龍茶  
 浄玻璃の鏡も曇らむこの暑気に  
 \*地獄の閻魔の序にあつて死者の生前の

行為を映し出すといふ鏡

家の中一巡りして暑がれる  
 鉢植の棕櫚竹ともども暑に耐へむ  
 赤松に対す秩父の暑に対す  
 暑にめげぬための麦湯を沸かしおく  
 度忘れを暑のせいにするよくあること  
 聞こえ来ぬ「暑ってくるしいことはいや」  
 電話口孫出てあうむ返し暑  
 蓮根の俳画懸け暑を煙に巻く  
 暑ければ頭に負担なき戦記物  
 胡座かきそこに居座るどっこい暑  
 たたみ込む暑や死神に手を貸して  
 顔にくる今朝のあつさや会葬日  
 散髪してサツパリすれば暑のやはらぐ  
 暑に徹るこゑてきぱきとヘルパーさん  
 菓子袋くしゃくしゃにして暑を譏る

暑はいまだ序の口ご自愛なされよと  
 滾る暑の底の方より油蟬  
 暑にああと四、五軒先の赤ん坊  
 夏衣 夏着  
 夏物のパジャマ引つ掛けギブスの上  
 ころり往生阿弥陀を拝す夏衣  
 夏着数枚年金暮しはシンプルに  
 普段着の海月の単衣よかりけり  
 伊勢佐木町ブルース単衣のソックリさん  
 夏服 白服 アロハシャツ  
 半ズボン  
 お気入アロハ押し込む旅鞆  
 アロハ着てはしゃぎたくなる気の未だあり  
 ナフタリン臭きアロハに手を通す  
 ピンボケの柄のアロハをことしも着て

アロハシャツ色地味にして柄派手や	素抱	被るのがめんだうなだけ夏帽子	随笑
退院の挨拶だぶつく夏ズボン	鳩信	夏帽 <small>山寺</small> の囲む山寺案内図	素抱
来島海峡単車で飛ばす半ズボン	寒暑	夏手袋 夏手套	
半ズボンにて夏の男鹿巡るべく	寒暑	妻 コンビニに行くにも帽子・夏手套	素抱
こんなにもベルト重たき夏ズボン	素抱	夏座布団 蘭座布団	
膝小僧うらはずかしき半ズボン	素抱	蘭座布団きちんと坐り直しけり	ばら
半ズボン地震来て咄嗟に入るゝ足	暮津	夏布団 夏掛	
白服 <small>タイ、インドネシア</small> にねむり成層圏を航く <small>八句</small>	ねず	夏掛のひやつとせるをあてがひぬ	鳩信
夏服に永年勤続祝がれをり	ばら	夏掛して妻と思ひ出話など	鳩信
谷地渡る風に白シャツはためかせ	燕音	たぐり寄す夏掛その内夜も明けん	寒暑
白服に浜の豆ツ子鼓笛隊	随笑	夏掛を一枚抱え漂流中	寒暑
夏帽子 夏帽		體には毒よと夏掛かけ呉れぬ	寒暑
パンの実の何処にとあふぐ夏帽子	さざ	夏掛てふ健気なるものうち被り	寒暑
カウアイ島巡りの夏帽買うて来ぬ <small>母</small>	さざ	夏掛の引つ張り過ぎを押し戻す	寒暑
夏帽子壁炉の上に誰のもの	さざ	夏掛を優にはみ出す足二本	寒暑
妻 <small>妻の云う</small> 帽子被れというに首を振る	随笑	夏掛を挙げ句の果てにぐるぐる巻	素抱

手探りでさがす夏掛あらぬ方	素抱	ごろ寝して裸の王様すだれ裡	暮津
夏掛の柄古ぼけてごろ寝かな	暮津	網戸	
熱帯魚		灯を取りにきたぞと網戸の外の蟬	随笑
チョウチョウウヲ吻云うて泳ぐなり	さざ	娑婆といふ紅蓮を堰きて網戸あり	寒暑
この辺の何処かにサザナミヤツコの本	さざ	地震あまりに激しく網戸に手掛けしまゝ	暮津
拗ねる癖吻にありありフエヤツコ	ばら	網戸に隙道理であちこち喰はるるよ	暮津
いそいそと竜宮城ヘルリスズメ	ばら	籐椅子	
いっせいに顔の向き替えデバスズメ	ばら	籐椅子に腰を浮かせぬまた余震	暮津
淡水水槽 ペレストトラ・コンゴテトラ・エトセトラ	ばら	紅緑忌	
熱帯魚所帯臭さを捨てゝ見る	素抱	書き損じくしゃくしゃにして紅緑忌	石鏡
青簾 古簾 簾		丈山忌	
青簾吊るや寝てよし覚めてよし	随笑	度忘れの頭叩いて丈山忌	随笑
青簾風に色目を使ひけり	素抱	五月富士 夏富士	
古簾取り替えやうかこの辺で	素抱	夏富士を語るに静岡弁が出て	もも
古簾一枚吊りて籠城す	素抱	この向きの夏秋田富士よかりけり	石鏡
ザツと雨ササササと風軒簾	暮津	茅 <small>ち</small> の輪 <small>わ</small> 名越の祓	



大茅の輪おもち大蛇を跨ぐ心地せり  
大茅の輪仕上り風が先づくぐる

ねず  
もも

華やぎて雨の降るなり祭月  
雨だれの音のとんとん祭月

ばら  
ばら

大茅の輪雨具携え潜りけり  
狩衣に風はらませて大祓

鳩信  
素抱

海開  
あやかしを畏み畏み海開

素抱  
素抱

祝詞の間蟻を見つむる大祓  
神主の出を待つ木履大祓

素抱  
素抱

海の家  
土左衛門欲しがる海の家開

素抱  
素抱

むにやむにやにむにやむにや和せる大祓  
瀬戸神社  
ゆすり蚊と名越の祓受けにけり

素抱  
暮津

海の家  
氷水伊豆見屋と云ふ海の家

ねず  
ねず

勤め人茅の輪せかせか潜りけり  
小暑

暮津  
鳩信

海の家  
くろんぼと云ふ名もよけれ海の家  
高浪に茶をひいてをり海の家

もも  
もも

採血の跡黄味がかる肌小暑  
七月

鳩信

海の家  
海の家二つこつきり日本海  
海の家ぼつりぼつりと建ち始む

暮津  
ばら

首筋に蟬の羽月の風受けて  
七月

ばら

半夏生  
少女らのジーパンの蠢クバ半夏生

寒暑  
素抱

七月の食器洗はれ積まる音  
水無月

暮津

半夏生  
半夏生朝が来てゐる自炊棟

石鏡  
素抱

煮炊きの火こもごも半夏の湯治棟  
漫画本手にし半夏の湯治人

石鏡  
石鏡

口つくむ百合に魂胆あるごとし  
蕾む百合あうむ返しをせる如し

鳩信  
鳩信

百合 山百合 車百合  
鹿子百合

素抱

ニス塗りし如くに百合の蒼かな  
すかし百合ちらほら見ゆる御殿場線  
蕾む百合こづいて籠むとノ登山の風

鳩信  
鳩信

カサブランカとかや云ふ百合咲き出せり  
見るからに雨が重荷のカサブランカ

暮津  
暮津

ケルン経て風届くなり車百合  
切り刻むビュッフエベルナル・ビュッフエ展の描線卓と百合

宿好  
宿好

かほる方振り放きげ見ればカサブランカ  
暗闇にてカサブランカの香のふい打

暮津  
暮津

岩崎邸百合も進取の香り立ち  
神奈川の縣花尋ねて崎山に

素抱  
素抱

山百合金山のうへに出でたる狸掘  
三浦半島 妙音寺  
ダダダツと山百合咲いてなだれけり

もも  
鳩信

聖域を犯すごと百合剪りにけり  
霊界の入口に百合佇つごとし

石鏡  
暮津

告別の膝折る寒の百合の前  
崖の百合揺れゐて波浪注意報

ねず  
もも

夏バテに百合根など佳し煮てお呉れ  
人一倍長けて気位高き百合

暮津  
暮津

熔岩積みの熔岩の間よりすいと百合  
車百合蝶をくると返しけり

さざ  
さざ

月見草  
月見草水平線の上に吹かれ

ねず  
ねず

かのこ百合やうやう暑さ納まるか

ばら

海峽のこちらは内地宵待草

随笑

鉦半島突端の大待宵草  
待宵草林立石油備蓄基地

随笑  
寒暑

花合歓に曇天覆ひ被さりぬ  
合歓の花風に散々雨に散々

素抱  
素抱

含羞草 眠草

観面にその葉畳める含羞草

さざ

合歓の花咲いてベティの長睫毛

暮津

ひやひやと夜の手が触れて眠草

暮津

雨の日も夢見る合歓の下田港

暮津

眠草なんなら君も触れてみな

暮津

花合歓の上を舞ふ揚羽うはの空

暮津

眠草突つく処がなくなりぬ

暮津

海桐の花 花とべら

姉妹交互に手出しねむり草

暮津

花とべら海匂はする風が吹き

さざ

合歓の花 花合歓

曇日を待ちゐしごとく合歓咲ける

もも

夾竹桃

古木にて惰眠むさぼる合歓の花

ばら

夾竹桃ブツダガヤなる聖地あり

鳩信

禿めくうひうひしさも合歓の花

随笑

夾竹桃一難去つてまた一難

素抱

そよ風の何ほめかす合歓の花

随笑

梅雨明

いっぽんの合歓咲く彼方古戦場

随笑

予報官えいと梅雨明宣言出す

寒暑

合歓の花一雨あるやも知れぬ闇

寒暑

冷夏

小安峽温泉  
稲不作うつつたふ婆の冷夏の眼

素抱

夏の日

夏の朝 夏暁 夏暁

牛乳の泡泡を押す夏の朝

ばら

夏の日をさへぎる櫛にして偉なり

さざ

床擦れに手こずり居れば夏暁の日

鳩信

投函に出でて蹤き来る夏の月

随笑

夏暁の散歩の顔の血色よき

素抱

夏満月妻のうながす処に佇ち

素抱

硫氣に顔撫でられ夏暁の露天風呂

石鏡

この匂ひ鮓の煮付け夏の月

暮津

夏暁の湯浴びに湯治の床もぬけ

石鏡

このところ忘れてをりし夏の月

暮津

夏暁のぼんやりしてゐる頭と手足

暮津

夏満月近々とあり顔ひとり

暮津

夏の露

夏の露ころりと白馬岳快晴

宿好

夏の灯の鯨の本へ乱反射

もも

夏の露松ひ諏訪社の五兵衛杉

宿好

夏の灯に売るアボガドのされかうべ

寒暑

夏の露昆布干し場の留石に

随笑

青田 青田風

夏の虫

四人で聞いて確かに夏の虫

随笑

一枚の巨きな青田みちのくは

随笑

夕かぜに息浅くつく夏の蟲

寒暑

清浄と男鹿の青田に注ぐ雨

寒暑

しゃかしやかと仙石原の夏の虫

暮津

日本海前に青田のしんと澄み

寒暑

驚を見て青田曇りの庄内路  
蚶満寺裏の青田の目に沁めり

石鏡  
石鏡

峯雲に見下ろされゐる鮫州駅  
天を突く気なき峯雲は斥けむ  
ぐわらぐわらと峰雲崩る筈もなし

もも  
さざ  
ぱら

雲の峰 入道雲 峰雲

十歩出て左方に海や雲の峯

さざ

決勝の壁と峯雲峙てり

燕音

怪鳥を出して見せうぞ雲の峰

鳩信

旺なり朝の峯雲も食欲も

随笑

碧天へいきなり到達雲の峯

素抱

孫美雨  
峯雲の漲れる日を産見舞

素抱

ぐつぐつと煮ゆる泥湯や雲の峯

石鏡

峯雲より滑走ジェットコースター

素抱

求道的たること今も雲の峰

暮津

痛恨の極みの峯雲突つ立てり

素抱

雲の峰崩るることを厭はずに

暮津

峰雲の力づくにて作りし塔

石鏡

雲の峰あらあら崩れ始めけり

暮津

一方に峰雲一方よりタンカー

暮津

雲の峰助バタバタ叩きみる

暮津

懷古 船旅  
ラバウルへ夏の密雲生る中

寒暑

鯨に入道雲の聳ち損ね

ぱら

雷 はたた神 日雷 鳴神なるかみ

ピッチング入道雲の高さより

随笑

軽雷 迅雷 遠雷 いかづち

さざ

直ぐ崩れては形なしの入道雲

素抱

はたた神空を鳴らして空開き

さざ

峯雲のよく聳つ日なり鵬を見ず

もも

うなばらを押へつけたるはたた神

さざ

峯雲に亀裂入ることなかりけり

もも

はたた神大だんびらを振りかざし

ぱら

ちやかびかとそれも端からはたた神

ぱら

\*佐久平に塩沢堰を引きし六川長三郎氏

東ひんがしに取って返せりはたた神

ぱら

村人に水大将と呼ばれ親しまれば

その伝で云へばなまくらのはたた神

ぱら

日雷雷電関の碑いしがみに

宿好

海陸に鈍器打ちつけはたた神

燕音

日雷孫のご機嫌斜めなり

素抱

やたら落ち田舎っぺえのはたた神

宿好

日雷母が正氣に戻るとき

暮津

はたた神ダイダラ坊を起すなよ

随笑

鳴神の逢瀬天上往き来して

ぱら

落ち方と云ふものあるうがはたた神

寒暑

わたつみに鳴神墜ちてどっぴんしゃん

鳩信

雨降嶺を唐竹割にはたた神

寒暑

鳴神の幕引とんと目途たたぬ

石鏡

さつきから目くじら立てゝはたた神

素抱

雷光に木像ガルーダ眼を剥いて

寒暑

腹に据えかね居るところをはたた神

石鏡

雷公の所持品古ぼけ大太鼓

鳩信

遠雷が一つ鳴りゐて下山道

宿好

雷公のもぐら叩きに遭ふごとし

寒暑

遠雷は陰口に似て崎つ方

随笑

京劇の殺陣稽古めく雷最中

寒暑

くわばらと云ひて遠退く雷ならず

寒暑

雷神の太刀先杉をばらりずん

ぱら

遠雷は響かず雨が蓋をして

暮津

ピカザと天地俄にさうざうし

随笑

あさつての方から聞え軽き雷

寒暑

雷果てて現にかへる顔と顔

随笑

迅雷の三連発に天地裂け

寒暑

雷の尻すばまりに海の方

寒暑

日雷水大将の家震ひ

もも

言葉尻濁せるごとく雷了る

寒暑

眼鏡置き眼休まず雷の中	寒暑	大夕立煙草ふかしてやり過ごす	素抱
落雷を逃るゝための唱えごと	寒暑	ところどころ言葉が消され大夕立	暮津
押入に片さるゝごと雷了る	寒暑	一線を越えてどどど大夕立	暮津
雷 <small>いかづち</small> に出し抜かれては道急ぎ	素抱	大夕立など何糞の <small>ユセシ</small> 一油蟬	暮津
雷又雷尾根の新樹を震はせて	素抱	二階より母の見てゐる大夕立	暮津
雷 <small>いかづち</small> は会津の方よりそれつきり	素抱	地を抜かんばかりの積迦力大夕立	暮津
雷が西瓜に入れし縞模様	素抱	白雨に舗道応へてをりにけり	さざ
雷夕立関東大気不安定	素抱	白雨を浴びをりペリカン修道士	ばら
雷の楔を入れるゝ相模灘	暮津	そら来たたと白雨に掌を差し伸べぬ	鳩信
雷獣の千里を駆くる光が見たり	暮津	白雨のごとログコテツジのバーベキュ	燕音
雷にいくうしろを断たれけり	暮津	枝々の明るさ増せり白雨中	燕音
蛸壺に一喝かれて海の雷	暮津	白雨抜け泊りは星の白馬村	宿好
武州金澤八景落雷なくはなし	暮津	切返すごとくに白雨上りけり	石鏡
夕立	白雨 <small>はくう</small> ゆだち 驟雨	白雨の仕上げに風を送りくる	石鏡
甲子園グラウンドを馳す大夕立	燕音	踏めばそこ雨の滲めり白雨あと	暮津
一、二枚青葉飛ばして大夕立	寒暑	夕立のあとのむむつとする中に	鳩信

夕立が上り辺りのなまぐさし	鳩信	夕立熄み雨音の輪を狭めくる	素抱
登ってさんざん下りてさんざん岳夕立	宿好	連れ立ちて物の流るゝ夕立川	素抱
兔平駅にて夕立遣り過ごす	宿好	夕立に足止喰いぬバーガー店	素抱
夕立に赤蟻川止め喰らひけり	随笑	夕立あと町空響き易きかな	素抱
軍配の返りたるごと夕立来	寒暑	雷夕立関東大気不安定	素抱
夕立後のごとくすかつとしてゐたし	寒暑	夕立の音立てゝ街呑み込めり	石鏡
端的と云ふは夕立の上がり際	寒暑	町雀けふは夕立まぬがれて	石鏡
夕立のざつとありたる雄物川	寒暑	また夕立こどもだましのやうな空	石鏡
五能線田母木に夕立うちつけて	寒暑	夕立に何處か伸び伸びして晩酌	暮津
夕立に叩かれめちやくちや日本海	寒暑	夕立に降られて肌着総取り替え	暮津
夕立来て東京湾をぶつたたく	寒暑	てのひらを返すごとくに夕立来	暮津
夕立中健気なる灯の点り初む	寒暑	夕立のあと何處となく大胆に	暮津
夕立の音の間合ひを詰め来たる	寒暑	夕立となりて万象雨隠れ	暮津
夕立にこりやたまらんと馳せる蝉	寒暑	夕立に容あるものみな打たれ	暮津
夕立来て地に喚くもの疾駆す	寒暑	夕立の涼気杉より檜より	暮津
大翼たたむごとくに夕立熄む	寒暑	夕立といふ一快挙ありにけり	暮津
夕立のそのたまさかに苗倒る	素抱	夕立といふ快音を広げたる	暮津

夕立のみるみる上がりとつぴんしゃん	暮津	打ちつけて傍若無人夜の驟雨	暮津
夕立にちからづけられ食すすむ	暮津	真暗がり打ちてやにはに夜の驟雨	暮津
夕立性一雨新宿駆け抜けり	暮津	端然として聞く夜半の一驟雨	暮津
夕立あと傘提げチャップリンめく家路	暮津	夜の驟雨納まりかけて来りけり	暮津
夕立の一气呵成のそれが来た	暮津	一驟雨頭のもやもやを拉し去る	暮津
夕立来と妻はクイズを抛り出し	暮津	旅 <small>の車中</small> 車内放送男鹿のどしやぶり雨告げて	寒暑
一驟雨高層ビルを壮とせり	ねず	スコール	
驟雨あり大根台地の地味肥やす	もも	波のりのこゑスコールのあがる海	ねず
驟雨来て朝の大正池壊す	宿好	羽抜鶏もんどりうつてスコール来	ねず
驟雨来空ゴンドラを送りけり	宿好	スコールは洋上はるか固め降り	暮津
驟雨来ぬ白馬の美田輝かせ	宿好	虹	
なぐり描き劇画のやうな驟雨くる	寒暑	虹立てり荒き雫は樅の直	ねず
一驟雨青森榎松濡らし去る	石鏡	海へ虹一帆もなく立消えに	もも
遣り過ごす韋駄天驟雨バーガー店	石鏡	鯛・鯉昇れや虹の大鼓橋	ぱら
一降りに闇を正せる夜の驟雨	暮津	色合ひをつべこべ云ふな虹は虹	ぱら
近づきては遠ざかりては夜の驟雨	暮津	立つ虹に見合つた言葉ぼんと出で	寒暑

虹のこと古事類苑の天文部	寒暑	佳き風を振舞はれけり夏座敷	随笑
<small>へなし</small> 艦作経て深浦辺りで虹を見ぬ	寒暑	嵌め物の類ひあれこれ夏座敷	随笑
のれん出す野毛飲屋街虹立ちて	素抱	夏座敷楓の風を取り込みて	随笑
母の記憶虹より淡くなる勿れ	素抱	ごたごたと物を置かぬが夏座敷	素抱
この家で命全うしたき虹	暮津	夏座敷豆麩浮かせて会津椀	素抱
はつきりせぬ虹の七彩折衷案	暮津	懐かしくサクがゐるなり夏座敷	素抱
夏霧	暮津	骨壺の一つ置きある夏座敷	暮津
海霧	暮津	遺品よく片づきをりし夏座敷	暮津
夏霧のじはつと鳴れる日本海	ぱら	扇	
海霧抜けてフォッグランプは黄菅色	燕音	扇 <small>せんす</small>	
羅臼沖背黒鷗に海霧去来	燕音	しやうぶ見る腰ポケットに扇子かな	ねず
国後島あとかたもなく海霧の中	燕音	けふ差して腰に馴染まぬ扇子かな	もも
魔がさしたやうに海霧湧きまだ引かず	燕音	御旅所に団扇と扇子語らひつ	さざ
ぼんやりと夏霧のこる山間部	随笑	腰折れの扇子使ひてふむふむと	鳩信
岳樺呑み込む海霧の迅さかな	素抱	通院日またぞろ扇子取り出して	燕音
夏座敷	随笑	三人が三人扇子取り出せり	随笑
<small>魚佐次(割烹)</small> 夏座敷茶のうまければおかはりす	随笑	扇子もつひとは扇子を遣り木蔭	随笑

飯店の円卓扇子を遣りながら  
定年後扇子が家に遊びをり  
五大堂風あり扇子納めけり  
骨傷みしても現役古扇子  
南谷ここがさうかと扇子出す  
海を見て扇子パチパチやつてをり  
白扇に茶化しきれざる病景色  
話かいつまんで云へばと古扇  
隣席の扇の風にあやかりぬ  
嘶家の扇のごとく器用なり  
中老の扇ひらひら屋台曳

団扇 団扇風

絵団扇のあらかた竹の性抜けて  
古団扇扇ぎて去年の手術のこと  
古団扇扇ぎ損ねて肋打つ  
傷み方あれこれありて古団扇

団扇風妻より貰ひ風の盆  
せつかちと思はるもよし団扇風  
両手もて孫の扇げる団扇風  
団扇風眠気しりぞけしりぞけて  
何云うてもみんな言訳団扇風  
一患者ふうふう云ふて団扇風  
その後のことはどうでも団扇風  
独酌の胸乳へ送る団扇風  
現八の麻張り房州団扇かな  
お気に入り房州団扇使ひ初め  
腹の底割りて二つの団扇かな  
掌の中に団扇ありけり昼寝覚  
御旅所に団扇と扇子語らひつ  
手にとりし団扇ことしもこの図柄  
腹の上団扇はたはたさせをりぬ  
団扇など置きてもてなす札所寺  
団扇手にとりてぬるめの風起こす

寒暑 素抱 古団扇骨傷みして風へなへな  
素抱 古団扇きゅつきゅと骨が鳴るやうに  
素抱 暇あればすぐ横になり古団扇  
素抱 骨折のそれでも使ふ古団扇  
石鏡 古団扇やれやれけふも了りけり  
暮津 考えてもしようがないこと古団扇  
鳩信 団扇絵に街道あるく馬子と松  
鳩信 団扇絵の逆巻く濤の風受けて  
随笑 団扇絵は漢を転かす女武者  
石鏡 団扇風とろけさうなる腕揺りて  
もも 身空てふ言葉も死語に団扇風  
さざ 縦あふぎはた横あふぎ団扇風  
鳩信 わが持論一步譲りて団扇風  
鳩信 「女」が孕み「阿亀」に団扇風  
宿好 団扇風いただき一番札所寺

宿好 相方の寝相や団扇持ちしまゝ  
随笑 団扇置き昼餉に呼ばれゆきにけり  
寒暑 ビニール製団扇手首の疲れるよ  
寒暑 枕辺に団扇やりきれなき一夜  
寒暑 投げ出しある団扇を掴みざまあふぐ  
素抱 重ねある中より軽めの団扇選り  
寒暑 団扇持つてあっちの部屋からこっちの部屋  
石鏡 団扇と辞書放つばらかしてある座敷  
素抱 手に届くところに団扇のある生活  
素抱 変はり映えしない団扇をことしも亦  
素抱 湯上りの団扇はどこだここに無し  
素抱 大リーグ観戦団扇持ち替えて  
素抱 気休めの団扇あふぎとなりゐたり  
素抱 ビニール製団扇の朝顔色褪せず  
素抱 孫吾をあふぐ団扇のへなへな風  
素抱 くさぐさの団扇の中のお気に入り  
石鏡 雑魚寝すや団扇片手に湯治人

団扇畳にほいと投げだし昼寝せり  
身ほとりに好みの団扇取り揃え  
団扇の辺通りすがりの蟻一匹

暮津  
暮津  
暮津

横浜港  
白日傘行き交ふ新装大棧橋  
熱線に痛み走れり浜日傘

寒暑  
暮津

### ハンモック

ひとねむり椰子の高みのハンモック

ねず

サングラス断てり氷河の乱反射

ばら

### 露台

テラス バルコニー  
ハマナスに別名あれば  
テラスのさき露のジヤパニーズ・ローズかな

燕音

道をしへ はんめう 斑猫

はんめうのふつと消えたる岩の色

もも

ポタージュを蜂嗅ぎつけぬカフェテラス

燕音

はんめうの背後にそつと息詰めて

ばら

風通るテラスにてピザ避暑家族

燕音

つと寄りて轉法輪寺道をしへ

宿好

珈琲を喫せりロッヂ「五千尺」

宿好

斑猫は肉食の彩泛べけり

随笑

バルコニー「マサイの矢尻」鉢に活け

暮津

天道虫 てんたうむし

天道虫ハイカラな星七つかな

もも

### 日傘

白日傘水母の海を覚ましゆく

ねず

てのひらに這はせて愛づる紅娘 てんとうむし

さざ

ハイカラな日傘と出合ふ軽井沢

燕音

教団の使者とし来たる天道虫

ばら

日傘して次に浮き来る亀を待つ

宿好

十勝晴れ天道虫が肩に来て

ばら

恐山日傘抹香臭くなり

随笑

屯して天道虫のローティーン

ばら

冬ざれの天道虫は能く歩く

素抱

かなぶんの打身の音をひたと聞く

よそゆきの水玉模様天道虫

素抱

かなぶんの現行犯を投げ撲ちぬ

暮津

### 金亀子 こがねむし

黄金虫

かなぶんの鉄砲玉に斜面畑

もも

かなぶんのその実じつよからぬ虫と聞く

暮津

かなぶんに玻璃戸を引きて助け船

ばら

かなぶんを音として聞くよからぬ音

暮津

茶天鷲絨かなぶんひっくり返りけり ちやびろうと

燕音

かなぶんを色として見る至福のいろ

暮津

かなぶんの支離滅裂となり当る

随笑

ぶんぶんと泣虫抛り出さんかな

ねず

ぱたと落つところを見れば豆かなぶん

随笑

もう我慢出来ぬぶんぶん締出せり

さざ

かなぶんの堂々巡りむさき家

寒暑

空襲警報下、母幼稚園に迎えに来ること再三聞けば

さざ

いつもならかなぶん翔んで来べき頃

寒暑

ぶんぶんやぶんと飛び来し艦載機

暮津

板の間に落つかなぶんの硬き尻

素抱

ぶんぶんは緑の鎧着し騎士 ナイト

暮津

かなぶんを捕つて抛りて戸をびしゃり

素抱

ぶんぶんの遊び半分灯を取りに

暮津

二階に赤子階下にかなぶん喚く家

素抱

ふんばりてドウガネブイブイ露吸へり

もも

潜みぬし昨夜のかなぶん灯を取りに

素抱

黄金蟲手っ取り早く翅畳む

ばら

うるさかり先生口調もかなぶんも

素抱

金亀虫さうかさやうか灯を遣ろふ

随笑

分銅の飛び来るごとく黄金虫

素抱

毛虫

黄金虫吾が掌蹴りあるく

暮津

毛虫焼く一部始終を見て足れり

ねず

鉛筆は日金亀虫の固さ

暮津

柩垣毛虫に先を越されたる

ばら

髪切虫 天牛

もも

むくむくと大善坊の毛虫かな

燕音

かみきりにいちじく甘露用意せる

もも

山茶花に毛虫一騒動ありぬ

燕音

天牛のつままれ鳴きのいと女女し

ばら

山道に毛虫の落ちて忙しき

随笑

天牛の朝飯前の力かな

鳩信

毛虫つく頃の柩と見てとほる

随笑

天牛の背を一息に押え込む

随笑

連休の中日の毛虫退治かな

随笑

鍬形虫

随笑

木より落つ毛虫地べたを一目散

随笑

強さうな名のヘラクレス大きくわがた

寒暑

黒毛虫妻譏ること譏ること

随笑

少年の溺愛鍬形剣闘士

暮津

毛虫垂る糸の辺りを横払ひ

随笑

兜虫 甲虫

暮津

毛虫のごと空攀づジェットコースター

寒暑

闇を翔け来たる強肩兜虫

ばら

満腹や毛虫の下見でもせんか

寒暑

偽八ヶ岳へ兜虫飛んだりまっしぐら

宿好

さざんくわの毛虫の下見的中す

寒暑

灯を取りに箱根の山の兜虫

随笑

良寛墓所毛虫も托鉢姿して

寒暑

鍛えたる角いつ使ふ甲虫

素抱

小肥りの毛虫良寛墓石馳す

寒暑

格子縞羽織り毛虫の三大夫

寒暑

軍艦に四万六千日の波

葉桜の毛虫垂るるによき暗さ

素抱

ほおづき縁日近し愛宕の杜冥く

石鏡

毛虫居るだけで全てを物語る

素抱

夏の山 青嶺 夏山

石鏡

毛虫ひそかに事運びしが発覚す

暮津

蝦夷青嶺肩寄せて守る湖の艶

ねず

発覚即リンチと毛虫心得よ

暮津

花火野郎青嶺の肝を抜き来しと

ねず

おとつと森の小径の垂れ毛虫

暮津

切り出してこころ青嶺の水利権

ばら

つままれることをいやいやする毛虫

暮津

押し迫る青嶺や巖棲息地

燕音

毛虫付き驚き桃の木山椒の木

暮津

お国自慢などしてバスは青嶺越え

随笑

こら毛虫ここで会うたが百年目

暮津

釣竿を青嶺に向けて川漁師

随笑

青山椒

暮津

川ぐいと曲る青嶺を引き寄せて

随笑

青山椒隈取り深く毛虫の貌

暮津

悠々と暮れて青嶺のいま黒嶺

随笑

青葡萄

暮津

ドライブイン四方の青嶺に見下ろされ

随笑

青ぶだう日毎に凌ぎやすくなる

随笑

田沢湖は青嶺の間に手の窪ほど

素抱

鬼灯市

鳩信

骨壺に葛生の青嶺見せ戻る

素抱

ほほづきの鉢提げ愛宕大権現

鳩信

青嶺攀ずよろよろ岩手県北バス

石鏡

ほほづき縁日笛ひやらひやらとひやらひやらと

鳩信

釣人の居る瀬居らぬ瀬青山中

随笑



エンジンブレーキ響かせ下りる夏蔵王  
杉皮の赤むきだしに夏の山  
夏鳥海山あつちゅうかいはるばる来たる者にこそ  
天候は出たとこ勝負夏山行

### 山滴る

かつを船滴る陸くがに戻りけり  
山滴る島を離れておけさ丸  
羽後牛のステーキ青嶺滴るに  
墓洗ふ向う滴る唐沢山

山滴る箱根に手づくり豆腐屋あり

### 森林浴

ふっ切らむ老いのしよぼくれ森林浴

### 登山 登山靴

ガレ場あり奈落より現る高山蝶  
遠雷が一つ鳴りみて下山道  
登ってさんざん下りてさんざん岳夕立

ガレ場にて噎れしこゑの昼の虫

後ろより兀と迫れる登山靴

八方尾根下山がたがた蝶番

登り来てモウセンゴケに顎出しぬ

トレッキングシューズの先の岩鏡

濃あぢさゐ登山電車はぎくしゃくし

登山届ポストほとほと霧霽

登山帳前黒帽子岳をピストンすと

### ケルン

二株のハクサンシャジンケルンに待す  
足垂らし涼みゐるなりケルンの端  
ケルン経て風届くなり車百合  
時かけて風の第三ケルンまで

### キャンプ

象亀のやうなテントもキャンプ場

### 野外映画

野外映画鞍馬天狗のをちさん出づ

### 岩魚

だんだんと水の高鳴る岩魚釣  
岩魚の瀬すこし上ミ手に山女の瀬  
水底について向き変ふ岩魚の斑

### お花畑 お花畑

えいおうと咲き出てエゾノヨロイグサ  
お花畑雨も疾走虻も疾走

太陽は真近しエチゴギジムシロ

オオバギボウシ白雲翳り易くして

露は凝りゐたりタテヤマウツボ草

白雲の雲影よぎるカラマツ草

エゾホソイ山雨傍若無人なり

雨脚のみるみる太しオヤマソバ

健脚なご婦人トリアシシヨウマの辺

ハクサンシャジンリフト減速して頂上

素抱

ばら

素抱

暮津

暮津

燕音

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

お花畑雲の空中散歩かな

登り来てモウセンゴケに顎出しぬ

シヨウマ等ちらちら兎平かな

お花畑リフト二つを乗り継いで

右左だう廻ろうかお花畑

風が湧き走り回れりお花畑

### 雪溪 氷河

カナダ アサバスカ氷河  
動悸打つごとく氷河の雫かな

雲に日の入れば氷河の懽然たり

草の花氷河すさりし跡に充つ

音も無く氷河の上を水はしり

光度増し氷河息づきゐるごとし

氷河焼けしたるガイドのジョーク好き

氷壁を煽りて発てるブルーージェイ

サングラス断てり氷河の乱反射

真輝く氷河を前に道消ゆる





術後の日の為の浴衣を着慣らしぬ	鳩信	甚平著て貴方も齡と云はれをり	寒暑
浴衣着に一皮むけていい女	鳩信	お化け小屋呼び込み男の甚平着	寒暑
今町のおわら流しの浴衣柄	宿好	あつさりと白旗掲ぐ甚平着	寒暑
浴衣着て妻も飛び入り湯揉みショウ	随笑	皺む腹甚平におし包みけり	寒暑
宿浴衣もみづる山に向ひ干す	寒暑	甚平に捌けて口調も応対も	寒暑
よその子が気になる祭浴衣かな	素抱	甚平着見て振り返る甚平着	素抱
湯治棟浴衣など吊り仕切りけり	石鏡	甚平の好きがわかってくる齡	素抱
浴衣干す針金ハンガー湯治棟	石鏡	甚平の紐結ふ手つき馴れてきし	素抱
<b>縮布</b> 白縮		甚平の食い込む紐をゆるめをり	素抱
白昼の真中に覚めて白縮	石鏡	サンダルを履き違へ来し甚平着	素抱
<b>パリ祭</b> 巴里祭		くるぶしをぶつつけおお痛甚平着	石鏡
<small>手術当日くだ</small> 救命の管のいろいろ巴里祭	鳩信	立読みも堂に入りたる甚平着	石鏡
管ぶらさげ鳴り物入りの巴里祭	鳩信	甚平の腰泳がせて地震最中	暮津
巴里祭定番鳩の手工品かな	随笑	<b>すてこ</b>	
<b>甚平</b>		汗くさき肌着ステテコシャツの山	鳩信
甚平が術後の吾を待つてをり	鳩信	すててこのすっぽんぼんは佳かりけり	随笑

すててこで出てゆき速達受け取りぬ	随笑	汗っかき太っちょ監督サイン出す	燕音
肌合ひのよきを好みてすててこ党	随笑	戦う汗涙となりぬ夕菜に	燕音
大リーグすててこ観戦愉しめり	寒暑	札所寺百日紅に汗退けり	宿好
すててこで古本整理ああ汚 <small>きたな</small>	寒暑	汗をかき日々を勇んであ昭和	随笑
すててこの上よりあはてゝ履けるもの	素抱	毛髪の間ほろつと汗生まれ	随笑
すててこの膝のところが薄くなり	素抱	汗拭いて七百八十五段の労	寒暑
すててこのまゝ玄関に出やうかとも	素抱	高からぬ鼻も汗かく日なりけり	寒暑
来客にすててこの腰泳がせて	石鏡	瘦せぎすの身なれど汗がなんぼでも	寒暑
妻が来て剥ぎとりゆけるすててこ等	暮津	放つとけばころがり落つる汗の玉	寒暑
<b>汗</b> 汗ばむ 玉の汗		汗地獄それもよかるう徒食の身	寒暑
出色の百日紅に汗退けり	もも	汗拭いて縦に走れる手術痕	寒暑
サイクリスト緑蔭に汗拭へるも	さざ	汗かかぬ魚を羨しと見てゐるも	寒暑
団扇風みぞおち辺り汗に冷ゆ	さざ	永久に拭く汗の貌ともおもへりき	寒暑
ボテロ描きしモナリザでぶで汗ばめり	ばら	汗拭いた了へて須臾の間仏がほ	寒暑
汗っかき大漢にして大ジョッキ	鳩信	汗かくだけかいて魂すっぽぬけ	寒暑
汗くさき肌着ステテコシャツの山	鳩信	身を離るときの快感汗の玉	寒暑



涼まんと帆船模型置く茶房	随笑	なるやうになれとはだけ夕端居	寒暑
丈六佛涼しみ拜む御居処かな	素抱	薄光る切傷撫でて夕端居	暮津
羅の二人は佳けれ納涼図	素抱	脛の創これは彼の時夕端居	暮津
仙厓の布袋図さながら夕涼み	素抱	衰ふるもの目に見えず夕端居	暮津
棲みつける臺ものそりと門涼み	素抱	手術痕古ぶばかりや夕端居	暮津
云ふならば初老夫婦の夕涼み	素抱	夜色楼台雪万家圖を見て端居	ねず
老人のでれつと涼む湯屋板間	暮津	端居して孫の手をもう借りる齡	随笑
板の間にへタリて錢湯納涼図	暮津	端居しておもひ巡らす眼となれり	随笑
ビル風に涼んでみたり病院裏	暮津	きのふけふ仏がそこに居る端居	素抱
ほつとせる貌を納涼夕雀	暮津	端居してみな遠のけるものばかり	素抱
夕雲を見つゝ涼とる妻共々	暮津	端居してまじまじと見る爪の土	暮津
<b>端居</b> 夕端居		端居してしみ・しわ・ほくろなど数ふ	暮津
あそこからかう来るかぜと端居人	随笑	端居して退職挨拶読み返す	暮津
関節を鳴らしてみせぬ端居人	寒暑	端居していちばん風の来る処	暮津
片膝立て地震に身構ふ端居びと	暮津	<b>打水</b> 水撒き 水を打つ	
端居人臍の掃除をして居れり	暮津	末つ子の水撒き上手水打てり	ねず

ばしやばしやとばしやりと水を打ち了る

ばら

**シャワー**

水を撒く母がもつともすずしさう	宿好	シャワー浴び貝殻ランタン灯の入りし	ねず
店先に水打つ鰈の洋服屋	随笑	海水着踏みつけて浴ぶシャワーかな	さざ
散水の葉蘭打つにやばたぼたと	随笑	肌伝ふシャワーに骨皮筋右衛門	鳩信
水撒いてやろうかほとぼり覚めぬ路地	寒暑	シャワー浴び吾が前よぎるアフロディテ	随笑
水打つて木に葉に石に當たる音	寒暑	シャワー浴ぶといふより滴らす	随笑
水打つて収まるものを収まらす	寒暑	シャワー浴ぶこんなところに雀斑かな	寒暑
打水の垣越ゆ水の一塊り	素抱	<b>夏の夕</b> 夏ゆふべ	
水打てば庭木喜ぶことしきり	暮津	白樺の一幹に倚る夏ゆふべ	もも
土けむりばつぱつと打水ぼたぼたと	暮津	夏の夕虫の語らふ繁々夜話	素抱
打水のぼかばか木の音草の音	暮津	<b>夏の夜</b> 真夏夜	
打ち水に真顔もて蚊が刺しにくる	暮津	夏の夜の力道山にこゑ囀らし	さざ
お隣りは元銀行員水を打つ	暮津	おろしたてパジャマに夏の夜の更くる	鳩信
<b>髪洗ふ</b>		夏の夜の採尿採つても採つてもや	鳩信
髪洗ふボトル二つやさてどちら	素抱	真夏夜の黒鍵叩きつける指	燕音
脂っ気もうなき髪を水洗ひ	暮津	真夏夜の知らぬが仏不整脈	燕音

シンコペーション真夏刻むジャズののり

随笑

惣領に生まれて夜濯ぎなど不得手

暮津

夏夜刻むリズムの権化ダリエンソ

素抱

濯ぐべきものくらがりの一隅に

暮津

夏の夜のうしろに廻る灯影かな

素抱

パイヤ

暮津

湯治人ボソボソ話しめる夏夜

石鏡

目に入りて拳大なる青パイヤ

さざ

真夏夜をチャンバラ好きの映画好き

石鏡

パイヤの青果押し合ひ<sup>へ</sup>圧し合ひて

さざ

夏の夜の字幕に友情出演と

暮津

パイヤへ銀の額をもてる朝

ばら

夏の夜の宴昭和のタップかな

暮津

完熟のパパイヤそれを賞味せん

鳩信

夜店

パイナップル

走り根を除けて夜店を組み始め

寒暑

パイナップル熟れきつてゐるお仏壇

暮津

夜店建ちけふの稼ぎを待つばかり

寒暑

パイナップルえぐ味の針が舌を刺す

暮津

夜店の材鉄パイプなど持ち込まれ

素抱

バナナ

暮津

水舎から水借り夜店支度とよ

素抱

朝市<sup>ジヤワ</sup>の涼<sup>四句</sup>とくるみバナナの葉

ねず

お願いを連発する子夜店の前

素抱

ゆつたりと泊船を入れバナナの葉

ねず

でっぷりした夜店のおばちゃん焼蕎麦焼く

暮津

南米産バナナは台湾バナナの横

ばら

夜店より孫を剥がすにくまれ口

暮津

大温室全開バナナに風入れて

ばら

夜濯

老人の間食モンキーバナナかな

石鏡

棕櫚の花一寸バナナを思ひ出し

石鏡

一物のごとく胡瓜のぶるさがり

暮津

吾が一つ覚えの臺灣バナナ買ふ

暮津

へエと云ひ葉下の胡瓜覗きゐる

暮津

世は移り二束三文バナナかな

暮津

朝もぎの「つ」の字「く」の字のへぼ胡瓜

暮津

マンゴー

へぼ胡瓜ヘルパーさんにお裾分け

暮津

マンゴーの見ゆる席にてグアバジュース

ばら

古漬けの胡瓜つまめる残暑かな

暮津

メロン

朝昼晩餉に出る古漬胡瓜かな

暮津

海上につよき一星メロン冷ゆ

ねず

胡瓜もみ

随笑

蔦の糞メロンの蔓を汚しけり

寒暑

胡瓜揉みぼりぼりやりて昼餉了ふ

暮津

瓜

もう少し肥りたけれど胡瓜揉

暮津

隼人瓜畑の先を通り雨

鳩信

冷索麵

随笑

変なこと覚えてゐるよ瓜の種

素抱

けふの昼餉冷索麵に一致して

さざ

瓜の種そこと云はれて顔撫づる

暮津

たとふれば男の美学冷索麵

燕音

胡瓜

冷索麵見た目も味の内也と

随笑

曲がることついつい忘れ優<sup>やさ</sup>胡瓜

ばら

アイステイ

随笑

胡瓜皆すんなり基準値合格品

素抱

とんとんと砂糖ステイックアイステイ

随笑

古漬胡瓜茶漬けの候となりにけり

暮津

アイステイー茉莉<sup>モリーチユンハオ</sup>春毫試し飲み

寒暑

アイステイーストロー吸うとき顔細め  
アイステイーぐびぐび飲んでまた寝る子

寒暑  
素抱

麦湯呑み午から体力消耗戦  
やるせなし麦湯に氷片二つ入れ  
一日了ふ壇の麦湯も底尽きて  
煮立つたる麦湯さましてゐる背中  
麦湯なまぬるくひとりでとる昼餉

寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑

### 麦茶 麦湯

文庫本伏せて麦湯を飲みゆく  
麦湯煮ることに精出す妻なりき  
年金の出る齢となり鳩麦茶

さざ  
宿好  
宿好  
宿好

煮立つたる麦湯さましてゐる背中  
麦湯なまぬるくひとりでとる昼餉

寒暑  
寒暑  
寒暑

麦湯飲み暑さ負けせぬ夫婦なり  
鳩麦を加ふ麦湯の香なりけり

宿好  
宿好

氷水伊豆見屋と云ふ海の家  
大仏をまづ先に見て氷水

ねず  
さざ

職引きて麦湯の湯気のやうな日々  
暑にめげぬための麦湯を沸かしおく

随笑  
随笑

片町に朝の氷を挽ける音  
しなしなの氷掬へり岐阜城下

ばら  
ばら

冷麦茶ありて重宝しておりぬ  
なまる身をしゃんと正せる冷麦茶

随笑  
随笑

わたしには氷いちごの真っ赤なやつ  
掻き鳴らし我が家自家製氷水

ばら  
鳩信

冷麦茶薬の如く頂ける  
麦湯の滋味吾らが元氣の源よ

随笑  
随笑

氷水落ち着くところに落ち着きぬ  
がりがりと妻が自家製氷水

鳩信  
燕音

起きだして朝から麦湯沸かす妻  
體に佳き麦湯毎朝沸かすなり

寒暑  
寒暑

新宿の地価折り込みの氷水

随笑

口染めてきんとと色の氷水

寒暑

### ラムネ

舌先が莫迦になるまで氷水

寒暑

売店へ空のラムネの壇戻す

さざ

旅先の風の津軽の氷水

寒暑

ひよつこりとラムネのおくび出で来たる

さざ

なまる身にしつかりせよと氷水

素抱

旧季題ラムネに明治の活気あり

鳩信

かうなれば開き直りて氷水

暮津

ラムネ玉ころりと仙石原晴れて

石鏡

氷水掻き止め遠きもの見つめ

暮津

ラムネのごと ヨコの三文字昇り来る

暮津

氷水真っ赤なやつに齒が浮いて

暮津

### ソーダ水

氷水舌の形が判りけり

暮津

鎌倉近代美術館  
モガ・モボ展一渡り見てソーダ水

鳩信

### アイスクリーム

馬車道を歩きがてらのアイスクリン

ばら

サイダーの大きなげつぷ暮めける

素抱

アイスクリームこんもり小岩井農場製

随笑

あやふやなサイダーの味雨籠り

素抱

蔵王蔵王山麓・酪農センター見てアイスクリームてんこ盛り

素抱

炭酸水ハヤシライスの木村屋にて

石鏡

### 氷菓

水脈を見てフェリー船尾に氷菓舐む

寒暑

### ビール

生ビール  
ビヤガーデン 麦酒

寒暑

其の上の病院船は氷菓かみいろ

寒暑

何は扱置き一杯目のビール

もも

氷菓買えと孫の奥の手泣威し

素抱

長かりし一日ビールの黄昏色

さざ





日光山一巡りして蜜豆 鳩信

麩はつたい 麦落雁 麦こがし

はつたい

落雁売茶っこさのんでいけといふ 宿好

妻との旅すぐにまとまる麦落雁 寒暑

その声価大いに疑問麦こがし 素抱

麦こがし老と片づけきれぬこと 暮津

冷奴 奴豆腐やつこじょうふ

だいそれたことを言ひ出す冷奴 ばら

奴豆腐ヤッコの上音頭とるのは花かつを 寒暑

冷奴地震の起こるメカニズム 素抱

大山の水が命の冷奴 素抱

冷奴堅箸をつけむとす 石鏡

隔たるものどんどん隔たり冷奴 暮津

冷奴へたに動かぬほうがよい 暮津

冷奴本心さらりと云ひ退けし 暮津

水切つて醤油をかけて冷奴 暮津

ともかくも生きていりゃこそ冷奴 暮津

冷奴の他に肴はもう一品 暮津

鮨 鮓

柿の葉鮓ほおばれば雨響くなり ばら

水飯すいはん 水飯みずめし

水飯の彼の日々母の語り草 素抱

洗膾あらひ

風通り鯉の洗膾を待つ座敷 燕音

泥鱈どじやう

どぜう捕大佐渡曇り背に負うて もも

日の下に田螺の大愚どぢやうの愚 ばら

泥鱈捕りザシキワラシも加はりて 宿好

温床を蹴つて泥鱈の浮き上がる 随笑

うたたねのホトケドジョウの髯立派 寒暑

金北山けふは晴れたと田のどぜう 寒暑

面構え佐渡随一のどぜうとも 寒暑

沼底のどぜうの欠伸ならむ泡 素抱

溝萩の謔けさ破り泥鱈捕 暮津

泥鱈鍋

やつと出て岩手時間のどぜう鍋 随笑

扇風機

ピザ店の大扇風機頭上より 随笑

道後の湯古りて天井扇風機 寒暑

扇風機万遍なくといふことを 寒暑

扇風機の風が洩れなく来るやうに 寒暑

首振の一芸をもつ扇風機 素抱

扇風機悼みの風を送るなり 素抱

扇風機夜はぼつねんと座せるのみ 暮津

翅休め昭和の遺物扇風機 暮津

扇風機はたと止まりしまゝ晩鐘 暮津

冷房 クーラー

病棟の深夜冷房音どすん 鳩信

冷房裡オペ頼末記筆談に 鳩信

見舞客勝手に変へて冷房「強」 鳩信

かかりつけ心臓外科の冷房利く 鳩信

浮世松太田記念美術館 燕音

觸體圖も弱冷房裡国芳展 宿好

白馬山麓星夜天然冷房裡 宿好

クーラーのああ埃臭さ試運転 随笑

冷房を入れず自然の風待ち派 随笑

がら空きの電車ひやすに弱冷房 寒暑

冷房のどすんと入る音の又 寒暑

入院、大部屋 寒暑

入れては切りいたちごっこの部屋冷房 素抱

冷氣にも気迷ひのありお化け小屋 素抱

シネマ冷房空席冷えに冷えゐたり 暮津

予後よきを聞きし日よりの鉄風鈴 ねず

軒風鈴ついついこんなことまで書く ばら

風鈴



ほぼ鉢の真ん中金魚の平常心  
 素抱  
 金魚の死母には伏して言はずにおく  
 素抱  
 十四で何んぼの和金売れゆきよし  
 石鏡  
 閉じてまた開く金魚の口可愛し  
 石鏡  
 彫り露けく金魚奉納三百尾  
 石鏡  
 枯木攀ずあの猫金魚盗った猫  
 石鏡  
 金魚掬ひまだ諦めぬ姉の意地  
 暮津  
 追ひ回し遂にデメキングットの子  
 暮津  
 忘れがちそれでも金魚生きてゐる  
 暮津  
 布袋草残り金魚は死に絶えし  
 暮津  
 ニュースキヤスター金魚の如きおめめして  
 暮津  
 金魚飼ふといつまで言ひ張るわからんちん  
 暮津  
 金魚掬ひ一回だけと念を押し  
 暮津  
 雨の日のペット屋金魚ぶかぶか浮く  
 暮津  
**金魚玉** 金魚鉢  
 水を張る手も逸りけり金魚鉢  
 宿好  
 雨の日の今日の句材は金魚鉢  
 素抱  
 金魚玉留守を任されぬたりけり  
 素抱  
 台風を生める地球と金魚玉  
 素抱  
 金魚玉如何に台風荒れやうと  
 素抱  
**松葉牡丹**  
 松葉牡丹咲かす家などんと失せ  
 随笑  
 汝が植えし松葉牡丹も喪に服す  
 暮津  
 松葉牡丹よく咲き未だ咲き猶咲かむ  
 暮津  
**水遊び**  
 べべ濡らす如雨露遊びもたけなはに  
 素抱  
 ありとあらゆる容器並べて水遊び  
 素抱  
 よその子とすぐうちとけて水遊び  
 石鏡  
**樟脳舟**  
 樟脳舟すぐに元気をなくしけり  
 もも  
 頭の裡に樟脳舟を走らしめ  
 寒暑  
 ゆくゆくは樟脳舟の船長に  
 寒暑

**水中花**  
 云ふに窮してそこまで云ふか水中花  
 暮津  
 家居して大いに退屈水中花  
 暮津  
 水中花葉は処方箋に基づき  
 暮津  
**花氷**  
 駅長の粹な計らひ花氷  
 素抱  
**冷蔵庫**  
 患者等のわれらが宝庫冷蔵庫  
 鳩信  
 スペースはづらして作る冷蔵庫  
 素抱  
 冷蔵庫に西瓜入れあるぞと出掛け  
 素抱  
 男手の何でも突つ込む冷蔵庫  
 暮津  
 冷蔵庫内部は蛙の胎に似て  
 暮津  
 往生すぎうぎう詰の冷蔵庫  
 暮津  
 物匂ふ世が嘗てあり冷蔵庫  
 暮津  
**盛夏** 真夏 夏旺ん  
 中華街  
 厨房へ徹る真夏の広東語  
 鳩信  
 日を追うて旺んなる夏如何にせん  
 随笑  
 バスの旅盛夏の下北くんだりまで  
 随笑  
 恐山盛夏団体割引あり  
 随笑  
 旺んなる夏に生まれて嬰の名美雨  
 素抱  
 盛る夏妻は地力をつけつつあり  
 素抱  
 とんカツの旨き盛夏となりにけり  
 暮津  
 夏旺ん紅茶はベルガモット入り  
 暮津  
 真夏の弦切り刻むカナロ・エン・パリ  
 暮津  
 真夏日のがちやんと痛に触る音  
 暮津  
 鼻つまみ鳴き継ぐ蟬の盛夏過ぐ  
 暮津  
 真夏の夢どうせみるなら酒池肉林  
 暮津  
**朝曇**  
 朝曇さきほど薬飲んだっけ  
 寒暑  
 朝曇り気概ばかりが雄々しくて  
 寒暑  
 朝曇り鈍く光れるドアのノブ  
 寒暑  
 朝曇黄のうちかすむ女郎花  
 素抱

納豆のやっかいな糸朝ぐもり  
朝曇妻の指さす食べこぼし

暮津  
暮津

日盛りの音たて壊す菓子袋

日の盛りカレー粉の素炒る香のす

日盛りの町の湯に入り私わたくしなし

暮津  
暮津  
暮津

日盛ひさかり 日の盛り

日の盛かすがひ 打たる仁王の脛

さざ

炎昼

日の盛引つ張り出して片付けもの

ばら

炎昼の時間の檻に入ることし

ばら

京劇に呑み込まれをり日の盛り

燕音

炎昼をへたばりをると誰が云ひし

鳩信

日盛りの中軸打線火を噴きぬ

燕音

家中に玩具踏み場もなき炎昼

素抱

日盛りの老人割引利く映画

随笑

炎昼の玩具転がしある一間

素抱

たまさかに聞く鳥の音も日の盛り

寒暑

炎ゆる昼人に二つの呼吸法

暮津

日盛りをあれもこれもと欲張らず

寒暑

炎昼の古漬噛めば澄みし音を

暮津

日盛りの出湯に血行よくなれり

寒暑

炎昼をふうふう言うてコップ拭き

暮津

日盛りを煌めき渡る風のあり

寒暑

炎天 炎ゆる 炎暑 炎天下

日盛りの波倒れんとする際の照り

素抱

真炎天

検針のこんどは瓦斯や日の盛り

素抱

炎ゆる日のはじめのトマトもぎにけり

ねず

もう一軒寄ってゆかねば日の盛

暮津

炎ゆる日をピッツアヨーラの海鮮ピザ

随笑

くるぶしに透く静脈や日の盛

暮津

炎ゆる日にふかすキャメルといふ葎

寒暑

炎ゆる日の昼餉昆布茶に焼きにぎり

暮津

炎天へ妻着て出づるジャワ更紗

ばら

ここに来て炎暑一掃通り雨

随笑

炎天を味方につけぬ勝投手

燕音

炎暑に貯金下ろすは砂取りゲームに似

寒暑

目をぎゅつとつむって開いて炎天へ

随笑

炎天下三半規管に従ひて

素抱

通院の炎天の道ゆく他なし

随笑

とりあへずこちちの方へ炎天下

素抱

診察は東の間炎天また戻る

随笑

はらからと喪服を灼かる炎天下

素抱

軽装がベスト炎天あるく旅

随笑

炎天下へたに歩かぬ方がよい

暮津

炎天をマリオネットのごと歩し来

随笑

ギブス嵌めそれでも煙草炎天下

暮津

作務衣の紐三つ目結うて炎天へ

随笑

虫瘤の意気壮んなり真炎天

宿好

炎天高校野球にもってゆかれし大飛球

随笑

心棒に狂ひを生ず真炎天

随笑

打って出るおもひ強かり炎天に

寒暑

にんげんに祭り雀に真炎天

随笑

ポケットの小銭ちやらちやら炎天へ

暮津

アッパーカット啖らひしごととき真炎天

素抱

帽子などなくてもへつちやら炎天ゆく

暮津

真炎天雀憶せず足許へ

素抱

炎天孫来し笑顔が家に上がり込む

暮津

真炎天ピシと音して割けるもの

暮津

炎天に思ひ浮かばぬもの名前

暮津

アイシヤドウ濃く炎天の一帆追ふ

ねず

炎天をのこのこ訪ね来る御仁

暮津

炎天見る武人埴輪の面持ちに

さざ

郵便夫配り損ねて炎天くる

暮津

油照

かんかん照り雀翔つさへ億劫な  
巡礼の秩父はかんかん照りの道  
屁理屈の罷り通らぬ油照  
ぎすぎすした物言ひになる油照  
油照起死回生の一手欲し

灼く

影ぐるみ灼かれ突立つ義民の碑  
「当人渡世勝手次第」の島に灼け  
大佐渡の竹灼き尽す日なりけり  
照りつける鉄砲鼻に葛灼けて  
白象のごとくけだかく雲灼けて  
灼け紅旗へんぼん関羽生誕祭  
灼けほてる土にどすんとランディング  
街道はこれから灼けむ露葎  
海照りて鬼の手作り岩を灼く

宿好  
宿好  
寒暑  
暮津  
暮津

石灼けて粉塵に帰す恐山  
ペンキ塗る青空がまだ灼けぬうち  
青空がまるごと灼けて玉砕日  
灼けてをりお岩木行きのバスダイヤ  
彼の日のごと林火忌権兵衛坂は灼けをりぬ  
灼くる道ほじくり返しその上に  
天灼けぬ白さるすべり地に灼けぬ  
蟹さんの型押し遊び灼け砂に  
天が下灼けゐる墓誌に余白あり  
はらからと喪服を灼かる炎天下  
こんなにも灼けゐる墓石西林寺  
ラバウルに灼けし零戦見て船旅  
やせつぼち灼ける海見て怯みけり  
灼かれても青葉が綺麗なたちはぜ  
灼ける景眼鏡の球を拭くばかり  
灼け木道一人歩めば一人の音

ねず  
ねず  
ねず  
もも  
もも  
ばら  
鳩信  
燕音  
宿好  
随笑

随笑  
随笑  
随笑  
寒暑  
寒暑  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
石鏡  
暮津  
暮津  
暮津  
暮津  
暮津  
暮津

昼寝

三尺寝 三尺寝 昼寝覚 午睡  
午睡して妻の背ひろびろとありぬ  
午睡より覚めしところへ水羊羹  
三尺寝濁世に用はなかりけり  
読みかけの本のほとりに三尺寝  
胸中に小さき虹懸け三尺寝  
遣りつけぬ仕事たたりて三尺寝  
昼寝人かさと寝返りうちにけり  
昼寝より覚めてうまづらはぎの顔  
なさけなき顔のオオカミウオ昼寝  
昼寝せるゼブラ縞柄バジヤマかな  
足のつば崑崙揉みてより昼寝  
お昼寝の面付き直せ山の神  
世之介の昼寝の涎ぬぐひやれ  
昼寝して腕むつちり如来肌  
「豆腐ノ辯」読み漁りみて昼寝かな

さざ  
寒暑  
鳩信  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
素抱  
もも  
ばら  
ばら  
鳩信  
鳩信  
鳩信  
鳩信  
鳩信  
燕音  
随笑

蚊帳潜り出でしところで覚む昼寝  
父の日の昼寝セットのプレゼント  
大昼寝して沙悟浄の国にかな  
自堕落と譏られやうがまた昼寝  
昼寝して雲散霧消時の枷  
読むことはここまですべてあと昼寝  
昼寝して飛脚行き交ふ東海道  
昼寝せん頭のもやもやのとれるまで  
お昼寝孫の済みしばかりの目の坐る  
昼寝して我は当家の山頭火  
昼寝して恐竜の影よぎる夢  
昼寝して手足遠のく心地せり  
昼寝より覚めてどこぞの馬の骨  
書き止めし句のたわい無し昼寝あと  
赤ん坊の欠伸おしやぶりママ昼寝  
団扇畳にほいと投げだし昼寝せり

随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
素抱  
素抱  
暮津

昼寝してカタクチイワシの群るゝ中	暮津	腸の水の山彦昼寝覚	随笑
昼寝より覚めてはてさて妻いづこ	暮津	昼寝覚六牙の白象降り佇ちて	随笑
午は昼寝に徹すと決めてやせつぽち	暮津	昼寝覚やつと合点のゆく風情	寒暑
仕方なし暑さのがれの昼寝せり	暮津	昼寝覚潰れしこゑを立て直す	寒暑
昼寝して何がなんきん唐茄子かぼちや	暮津	昼寝覚てのひらの斯くやはらかし	寒暑
昼寝覚椰子五六本突立てり	ねず	昼寝覚出づる言葉のあぶくめく	寒暑
昼寝覚とろんと庭木ありにけり	ねず	昼寝覚我翩翻とひるがへり	素抱
掌の中に団扇ありけり昼寝覚	もも	浪々の身をいまさらに昼寝覚	石鏡
藻を離る気泡のごとく昼寝覚	ばら	昼寝覚五臓の位置が不確かだ	石鏡
昼寝覚一陣の風つまさきに	ばら	昼寝覚辺り白みてそっけなし	暮津
古ぼけし畳の目あり昼寝覚	ばら	昼寝覚檻褌が起き出す如くなり	暮津
注射針ぬうつと太き昼寝覚	鳩信	雪村の鯉にまたがりぬし夢か	ばら
麻酔覚昼寝覚ではなかりけり	鳩信	畳の目見遣り睡後の漂流感	寒暑
声の主一体誰や昼寝覚	鳩信	<b>熱帯夜</b>	
武具馬具と昼寝覚めたる人の言	随笑	熱帯夜一服つけんと起き出しぬ	寒暑
泡沫のなほ立ち昇る昼寝覚	随笑	熱帯夜はと覚め夢のもうこりごり	石鏡

妻は鯛わたしは平目熱帯夜	暮津	莫迦となる錠や西日の硝子窓	暮津
二夜連続戦争ドラマ熱帯夜	暮津	大西日差すといふより照射せり	暮津
<b>片蔭</b> 片蔭道		大西日蟬 <small>いまは</small> の今際に立ち会へる	暮津
片陰ゆくハローワークの呼び出し日	宿好	呼び出され西日の中へ出でゆけり	暮津
男つぷり上げて戻れり片陰道	随笑	西日中空振り三振シャツアウト	暮津
ガヴァジューストラック島の片陰選り	随笑	<b>朝焼</b>	
国府津駅蓑ふかすに片陰無し	石鏡	東京の朝焼け入院一日目	鳩信
<b>西日</b>		<b>夕焼</b> 夕焼雲	
カナディアン・ロッキーの西日赤シャツに	ばら	長政のこゑぞ全天下焼けて	ねず
西日中バックホームの残像も	燕音	夕焼空アララ讚ふるこゑのぼる	ねず
つらさうな顔して通る西日中	素抱	夕映えを長びかせをりブラシの花	もも
一切を放置してをり西日中	素抱	誇張して夕焼空を彩れる	さざ
大西日覚悟のほどは出来てゐる	素抱	夕焼けに拳句の果ての寅次郎	ばら
先急ぎ西日をさまる当てもなし	素抱	神々の乗り込む船が夕焼けて	ばら
葬りて西日切り裂く中にをり	素抱	海上に夕焼屈み込むやうに	ばら
手庇に西日当れる鶴ヶ城	石鏡	夕焼けて年増女のやうな舟	ばら

クルーズ船バンクーバーの夕焼け追ひ

ばら

石獣のひたすら座せる大暑とも

ねず

夕焼けの終の光の水平線

燕音

大暑の頭巡らすよいやさよいやさのさ

鳩信

斜里町はサーモン色の夕焼けに

燕音

この大暑逃れんための一ねむり

随笑

夕焼けに顔を燃やして発句修羅

随笑

気圧されてぐうの音も出ぬ大暑かな

随笑

福島の桃の夕焼けどき長き

随笑

領いてばかり大暑の電話口

寒暑

大夕焼そこのところは割り切つて

素抱

なまくらな鉄を使ふ大暑かな

素抱

八幡船さながら夕焼け雲南下

石鏡

あらためて大暑と聞きて太吐息

石鏡

口癖の「生きていりゃこそ」夕焼見て

暮津

瘡蓋の黒くかさばる大暑かな

暮津

海夕焼け未だ償い足らぬかに

暮津

指の間残る大暑の菓粒

暮津

### 風死す

法難絵図風死す灘を正面に

ねず

考へて大暑を味方につける策

暮津

風と云ふ風が死にゐる大蓮田

もも

ものさしの目盛薄るゝ大暑かな

暮津

ベンガル虎風死す檻を往き来せり

さざ

牛よりも鈍し大暑の身のこなし

暮津

風死すなか脛毛の薄きところかな

暮津

大象の大暑の牙の薄光り

暮津

風死す中あらぬ方見て採血す

暮津

大暑には頭使はぬコップ拭き

暮津

### 大暑

硝子器の汚れ目につく大暑かな

暮津

膝鳴らし起ちて大暑の水をのむ

暮津

### 夏枯

#### 三伏

三伏の激痛に腰挿まれし

もも

夏枯れの詩囊繕ふ術知らず

寒暑

三伏の肩を叩きて肩の音

ばら

夏枯れの糶場に口細蝶かな

寒暑

三伏の我が身一つを持って余す

鳩信

請雨経某々竜王づくめかな

さざ

#### 極暑

詐欺に遭うやうや猛暑に出合へるは

寒暑

雨乞に瀬の真似事したりけり

素抱

頭のうへ酷暑の通り過ぎるを待つ

寒暑

喜雨零カナリ椰子の刺にかな

ねず

棒のごと瘦躯横たえ暑の極み

暮津

シマガラスヨトウ嘉せる夏の雨

もも

音を上ぐるものこゑ聞く暑の極み

暮津

広重の人馬ふためく夏の雨

さざ

うだる日を背を押すやうに送りけり

暮津

上高地降られに寄つたやうなもの

宿好

#### 旱

引とり手なき古本の旱山

寒暑

札所寺二番で降られ夏の雨

宿好

家居とは無言なる行大旱

暮津

存分に泰山木の雫切る

随笑

床擦れの我が身離れぬ早かな

暮津

夏の雨白黒映画の画面ぶれ

素抱

早星創は乾かすこと大事

暮津



鳥海山の夏場の雨の桁外れ  
走り根を洗ひて夏の雨あがる  
はだける肋に韻く夏の雨

石鏡  
石鏡  
暮津

熊蟬の大捕物となりにけり  
熊蟬が朝から納豆粘り出す  
死してなほ肉付きのよき蟬の肩

素抱  
素抱  
ばら

蟬 にいにい蟬 唾蟬 熊蟬

死す蟬のままドンキホーテ面

ばら

油蟬 蟬捕り 蟬時雨 蟬の穴

青空がずり落ちて蟬転落死

寒暑

朝蟬 夕蟬 夜蟬 落蟬 晚蟬

吾知らぬところで蟬のぼっくり死に

素抱

みんみん蟬

方寸の景見て死ぬる蟬ならむ

素抱

生ぬるき木椅子ににい蟬聴けり

もも

死してなほ蟬の目鼻の剛健に

暮津

にい蟬生ぬるく夜の明けにけり

ばら

時国家湯殿にとほる蟬のこゑ

ばら

まんじりともせざる夜の明けにい蟬

寒暑

こゑも褪せ茶の出がらしのやうな蟬

随笑

たどたどしきにい蟬の節廻し

寒暑

虚空会えの説法蟬のこゑ借りて

随笑

煮え切らぬ鳴き方あればにい蟬

素抱

先客にとまどひながら止まる蟬

寒暑

鳴く番がなき唾蟬とやがて知る

寒暑

高低を選ばず止まる蟬となんぬ

素抱

唾蟬の羽音ばかりが大きくて

寒暑

蟬止まる所に拘る太郎杉

素抱

バタバタと唾蟬あたり昏れしめき

暮津

蟬止まれりや何處でもよいといふ風情

暮津

熊蟬の熊坂長範啼き出すよ

寒暑

蟬声のおつと止まった誰か来た

暮津

蟬飛んでなんだ近くにまた止まる

暮津

蟬を捕る子のためにあり八幡さま

土壇場の蟬の声音こわねと思ひけり

随笑

捕虫網蟬を大地に押さえ付け

素抱

肉声に肉声ぶつけ油蟬

随笑

ご近所での蟬捕上手肉屋の子

暮津

山林に蟬の蛮声おとろえず

素抱

捕虫網ぬうつと蟬の背後より

暮津

お粗末を悪声ながら勤む蟬

暮津

界限の木々に目配り蟬捕る子

暮津

脱藩者めく蟬街道外れて飛ぶ

寒暑

蟬捕りの極意は逃げ来る蟬捕れと

暮津

飛行法伝授させたき蟬のあり

寒暑

いとたやすく手捕らる蟬となり果てしか

暮津

見当をつけずに飛べる正に蟬

素抱

唐突に簾の蟬の鳴き出せり

もも

電線揺れ地震の間飛ぶ蟬見たり

暮津

また鳴きて蟬は古きに泥むごと

さざ

地震に発つ蟬のおろおる飛ぶばかり

暮津

鳴き納む蟬チリチリとチリとヂと

ばら

飛び方を蟬に手ほどきして遣りたし

暮津

じり貧といふ鳴き方をせる蟬も

燕音

飛ぶ蟬のいづれも路頭に迷ふさま

暮津

まだ鳴かぬ蟬のどうしていることやら

随笑

蟬飛ぶは粋な小政の旅姿

暮津

蟬わつと鳴き出す前にしておくこと

随笑

蟬捕りの子を指図して通行人

寒暑

軒へ蟬早速鳴いてみせにけり

寒暑

蟬捕りを中断塾に出かける子

素抱

しどろもどろに鳴く蟬ありて雨の中

素抱

虫籠提げ蟬など捕ってちようだいと

素抱

ここに来て蟬鳴くほんの二三日前

素抱

僕捕りし蟬見て呉れと眸めの云へる

素抱

蟬を捕る極意暫く鳴かせてから

素抱

もう一つ鳴く蟬殖えてまったくもう	素抱	啼く蟬の後先もなく一緒くた	素抱
台風の巻き添え喰って鳴く蟬か	素抱	啼く蟬のただならぬ時過ぎぬたり	素抱
ばらばらに鳴いてけつかる処暑の蟬	素抱	お迎えはまだまだ先よと蟬啼けり	暮津
大木にとりつき鳴ける蟬反り身	暮津	月端 <small>はな</small> の蟬ごゑ何処か衰へし	宿好
蟬捕の蟬を鳴かせて通りけり	暮津	蟬ごゑのあの啼き方は手捕られし	随笑
鳴くしきやない蟬のいちにち了りけり	暮津	思ふともけふを限りの蟬ごゑと	随笑
鼻つまみ鳴き継ぐ蟬の盛夏過ぐ	暮津	蟬ごゑのヒリつく中を投函に	随笑
蟬鳴き出す空襲警報発令と	暮津	蟬ごゑを薄め薄めて夕風吹く	素抱
莫迦鳴きをはばかりもなく軒の蟬	暮津	蟬時雨だまらっしやいと夕立来	鳩信
うだうだと頭でつかち蟬啼けり	鳩信	目が覚めて此処如何な國蟬しぐれ	随笑
定年だあ定年だあと蟬啼くも	宿好	蟬しぐれてふ特大の埧塙抜け	寒暑
忍辱 <small>にんじく</small> の鎧に蟬の啼き通す	随笑	蟬しぐれあたり暮れ来て先細り	寒暑
啼き了へし蟬のころりと仏国土	随笑	もう先が無いぞ無いぞと蟬しぐれ	素抱
蟬啼かぬ分だけ凌ぎ易きけふ	寒暑	<small>黒湯温泉</small> 蟬しぐれブナすらすらと生ふる森	素抱
けふの無事告げ合ふごとく蟬啼くも	寒暑	<small>出流観音満願寺</small> 蟬しぐれ寄進杉苗拾萬本	素抱
就中意味あるやうに蟬の啼く	寒暑	<small>大谷観音</small> 名にし負ふ石の大谷の蟬しぐれ	素抱
頼むからもそつと抑え啼けよ蟬	寒暑	上野山精養軒の蟬しぐれ	素抱

蟬時雨人は勤まることをして	暮津	夕飯の支度そろそろ蟬音減る	随笑
蟬しぐれ漫然と聞き横坐り	暮津	蟬音絶ゆ木が悄然と佇つてをり	寒暑
蟬時雨ときにはうねることのあり	暮津	晩酌や蟬音遠のくばかりなり	寒暑
蟬時雨やぼ用一つ出来にけり	暮津	蟬音沁む洗濯ものを取り込みり	素抱
蟬時雨晩年押しつけられてをり	暮津	野分あと斯く減る蟬音拍子抜け	素抱
つじつまの合ふ句は陳腐蟬しぐれ	暮津	盆近み蟬音そろそろ空いて来し	素抱
蟬しぐれ痴呆の母と禅問答	暮津	上ずつて蟬音何とも幼かり	暮津
赤恥をさらす訳には蟬しぐれ	暮津	水のみにつつ昼蟬音の締めまり無き	暮津
蟬穴の瞑さに辺り暮れて来ぬ	ばら	蟬音いま空中楼閣なせりけり	暮津
蟬の穴程の寂しさなどといふ	燕音	ヒリヒリと蟬音あたりが暮れてくる	暮津
蟬の穴ホーチンミンも斯く潜み	宿好	減る蟬音聞いて山妻厨に立つ	暮津
蟬の穴探し切りなしもう止めた	暮津	昏れて来て蟬音半減又半減	暮津
蟬の穴同士近くて愛しけれ	暮津	夕方の風が出てきて減る蟬音	暮津
蟬の穴ここらに集中する訳は	暮津	朝蟬のじゅげむじゅげむに起き出して	もも
そこらぢゅうとり散らかして蟬音の中	随笑	行く方に朝蟬の杜わつとあり	もも
蟬音断ち靱彦の釈迦説法図	随笑	心経の皮切りに似て朝の蟬	さざ
竜口寺蟬音の念彼観音力	随笑	朝蟬の頭越しなる喧し屋	ばら

自宅にて養生始まる朝の蝉	鳩信	朝蟬に鼓舞され我流体操す	暮津
朝蟬が啼かぬとある日来たりけり	鳩信	朝の蟬聞き流しをり床の中	暮津
朝蟬のいやに啼くとき啼かぬとき	鳩信	晩蟬のこゑ押つ被せ押つ被せ	随笑
鼻声に何か言ひたげ朝の蝉	鳩信	晩蟬の明けても暮れてもこの一手	随笑
昨日より暑くなるぞと朝の蝉	燕音	晩蟬のきのふともなく音を絶てり	素抱
朝の蟬うんざりする日が始まりぬ	随笑	木斛に晩蟬こゑをたてずにある	暮津
朝蟬の誦経の尻切れとんぼかな	随笑	盲蟬ぶつかる音にまどろまず	鳩信
百蟬 <small>せん</small> の息ひそめけり朝の杜	随笑	ごによごによと云ひて夜蟬の紋切型	随笑
処暑処暑と今朝方の蟬さう鳴くも	随笑	劍客シラノさながら夜蟬の呟くは	随笑
朝蟬のしゃんしゃん手拍子足拍子	寒暑	濡縁で聞きぬ夜蟬の腹話術	素抱
朝蟬の寝言まがひのこゑ一つ	素抱	夜の蟬も十七文字も紋切り型	素抱
ぶるぶると鳴かぬ朝蟬木を替えて	暮津	檻樓のごと寝ねて夜蟬の短鳴き	暮津
朝蟬の鳴き出すまでの樹のしじま	暮津	手短に鳴ける夜蟬の空元氣	暮津
もう既にこゑの森なす朝の蝉	暮津	幾つもや月夜を蟬の魂昇天	暮津
朝の蟬潮のごとく退くときあり	暮津	夜蟬啼くは後悔に似て忸怩たり	暮津
朝蟬のいつとはなしに一潮流	暮津	社好き瀬戸明神の油蟬	鳩信
朝蟬の勢ひたてるが元氣の素	暮津	割り込んでここぞと鳴ける油蟬	燕音

まだ鳴かずどうしたことか油蟬	随笑	落蟬は有為の奥山けふ越えて	素抱
大施主のこゑを代弁油蟬	随笑	落蟬の一つは玄関灯真下	素抱
油蟬一列縦隊なせる幹	素抱	落蟬の足蹴にされて一、二転	素抱
滾る暑の底の方より油蟬	暮津	落蟬の翅ヒクヒクとさきほどまで	暮津
飛び下手の頭でつかち油蟬	暮津	落蟬のほとり過ぎゆく勤め人	暮津
着艦に似たり油蟬 <small>あぶら</small> の止まり際	暮津	いと白き落蟬の腹秋立ちぬ	暮津
町中の墓地の空飛ぶ油蟬	暮津	明神のうしろ日当る竹に蟬	ねず
塔婆より塔婆へ飛んで油蟬	暮津	ずんどうの櫓に蟬の取纏る	もも
夕蟬にやうやう見ゆる鳴き疲れ	燕音	わめく蟬塚原問答聴くごとし	もも
夕蟬の一段落や飯にせん	素抱	抽んづる赤松蟬を集めをり	もも
落蟬のころりと参る姿かな	随笑	行きあたりばつたりの蟬吾を掴む	もも
通り雨長らふ蟬に落蟬に	随笑	寝返りを打ちつゝ蟬のかすれごゑ	さざ
落蟬のごとく仰向きぐうたら寝	随笑	おぼつかなくなりし日差しに愚図る蟬	さざ
落蟬にいつもの空があり真青	寒暑	拾ひあげ蟬の茶羽根を広げみる	さざ
落蟬の落ち方むろん頭から	寒暑	みんなの持論力説するごとし	ぱら
落蟬のまた此処にもの思ひかな	素抱	結局は一日蟬を聞く羽目に	鳩信
落蟬をヘッドライトのよぎり消ゆ	素抱	ご当地の赤蝦夷蟬といふを聴く	燕音

堂縁に一つ載せあり蟬骸	宿好	蟬は木に登る六根清浄と	随笑
秩父事件蜂起の鐘を蟬抱き	宿好	喚く蟬二百億劫経て成佛	随笑
わめき散らす蟬あり我に鼓膜あり	随笑	念力をキリキリ蟬の大神通 <small>だいじんずう</small>	随笑
割れ鐘の蟬の独壇場に入る	随笑	蟬は今普賢の行説く大団円	随笑
颱風の合間蛮勇ふるふ蟬	随笑	昏倒の蟬を箒に懸けにけり	随笑
灯を取りにきたぞと網戸の外 <small>の</small> の蟬	随笑	健気にも蟬が櫂に取り付く凶	随笑
<small>蟬の法華経 二十一句</small> 不受不施と日蓮坊を慕ふ蟬	随笑	蟬の瑠璃ちらつと脳裏掠めけり	随笑
<small>良医の喩</small> 顛倒せる蟬の太つちよ一凡夫	随笑	青天の霹靂とはこれ蟬の尿 <small>しと</small>	寒暑
方便の一つに蟬の小便も	随笑	みんみんは途中で止めてしまひけり	寒暑
ご法話に蟬随喜して靈鷲山	随笑	戦艦の一部のごとき蟬の胸	寒暑
けふも又蟬の頭陀行櫂の木に	随笑	蟬の胸部時計の内部に酷似して	寒暑
法師 <small>ほつしほん</small> 品称えて蟬の生まる也	随笑	玻璃の蟬腹部まじまじ見られをり	寒暑
森深く蟬八百の眼 <small>げん</small> 睦きて	随笑	この木さしづめ蟬の井戸端会議の木	寒暑
羽化の蟬地涌 <small>じゆ</small> の菩薩の化身にて	随笑	正調といふべき蟬に耳を藉し	寒暑
身は空に放ちて蟬の糞掃衣 <small>ふんぞうえ</small>	随笑	ご近所を騒がす蟬も一頓挫	寒暑
定年は如何にと蟬の頭陀行者	随笑	引継もいと簡単に楠の蟬	寒暑
成仏を明日に蟬の富楼那 <small>ふるな</small> の弁	随笑	お騒がせしましたと蟬木を離れ	寒暑
遠き蟬さらに遠くを風吹けり	寒暑	夕立にこりやたまらんと馳せる蟬	寒暑
公園の広場を蟬のまつしぐら	寒暑	出し殻のやうな蟬の音絞りをり	寒暑
あらぬこと考えて蟬、音の鈍る	寒暑	孫おうむ返しに「せみさんしんでいる」	寒暑
哲人の風貌しかと蟬の面 <small>おもて</small>	寒暑	蟬の尿ならぬお山の通り雨	素抱
行きずりの松から転倒したる蟬	寒暑	虫籠に蟬の御報謝ありにけり	素抱
<small>三門博</small> リズムよく蟬の唄入り観音経	寒暑	空蟬も蟬も入れられ一つ籠	素抱
<small>レス</small> 術痕 捻子埋 <small>ねす</small> ずむ胸の手ざはり遠き蟬	寒暑	みんみに云ひ負かされてをる <small>ごと</small> し	素抱
いたづらに力んでみせる蟬は野暮	寒暑	かうなれば蟬の殲滅計りたし	素抱
夕栄えも手伝ひ蟬の愁嘆場	寒暑	口はさむ余地なき蟬の天下なり	素抱
意気上がらぬ世嘆き蟬もこんな調子	寒暑	野次馬のやうに馳せゆく蟬見たり	素抱
万歳をして落つ蟬の手をそのまゝ	寒暑	肅と蟬発たする天下一の鐘	素抱
驚き逃ぐ蟬の尿浴び「まあいいか」	寒暑	台風の眼の中にみて蟬憶せず	素抱
また元の木に舞ひ戻る蟬のあり	寒暑	ざら紙に蟬の一句を書留めん	素抱
<small>孫に示す</small> この通り蟬は素手もて掴むもの	寒暑	蟬手づまりそんな感じのする夕べ	素抱
せみとらせてくださいと子の門に立つ	寒暑	武士 <small>もののふ</small> の風貌なるも蟬非力	素抱
榊大樹果たして蟬はここに居る	寒暑	放浪の木を替へ蟬の山頭火	素抱
蟬逃ぐるぶうんと熱き風起たせ	寒暑	木に縋る蟬のまたもやドジを踏む	素抱

蟬の音の納まるを待ち門火焚	素抱	大西日蟬の今際に立ち会へる	暮津
頭を寄す子ら一人が蟬を押さえ付け	素抱	蟬何かに突き当たたる音露けしや	暮津
いま正に蟬の天下といふべかり	素抱	<b>空蟬</b> 蟬殻	
建前の柱に蟬も招ばれけり	素抱	空蟬の貫き通す初一念	鳩信
その羽音てつきり蟬と思ひけり	素抱	ドロの木より空蟬剥がしやりにつけり	燕音
大夕立など何糞の一油蟬	暮津	空蟬の興はや失せて掌に残る	素抱
コンビニに蟬と蟬がら持ち込む子	暮津	空蟬とHOPPE机上に昼開けぬ	素抱
百蟬の中の一蟬たち優る	暮津	空蟬を机上に置いて散歩果つ	素抱
杜の蟬勝手に幕を引きにつけり	暮津	空蟬のやがて忘らる机の上	素抱
早起きを励ます蟬も減りにけり	暮津	空蟬も蟬も入れられ一つ籠	素抱
凡百の蟬に占められ官幣社	暮津	空蟬の爪先少し焦げてをり	素抱
強靱な蟬の肋を仰ぎ見て	暮津	腑分け図のごとく詳しく空蟬描く	素抱
方向がちがふと羽根を返す蟬	暮津	空蟬のかけらも入るらむ長寿薬	素抱
こりやあびつくり郵便受より蟬発てり	暮津	空蟬の鋼の脚のとしなへ	素抱
行き遇ひて蟬も驚く吾も驚く	暮津	空蟬の宝庫と巡る八幡宮	素抱
おし黙りころり転倒せる蟬も	暮津	空蟬の背に刻めるは梵字とも	素抱

空蟬は白雨飛沫を浴びてをり	石鏡	捕虫網破れかぶれに振る始末	素抱
空蟬をおっかなびつくり抓む指	石鏡	捕虫網継ぎ足す棒が見あたらす	素抱
空蟬の一つひつつく常夜燈	暮津	捕虫網産土の森一漁り	素抱
空蟬の風雨に目鼻古びざる	暮津	捕虫網蟬を大地に押さえ付け	素抱
コンビニに蟬と蟬がら持ち込む子	暮津	捕虫網出会ひ頭の蝶逃がす	石鏡
蟬殻のそこで時間が止まりをり	暮津	捕虫網ぬうつと蟬の背後より	暮津
蟬殻を剥がし欄干歩まする	暮津	捕虫網かなぐり捨てて鳩追ふ子	暮津
賽銭箱のぼり詰めたる蟬殻あり	暮津	<b>跣</b> 素足 跣足	
蟬殻を終には壊し始めし子	暮津	山荘の板敷素足よるこべり	さざ
虫籠の中はと見れば蟬の殻	暮津	素足吹く風あり本を読み継げり	ばら
<b>捕虫網</b>		素手素足ずいぶんすつきりした色に	鳩信
捕虫網持つてほつつき歩きけり	鳩信	干潟踏む素足の白くさみしけれ	燕音
垣内にずんと伸びくる捕虫網	寒暑	素足となり踏んづけてみぬオカヒジキ	燕音
草原の端っこ押え捕虫網	素抱	ぶくぶくの素足むんずと赤子立つ	宿好
捕虫網押えたままで大きな声	素抱	ロシア船員跣足であるくタロ芋島	寒暑
捕虫網戻りはママがうち担ぎ	素抱	父の日の素足すうすうしてゐたり	素抱

混合の女岩踏む跣の音  
裸 素裸 赤裸

真裸にて辿り着きたる正念場  
鳩信

手術着に所詮孤りとなる裸  
鳩信

グラビア版カレンダーあり裸婦と薔薇  
宿好

素裸を朝からたのしむ誕生日  
随笑

診察のそばかす裸裏返す  
随笑

朝刊をさてと開きて丸裸  
随笑

老體に近づくと裸にも産毛  
寒暑

素裸に電極五箇所心電図  
寒暑

湯上がりのすつぽんぽんは佳かりけり  
寒暑

宅配の人にあはてる裸かな  
素抱

居間塞ぐ裸寝妻に咎められ  
素抱

タオル一枚はおる裸やバツ悪し  
素抱

混合の飄ひょうと上がれる赤裸  
素抱

玉すだれ裸叩いてゐる男  
素抱

### 夏の海

ヨット馳せグレイプフルーツ色の海  
ばら

オホーツクブルーに夏の海無辺  
燕音

水戸水戸 潤沼那珂湊  
ぎしぎしの枯れざま海は荒れ模様  
随笑

二時間と何んぼの夏の佐渡航路  
寒暑

照りつけて男鹿の瘤鯛揚がる海  
寒暑

だるさうに横たはりゐる夏の海  
暮津

### 夏潮

夏潮の煌めき寄する国府津駅  
石鏡

遊覧船やませの底を這ひ廻り  
随笑

岩牡蠣の岩場の向う遊び舟  
寒暑

### ヨット

ヨット馳せグレイプフルーツ色の海  
ばら

お披露目のごとくヨットの快走す  
寒暑

錠摺あふすりのヨット馳すなり薔薇の窓  
素抱

急雨来る韻き裸にはおるもの  
石鏡

虫刺され酸の如きを裸身に  
暮津

はらと落つ抜け毛のあたる裸かな  
暮津

驚破地震と咄嗟に裸にはおるもの  
暮津

賢愚邪正けんぐじよしやうひんかくきせん 貧福貴賤皆裸  
暮津

裸体の前を押さえて「御免なさい」  
暮津

銭湯の徳を数えて赤裸  
暮津

裸形にて湯浴び孔子も権助も  
暮津

### 日焼

日焼せし腕ものいふホームラン  
燕音

先生に日焼顔見ず診察日  
随笑

ビーチバレーの日焼けピチピチガールかな  
随笑

日焼けして二等船室雑魚寝組  
寒暑

着てみせて旅装のきまる日焼妻  
寒暑

実家にて油売りくる日焼妻  
寒暑

鼻っ柱少し日焼けて水を遣る  
暮津

### 波乗り

ペデュキュアの女ヨットに乗り込めり  
素抱

檳榔樹ヨットスクール開校中  
素抱

大南風途絶えてへなへなヨットの帆  
素抱

ヨット操る男サルビア色のシャツ  
素抱

美学にして幾何学ヨットの帆走は  
暮津

### 波乗り

波のりのこゑスコールのあがる海  
ねず

サーファーの臀部凜々しく南風吹く中  
宿好

サーファーに勝手の違ふ風が吹き  
暮津

### プール

船の旅プールではしやぎ夜はダンス  
随笑

泳ぎ 水泳  
われ泳ぐ下にテーブルサンゴ礁  
ねず

水族館  
ドレッシー・ハナミノカサゴ水掻けり  
ばら

乙なものの大海馬の立ち泳ぎ  
ばら

皮下脂肪揺りてセイウチ泳ぐなり  
ばら

水泳の足の切り傷オキシフル

鳩信

浮袋並べ干しある月の庭

随笑

のうのうと髯のオジサン泳ぎけり

燕音

ポカやってもう追ひつけぬ浮輪かな

寒暑

ひょうきん者ねずみ泳ぎのネズミフグ

燕音

砂金沢八景 乙瀬海岸の城築きし王子潮浴びに

素抱

力泳のその名もウケグチイットウダイ

燕音

浮輪の子くらげの拾いごっこして

素抱

定年の一年前の立泳ぎ

燕音

はしやぐこと尻をふりぷり浮輪の子

素抱

シンクロナイズドスイミング咲かす四肢の花

宿好

海を見て浮輪ふうふう膨らます

素抱

ダイビング黄膚台頭アジア勢

宿好

潮浴びの手の萎びをり焼むすび

素抱

平泳ぎのあとには出鱈目犬っ掻き

寒暑

潮浴びのでぶちゃん波を跨ぎゆく

暮津

ずいぶんと泳いだつもり本人は

寒暑

浮輪の子嬉々と寄る波跨ぎゆく

暮津

女川おながわの優しき波に泳ぎけり

寒暑

浮袋二箇膨らます役はパパ

暮津

大川に溺れて真水のみしこと

暮津

浮輪の子おどおど臍の深さまで

暮津

### 箱眼鏡

ふなばたに箱眼鏡のみ新しや

石鏡

海水着踏みつけて浴ぶシャワーかな

さざ

水みず視見漁木きりよう地新しき箱眼鏡

石鏡

海水着はちきれさうよ如来肌

宿好

### 海水浴 浮輪 浮袋 潮浴しほあび

五能線浜で手を振る浮輪の子

寒暑

胴廻り一寸足りない海水着

寒暑

### 海水着 水着

水着より潮したたらせバーベキュー

素抱

昼月をあふぎ海月の波枕

宿好

大胆な女ひとと水着を見て想ふ

暮津

羅を着こなし上手水海月

随笑

彩どりを抑えし水着長女なる

暮津

水みづを掻く分だけすすむ海月かな

素抱

ゴム引つ張りぱちんとやりぬ海水着

暮津

波に乗り余世は海月の風来坊

素抱

ぴっちりとは水着着込めばいるかの胴

暮津

とりあへず海月のやうに浮いてみな

暮津

### 海月 水母 水海月 行灯海月

ミズクラゲほうと魅入れば又昇る

ばら

浮ついた海月の部類わに吾も入るか

暮津

くらげ文様六文銭に相似たり

燕音

白日傘水母の海を覚ましゆく

ねず

葉山沖わたるアンドククラゲかな

素抱

海を出て水母の一つ昼月に

ばら

その華麗なること水を蹴るくらげ

素抱

麻酔利き水母漂ふごとくなり

鳩信

みずくらげワルツのステップ踏むごとし

素抱

霊場巡り水母のやうな出で立ちに

随笑

大濤に手玉にとられみずくらげ

素抱

海に水母くが陸にあぢさゝる漂へる

素抱

月の夜の海月が考へさうなこと

ばら

花火の傘爛れかつをのえぼしかな

燕音

普段着の海月の単衣よかりけり

鳩信

花火の煙ゆらゆらかつおのゑぼしめく

随笑

漂ふて花火の煙の大海月

鳩信

### 海鞘ほや

風邪の身の海月さながら廁まで

宿好

海鞘食べて午睡六腑の匂ふらむ

ねず

海鞘好きの客と覚えてみて呉れし

ねず

夏牡蠣は鳥海山もたらす雨の味

石鏡

海鞘の酢が利きてびくんと長まつげ

ばら

旅人の喉に納まる夏場の牡蠣

石鏡

旅をして陸中海岸海鞘どころ

随笑

岩牡蠣と云へば象潟合歓咲くころ

暮津

旅のプランじょんがらを聞き海鞘突つつき

寒暑

旅は寄り道夏牡蠣育つ日本海

暮津

海鞘料る妻は手馴れたものである

石鏡

### 船虫

商店街海鞘を横目にうち過ぎぬ

暮津

舟虫のしよぼしよぼ歩き雨に釣る

もも

句を貶し海鞘に談論風発す

暮津

船虫散る活路開けるごとくなり

さざ

### 人手 海星

刺網にかかるがらくた蜘蛛人手

燕音

舟蟲の吾に続けと云ふごとし

ばら

漁減りて海星ばかりが揚がる海

石鏡

舟蟲の這ひ廻る岩減りもせず

ばら

海星に手触るとき心臓どつきんこ

暮津

舟虫や怪傑ゾロを彷彿と

ばら

### 夏牡蠣 岩牡蠣

岩牡蠣の岩場の向う遊び舟

寒暑

舟虫の俗気さらなる俗気呼ぶ

鳩信

プランクトン食うて夏牡蠣太る海

石鏡

舟虫に危害加えることなんぞ

燕音

雨しぶく露店に夏牡蠣注文す

石鏡

舟虫の梁山泊を覗きけり

燕音

鳥海山の溶岩めく夏牡蠣二口に

石鏡

海峡の舟虫にして黒光り

随笑

時化するぞと牢名主めく舟虫が

随笑

夏の大間崎 露昆布干し場の留石に

随笑

突堤に舟虫しやしやり出て祭

素抱

値の張つて然り利尻の厚昆布

素抱

船蟲に持ち場持ち場のあるごとし

石鏡

島土産利尻昆布のピンからキリ

素抱

### 海女

腕っこき海女の揚げたる大あわび

ばら

晩酌に子持ち昆布かこりやいいや

暮津

### 天草取

風一夜天草浮いて生口島

寒暑

浜おもとと踏みしむる砂ほこほこと

もも

天草採序でに引ききし鶏冠のり

素抱

浜木綿はタカラジェンヌの長まつげ

素抱

### 荒布

雁引くや荒布色なる島の子ら

ねず

避暑客のたてこんでくる小海線

さざ

オホーツク渚を滑りをる荒布

燕音

伊豆へ避暑今は山中今は浜

鳩信

### 搗布

島人 シツタカ(貝)のことを搗布つ食いと云えば

もも

避暑便りペイネのポストカードかな

燕音

笹茄の搗布つ喰ひに手が伸びて

もも

風通るテラスにてピザ避暑家族

燕音

シードラゴン搗布林を散策す

ばら

皮剥の小さき鱈振る鎖夏法

随笑

### 昆布刈る 昆布

ナツメロに夫婦してのる鎖夏法

寒暑

ナツメロに夫婦してのる鎖夏法

寒暑



その上は華族かみの避暑地熱海お宮の松

寒暑

古漬に顔を響める土用かな

素抱

### 夏休み

武甲山どんと構えて夏休

宿好

木鋏に木渋かたまる土用かな  
ただ魂消土用の地震のなすままに

暮津

ラジオ体操老人にこそ夏休

寒暑

暑中見舞 夏見舞

夏休テレビひねればドキンちゃん

素抱

ヤップより届き主治医の夏見舞

随笑

帰省 帰省子

素抱

飲み仲間直腸断てりと夏見舞

随笑

帰省せり蠅取りボン吊る家に

ねず

絵葉書に貝のイラスト夏見舞

暮津

帰省便り玄海灘に友釣ると

ねず

退職の挨拶兼ねて夏見舞

暮津

自転車で駅まで運ぶ帰省の荷

ねず

### 河童忌

夏期講習会 夏期講座

素抱

河童忌の横須賀海軍カレー食ぶ

宿好

午からは頭も霞む夏期講座

燕音

河童忌の肋撫づれば風の起つ

素抱

夏期講座先生三角定規もち

暮津

虫干 曝書 書を曝す

宿好

ほれほれと土用雀を翔たせゆく

随笑

背の崩る温知叢書を曝しけり

もも

### 土用

随笑

曝古地図されて龍の取り巻く秋津島

もも

よい匂ひして来ぬ土用の焼にぎり

随笑

虫干しの開山語録と韓櫃と

燕音

曼茶羅圖喰うとは紙魚のふてえ奴

ばら

曝書などせんとて一念発起の日

宿好

同一の紙魚の仕業でありにけり

ばら

照り返し強し鰻の日の舗道

ねず

死者の書は畏多しと紙魚云うも

燕音

上背ある次男と土用鰻食ぶ

さざ

紙魚を詠むこころ世過ぎの足しにせん

随笑

溪流に土用鰻を活かしをり

随笑

宸筆ものかは紙魚の確信犯

随笑

飯の量注文つけて鰻の日

暮津

ルーペもて紙魚の歯なんぞ見てみまし

素抱

鰻喰ふ客を横目に鰻喰ふ

暮津

古書即賣案内元は紙魚之會

石鏡

### 暑氣払ひ

暮津

### 梅干

素抱

暑氣払やるかと妻は探り入れ

暮津

気づかひの梅干茶漬忝なし

素抱

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

荒凡夫土用太郎の波起こす

ばら

### 梅酒

もも

土用波波の裏より手が拳り

鳩信

あれこれと梅酒造りの空壘出す

もも

土用浪一つ大きく勇魚いさないろ

燕音

飲み頃と持ち出してくる梅酒瓶

素抱

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水たつぷり飲みみて眠氣と暑氣払はむ

暮津

水中りの洗禮を受くジョクジャカルタ  
その嘔吐鮮烈にして水中り  
追憶 ジャカルタ  
水中りコーラン聞いて遙かな目

素抱  
素抱  
暮津

夏痩せて妻の指圧の稽古台  
夏痩の肋凹ませハーモニカ  
こほろぎの腿に引け目や夏痩せて

素抱  
暮津  
暮津

夏瘦 夏負け 夏ばて

夏バテの我が身思へば酢豚など  
夏バテなし漫画を糧の青年は  
羊羹が何故か効きさう夏バテに  
指圧教室夏バテの筋掴まれて

寒暑  
寒暑  
素抱  
素抱

夏負けもせず来て蝦のチリソース  
快眠を心がけ夏へこたれず  
ぶりかえす暑に打負けて易きにつく

寒暑  
随笑  
寒暑

夏バテに百合根など佳し煮てお呉れ

暮津

寝冷腹抱へて槽の狼魚 かね おおかみうお

燕音

夏痩せてブラキオサウルス仰ぎけり

ねず

夏風邪

夏痩せてハダカイワシのご面相  
昼餉共にして夏瘦の弟よ

燕音  
燕音

キリストの鼻かむやうに夏の風邪  
夏風邪にうだうだ咳きしてお恥ずかし

ぱら  
暮津

夏痩て花王石鯨また逃す

随笑

夏風邪の眼を茫々の海へ投ぐ

暮津

夏瘦の腕ただ組みて無為無策

寒暑

夏風邪引く面目なしと云ふ他なく

暮津

夏痩せて拝み太郎の湯浴みなり

素抱

抜け気味の夏風邪妻よ無理するな

暮津

夏瘦は風体のみに非らざるよ

素抱

夏風邪に昇れる月のうすばんやり

暮津

日射病

若き日の出張  
日射病倒れし其処はジャカルタで

素抱

花火果て闇抱え込む雄物川  
花火果つその大空のみみず腫れ

燕音  
暮津

線香花火 手花火

手花火の煙くる部屋にシート敷く  
手花火に興じぬしこゑ引つ込みぬ

もも  
ぱら

花火果つ五體叩きて砂払ふ  
ナトリウム色の花火に顔染めて

もも  
ぱら

手花火の音の奇天烈奇天烈と

鳩信

ポカポカと追打かけて昼花火

ぱら

後かたづけやうやく終り手花火す

寒暑

しけた音残して揚がる昼花火

暮津

線香花火じゅじゅじゅじゅと牡丹より

素抱

一工夫ありそな花火揚がりけり

もも

線香花火踊る小松葉大松葉

素抱

パリパリと揚がりズドンと花火了ふ

もも

線香花火終の柳は公家のひげ

素抱

意気込みも新たに花火揚がりけり

さざ

線香花火一本領けてもらひけり

素抱

ストトンとさきがけ花火揚がりけり

ぱら

花火 揚花火 遠花火

音に凝る花火もありてどよもせる  
花火音立て込む家に舂して

さざ  
宿好

不景気を一蹴せんと揚花火  
揚花火どんと武甲山の肩を突き

鳩信  
宿好

どんじりに控えて音も凄花火

寒暑

揚花火連打ドンブスドンブスと

随笑

花火にも音の味付ありにけり

素抱

長たらしき呼び名の花火揚がりけり

石鏡

揚花火探り当てたる空の芯	暮津	昇りつむ花火の青息吐息かな	宿好
揚花火うち抜きし空締めりけり	暮津	花火にも前座・真打ちありにけり	宿好
どぶ板通りねずみ花火が駈け抜けて	ねず	<small>横須賀花火大会</small> 花火尺玉東京湾を凹まする	随笑
花火野郎青嶺の肝を抜き来しと	ねず	シンシナナイキッド連発花火かな	随笑
空昇りつめてよるめく花火玉	もも	花火の煙ゆらゆらかつおのゑぼしめく	随笑
大玉となりて間合をとる花火	もも	どかどんと犬へこまする大花火	随笑
打止めの花火はこれかこの後か	もも	フィナーレのいけいけいけどんどん花火かな	随笑
終の花火らしき高さにあがりけり	もも	<small>横浜国際花火大会</small> 世直しのつもりの花火がドカドンと	寒暑
消ゆ花火開く花火に照らされて	さざ	おとぼけの花火も交じる前半部	寒暑
手の内をあかすが如く花火爆ぜ	さざ	首根っこ打てる花火の大罇	素抱
協賛の某花火あがりけり	ばら	帰るさの横手の花火蔵の間	素抱
あがりたる初手の花火の高さかな	ばら	ぼんぼんとけふの花火の予告あり	素抱
長岡の花火帰りの道真直	ばら	逆さまのぺこちゃん花火失笑買ふ	素抱
川幅のそれと知らるる花火舟	ばら	同床異夢冬の花火を俱に見て	素抱
花火の傘爛れかつをのえぼしかな	燕音	匂ふ海これより花火一萬発	暮津
炭酸のはじけるやうに閉ず花火	燕音	どんぷすと岬辺りの遠花火	暮津
花火見る旅も山下清めく	宿好	愛敬を振りまき上る花火あり	暮津

目と鼻とおまけに口もある花火	暮津	青りんご葉隠れお岩木雲隠れ	寒暑
<b>独立祭</b>		お岩木の日照雨を弾く青りんご	寒暑
コップに挿すすずめのでつぱう独立祭	ねず	お岩木に雲又かかるとか青りんご	寒暑
独立記念日空にボンボン爆ずものあり	寒暑	青りんご薄光りせるおでこかな	寒暑
ノースリーブ横須賀をゆく独立祭	素抱	<b>青胡桃</b>	
洗濯屋蒸気しゅっしゅつと独立祭	素抱	青胡桃この木とことん優しき木	燕音
コカコーラにおくび連発独立祭	素抱	<b>胡麻の花</b>	
<b>閻魔参</b>		湧く雲も胡麻の花いろ奥秩父	宿好
<small>内職洋裁にて戦後を乗り切りし母曰く 黄泉にては閻魔の禪の丈詰めん</small>	鳩信	<b>苧</b> <small>からむし</small>	
<b>青柿</b>		苧麻知らず東海道の一筋も	随笑
青柿の尻辺に廻る雨滴かな	燕音	<b>滑覚</b> <small>すべりひゆ</small>	
青柿の雨滴びしやりと浴びにけり	寒暑	糸屑が絡まってゐるすべりひゆ	素抱
ちっぽけな青柿にしてお恥ずかし	素抱	すべりひゆ繁茂なにぶん古き庭	石鏡
青柿や党首張り上ぐ第一声	暮津	<b>苔茂る</b>	
<b>青林檎</b>		老梅の老梅たる枝苔生す枝	燕音
青りんご青田青風岩木山	寒暑	光苔見ゆかと問へば「それとなく」	燕音

滝不動苔むすなまくら剣かな  
木道よりもうせん苔に目を落とす

素抱  
石鏡

夜顔と夕月闇を同じうす  
夕顔の雨にでれつと五つ程

暮津  
暮津

### 瓢の花

ひょうたんの花等類を好みけり

ばら

萋の花とまどひがちに雨降れる

さざ

### 夕顔 夜顔

坐をすこしずらせば見ゆる夕顔棚

ねず

からす瓜真白き花の怯え咲き

鳩信

家に入る前に夕顔垣間見て

もも

烏瓜の花の縮みて昨日あり

鳩信

夕顔を天蛾すずめがぶると発ちにけり

もも

烏瓜咲く辺の興味津々と

鳩信

夜顔や老人ばかり殖ゆる世に

鳩信

烏瓜不思議や不思議霞み咲き

鳩信

夕顔とおわら流しの宵迎ふ

宿好

烏瓜開花頗る珍にして

鳩信

夕顔に胡弓漂ひ初めにけり

宿好

煙る花曇み込みけり烏瓜

随笑

夕顔の大首役者めく花よ

素抱

烏瓜の花煙幕を張りにけり

寒暑

火星大接近妙なる夕顔に

素抱

一夜経て悄然からすうりの花

素抱

少し手に余る花なり夜顔は

暮津

音曲に合はせて咲くや烏瓜

石鏡

夕顔の妙なる闇を蛾の羽打ち

暮津

烏瓜窺ひ咲ける夜の怪し

石鏡

咲き登る夜顔脇の月を見て

暮津

### 葎

夏葎埃立たせて雨の来る

鳩信

未草目白押しとはこんな様

寒暑

宇津谷の葎叩きの雨上る

燕音

日に熱す一千枚の未草

寒暑

街道はこれから灼けむ露葎

宿好

生かされて生くる御教え未草

暮津

夏葎人を葬ることに馴れ

素抱

未草そこ離れむとして眩暈

暮津

夏葎掃出窓の高さほど

素抱

雨降ればもうめちやめちやに未草

暮津

小用を足しに葎の真ただ中

石鏡

後楽園池に蓋する未草

暮津

### 布袋草

布袋草きゅつとくびれるところかな

燕音

風と云ふ風が死にゐる大蓮田

もも

札所寺大鉢に生ふ布袋草

宿好

蓮の葉のさつと開いて風通す

さざ

布袋草程の明るき世を欲れり

随笑

蓮に雨素通りといふ通り方

さざ

金魚屋の布袋草よく肥えてをり

素抱

莫迦でかきオオオニハスの葉の置き処

さざ

尻腐れ座りづめなる布袋草

素抱

金輪際動かぬ蓮の間の水

ばら

布袋草表紙に掲ぐ一俳誌

暮津

蓮開きジャポニズム展開催中

ばら

布袋草残り金魚は死に絶えし

暮津

蓮咲くとイスパニア語にて言ふならむ

ばら

### 睡蓮

未草

睡蓮の四方の水面びらびらす

鳩信

蓮の葉の瑕つけ合うて風の中  
三溪園  
うつくつと蓮の奥より誰がこゑす

鳩信

蓮葉の大きなやつがはたと昏れ  
 蓮弁のグラデーションを愉しめり  
 蓮田べり亀の子ぶかぶかやつてをり  
 息つけり蓮華数顆のかほる中  
不忍池  
 蓮葉をめぐりにかかる池の風  
 煽られて蓮の棒茎ごつつんこ  
 蓮葉の大きな葉を揺り大きな風  
 娑婆といふ紅蓮を堰きて網戸あり  
 蓮田の彼方竿灯点り初め  
 齢取ったかな蓮根はやや苦手  
 蓮見たくなりて上野の池之端  
 紅蓮上野の山の負け戦  
 こなたよりあなたへ渡る蓮の風  
 青蓮の器量の程も斯くなりて  
 水破る音のみしりと蓮の奥  
 丁寧に生きて蓮のこちら側

茗荷の子 茗荷汁  
 庭石に二つ茗荷の忘れ物  
 順ぐりにお迎えが来てめうが汁  
 草むしりして来て茗荷の出来云へり  
 めうが採る数の目当ては特になく  
 茗荷汁気兼ねなき友いつか減り  
 四つほど採れたるめうが妻に見す  
 茗荷採ここに無ければそこどうか  
 一膳で足る餉茗荷の古漬に  
 新語  
 新語を水に濯げば紅はしる  
 干瓢乾す  
 ふるさとの雲の匂ひのかんぴよう着く  
 キヤベツ 甘藍  
 夏キャベツ盛り沢山に勝烈庵  
 甘藍の苗に寄せやる土ふんだん

トマト 蕃茄 ミニトマト

炎ゆる日のはじめのトマトもぎにけり  
 ピザ・ Pasta 何にでも合ふミニトマト  
 釜利谷のをばさんの売る地のトマト  
 蕃茄に塩振りすぎとこゑありにけり  
 トマトに振る塩目分量一寸過ぎし  
 トマト好き故にピザ好き紅茶好き  
 蕃茄に塩たつぷり昭和生まれなる  
 生り方も見てのとほりのミニトマト  
 手を変へてトマトの料理朝昼晩  
 それなりに数つけにけりミニトマト  
 プチトマト朝夕の膳賑はせり  
 茄子 茄子汁 なすび  
 焼茄子の直火強めぬ盆厨  
 焼茄子にまづまづ食のすすむなり  
 茄子を焼く熱気厨に籠りたる

茄子の他仏は水を糧とせり  
 丸茄子朝露弾く梵天丸  
 水茄子の笹売り朝市たて込めり  
 茄子汁にすこし早めの夕餉とる  
 混濁の一日なりしなすび汁  
 茄子汁の味噌の香残暑の香なりけり  
 茄子汁や妻のきりもり四十年  
 煮冷ましの茄子汁底なし沼めける  
 茶屋の婆勸む民田茄子抓む  
 賀茂なすの素の味秋はもうそこまで  
 夜は明けて茄子炯々と納骨日  
 若牛蒡 新牛蒡  
 朝市の牛蒡せり出す寺門脇  
妻の云へる  
 腸の為よろしき牛蒡召し上がれ  
 新牛蒡どちの雑談牛蒡語で  
 鴨焼

鳴焼のわが家の味は極甘め

素抱

ポンポンと咲いてポンポンダリヤとぞ

暮津

茄子漬

漬茄子と佐渡米に食すすむなり

もも

ひまわりの一哲人にゆき遇へる

暮津

ほんとうに軽く一膳漬茄子

ばら

ひまわりの火の性しやう天より領たれて

暮津

茄子漬時が薬と養生す

随笑

ひまわりの彼方夕栄え未帰還機

暮津

蘇鉄の花 花蘇鉄

花蘇鉄黒船の世は嘸やさぞ

随笑

ひまわりの一つ目小僧月下に聳つ

暮津

仙人掌さぼてん

仙人掌に侏儒の咲かせる黄の小花

さざ

大向日葵竜顔を拝すごと

もも

ユツカ

沖波のときに牙だち花ユツカ

もも

向日葵の茎は棍棒火山灰大地

さざ

ダリヤ ポンポンダリア

風采のあがらぬ花よポンポンダリア

ばら

向日葵の王道青すすきの覇道

随笑

その頃の花ではポンポンダリアかな

ばら

昔日の海向日葵の瞳の中に

随笑

男鹿温泉ポンポンダリアが咲いてをり

寒暑

向日葵の花より茎のヴァイタリテイ

寒暑

ほんぼんだりあ昔は良かった能く遊んだ

素抱

向日葵の謹厳実直背を正し

素抱

向日葵の意気軒昂に接す朝

暮津

実ひまわり典座てんざのごとく佇つ夕べ

長雨がたたり向日葵ひよろひよろ立

暮津

実ひまわり今は落ち着き土の性

暮津

向日葵に劣らぬ笑顔のヘルパーさん

暮津

実ひまわりそっくり返ってしまはぬか

暮津

向日葵の育ち盛りの大きな葉

暮津

憲兵のごとき眼をして実向日葵

暮津

向日葵のぐでんと水を欲しがるとさま

暮津

ひよろりと長け一寸猫背の実ひまわり

暮津

向日葵を一呑みにして険しき雨

暮津

ひまはりを十本植うは晴れがまし

鳩信

向日葵の見通せぬもの無きごとし

暮津

長生き行きずりの御婦人をしさう風蘭見て曰く

素抱

向日葵や真にひとりとおもへるとき

暮津

風蘭を見上ぐる人のうしろに佇つ

素抱

向日葵や還らぬものを猶おもひ

暮津

風蘭はそらそらあそこ木瘤の下

素抱

向日葵の司どる海荒れむとす

暮津

風蘭を見て来し夕べ雲呑食わんたんぶ

素抱

痩せ向日葵勤王志士にさも似たり

暮津

柳蘭

素抱

防諜と殺戮向日葵知っている

暮津

柳蘭

素抱

向日葵の種子皆窮屈さうにして

暮津

高原坊平ゴルフコース敷地のヤナギラン

素抱

実向日葵故人の笑ひかけるごと

暮津

凌霄花のうぜんくわ のうぜん

ねず

その目つき何暗示せる実ひまわり

暮津

のうぜんの方へ顔向け母眠る

ねず

実向日葵ブラックホール引き込みて

暮津

焼香の列遅々としてのうぜん花

ねず



山道の一層冥く宝鐸草

暮津

浦島草

浦島草釣糸垂れてむかう向き

さざ

浦島草蕭白好みの画材にて

鳩信

糠雨に凄味を増しぬ浦島草

寒暑

えぞことう

あまことう 大傘持

エゾニューアマニューみんな似ていてどれがどれ

燕音

アマニューと断ずるこゑも自信なげ

燕音

入日急大傘持の太茎に

燕音

エゾニューのポンポン咲ける岬なり

燕音

棒立ちの大傘持に沖時化て

燕音

アマニューとアマニューの間雪溪見ゆ

宿好

アマニューにピカッとザザッと降るわいな

宿好

岩煙草

岩たばこ宿創業は明治なり

随笑

雨の日の葉影うつすら岩たばこ

寒暑

綿菅

ワタスゲの雨吸ひ過ぎて絮の悄気

石鏡

風露草

ハクサンフウロガレ場の風に煽られて

宿好

極めつけタカネグンナイフウロかな

石鏡

風露草雨すれすれに落ち来たる

暮津

薄雪草

一目見て薄雪草と断じけり

さざ

真上より天つ日ハツポウウスユキノウ

宿好

岩鏡

トレッキングシューズの先の岩鏡

宿好

話声ぴたりと止まり岩鏡

石鏡

駒草

霧濡れの小石を抛り処駒草は

ぱら

駒草を囲ふ鎖の霧霽

素抱

駒草や岩場岩場の岩の彩

暮津

ちんぐるま

溪寄りの脇道閉鎖チングルマ

宿好

チングルマ好みの風が吹いてをり

宿好

雪溪の舌の先なるチングルマ

宿好

梅鉢草

ウメバチソウ我等向き合ひ昼餉とる

宿好

八幡平夏の名残の梅鉢草

寒暑

ざるをがせ

乗鞍の霧を糧としさるをがせ

素抱

独活の花

山出しのししうどの花盛りなり

鳩信

独活の花無駄と思へば全て無駄

燕音

ししうどの花を霧来て閉ざすところ

随笑

ししうどの花のほとりに捨て蒸気

石鏡

灸花

へくそかづら

ぱら

灸花やたらむしやくしやする日なり

ぱら

綿菅

ワタスゲの雨吸ひ過ぎて絮の悄気

石鏡

風露草

ハクサンフウロガレ場の風に煽られて

宿好

極めつけタカネグンナイフウロかな

石鏡

風露草雨すれすれに落ち来たる

暮津

薄雪草

一目見て薄雪草と断じけり

さざ

真上より天つ日ハツポウウスユキノウ

宿好

岩鏡

トレッキングシューズの先の岩鏡

宿好

話声ぴたりと止まり岩鏡

石鏡

駒草

霧濡れの小石を抛り処駒草は

ぱら

駒草を囲ふ鎖の霧霽

素抱

駒草や岩場岩場の岩の彩

暮津



味はふて珍うらの芭蕉すすめればの花の蜜

麻

卸かけ麻のしちめんどくさい肌着

常木ははきぎ 帚草ほうきぐさ

帚草雨に優しさ加はれり

日と雨のたまもの色づく帚草

夏萩

夏萩のすんなり風を受け入れて

夏萩のはらほろひれと葉の靡き

夏萩や地べたを伝ひ風起てり

沙羅の花 夏椿

一つ咲きうしろ向きなる夏つばき

沙羅咲いて且つ散る根本中堂前

百日紅さるすべり 紫薇ひやうしゅう 百日紅

散りそめて白さるすべり水の上

さるすべり咲きつゝ散れる空まさを

燕音

天灼けぬ白さるすべり地に灼けぬ  
此処天界白さるすべり散るところ

漢名おんの音の締りのよくて紫薇

紫薇花下に極楽おもへとや

寺々の中でも出色この紫薇は

豊廊百日紅に突きあたる

出色の百日紅に汗退けり

極楽寺百日紅の夢見時

さほどにはあかくはならぬ百日紅

つきあたり百日紅の極め付け

境内のこれは別格百日紅

百日紅盛りなりいざ極楽寺

札所寺百日紅に汗退けり

百日紅どうれと山門潜りけり

百日紅詩は独断と心得て

採血の血止する間の百日紅

素抱

暮津

鳩信

随笑

暮津

もも

もも

さざ

さざ

さざ

ばら

燕音

宿好

宿好

寒暑

素抱

閻魔庁正門脇の百日紅

百日紅樹皮の剥落続きをり

大幹にしてなかなかの百日紅

百日紅花より幹の至福相

赤裸々に生きていりやこそ百日紅

百日紅愛染明王然として

紅にもう一盛り百日紅

お寺さま咲かする百日紅が見え

海紅豆かいこうづ

綱繕ふ手許けだるく海紅豆

タツクルに走者潰さる海紅豆

手放しに海が招くよ海紅豆

茉莉花まつりくわ ジャスミン

ジャスミンの芬々馬鹿に蒸す日かな

茉莉花に皆鼻持つてゆきにけり

つきあひにも距離といふものジャスミン茶

朝鮮朝顔 ダチュラ

エンゼルトランペット 曼陀羅華

むつとして妻良の明け方ダチュラ咲く

ダチュラ咲き当地至つて温暖な

花ダチュラ押さばばふ鳴るならむ

下田港きだちちようせんあさがお咲く

アトリエを包む潮騒花ダチュラ

ぶらさがり咲きが得手なり花ダチュラ

徒に大きなエンゼルトランペット

曙いろダチュラ大きく開けゴマ

仲違ひダチュラがそっぽ向いてゐる

曼陀羅華咲けば豆州の妻良おもふ

エンゼルトランペット教会の庭に垂れ

月光にダチュラ怪人佇つごとし

花ダチュラだらんとぴちよぴちよ雨の路地

終末の喇叭を吹けり花ダチュラ

ハイビスカス 仏桑花

すぐあがる雨と知りをりハイビスカス

ねず

霧湧かす花別名をゼンテイカ

石鏡

夏落葉

寺男朝な手古摺る夏落葉

さざ

ハイビスカス花の真中の突起物

鳩信

楊梅の朱ヶ夏落葉方円に

素抱

仏桑花葉巻めく花落しけり

暮津

高齡のもう起きて掃く夏落葉

暮津

夕菅

夕菅の霧を素早く技けし色

さざ

病葉

英名は洒落みて夕菅デイ・リリー

暮津

雨あとの磴打ち泰山木病葉

もも

当地ではアサマキスゲと呼ばれもし

暮津

蜘蛛の囀に病葉二、三ちらし掛け

素抱

日光黄菅

日光黄菅霧の向うの霧を見て

さざ

病葉の散るがきっかけ降り出せり

暮津

取継る蝶もニッコウキスゲ色

さざ

夏深し

鐵路伸ぶ限り群落ゼンテイカ

燕音

はりきり草しほたれ草や夏深み

さざ

だまなして霧の走れりゼンテイカ

燕音

秋近し 秋隣

先生が引率ニッコウキスゲの径

随笑

手にとる本手にとらぬ本秋隣

寒暑

お弁当ニッコウキスゲに向き合ひて

石鏡

図書館の中庭に秋待てる樹々

石鏡

賀茂なすの素の味秋はもうそこまで

石鏡

寝酒などもともとやらぬ夜の秋

素抱

もう了る花と秋待ちみたる花

暮津

犯人を妻見破れり夜の秋

石鏡

夜の秋

草稿に手を置くことも夜の秋

ねず

べらべらの着慣れしパジャマ夜の秋

暮津

元素記号子の諳んずる夜の秋

ねず

牢名主めく患者みて部屋晩夏

鳩信

榊酒に口とがらする夜の秋

ねず

余分なことばかり考えみて晩夏

寒暑

トランプのジャック振向く夜の秋

ばら

人はローン蝸牛は殻を負ひ晩夏

素抱

月琴の音締めきりきり夜の秋

ばら

山間を雲ゆく晩夏の孫六湯

素抱

エッセイのとば口に佇つ夜の秋

鳩信

晩夏はや煮詰め過ぎたる豆腐汁

素抱

寝返れば傷口ひくと夜の秋

鳩信

遠くを見るゴリラに園の晩夏かな

素抱

自転車を漕いで灯点す夜の秋

素抱

亭々と晩夏を送るホルトの木

素抱

夜の秋赤鉛筆が見当たらず

素抱

紹興酒晩夏の酔ひのよるべなく

石鏡

風通る所に身を置く夜の秋

素抱

象牙の箸浸しあるなり晩夏の水

暮津

歳時記の表紙藍鉄夜の秋

素抱

ぞりぞりと晩夏の魚の鱗剥ぐ

暮津

佳き風の四通八達夜の秋

素抱

模糊として口の開け閉て晩夏の鯉

暮津

路地をゆく蹠音つぶさに夜の秋

素抱

晩夏をたとへて云へば座礁船  
船体のごとく傾き始む夏

暮津

虫送り撮りにケーブルテレビ局  
村の衆手拭い首に虫送り

宿好

晩夏の地震母は二階の揺れを言ふ  
晩夏なる机にやたらもの積まれ

暮津

原爆忌

暮津

回覧板届けに晩夏の腰痛持

暮津

がぶがぶとピカドンの日の真水のむ  
眼も耳も広島忌も皆風化

暮津

### 虫送り

むずむずと田虫送りの火のすすむ

ばら

夏果 夏惜しむ 夏行く  
夏終る

暮津

松明の高きいっぽん虫送り

ばら

夏送るころにアディオス・パンパ・ミア

さざ

虫送り嶺に張りつく二集落

宿好

樟脳の気落ちして夏逝けるなり

さざ

虫送り竹竿に鉦ぶるさげて

宿好

あさがおに夏も了りの尿の音

随笑

あきあかね先導つとむ虫送り

宿好

八幡平夏の名残の梅鉢草

寒暑

盆がらを追ひやる掛け声山里に

宿好

牢乎として櫂一夏逝かせけり

寒暑

山風に「ようづの虫も送るヨイ」

宿好

夏惜しむ豆腐に絡め豆板醬

素抱

ゆく雲に「はやりの虫も送るヨイ」

宿好

アルミ銭つまみ退けおく夏の果

素抱

盆がらにあらざる秋津里に殖え

宿好

車前草の穂の遅しく夏送る

素抱

秋はひねもす「鼻峯高慢男」読む

燕音

ぼろぼろの夏果ての鳶岩鼻に

暮津

ランチタイムは秋のシシリア風ピザに

宿好

夏果ての隠れ煙草を患者らは

暮津

ピザの秋アイダホスペシャル平らげて

宿好

■八月

暮津

達者なる足腰秋のあめんぼう

随笑

秋 秋色

随笑

湯畑の秋やとてつもなき湯量

随笑

石炭紀の模型蜻蛉に秋が来て

もも

水も入れ替へて金魚の新居の秋

随笑

城垣の上より呼べる秋の鯉

もも

定年は鰯の退屈地でゆく秋

随笑

カルテの横秋の心臓模型かな

さざ

酷評に怯まぬ錦秋球子富士

随笑

カナダイアン・ロッキーの秋見に来たり

ばら

エゾオヤマリンドウ秋を告ぐ峠

寒暑

秋秋と尾鱗を付けて啼く蟬も

鳩信

あちらぎの泰然栃の自若の秋

寒暑

横須賀へ舟賃五十銭の秋

鳩信

おのづから秋となりぬる爪楊枝

素抱

心音も至極尋常明日は秋

鳩信

秋そこに横臥屈葬人骨に

素抱

有袋類おぼさん秋の日向路へ

鳩信

地に降りて人に動じぬ秋の鳶

素抱

店頭の本に目利きの要る秋ぞ

鳩信

無聊とて秋はかまけるもの多し

素抱

日本の秋一見の遠眼鏡

燕音

小心の秋の雀も餌貰ひに

素抱

上野の山人出の秋となりゐたり

燕音

雀あぐ秋の小さな土埃

素抱

荒木宗太郎便乗

燕音

雀あぐ秋の小さな土埃

素抱

妻も亦ボシエツト族なれば

鳩信

無聊とて秋はかまけるもの多し

素抱

日本一の秋一見の遠眼鏡

燕音

小心の秋の雀も餌貰ひに

素抱

上野の山人出の秋となりゐたり

燕音

雀あぐ秋の小さな土埃

素抱

荒木宗太郎便乗

燕音

小心の秋の雀も餌貰ひに

素抱

上野の山人出の秋となりゐたり

燕音

雀あぐ秋の小さな土埃

素抱

乗鞍の秋積より林道より  
上高地 上高地ビクターセンター木々の秋  
 素抱 秋も半ばの東京より来て智恵子のそら  
 素抱 波間に空瓶ぶかり川崎洋死す秋  
 素抱 団体用乗降口ある駅の秋  
 素抱 錦繡の秋パノラマの鳩ノ巣荘  
 素抱 トピアリー秋のイルカのジャンピング  
 素抱 そこそこの句が出来秋のたんぼ道  
 素抱 擦過音身ほとりに殖え秋半ば  
 素抱 秋色のこれより亘る街並木  
 石鏡 立秋の影のごと出て帆の一つ  
 石鏡 秋来る 今朝の秋  
 石鏡 秋立つ 秋に入る  
 石鏡 その殻も薄手に秋のかたつむり  
 石鏡 秋立つと丸々肥えしモモズメ  
 石鏡 杏履きて古刹の秋のあめんぼう  
 石鏡 木斛の葉つばぴかりと秋がくる  
 石鏡 日に爆ぜるものの音して牧の秋  
 石鏡 人間に雲脂といふもの秋立ちて  
 石鏡 標本としての脳天自尊の秋 飯田蛇笏  
 石鏡 忍性の赤鼻に秋立ちにけり  
 石鏡 正視して絶景秋の人體展  
 石鏡 金澤文庫  
 石鏡 筆ささと芋銭のスケッチ秋の生りもの  
 石鏡 立秋と云はれて空の海のいろ  
 石鏡 杉玉に喜多方の秋紛れなし  
 石鏡 ヤブニッケイ大樹自尊の秋立てり  
 石鏡 商秋の白虎堂とは菓子舗なり  
 石鏡 秋来るといふ目を鹿のしたりけり  
 石鏡 秋の遠足車内さながら鶏舎のごと  
 石鏡 それとなく秋は来にけりポタアジュに  
 石鏡 随笑

堰とどろ山に秋くること早き  
 素抱 仏壇より借りくる文月のチャッカマン  
 素抱 目もさやに秋は来にけり牛蒡の葉  
 素抱 初秋 秋の初め  
 石鏡 起きあがり小法師ゆらゆら立てる秋  
 石鏡 トカトンと秋も始めの家造り  
 素抱 立秋の掛け声ばかり臍のゴミ  
 暮津 **ねぶた** ねぶた 倭武多  
 暮津 一歩づゝ秋来る空とおもひけり  
 暮津 立倭武多 扇燈籠 おぎしほ 金魚ねぶた  
 暮津 いと白き落蟬の腹秋立ちぬ  
 暮津 鏡絵  
 暮津 今朝秋の踝汚し戻りけり  
 暮津 ねぶたの件でおたづねしますと電話口  
 暮津 今朝秋のモーニングコーヒーブラックで  
 暮津 眼をばちくりさせて見送る武者倭武多  
 暮津 秋来たり木々の陰翳礼讃す  
 暮津 ヤーヤドー倭武多は鬼火揺き立てて  
 八月 土崎  
 寒暑 八月のフェリー向かふは苦小牧  
 寒暑 扇燈籠の熱気にゆらぐ立見客  
 寒暑 麻婆豆腐食うべ八月乗り切らん  
 寒暑 五所川原 おもしろ  
 寒暑 紅唇の面白女武者ねぶた  
 寒暑 天を衝く北の守護神立倭武多  
 寒暑 八月の負ふてゐるもの何々ぞ  
 寒暑 立倭武多近づけば子をてんぐるま  
 寒暑 物故者一名俳誌八月号末尾  
 寒暑 ねぶた見る津軽民謡酒場にて  
 寒暑 山唄  
 寒暑 文月の投句句数揃えに雨の日當て  
 寒暑 旅人も声を限りのヤーヤドウ

津軽公御紋牡丹の炎のねぶた	寒暑	うつしみの顔へねぶたの灯の透けぬ	寒暑
見送り絵小雪舞はせて雪をんな	寒暑	旅をして夜毎のねぶたねぶたかな	寒暑
鏡絵の関羽だんびら振りかざし	寒暑	立佞武多ゴジラのごとくやってくる	暮津
溜息を誘ふ鏡絵九紋竜	寒暑	<b>竿燈祭</b> 竿燈	
見送り絵常磐御前の被りもの	寒暑	羽後の空深く竿燈黄金咲き	寒暑
鏡絵に武者の素っ首十あまり	寒暑	竿燈の灯の川絶えずゆらぎあて	寒暑
鏡絵のこの透明は何處よりくる	寒暑	点り初む <small>秋田</small> コンビニの灯と竿燈と	寒暑
鏡絵の女美丈夫太刀かざし	寒暑	蓮田の彼方竿燈点り初め	寒暑
鏡絵の大蛇は青く鬼赤く	寒暑	竿燈の油断大敵ふいの風	寒暑
跨り打つ佞武多太鼓の撥の反り	寒暑	竿燈は大きく宙を一泳ぎ	寒暑
子供ねぶたヤーヤドウのこゑ絞る	寒暑	竿の癖よく読み竿燈あやつれる	寒暑
扇燈籠 <small>おぎとろ</small> の紅蓮見送り立ちん棒	寒暑	自衛隊日の丸竿燈ゆうらゆうら	寒暑
ちびっ子の手に手に金魚ねぶた提げ	寒暑	どうだいと云はんばかりの大竿燈	寒暑
雲漢へ飛ばされさうに大太鼓	寒暑	ところてん製造元の竿燈なり	寒暑
白眼の張飛関羽の武者佞武多	寒暑	竿燈の一艘一艘すすむごと	寒暑
婆と孫やんやのピカチュウねぶたかな	寒暑	竿燈の均衡破れ走り出す	寒暑

竿燈のどう傾くかスリリング 寒暑

中元

軒け竿燈目なしと起ち上る 寒暑

盆の挨拶妻がおもむく西林寺

七夕 願の糸 星祭

生身魂いきみたま

七夕の夜風にあたるギブス組	鳩信	どぜういんげんこまめに摘んで生身魂	ねず
包帯に患部包みて星祭	鳩信	へうと水のみに起ちたる生身魂	寒暑
七夕竹搭乗手続カウンターに	燕音	ご先祖に遇ふ面持ちであらせられ	素抱
七夕の水平飛行に入る空路	燕音	ネーム入り傘を貸し呉れ生身魂	暮津
七夕の空を降り来て女満別	燕音	飯支度お手のものなる生身魂	暮津
生まれくる子のごとに尽く願の糸	素抱	生身魂達者なものよ卵焼く	暮津
大方は妻の筆跡願の糸	素抱	捨て湯して今日が始まる生身魂	暮津
		生身魂好き嫌ひなく膳のもの	暮津

天の川 銀河

甲板にて星座教室天の川	随笑	生身魂野菜サラダに目の無くて	暮津
赤ん坊に敷布妙なる天の川	素抱	一寸づゝおかずに手つけ生身魂	暮津
かるめ焼おたまの上の銀河系	素抱	生身魂何出て来てもマヨネーズ	暮津
傾ける銀河系模し懸崖菊	素抱	じっくりと聞く耳持てり生身魂	暮津
蚊の刺せる處膨らむ天の川	暮津	座睡して楽土に遊ぶ生身魂	暮津

生身魂だうした訳からつきよ好き  
生身魂豊を擦りて小用に

暮津

盆花  
盆花摘み川原歩きも朝のうち  
盆花の色よき花の取り合はせ

ばら

芋殻折るひびきに迎へごころかな

もも

庭先の何にしやうか盆の供花

素抱

行き交へる人も芋殻のひとつ

さざ

剪りて来し盆花にまだ日の温み

素抱

芋殻折るひびきを芋殻を折る前に

ばら

生彩無き盆花なれど仕方なし

暮津

はらからは屈んですなり芋殻焚

鳩信

盆花の活けある水のすぐ古ぶ

暮津

芋殻束半分残し霊迎え

寒暑

### 盆波

「ただいま」と芋殻抱へて妻戻る

暮津

盆波のうねり座頭鯨の背のやうに

ばら

### 溝萩

溝萩の綻びかけに目を細め

寒暑

じよんがらのででんと盆波くつがへる

ばら

鼠尾草も売られスーパー花売場

素抱

盆波の生めるあぶくのたゆたへる

随笑

島田家の溝萩常のいる湛え

素抱

土左衛門盆波に乗り材木座

素抱

骨壺は溝萩盛る家を出で

素抱

門火かどび 門火焚く 芋殻火

手つかずの溝萩に風拡がれり

暮津

芋殻焚く

溝萩の謔けさ破り泥鱈捕

暮津

芋殻火また消え入りさうになりけり

もも

おがら火の一ト揺らぎして直なる炎

さざ

芋殻焚く新聞紙は吾が持ち

随笑

芋殻火吹く風のうごきを見てゐたり

寒暑

風の来る方を開けおき芋殻焚

随笑

芋殻火に降り出す雨のすまなささう

素抱

昨年は一寸降られし芋殻焚

随笑

芋殻火を跨ぐ仕種が身について

暮津

芋殻焚き了へたる指の煙くさき

寒暑

芋殻火にめいめいの頭をよぎるもの

暮津

芋殻焚く頃ぞとひねる新聞紙

素抱

芋殻火の果てたる闇に炭の香す

暮津

いつもより早めの夕餉芋殻焚

暮津

三人みたりにて芋殻火囲む今年また

暮津

芋殻焚日暮れひとえに待たれけり

暮津

仕舞ひまできれいに芋殻燃えにけり

ねず

芋殻焚うすくらがり溜まる煙

暮津

燃えのこる芋殻にも炎を廻らしむ

ばら

本日の一大事とは芋殻焚

暮津

燃えさしの無きやう芋殻焚き了えぬ

素抱

弟が立寄り呉れて門火焚

もも

燃え尽きる迄燃す芋殻の切れっ端

暮津

門火焚く時刻そろそろ来てをりぬ

もも

わらわらと芋殻燃えけり石の上

暮津

門火焚く用意かさばるもの多し

寒暑

路地明けて来るなり芋殻の燃えかすに

暮津

蟬の音の納まるを待ち門火焚

素抱

後後のことを芋殻を焚きながら

ばら

飲食の腹足りてさて門火焚

素抱

炎明りに雨粒見ゆる芋殻焚

ばら

迎火 魂迎

芋殻焚きなど大切にしませうや

随笑

迎へ火のたきつけ紙をひねりけり

さざ

迎火焚く横を挨拶して通る  
芋殻束半分残し霊迎え

随笑  
寒暑

紅花隠元咲けば秩父に盆が来る  
天国よりの盆掃省  
霊者らに盆の改札始まり

宿好  
寒暑

迎え火は共に 送り火はひとり

暮津

この奥に津軽家霊屋姥百合咲く

寒暑

盂蘭盆 盆 盆休 盆の入

暮津

箸の水切つて乾かず魂祭

寒暑

魂祭 魂棚

随笑

焼茄子の直火強めぬ盆厨

寒暑

盆過ぎの更に大きくうねる浪

さざ

コンビニに盆供のセット出廻りぬ

素抱

盆過ぎの空の高さを妻云へり

暮津

コンビニのとつつきで売る盆のもの

素抱

八丈太鼓教師の打てる盆休

ねず

盆近み蟬音そろそろ空いて来し

素抱

泥亀も首をすぼめて盆休

鳩信

魂棚の賑やかしとて葉鶏頭

素抱

さうかさうかお盆休か散髪屋

随笑

喰いちぎる盆の蒟蒻お熱し

素抱

吊革の揃つて揺るゝ盆休

寒暑

鳥海山の夕栄ながく送り盆

素抱

ゆふかぜに葉の摩れて鳴る盆の入

さざ

徒浪の盆供曳きては打寄せぬ

石鏡

盆の入電車幾分空いてをり

鳩信

雑草は露を蒐めて魂祭

暮津

盆に入る朝の煮炊きの炎をながめ

暮津

盂蘭盆の仏飯一夜にて乾ぶ

暮津

切株の白打つて雨盆の山

ねず

仏壇のおさがり貰ふ盆雀

暮津

何に付けきゅつとやらねば盆最中

鳩信

盆の家いい塩梅に風が抜け

暮津

雀来て群がる盆の変電所

暮津

岐阜提灯ならではのこのアトモスフィア

盆僧の頭下げ下げ隣家辞す

暮津

仕きたりの花鳥の絵柄岐阜提灯

随笑

### 施餓鬼

莫菴の上に婆を満載川施餓鬼

寒暑

岐阜提灯小野小町は野に倒れ

暮津

墓参 墓洗ふ 墓参

ねず

踊 阿波踊 盆踊 鹿踊

暮津

死ぬは莫迦と告げたる人の墓洗ふ

ねず

踊唄 踊の輪 踊浴衣

暮津

墓参とて葛生に近き片田舎

素抱

阿波踊りそこは素通りぞろぞろ連

ばら

閑伽桶の水鳴る一人の墓参かな

素抱

阿波踊目抜きにかかりハイヤットサ

寒暑

線香の付け火に手を焼く墓参かな

素抱

飛び込んでもう止められぬ阿波踊

寒暑

墓洗ふ向う滴る唐沢山

素抱

水飴のやうに伸す腰阿波踊

寒暑

### 燈籠

名舟衆切籠泣かせて山を降る

ばら

鹿踊鹿八頭の揃い踏み

寒暑

デカメンが割り込み御神乗夏太鼓

ばら

かんながらちぎれんばかり鹿踊

寒暑

すと現れて幽霊面を受け継ぐ子

ばら

腰ざしのゆらゆら奉納鹿踊

寒暑

道中飛脚奉納燈籠そぞろ寒

石鏡

鹿踊伝えて遠野十五ケ村

寒暑

### 岐阜提灯

一寸手を空に合はせて女の踊り

宿好

阿波女踊り手付きが身上よ	寒暑	阿呆連奴踊りにくったくた	寒暑
よう踊れ西馬音内女ごのハギ衣裳	素抱	ヤツチクを郡上生まれの娘っこ	ばら
男踊り日本一の尻ばしより	寒暑	若衆のゲンゲンバラバラ夜つぴいて	ばら
盆踊りここでお仕舞い子供の部	寒暑	足わるき上人さんの庭踊	燕音
近道は墓地の脇道盆踊	素抱	念仏と薄と踊る一遍と	燕音
ここまでは子供の時間盆踊	素抱	踊り手が町に戻りて風の盆	宿好
夕風にすちやらかちやんちやか盆踊り	素抱	風おさまる如く豊年踊果つ	宿好
嬢っこ達めかして西馬音内盆踊り	素抱	墓地越へて二夕夜続きの踊唄	随笑
盆踊り爆笑ものエロ音頭	素抱	踊巧者踊見巧者風の盆	随笑
盆踊りホームステイはお寺にも	素抱	チゴガニの踊を真似て去なんとす	寒暑
盆踊り甚句詞は野趣あふれ	素抱	一人脱け二人脱けして踊の輪	寒暑
盆踊雨の様子見して再開	暮津	雌鹿狂ひ雄鹿闘ひ倒れたり	寒暑
豆腐屋の娘めかして盆踊	暮津	<small>*雌鹿狂ひは一匹の女鹿を男鹿が奪い合う鹿踊の演目</small>	
よしこのに腕まくりしてうづうづ連	ばら	しし踊り十八番の柱懸りかな	寒暑
高張のずうんと高く蜂須賀連	寒暑	一連隊大人に伍して炭坑節	素抱
沿道に汗を振りまき阿呆連	寒暑	踊の輪間合の空けばそこ詰めて	素抱
綺麗どころ前面に立て殿様連	寒暑	墓地越えて風の運べる踊唄	素抱
皆浮かれ戯け地口の踊唄	素抱	見物衆踊る腰つき見てたんせ	素抱
皆踊る笛に鉦っこハギ衣裳	素抱	優に六尺彦三頭巾の踊るかな	素抱
踊る夜を嬢っこ真紅のしごき帯	素抱	篝の前ここぞと亡者踊かな	素抱
彦三頭巾キタカサツサと踊りけり	素抱	豊年踊り地口も嬢腹満作と	素抱
一踊りおじゃれ篝火盛る間を	素抱	踊果つ町筋篝なほ染めて	素抱
嬢っこ等の踊り浴衣を見てたんせ	素抱	帰るさに編笠抱え踊人	素抱
踊り見に二万石橋うち渡り	素抱	踊り見て宿は雑魚寝の公民館	素抱
亡者踊り鼓、鉦打鳴らし	素抱	上踊りサアサ島田の夜のとばり	石鏡
晩涼の橋の向うの寄せ太鼓	素抱	藤娘早抜き自慢の上踊り	石鏡
亡者踊り夜半の篝火掻き立てて	素抱	上踊り雨の五郎に火蛾飛んで	石鏡
撒き砂を踏みしめ亡者踊かな	素抱	上踊り一寸法師におひねり飛ぶ	石鏡
撒き砂に願化踊りの雁形舞	素抱	校庭の鉄棒に寄り踊り見る	暮津
彼の世にも搏ちて願化の鉦鼓	素抱	山妻は根っから陽気踊りもラフ	暮津
西馬音内夜更けて踊り達者が出	素抱	新作の踊りに挑む影法師	暮津
願化踊り篝の薪目減りして	素抱	踊りに飽きかはほりのごと闇馳す子	暮津
夜も更けて彦三頭巾の虚仮踊り	素抱		

終戦記念日 終戦日 敗戦日



八月十五日

あかあかと諸洗ひあげ終戦日

ねず

その本は今も何處かに終戦日

暮津

卓袱台で卵割る音敗戦日

さざ

玉子割れば黄味の生き生き敗戦日

暮津

醤油瓶醤油尽きかけ終戦日

ばら

真水飲み噎ぶ八月十五日

暮津

水団腹終戦日毎日あれから五十年

宿好

ひっちぎる日めぐり八月十五日

暮津

水団の戦後生まれを自認せり

宿好

研ぐ米の釜に張りつく終戦日

暮津

灰皿に灰横たはる終戦日

随笑

流燈

随笑

終戦日深くしゃがんで厠の蚊

寒暑

雨落ちて来ぬ流燈のまへうしろ

ねず

掩体えんたいに蝙蝠巣くふ終戦日

素抱

流燈長瀬のライン下りとなりにつけり

宿好

ピースからホープに替えて終戦日

素抱

急湍にかかる流燈間合詰め

宿好

マッカサー銜えパイプの終戦日

素抱

流燈の二つひつつき流れけり

宿好

終戦日目当てに組まるドキュメンタリー

素抱

流燈の脈打つごとく打過ぎぬ

宿好

病院は軍艦に似て終戦日

素抱

闇より手伸び来て流燈すいと押す

宿好

したたりを許さぬ蛇口終戦日

暮津

流燈はおのが道筋照らしゆく

宿好

連結車輛の数の当てつこ終戦日

暮津

流燈のひかひか川面照らしゆく

宿好

鉄路に釘均らす遊びを終戦日

暮津

瞬けば流燈もまた瞬ける

宿好

うつつらと水明り流燈そこを過ぐ

宿好

ほればれとするあんこ腹鏡里

精霊舟

くろぐろと精霊舟を曳きし跡

ねず

東海の弓取り上手大岩山

宿好

送火

風船かづら祖霊送しも済ませしよ

宿好

あんこ形力士あづくるあんこ腹

宿好

迎え火は共に 送り火はひとり

暮津

かうなれば小細工効かぬ四つ角力

宿好

処暑

処暑処暑と今朝方の蟬さう鳴くも

随笑

秋場所の力相撲となりにつけり

宿好

手妻すさびに処暑のコップを拭き並べ

素抱

突つ張つてはたいていなす技てが効いて

宿好

処暑のそら土器かわらけいろの火星現る

素抱

舞ノ海大きな相撲取りにつけり

宿好

処暑処暑と口火切りたるつくつくし

暮津

横綱の巨きな張り手飛んでくる

宿好

相撲

角力好き患者綿子にくるまれて

ばら

どうにでもなれと当るが勝角力

宿好

一波乱相撲秋場所上位陣

鳩信

尻はたきこ一番の大相撲

宿好

そのかみの力士と云へば名寄岩

宿好

負越しの土俵勤むも後二番

宿好

踏み込んでやうやく初日しよびの出るすまふ

宿好

横綱を取って投げたる晴姿

宿好

投げられて口をへの字の武蔵丸

宿好

踏み込んでやうやく初日しよびの出るすまふ

宿好

林火忌

待ったなしうるさきすまふ取る同志  
持ちまへのがむしやらが出て負相撲

宿好 宿好

林火忌 彼の日のごと権兵衛坂は灼けをりぬ

寒暑

立て込める黒星同志「はっけよい」

宿好

日盛りを煌めき渡る風のあり

寒暑

好調は躰に任せとる相撲

宿好

林火忌を憶へばそれに連なるひと

石鏡

乾坤の当りに懸けぬ土佐ノ海

宿好

林火忌の朝動き出す街の音

石鏡

俳諧に我も自分の相撲とる

宿好

蛸 かなかな 暁蛸 夕かなかな

相撲取草履つっかけ総武線

寒暑

絵解僧こゑをおとしぬ遠蛸

ねず

顔叩き力士勝気を呼び込めり

石鏡

蛸の申し送りに嶺々昏れて

ねず

首捻り宙を睨んで負け力士

石鏡

蛸の畳みかけ鳴く閉園どき

ぱら

インタビュウはあはあぜいぜい勝力士

石鏡

蛸聞き平家統領たう謫居の家

ぱら

相撲見て膝を叩いて晩酌や

石鏡

秩父神社 蛸聞き八意思兼命

宿好

負相撲鬚が全てを物語る

石鏡

蛸をまどろみの中暮れて来し

宿好

あんこ腹あづけて力士がぶり勝

石鏡

蛸や椅子の片脚浮いてをり

随笑

その巨漢待める力士ポカ多し

石鏡

蛸に三十四身変化佛

随笑

角力見てをれば辺りの暮れて来ぬ

石鏡

かなかなのあと艶消しの油蛸

素抱

大相撲地震の画面に切り替り

暮津

梅雨蛸湯治話が長くなり

石鏡

暁蛸教ふるこゑに重なりて

石鏡

忍辱の心の裡を法師蛸

随笑

暁蛸桐箆筒にも沁みにけり

暮津

万太郎の前書きに似てつくつくし

寒暑

暁蛸四声が程に途絶えけり

暮津

つくつくほうしつくつくご飯がもう済んで

寒暑

蛸に鳴きねばられて夕日の樹

暮津

法師蛸薄荷のやうに頭に沁み来

寒暑

靱殻の音の中なる暁蛸

暮津

法師蛸出だしもたもたして居りぬ

寒暑

暁蛸一つ遠くに際立ち来

暮津

鳴くまでの手順を踏みて法師蛸

素抱

夕かなかなやつつけ仕事一頓挫

暮津

歩くなら坂本あたり法師蛸

素抱

法師蛸 つくつくし

つくつくほうし

長啼きのこれにて退散法師蛸

暮津

法師蛸走り込み鳴きたりけり

ぱら

秋の蛸 しうせん 残る蛸

ぱら

つくつくし前口上を端折りけり

ぱら

秋蛸のひりりと榧を離れざる

ぱら

連れ鳴きの末はだらけて法師蛸

鳩信

秋蛸の遠く蔵書を死蔵して

鳩信

急雨にもいけしやあしやあの法師蛸

鳩信

ひっひつと聞こえて遠まぢの秋の蛸

宿好

啼き納め方にも作法法師蛸

随笑

転げ墜つところが墳や秋の蛸

寒暑

往生の手形に写経法師蛸

随笑

なほ翔びて縋るものなき秋の蛸

寒暑

法師蛸多宝如来のこゑ以て

随笑

落とすものあと命だけ秋の蛸

素抱

鳴きさまの朝からなげやり秋の蟬  
朝から翅バタつかせゐて残る蟬  
残る蟬非力非力と鳴けるなり  
飛ぶさまは愚直そのもの残る蟬  
長たらしく鳴いて鎮守に残る蟬

赤蜻蛉

秋茜 あきあかね

空にゐる鶴田浩二の赤とんぼ  
アキアカネ墳の鞍部を乗り越えて  
赤チンを吹いて乾かすアキアカネ  
あきあかね先導つとむ虫送り  
火口湖へ降りゆく昼の秋あかね  
湯治場の錆び木杭に秋あかね  
山頂駅鉄鎖に止まる秋あかね  
秋あかね和賀流の句碑の肩選み  
夕日に透き五効ごこうのすりきれ赤とんぼ  
ともかくも選挙終れり赤とんぼ

赤とんぼ汚るゝ翅に無頓着

残暑

秋暑 秋暑し

阿武隈川ぶくと秋暑の泡生める  
ここのごとろご無沙汰残暑見舞出す  
ことさらにことしの残暑手強こわかり  
ピザ食うて残暑なんぞにへこたれじ

前山に残暑色濃くのこりけり  
糊の効きわるき秋暑の古切手  
秋暑のこと家鴨に言つてもはじまらぬ  
観念し秋暑の路を辿るのみ  
拡声器がなり秋暑の声割れぬ  
舌垂らし秋暑にダアと寝そべる犬

秋旱

返信の筆も鈍れる秋旱

秋めく

秋づく

秋づくと上野の山を歩きけり

めつきり秋らしくなる日をピザ焼いて  
秋めくといふ空の下授かる句  
秋めくといふこゑ空に吸はれけり

秋の初嵐

辞書は机上に開きおくもの秋初嵐  
秋初嵐句帖持たずば頭に記す  
こんな日はひとりがよくし秋初嵐

初嵐

一遍に阿弥衣はりつく初嵐  
けだるさが目に見えて退き初嵐

新涼

新涼の燈台五十万カンデラ  
新涼の柳手といふ指圧法  
新涼やあらかた骨の膝小僧

秋の雷

秋雷

秋雷の一つ転がる山向う

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

暮津

紅芙蓉手荒な風を嬉びて	石鏡	白芙蓉如常住のほとけなり	燕音
芙蓉咲く高さは風の通り道	鳩信	白芙蓉見ながら体調どうと問ふ	燕音
月半までお向いさんの芙蓉咲く	燕音	白芙蓉咲き加はりし庭の景	宿好
芙蓉咲き生・老・病・死持ち回り	随笑	白芙蓉鎮まらぬもの鎮めをり	素抱
お隣の芙蓉が咲いてホツとする	随笑	西施・虞姫芙蓉の三十二相かな	ぱら
芙蓉咲くこともふとしたことのうち	随笑	朝の気をはらめる芙蓉雨外れし	ぱら
見る者をつつみ込むいろ芙蓉咲く	随笑	夕されば芙蓉けじめをつけること	ぱら
芙蓉咲くや一方的なあかるさに	素抱	芙蓉淡々同窓会の日が近む	宿好
眼をこすりつゝ来て芙蓉の咲くほとり	素抱	昼からの芙蓉曇りとなりけり	宿好
芙蓉咲きこつちを向ひて呉れぬ花	石鏡	芙蓉萎え申しそびれしやうな形 <small>なり</small>	随笑
芙蓉咲きけふもぼんやり日を過ごす	石鏡	退院のその後を聞けり芙蓉の辺	随笑
日毎咲く芙蓉と共にある生活 <small>たつき</small>	暮津	世尊に掌合はせるごとく芙蓉閉ず	随笑
そはそはと次の風待つ白芙蓉	もも	単純で明快が佳し花芙蓉	随笑
白芙蓉咲かせに朝がやってくる	さざ	御命講芙蓉に洩れて医院の灯	随笑
朔日の空にぽっかり白芙蓉	さざ	芙蓉の明るさ例ふるもの見つからず	石鏡
白芙蓉閉つと云ふよりポシヤリけり	ぱら	午から晴れ芙蓉の気色とりなおす	石鏡
白芙蓉後事託すと云ひて墜つ	鳩信	芙蓉散り法器のやうなその落花	石鏡

看取りの日々芙蓉は花を幾つもつけ	石鏡	*嘗て 教科書で学べば たたかひは上海に	
アメリカ芙蓉国家斉唱するごとし	暮津	起り居たりけり 鳳仙花紅く散りみたりけり	
芙蓉食ふ虫は小奴でありにけり	暮津	鳳仙花防空頭巾を被る世の	暮津
芙蓉喰う虫はお主か悪漢 <small>わる</small> じゃのう	暮津	千人針知る人絶えてほうせんか	暮津
吹かれては芙蓉の影の舞ひあがる	暮津	この道は湯屋に抜けらるほうせんか	暮津
<b>木<small>むくげ</small> 白木<small>むくげ</small> 底紅</b>		また一つ湯屋が潰れてほうせんか	暮津
白木 <small>むくげ</small> とびきり暑き日とならむ	ぱら	悲しみは追ひかけてくる鳳仙花	暮津
底紅やうち籠るべく家があり	寒暑	鳳仙花ほどに晩年弾けたし	暮津
底紅に胸なでおろす風が出て	寒暑	鳳仙花昔はよいことだらけなる	暮津
白木 <small>むくげ</small> 母に忘らる日が来るか	素抱	<b>白<small>おしろい</small>の花</b> おしろい	
<b>鶉<small>ひよどり</small>花</b>		白粉花の勝手気ままに路地に殖ゆ	さざ
子規 <small>ひよどり</small> ここを下りゆきしか鶉花	素抱	おしろいの種蒐む子のたそがれぬ	さざ
<b>鳳仙花</b>		しゅんとしておしろい朝を迎へけり	さざ
第二子もおなごこと聞けり鳳仙花	素抱	四時廻り白粉 <small>フォーオク ロック</small> 花咲き出せり	ぱら
朝夕の落ち着き来る鳳仙花	暮津	ありふれてゐる定年と白粉花	随笑
上海が出て来て困る鳳仙花	暮津	空模様怪しくなれば白粉花 <small>しよげ</small> 憎気	素抱

白粉花散るは浪費といふ風情  
朝顔 薺

暮津

朝顔のくたと十時廻る日に

石鏡

朝顔に水やる朝の内がよし

石鏡

朝顔のうなだるる葉に水遣れり

さざ

煮立てゐる味噌汁の香が朝顔へ

石鏡

朝顔の小つさうなつて咲きつづけ

さざ

朝顔の残りの花期を尽してや

石鏡

朝顔の色はと見れば在り来たり

ばら

朝顔の掴まる処用意せり

暮津

朝顔の大輪清水湛ふごと

燕音

朝顔にあいにくの雨上がらざり

暮津

朝顔の遅まき咲といふがぼと

宿好

朝顔蔓おいおいそこは物干竿

暮津

風の盆朝顔の葉に灯の洩れて

宿好

鉢朝顔ご丹精とぞ褒められし

暮津

微風湧くなり朝顔の瑠璃の淵

寒暑

朝顔の蔓に誤算のあり漂ふ

暮津

朝顔の花に従ひ葉もくたり

素抱

くたくたよ三時の薺ならずとも

暮津

彩と云ひけふの朝顔奥床し

素抱

落胆のこゑ薺のほとりより

暮津

朝顔の一時に咲き勿体なし

素抱

薺の耳を疑ふ怪事件

暮津

朝顔の明日期す舊五つほど

素抱

日課となる朝顔の世話水の世話

暮津

朝顔のけふ咲き惜しみ一つだけ

素抱

### 弁慶草

朝顔の花能く見んと中躡み

素抱

雨弾き弁慶草の葉にちから

ねず

鉢植えにして朝顔の鼎咲

素抱

弁慶草起こし野分の後始末

鳩信

腕組みしてさてどう詠まん弁慶草  
弁慶草擦り傷つくらぬ子が殖えて

燕音

零れたる西瓜の種は眺好き

寒暑

### 泡立草 秋の麒麟草

泡立草錆つくものは錆つきて

さざ

雷が西瓜に入れし縞模様

素抱

上背のあればやアキノキリン草

燕音

冷蔵庫に西瓜入れあるぞと出掛け

素抱

この辺り倒れながらも泡立草

燕音

口中の西瓜の種を何處へやる

素抱

席巻といふ語まさしく泡立草

暮津

何にでも被せるラップ西瓜にも

素抱

### 西瓜

間引かれてふてくされゐる西瓜玉

もも

莫迦をみる初生り西瓜承知で買ふ

暮津

西瓜置く場所を最初にこしらへて

さざ

西瓜の出来上出来で無しスカでも無し

暮津

西瓜種ほじくる種のうしろにも

さざ

### 南瓜

灯が貧しく見えて西瓜の種わびし

寒暑

元氣出てかぼちやいろなる尿の色

鳩信

一わたり西瓜の種をうち眺め

寒暑

南瓜煮る妻に俳句の出来栄え問ふ

随笑

西瓜の種一つ鎖骨に付いてをり

寒暑

農作業南瓜の玉敷岬晴れて

寒暑

出来不出来は西瓜の胴を叩き聞け

寒暑

粋な昼餉つめたき南瓜のスウプかな

暮津

匏相して濡らせる西瓜臭き胸

寒暑

煮南瓜の皮真青なる盆の入

暮津

豇豆 ささげ

親孝行てふ名の十六ささげ干す

石鏡

化野の犬蓼の辺の欠け佛

宿好

赤のまま賢治作りし弥助橋

寒暑

新豆腐

つきだしに水もしたたる新豆腐

宿好

小流れをなせる余り温泉赤のまま

寒暑

掬ふとき掌におよがせて新豆腐

石鏡

犬蓼見てふらん。ふらんと戻りけり

随笑

地藏盆

地藏盆実の付いてゐる檣束

ばら

蓼の花

この方が面白さうな蓼咲く路

随笑

なむあみだ躰にたむる地藏盆

ばら

ずず玉の天つ日返す地藏盆

ばら

略図又出して確かむ蓼の道

暮津

沢蟹のとことこ宇津谷地藏盆

燕音

藪からし

赤のまんま 犬蓼 赤のまま

犬蓼の稲田になだれ込むところ

もも

やぶからし最初考え違ひして

鳩信

赤のまま此処らで誰か滑りしか

もも

雑草に掴まり立ちのやぶからし

鳩信

昼の虫すがれし赤のままのなか

さざ

藪からし怪しき光り放ちけり

素抱

水張りしコップに空地の赤のまま

ばら

荒廢の片棒担ぐ藪からし

暮津

犬蓼にけふの散歩はここ迄と

宿好

水引の花 水引草

水引の際立つ方へ目を遣りぬ

もも

カンナ

水引に視力測られぬごとし

もも

手に負へぬ赤さのカンナ咲き出して

もも

水引がすいと目に入る高山寺

宿好

老人の我流体操カンナの辺

素抱

養生は一生のこと水引草

石鏡

緋カンナに国府津の海の展けたる

石鏡

煙草の花 花煙草

花煙草十分に葉の大きかり

ばら

かたまつてカンナ八紘一字かな

暮津

反魂草

反魂草残り少なき休みかな

暮津

芭蕉 芭蕉林

翻る芭蕉に雨の五十棒

もも

玉すだれ

玉すだれなかなか夏が逝かぬなり

燕音

青芭蕉煽らるる日の清方展

宿好

家一つ毀たる跡に玉すだれ

寒暑

窓に人ちよんと描きて芭蕉林

素抱

玄関の灯の及びゐる玉すだれ

素抱

田村草

玉すだれ裸叩いてゐる男

素抱

花の名をそこそこ覚え田村草

もも

玉すだれ政権どちらに転ばうと

暮津

田村草風は二手に岐れゆく

燕音

アカンサス

どう見てもこれ育ち過ぎアカンサス

暮津

八月尽

八月も終りに降れる雨に斑

ばら

煮浸しの鮓を返す八月尽  
かさぶたを搔きこはす癖八月尽  
小遣いの前借りなどして八月盡  
手すさびの手のゆく腋毛八月尽

■九月

九月 其色月

風立てる其色月の橋わたり

葉月 雁来月

弔旗垂れ雁来月端紐育

仲秋

仲秋の雲片づけに風が出て

仲秋の或る晴れた日の耳掃除

震災忌 防災日

震災忌云い聞かす婆無うなりて

一切は過去と云うても震災忌

蛇口より水の塊防災日

石鏡

石鏡

暮津

暮津

暮津

ばら

ばら

随笑

随笑

石鏡

暮津

暮津

燕音

寒暑

寒暑

寒暑

花鳥風月なんのかんのとマグマの上

今日を逃がしてどうする我が家の地震対策

棚の本ときに仇なす震災忌

つくねんと水を味はふ震災忌

風の盆

川の音おわら流しの遠ざかる

おわら見て二階に風の通る家

足そろと運びておわら流しかな

おわら流しふらりと出でて町流す

夕顔とおわら流しの宵迎ふ

おわら流し橋で一息入れゆけり

紅引いておわら流しの出を待つ娘

おわら流し折り目正しき手の捌き

佳き風が出て来ておわら流しどき

聞名寺堂縁借りておわら節

揃え脱ぐおわら流しの草履に名

石鏡

暮津

暮津

暮津

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

今町のおわら流しの浴衣柄

おわら流しここで一服私も一服

おわら流しところと川原の石鳴れり

踊り手が町に戻りて風の盆

坂の町足のむくまま風の盆

石垣の上の町並み風の盆

風の盆朝顔の葉に灯の洩れて

太棹の影が法被に風の盆

町衆の趣向の法被風の盆

くらがりに鈴虫を飼ふ風の盆

編笠も月を象どる風の盆

団扇風妻より貰ひ風の盆

風おさまる如く豊年踊果つ

夕顔に胡弓漂ひ初めにけり

素通しに川原の見ゆる盆の家

一寸手を空に合はせて女の踊り

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

黒羽二重法被衣桁に風の盆

八尾びと路地先に据ふ涼み台

一息に唄ひ切らねば風の盆

細き路地大きく使ひ総流し

踊巧者踊見巧者風の盆

台風

あばずれのキティ上陸せしことも

青葉吹き散らしさしもの颱風も

関東縦断台風スピードアップせり

颱風の何処へ抜けやうかと腐心

秋津島颱風窺う頃となり

颱風のたてこんでくるこの時分

颱風の道草食うて近畿道

颱風のアップパークット喰らふ軒

玉突き玉めく台風天気凶に

颱風は颱風として葉囓む

颱風の出口を待てる外房線	随笑	茶の間にも寄せて颱風余波の浪	石鏡
風来坊颱風こつちへ向つて来	随笑	颱風禍まざまざチャンネル切り替えても	石鏡
颱風やうち倒さるゝ樹が凶器	随笑	台風に脚掬はれて百葉箱	石鏡
颱風の腕力のほど身にしてみて	随笑	越後に地震播磨に颱風なんてえこと	石鏡
生木剥ぐ風の鈍刀颱風裡	随笑	颱風の眼窩豁然青菜畑	石鏡
颱風来て玄関にわかには物置場	随笑	台風の雨の底抜け箱根町	暮津
颱風の合間蛮勇ふるふ蟬	随笑	のろまなる台風と聞きやきもきす	暮津
颱風のあとのなんだいこのあつさ	随笑	予報士のまたもやヘクトパスカルと	暮津
少しづゝガタのくる家颱風裡	随笑	台風に先手打ち鉢取り込みぬ	暮津
颱風一過パンパカパーンと晴れわたり	随笑	台風その規模風鈴きりきり舞	暮津
真ん中をへことやられて風倒田	随笑	煙草買ふ間ありて台風中だるみ	暮津
<small>陸羽西線</small>		買置きの煙草とライター台風下	暮津
颱風のいい加減さに振り回され	随笑	台風の眼のなかジメジメしてゐたり	暮津
台風の中にあつて蟬憶せず	素抱	台風直下こんなものかと空見上げ	暮津
台風の巻き添え喰つて鳴く蟬か	素抱	台風来庭木を括る紐いろいろ	暮津
台風を生める地球と金魚玉	素抱	台風の中出て垣根手当せり	暮津
金魚玉如何に台風荒れやうと	素抱	台風下足のベタつく厠板	暮津
台風の素通りてふはなかりけり	素抱		
一灯の他は台風圏の闇	暮津	<b>秋夕焼</b>	
台風のおとの日差しに疲れけり	暮津	ぼつと出の社員に新宿秋夕焼	さざ
ここに来てペース落とせり雨颱風	暮津	<b>秋曇り</b> 秋翳り	
<b>野分</b> 野分晴 野分あと		ほうほうと馬遠の作画秋翳り	宿好
ふれ込みと違ひ野分の雨然程	さざ	断つてばかりの家居秋ぐもり	石鏡
野分あと街は輝く万華鏡	寒暑	<b>秋湿り</b>	
うつくしゅうみえる家々野分晴れ	素抱	揚菓子子の拍子抜けして秋湿り	素抱
電線のつくづくとある野分あと	素抱	<b>夕月夜</b>	
野分あと長々起きてゐたりしよ	素抱	夕月の一刻経つてその高み	素抱
野分あと斯く減る蟬音拍子抜け	素抱	独酌の間を夕月移りつゝ	石鏡
大鯉の真水突き上げ野分中	石鏡	夕月の色のいよいよ栗きんとん	石鏡
うなばらの涯まで野分一掃す	暮津	酒のあと水恋しくて夕月夜	石鏡
万象の斯くあきらかに野分あと	暮津	<b>秋の昼</b>	
野分あとこんなに晴れて目の遣り場	暮津	石像のテーベ市長と遭ふ秋昼	燕音
<b>秋の虹</b>		きゅつと鳴る紅茶の砂糖秋の昼	宿好
解決にまだ道遠し秋の虹	寒暑		



夜や秋の手にとりてみぬ不審紙

もも

○△□圖判じみる夜長

もも

秋夜読む「扱さても狐たつきつね通人つうじん」

燕音

外骨滑稽新聞に引きずり込まれ読む夜長

さざ

等類の右へならへに倦む秋夜

宿好

敵かなはない人の句を誦す夜長なり

ばら

さきに寐し秋夜の妻の後向き

石鏡

夜長宿宴席の名も草千里

鳩信

秋の夜の明るさ違え二夕間の灯

石鏡

夜長咄狐が人を騙す型かた

鳩信

秋の夜を忍んで日劇ストリップ

暮津

人間が単純になる湯に夜長

燕音

夜長 長き夜 夜長人 夜長し

さざ

宿炬燵山の夜長を如何にせん

燕音

長き夜の本を持ち替へ持ち替へて

さざ

しびれてはうめく草津の夜長の湯

随笑

長き夜北九州行のつれづれに湯の効能書

鳩信

連れ立ちて湯畑巡る夜長人

随笑

出し柴田宵曲文集流る本こそよけれ長き夜に

鳩信

節黒の杉板囲ひ夜長の湯

随笑

長き夜を読ませる宵曲妖怪譚

鳩信

地藏湯の道順聞いて夜長人

随笑

長き夜のどうでもよき句は読み飛ばす

宿好

湯花咲く夜長の宿の湯引き樋

随笑

長き夜の寝惚先生文集読む

宿好

水飲んでそれからする事無き夜長

寒暑

長き夜の灯を引き込みて先斗町

宿好

一人酌む酒は蓬萊宿夜長

素抱

長き夜の熱きが薬地藏の湯

随笑

夜長妻予期したとほり生返事

暮津

廊に群る夜長のスリツパ鼠めく

ねず

問い掛けに返事が返って来ぬ夜長

暮津

宙信貴山縁起を飛ぶ倉を目で追ふ夜の長し

もも

燈火親し「臍の下谷」を読み始む

燕音

めいめいの部屋に引きとる夜の長し

ばら

燈火親しめず雲脂より軽き句に

宿好

ここ迄と長夜の本の耳を折る

寒暑

燈火親し袖珍文庫二色刷り

素抱

湯後生掛温泉疲れや長き夜に倦み生あくび

寒暑

夜なべ

寒暑

一人泊つ長夜に飛弾の味噌せんべい

素抱

夜なべの肩凝りみて蟹の甲羅ほど

寒暑

火の始末等して長夜さあ寐よか

石鏡

秋意

素抱

夜を長く感じ始める灯の許に

暮津

ぎらぎらと日差すなかにも秋意かな

素抱

虎造の侠客ものに夜の長し

暮津

ぐい呑みを買ひ足すこともまた秋意

石鏡

秋の燈 秋灯

秋気

秋燈懐旧下勢ひし日には勢ひし書

鳩信

秋気満つ金閣を出て銀閣へ

宿好

眉唾黄表紙 七句もの黄表紙ひろぐ秋燈下

燕音

遊行忌の道一本や相模晴

ねず

秋の灯に湯呑の絵柄廻し見ぬ

寒暑

回遊の鯉の鱗見え一遍忌

ねず

秋の灯に詰め替えてゐる旅鞆

素抱

鮑あわびの上あるく鮑よ一遍忌

ねず

燈火親し

耕衣忌

燈火親し楷の木の本展ぐれば

ばら

永田耕衣逝く

鳩信

燈火親し流石てふ字に目を止めて

ばら

トラトラトラ！耕衣俳句は奇襲もて

鳩信

生姜市

芝神明宮 だらだら祭  
大門は目と鼻のさき生姜市

燕音

秋草の長きは長く摘み揃え  
秋草を摘める長短取り混ぜて

随笑

かはたれの芝に廻りて生姜市

燕音

秋草は茎を活けるがごとくなり

寒暑

花野

花野ゆく女の服の大雑把

さざ

秋草と一つ括りに野辺の草

素抱

花野行足弱組に加はれり

ばら

秋草を厨廁に頒ち活け

素抱

いっぽんの手拭首に花野行

随笑

秋草を食卓に活け愛づ生活

素抱

どうどうといなし花野を巡る馬

随笑

つんつんとへなりと野辺の秋草は

石鏡

花野行さよなら三角また来て四角

随笑

秋草の風に打合ひ古ぶ穂よ

石鏡

秋草

秋草を折りとる音の根元より

もも

秋草のこの名も妻の知るところ

石鏡

一秋草ひよんなはづみで田に入りて

さざ

せいぜい知る秋草の名を独りごち

石鏡

秋草も黄勝ちの野草摘みとりぬ

宿好

秋草を手折るは釣れぬ証拠なり

暮津

秋草を鳥羽絵の兎高掲げ

宿好

芒 花芒 尾花 芒原 薄

等伯の松剛直に秋草図

宿好

穂芒

秋草といひて一草引いて来ぬ

随笑

笛吹川の中州の尾花日和かな

さざ

花すすき夜盗さながら裾野馳せ

鳩信

芒原目がみえてきて女郎花

ばら

花すすき 十方衆生の願ありて

燕音

川床に湯花川原にすすき咲く

随笑

花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ

燕音

湯治小屋嘗て十六芒原

寒暑

花すすき人家といふは寄り添うて

燕音

果し合い活動写真のすすき原

寒暑

川上も又川下も花芒

燕音

近道のつもりが何ですすき原

寒暑

花すすき雲を飛ばして最上川

随笑

眊に紅ほとばしる芒かな

寒暑

花すすき河の流れのやうにかな

随笑

紅すすきほどにあからみ山の湯に

素抱

自炊棟裏のすすきの花盛り

寒暑

紅すすき湯田の町並見えながら

素抱

花すすき仏拝んでゆかれよと

素抱

穂すすきのほの字程度に解けそめて

もも

ひとりでに唄が出てくる花すすき

素抱

半歩ほど入りて穂芒手折りけり

ばら

言うなれば奉書の明るさ花すすき

石鏡

薄は穂に清浄光佛在す寺

燕音

花すすき揺るゝ辺ひねもす釣糸垂れ

暮津

穂芒のまさに段平抜かんとす

燕音

芒とる少年月を迎ふ村

燕音

句碑の横風にばらけし芒の穂

随笑

月祀る芒に添えてゑのころも

宿好

穂芒の末路思はず風吹けり

素抱

月祀るすすき折り来し此通り

寒暑

穂芒に声在りとせば御空より

素抱

蔵店は月見名残りの芒活け

石鏡

売れのこる芒みみづく風邪引くな

ねず

なあなああの仲の芒と望月と

暮津

道なりに下りゆかれよ芒の中

もも





朝露に触るゝ足許湯中り呆け	随笑	露の空何かあつては困るなり	暮津
屑籠は大き程よし露の家	随笑	露の世の木と紙の家震ふ地震	暮津
村営バス朝刊下ろす露の村	寒暑	おほらかに露の凝りしが葡萄とも	暮津
露零す螢袋に道草す	素抱	大石田大河洋洋露満満	暮津
書家にして露の世あとにせられけり	素抱	虫 朝の虫 昼の虫 夜の虫	
萩と露色のつり合ひとれてをり	素抱	虫籠 虫時雨 虫の闇	
鬼やんま棲みつく山に露降りて	素抱	虫の音 虫音	
青花を摘むとき露が手に当り	素抱	昼蘭けて鳴く虫もなき岡城隍	鳩信
羽黒山大鐘露を生みにけり	石鏡	<small>大英博物館 古代エジプト展</small> 太陽神ラーとミイラと昼鳴く虫	燕音
大露に衿搔き合はせ驚きぬ	石鏡	半島はここにてくびれ昼の虫	さざ
触るもの全てに露の夥し	石鏡	昼の虫すがれし赤のままのなか	さざ
露の浜犬にも流行りすたりあり	石鏡	白浪物短けえ娑婆に昼の虫	鳩信
おとつと露のまだ干ぬ草っ原	石鏡	ガレ場にて嘎れしこゑの昼の虫	宿好
朝露にあらあら濡れてしまひけり	石鏡	東尋坊岩間に昼の虫音澄み	宿好
<small>わらわ</small> 雑草は露を蒐めて魂祭	暮津	顔つくる外出の妻に昼の虫	宿好
芋の露面白ければ覆す	暮津	昼の虫電車はなんぼ待てば来る	随笑
子規庵のつましき間取り昼の虫	随笑	虫の夜をピアノ小刻みダリエンソ	素抱
虫の音のほろろばったり雨閉す	ばら	捕れたかと云へば虫籠掲げ見す	宿好
上人の虫音のごときおねんぶつ	燕音	皆百円香奠袋も虫籠も	素抱
虫音のごと木乃伊の音声ガイド洩れ	燕音	虫籠に蜥蜴を入れて兄貴分	素抱
虫の音におっとりとまた性急と	寒暑	虫籠を覗けば何と瑠璃蜥蜴	素抱
暁の虫音交りの雨降れり	素抱	虫籠に蟬の御報謝ありにけり	素抱
鳴く虫も鉦のやうなり西馬音内	素抱	虫籠提げ蟬など捕ってちようだいと	素抱
<small>西馬音内(にしもない)</small>		虫籠の棧に掴まり弱りをる	素抱
聞き分けて違ふ虫の音三つほど	石鏡	虫籠の中はと見れば蟬の殻	暮津
点線の虫音と棒線の虫音	石鏡	虫一つ水平飛行秋日中	さざ
虫の音のじんじんとフルオーケストラ	暮津	とび出して土師器色なる墳の虫	さざ
虫の音を聞きつゝ庭の片づけごと	暮津	繰返す蟲は一病息災と	ばら
虫の夜のあ利尿剂利きにけり	ばら	虫時雨妻の寝顔のつやつやと	鳩信
根詰めて仕事にかかる虫の夜	鳩信	月渡る空朗々と虫今宵	鳩信
山峡の百千の蟲夜を徹し	燕音	芙蓉の葉食むは一体如何な虫	鳩信
夜半の虫煙草ふかしに起きて来ぬ	随笑	かしゃかしゃと番屋近くに鳴く虫も	燕音
虫の夜といふには虫を知らずに来し	随笑	茶畑のその畝々の朝の虫	燕音
虫を聴くゆとり生まれぬ夜風のなか	寒暑		

肝張っていきいき鳴ける朝の虫  
虫のこゑじいんじいんと稲稔る  
悪さする虫に先んじくわりん採

宿好  
宿好  
宿好

すいっちよと云ひて足音しのばせゆく  
蟋蟀 えんま蟋蟀 ちちろ虫  
こほろぎ

鳩信

虫の鳴く左沢線トコトントンと

随笑

ちちろ虫雨の音色と心得て

鳩信

進みゐるくわりんの尻の虫腐れ

随笑

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

鳩信

始めて鳴く蟲と思へず達者なもん

寒暑

こおろぎが畳のうへに上がり込む

随笑

目覚むれば妻も目覚むる曉の虫

寒暑

玄閑にて鳴くこほろぎの居候

随笑

虫すだく坊主地獄の陥没箇所

寒暑

脱衣籠えんまこおろぎ宿しけり

寒暑

温泉に浮かむ羽虫一匹一青葉

寒暑

草叢をこそつかせぬしは蟋蟀

素抱

バンドネオンは虫の息継ぎダリエンソ

素抱

こほろぎの腿に引け目や夏瘦せて

暮津

満腹の腹先すつかり虫の闇

石鏡

髯を振るこほろぎ遺愛の箆笥の辺

暮津

がさつかせ茂みの虫を捕る雀

暮津

鼯馬 かまどごうま いとど

暮津

虫の名のそのいちいち知らざりき

暮津

病み上がり足許いとどに跳ばれけり

鳩信

### 鈴虫

くらがり鈴虫を飼ふ風の盆

宿好

逞しきいとどの腿に及ばざり

暮津

### 馬追 すいっちよ

蝻 ぎす きりぎりす

暮津

擬態語の力を借りてぎす鳴けり

さざ

オオミノガの巢をこじあけてみるつもり

さざ

きりぎりすぴくりと動く水平線

ばら

蓑虫の蓑はおほかた簡單着

随笑

ぎす鳴いて玉川温泉岩盤浴

寒暑

蓑虫の蓑温めぬし日の陰る

随笑

陶工の筋金入りやきりぎりす

素抱

蓑虫の着たきりすずめ押し通す

寒暑

きりぎりす奥羽山系横たはり

素抱

蟪蛄 かまきり いぼむしり

寒暑

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

鳩信

見えてゐるものが全てやいぼむしり

鳩信

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

鳩信

種採のおつとここにはいぼむしり

暮津

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

鳩信

かまきりの巢と云ふを見る着膨れて

もも

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

ねず

朔日の風蟪蛄の貌を吹く

もも

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

ねず

中 古の斧を振りあげ蟪蛄は

さざ

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

ねず

蟪蛄の翅にも山の露降りて

ばら

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

もも

蟪蛄の翅まだ青き十二月

燕音

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

もも

腹立つとみえて蟪蛄斧振り上ぐ

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ

石鏡

蟪蛄は千人斬りの構えなり

宿好

青蠶螂生兵法の斧を振る 宿好 蠶螂に横を向かれてしまひけり  
 藁持つて青蠶螂を指南せる 宿好 蠶螂の三角の貌キューヴイズム  
 紛れ込む蠶螂を外に出し遣りぬ 宿好 夏術後回想痩せて拝み太郎の湯浴みなり  
 蠶螂の斧振りかぶり豪の者 宿好 蠶螂の美学を学びジャコメティ  
 腹見せて蠶螂ひっくり返るとは 宿好 蠶螂の斧見よ一点豪華主義  
 素浪人風の蠶螂振り返る 宿好 額艶やかに蠶螂の妙好人  
 蠶螂の登攀そこに壁があり 宿好 こりやあびつくり菊に跨りゐる蠶螂  
 蠶螂の背筋をびんと張るときあり 宿好 権禰宜めく蠶螂にして畏れ多し  
 棒切れでかまえば蠶螂ご立腹 随笑 蠶螂の逃げるにあらず尻向けぬ  
 蠶螂の一劍客に出会ひたる 随笑 蠶螂を凝視ひるんだ方が負け  
 蠶螂の構えはト伝無手勝流 随笑 放屁虫 三井寺步行虫  
 蠶螂と戦争一つ日の下に 随笑 三井寺步行虫訳も分からず詠んでみぬ  
 蠶螂も戦もキツと身構へて 随笑 敬老の日 敬老日  
 先づ出方窺ふ戦も蠶螂も 随笑 町内の二百と五人の敬老日  
 蠶螂の暢気な父さん歩きかな 随笑 とかんと金槌振ふ敬老日  
 随笑 敬老日ころつと忘れをりにけり  
 随笑 宿好

お年寄駄菓子ほおぼる敬老日 石鏡 月光にダチュラ怪人佇つごとし  
 敬老日番組玄米健康法 石鏡 月明の紙魚と遊びて師の忌くる  
 枯月夜燭入りて堂膨らむよ ねず 月明に母船の如く吾家あり  
 月の夜の海月が考へさうなこと ねず 焼山に月の出かかる母郷かな  
 菜の花に北信五岳月夜かな 燕音 月高みはくれむ浮力のつくごとし  
 北安曇野月夜高吟小田蛙 宿好 シヤガールの月にビュッフエの一枯木  
 月交え白木蓮の夜の宴 随笑 海を出て水母の一つ昼月に  
 河鍋曉斎 暁斎の蜘蛛出づ月の怪しき夜 暮津 月氏国おもへと月に琵琶弾ず  
 幾つもや月夜を蟬の魂昇天 暮津 ダマスカスナイフの月が椰子の横  
 垢抜けてみゆる月夜の路地てふ路地 暮津 一疋のねりぎぬ月の千曲川  
 月下にて山田の案山子隙だらけ 寒暑 麴花こうしいろの昼月冲天に  
 痩せ猫の背中ごとごと月下をゆく 暮津 月渡る空朗々と虫今宵  
 月光のあまねく葱に性根入る もも ぬるま湯に浸りて雨降りお月さん  
 月光に育つくわりんと思へりき 石鏡 水面の月檜の寶藏院覗く  
 醉漢の駅指しあるく月光裡 石鏡 仲麻呂のまなざし凜と月の海  
 宿好 燕音

薩摩琵琶待月軒に徹りけり	燕音	月よりも慎ましきもの対ひの灯	石鏡
芒とる少年月を迎ふ村	燕音	風禍・震災かうむる人に澄める月	石鏡
町内に枯木と月と銭湯と	燕音	月の家ヒゲタ醤油の髭の屋根	暮津
月あるも寒さしぶとき戻り道	宿好	待宵	
編笠も月を象どる風の盆	宿好	待宵の濡れ岩隠り蟹の爪	ねず
昼月をあふぎ海月の波枕	宿好	待宵の湯呑をつつむ両手かな	寒暑
月浴びて夜叉のはくれん突つ立てる	随笑	名月 今日の月 十五夜	
浮袋並べ干しある月の庭	随笑	満月 望月 望の夜	
買物の帰りに見て来し月のこと	随笑	供へらる二十世紀に今日の月	さざ
重くれるくわりんに月のまどかなり	寒暑	今日の月三溪園の松越しに	宿好
月の前はばかり通る雲一つ	寒暑	雨止めば確かめに出て今日の月	随笑
質蔵に月高まりぬ寺前町	素抱	飛石に載りて迎へる今日の月	石鏡
仙厓の拙き月のなぐり描き	素抱	町中の墓地ぼつかりと今日の月	暮津
高山の月を歩ませ練り屋台	素抱	顎髯のいやにちくちく今日の月	暮津
銭湯の煙突月と睦むかな	石鏡	この路地に建て込む家並今日の月	暮津
武州金澤明けて朝月松の上	石鏡	十五夜の空へこぞれる糸瓜加持	ねず

十五夜の花暮町に灯の入りて	もも	観月会琵琶の音締めを襖越し	宿好
三浦三崎		蔵店は月見名残りの芒活け	石鏡
浮かぬ空模様十五夜台無しに	石鏡	月見だんご供えて妻の横坐り	石鏡
地卵の色の満月上りけり	石鏡	月見まんじゅう月が食うたか一つ減る	暮津
白帯びて満月の路地愛しきやし	石鏡	鉛筆をいっぽん置きて月を待つ	暮津
満月はいつもここより家並の間	石鏡	月見まんじゅうもちとして月見の座	暮津
満月にほっとする顔寄せ合へり	暮津	良夜	
満月の下に睦める家と家	暮津	通夜ありて良夜の句会一人欠く	ねず
もうけもの雨後の望月正面に	ばら	家々に良夜迎へる窓のあり	ばら
月並みを恐れず恥じず名月吟	鳩信	庭石を二つ渡りし良夜なる	宿好
天柱山闇夜転じて望の月	燕音	水道の雫切る音良夜なり	寒暑
いちまつ望みはありてけふの月	石鏡	寐落つまで耳を遊ばせぬる良夜	石鏡
望の夜のかさごの煮付け甘かりき	暮津	明日の良夜待ち切れざれば酒無心	石鏡
なあなあ仲の芒と望月と	暮津	良夜の足二本重ねて寝まるなり	暮津
月見 観月 月を待つ 月祭る		二つ飛ぶ夜間飛行の灯も良夜	暮津
吐月峯	燕音	手に通す良夜のパジャマ薄黄なる	暮津
大寺の二間打ち抜き観月会	宿好		
月祀る芒に添えてゑのころも	宿好		





朝湯して湯花は霧の淡さなる 素抱 もも  
 シヤツ通す冷氣朝霧湧き止まず 素抱 もも  
 朝霧の樹間ほのぼの明るめり 素抱 さぎ  
 蜘蛛の囀に朝霧の粒あからさま 素抱 さぎ  
 朝霧に散歩の下駄の緒の緩し 素抱 さぎ  
 霧の中四五歩先ゆく妻の肩 鳩信 ぱら  
 カルデラを一目たりとも霧の中 宿好 ぱら  
 霧の中霧に日当る一所 素抱 げら  
 霧の中バスはもたもた蔵王嶺へ 素抱 鳩信  
蔵王・お釜  
 霧の中ガイドお釜がある筈と 素抱 鳩信  
 足許は草の色して霧の中 暮津 鳩信  
 夕霧にチョイナチョイナの時報かな 随笑 鳩信  
 霧冷えの肩に落ちくる縦雫 燕音 鳩信  
 土産物屋をひやかし霧冷え宿浴衣 素抱 鳩信  
 霧冷えの先客ひとり町営湯 石鏡 燕音  
草津 西ノ河原  
 霧籠めの朝は一際硫黄の香 随笑 燕音  
湯けむりにふすぼりもせぬ月の貌 一茶  
 霧籠めに一茶の句碑のふすぼり貌 随笑 燕音  
 吊鐘人参聞きをり霧の私語 ささめこ 燕音

トラノオのその先霧の粗く飛ぶ 宿好 素抱  
 グライダー大格納庫霧閉ざす 随笑 素抱  
 吾亦紅霧の冥さを帯びつゝあり 随笑 素抱  
 一条の霧を抜ける日の光 随笑 素抱  
 覗き込む下山路霧を背にしたり 随笑 素抱  
 霧を来て鮫肌いろの両腕 随笑 素抱  
 石ころ径霧に眼の利く蜻蛉来て 随笑 素抱  
 ししうどの花を霧来て閉ざすところ 随笑 素抱  
 霧らふ山下り来てホットミルクかな 随笑 素抱  
 霧まみれ婆ちゃん湯の花ひさぎをり 随笑 素抱  
 霧らふ宿ぎうと犇めく草津町 随笑 素抱  
 まんじゅうの湯気の淡さに町霧らふ 随笑 素抱  
殺生河原  
 霧に呼びかく殺生河原の拡声器 随笑 素抱  
 霧に擦るマツチのぼうと硫黄の香 随笑 素抱  
 一本の樺見ゆ他は一切霧 随笑 素抱  
 恨めしや湯釜は霧に覆はれて 随笑 素抱  
 燈台の鉄階を霧濡らし初む 寒暑 石鏡  
 戸隠の霧に娑婆気抜かれけり 素抱 もも  
 釣舟草霧に溺るる女坂 素抱 もも  
 白檜曾の幹を好める霧が出て 素抱 さぎ  
 一団の霧に突き上げらる霧も 素抱 さぎ  
 日光黄菅霧の向うの霧を見て 素抱 さぎ  
 夕菅の霧を素早く技けし色 素抱 さぎ  
 霧濡れの小石を抛り処駒草は 素抱 ぱら  
 霧うすれ弟子屈町営飛行場 ぱら 鳩信  
 草千里一二三と霧湧いて 鳩信 鳩信  
 ゆふいんの霧に目の慣れ梅擬 鳩信 鳩信  
 霧込めののつぺらぼうぞ草千里 鳩信 鳩信  
 嘶きと思はるこゑも霧四辺 鳩信 鳩信  
 だまなして霧の走れりゼンテイカ 燕音 鳩信  
 九階草霧淡くなり淡くなり 燕音 鳩信  
 松虫草霧来る方を知れるなり 燕音 鳩信  
 霧浴びし山の蜻蛉の羽根使ひ 燕音 鳩信  
 霧籠れのお釜の石に御注意を 素抱 素抱  
蔵王温泉  
 湯をうすめうすめ夜霧の共同湯 素抱 素抱  
 霧の夜の湯町の上湯下湯かな 素抱 素抱  
 露天湯の湯口の硫黄霧呼びべり 素抱 素抱  
 戻り湯の湯町坂がち霧にほふ 素抱 素抱  
 夜も更けて霧に灯ながす老舗宿 素抱 素抱  
 濃霧の夜壁越しにこゑ共同湯 素抱 素抱  
 ガタの来し下駄箱霧の共同湯 素抱 素抱  
 庭園灯さ霧の他に訪ふものなし 素抱 素抱  
 霧退くと思へば寄せて白樺に 素抱 素抱  
 みやうみやうと霧の乗鞍スカイライン 素抱 素抱  
 日雀啼き大目岳の霧霽らす 素抱 素抱  
 乗鞍の霧にトウヒのかくれんぼ 素抱 素抱  
 霧好きは一位に如かず摩利支天岳 まりしてん 素抱 素抱  
 霧の香に八百萬神在す羽黒山 石鏡 素抱

霧の坂羽黒詣での息整え  
羽黒権現姥百合に霧ながれけり  
潜水艦霧雨隠りにその艦尾  
霧雨に箱根七湯めそめそと  
霧に頭つ岩相岩場の道ゆけり

うすばかげろふ

翅ひろぐうすばかげろうガレの壺

蜻蛉 あきつ 秋津 やんま

鬼やんま 銀やんま 塩辛蜻蛉  
また顔にあたる狼煙のあきつかな  
もくもくと投げるエースにあきつ殖ゆ  
最上川あきつの止まる破れ竹瓮  
天守閣あきつがこんな所まで  
安達太良山晴れてあきつを湧かす谷  
隠坊の如きとんぼが前から来る  
羽化一番乗りのとんぼと出合ひけり

混合の脱衣場秋津の入り来たる  
混合は熱め折々秋津くる  
混合のずばり入る湯に秋津来る  
足湯大金温泉して簀の子に止まる秋津見る  
男体と名も佳き山に蜻蛉湧く  
石炭紀の模型蜻蛉に秋が来て  
黒塚をよぎる蜻蛉の胴焦げて  
蜻蛉は翅を頼れる楽天家  
祖師堂前蜻蛉のつるむ音すなり  
蜻蛉の面白がりぬ穂先の揺れ  
沼辺より翔ちて蜻蛉の飛行艇  
霧浴びし山の蜻蛉の羽根使ひ  
蜻蛉の訝しげなる眼に遭ひぬ  
蜻蛉の極めて人間臭しんくき季  
ふらふらと頭の上にくる岳蜻蛉  
岳蜻蛉日差しの強さ知ってをり  
石ころ径霧に眼の利く蜻蛉来て

石鏡  
石鏡  
石鏡  
石鏡  
暮津

湧水見てサナエトンボに出会う径  
とんぼ飛ぶ泥亀町でいきちょうとはこの辺り  
泥亀町吾が前をゆく鬼やんま  
張り切つてやんまがやんま追ひゆけり  
時国家ぐんと高むや鬼やんま  
鬼やんま青の洞門抜け来たる  
鬼やんま飛行高度を上げにけり  
鬼やんま追い駆く目線振り切られ  
眼中に吾無きごとくやんま過ぐ  
鬼やんま棲みつく山に露降りて  
蓮田に潜む少年ぎんやんま  
水飲むをルリボシヤンマとしておかう  
塩辛蜻蛉しほからの汚れし翅を笑むごとく  
ぎしぎししほからの錆びを塩辛蜻蛉賞ひ受け  
野趣蒸ノ湯溢る出湯は塩辛蜻蛉いる  
盆がらにあらざる秋津里に殖え

宿好

随笑  
暮津  
さざ  
さざ  
ぱら  
鳩信  
随笑  
寒暑

ばら  
ばら  
燕音  
随笑  
石鏡  
石鏡  
燕音  
随笑

随笑  
もも  
もも  
随笑  
寒暑  
宿好

素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
ねず  
もも  
さざ  
さざ  
ばら  
鳩信  
鳩信  
燕音  
燕音  
燕音  
宿好  
宿好  
随笑

蜻蛉も一差し舞へる能舞台  
指立てて蜻蛉止まらず子の真顔  
今市のそらゆく蜻蛉権現晴れ  
上昇の蜻蛉頭を振りぐんと振り  
蜻蛉の流さるゝ方鶏頂山  
露天湯八丁の湯の上をくる蜻蛉にでつくわす  
葭叢の中に蜻蛉の通り道  
この沼を往き来蜻蛉の二匹は居る  
蜻蛉捕パパお手本の忍び足  
蜻蛉がお手本人力飛行なる  
蜻蛉の好みて止まるダンボール  
孫六湯山の蜻蛉は岩場好き  
木道に人に蜻蛉の寄り易し  
序幕から蜻蛉が飛んで村芝居  
そこ動かぬ蜻蛉にたうたう根負けして  
蜻蛉の咄嗟に我を交はしゆく  
蜻蛉に無き石段が吾にあり

寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
寒暑  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
石鏡  
石鏡  
石鏡

蜻蛉飛ぶ定期航路のある如く

暮津

蜩蝶

蜻蛉つるむ音のかさこそかさと同つ

暮津

しじみ蝶一つは寂し二つある

寒暑

蜻蛉を捕ふにへんな手つきかな

暮津

地に沿ひて石ころ色のしじみ蝶

寒暑

秋の蝶

秋蝶

秋蝶のあれあれとほる仁王門

宿好

視野に入り視野を出でゆくしじみ蝶

寒暑

秋蝶沿ふ仁和寺の塀長く長く

宿好

しじみ蝶止まるまで見て草っぱら

寒暑

段のぼる気多若宮の秋の蝶

素抱

会葬の人に躓きゆくしじみ蝶

素抱

ぶらさがり止まりが好きで秋の蝶

石鏡

前後しててんでこ舞のしじみ蝶

素抱

気をもませながら秋蝶まだ止まらず

暮津

しじみ蝶捕らむとすれば擦り抜けて

素抱

セセリ蝶ねずみの如き貌をして

暮津

しじみ蝶躍り越ゆものある限り

石鏡

せせり来て吾がズボンまでせせる蝶

暮津

しじみ蝶日向の端から端へ飛び

石鏡

木の葉蝶

山道の腐れ木株に木の葉蝶

素抱

しじみ蝶股間を抜けてゆきにけり

石鏡

秋の蠅

火山弾上にぬくもる秋の蠅

随笑

蜩蝶はたはた舞へば書き割りめく

暮津

秋の蠅集る牧牛見せ呉れし

石鏡

蜩蝶せせる一日始まりぬ

暮津

蜩蝶せせり疲れの無きものか

暮津

迷へども持って出かけぬ秋扇

鳩信

秋の蚊

あぶれ蚊

ぺしやんことなりし秋の蚊塵と捨つ

寒暑

扇面のをんな艶たる秋扇

暮津

秋の蚊を打ちて血しぶき浴ぶ膚

石鏡

秋扇いっぽん持ちて通院す

暮津

足揃え搏たれし秋の蚊なりけり

石鏡

仁和寺の御室で降りぬ秋袷

宿好

暖房を焚けばあぶれ蚊のこのこと

石鏡

お供物に両手塞がる秋彼岸

暮津

力んでは秋の蚊をまた打ちもらす

暮津

線香を身寄りの墓にも秋彼岸

暮津

秋の蚊の抛ん所なく隅にをる

暮津

認知症とはけつたいな秋彼岸

暮津

刺すことの今旺盛な秋蚊とも

暮津

言替えても痴呆は痴呆秋彼岸

暮津

秋の蚊を振り切りしかと辺りみる

暮津

判りにくき墓地の地図見て秋彼岸

暮津

秋簾

見当のつくこゑ過ぎぬ秋簾

素抱

おくんち

暮津

秋簾五枚連ねて真宗寺

素抱

長崎くんちくんちと鉦囃す

燕音

外に起こることは外のこと秋簾

暮津

シーボルト挿し絵に遺す鯨曳

燕音

秋扇

書きあぐねをれば秋扇手にとりて

ばら

小鯨の前曳祭の子がわーい

燕音

繰り出すは屋台鯨の親爺舟  
本石灰町 御朱印船  
祭足袋ばたばた御朱印船を曳く

燕音

藤沢山野ぶだうに色のり初めぬ  
足わろき上人さんの庭踊

燕音

印度人の傘持御朱印船上に

燕音

花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ

燕音

荒木宗太郎便乗  
日本の秋一見の遠眼鏡

燕音

念仏と薄と踊る一遍と

燕音

阿蘭陀万才手書きの髭も爽やかに

燕音

上人の虫音のごときおねんぶつ

燕音

あつぱれの阿蘭陀万才秋天下

燕音

### 面掛行列

長谷 御霊神社の面掛行列  
江ノ電をよぎり出発面掛衆

燕音

薄念仏会  
清浄光寺(遊行寺) 薄念仏会  
遊行寺のすすき光沢持ち始む

燕音

面掛行列ひようと「天狗」の先祇い

燕音

薄は穂に清浄光佛在す寺

燕音

\*面掛行列は仮面風流を今に伝える文化遺産。  
鎌倉権五郎景政の命日に当たる例大祭は神輿渡御

薄念仏唱ふや鏡縁澄むほとり

燕音

\*鏡縁は時宗固有の内陣の板の間で極楽の池を象徴的に表す

お上人手ずから賦算念仏会

燕音

神輿渡御を待つ間「鼻長」一服す

燕音

\*賦算はお礼くばりのこと「南無阿弥陀仏決定六十万入」

艶ありて甕の薄も念仏も

燕音

「翁」「火吹男」「福祿」「阿亀」「女」なり  
外国人見物す

白芙蓉如如常住のほとけなり

燕音

「鼻長」をわし鼻が見る面掛祭

燕音

花すすき十方衆生の願ありて

燕音

面掛の「天狗」の高下駄のっしのし

燕音

「女」が孕み「阿亀」に団扇風

燕音

竜淵に潜む面持ちして診られ

鎌倉に裏面史ありぬはらみつと

燕音

竜淵に潜みとろんと紹興酒

宿好

\*はらみつとは面掛衆のうち、おかめは妊婦の風態に

燕音

龍淵に潜む好機を逸しけり

宿好

仮装し、大きな腹を抱えながら歩行する。それゆえ、

寒暑

竜淵に潜む秘湯に四肢伸ばし

寒暑

この行列を「はらみつ」と称したこともある。

素抱

肩のツボクセイ  
竜淵に潜む肩井指圧して

素抱

田楽によく出るはらみ女の流系と見たのであるが、里伝

石鏡

竜淵に潜む槽より豆腐揚ぐ

石鏡

によると、源頼朝が甘縄の非人の娘を懐胎させたので、

石鏡

竜淵に潜む槽より豆腐揚ぐ

石鏡

年に一度、彼らに無礼講の機会を与えた、その名残

素抱

### 美術の秋 一科展

素抱

といい、近年まで「非人面行列」とも呼んでいた

石鏡

上野周辺  
ざぼらな吾東京に出て二科を観る

石鏡

先祇い「天狗」ぐらつくこと幾たび

随笑

美術の秋上野にぼんと降り立ちて

随笑

をさな子の鎌倉囃子に乗り「翁」

もも

蛇穴に入る 秋の蛇

もも

面掛けの一戸一役里祭

随笑

そそくさと蛇穴に入る海蔵寺

もも

### 秋分の日

随笑

秋蛇に遭ひし女の気色ばむ

随笑

金澤八景駅 懐古  
秋分の木造駅舎の日章旗

鳩信

### 穴まどひ

鳩信

### 竜淵に潜む

鳩信

こんなのと母が手揚げ穴惑ひ

鳩信

レントゲン写真  
龍淵に潜む透視図医師と見て

もも

穴惑大日如来につこりす

鳩信

楓かえでの穴惑めく走り根よ

宿好

曼珠沙華 彼岸花 死人花しびと

穴まどひ間が悪さうに消えゆけり

素抱

まんじゅさげ

穴惑前にしどぎまぎしてゐる妻

石鏡

野に出でてよりの水勢まんじゅさげ

ねず

雁 かりがね

石鏡

まんじゅさげ蹴散らかしゆく小鬼あり

さざ

顎引いて太棹雁のわたる空

燕音

まんじゅさげその朱ヶ飛んで宇佐八幡

鳩信

連れ立ちて屏風の裾より雁どち

寒暑

しがらみの地縁人縁まんじゅさげ

宿好

仙入

寒暑

蝶せせる薬わなわなとまんじゅさげ

宿好

森若葉してセンニユウの高調子

燕音

まんじゅさげ生白の茎によきによきと

宿好

雁渡し

石鏡

まんじゅさげ此処を黄泉路と違へ咲く

随笑

人足に定年ありて雁渡し

石鏡

金澤山きんたくさん弥勒院跡まんじゅさげ

随笑

草の上は空に直結雁わたし

暮津

散らばつて散らばつて日とまんじゅさげ

寒暑

燕帰る

秋燕

薬わたる一匹の蟻まんじゅさげ

寒暑

秋燕を見たりのこゑに振り返る

燕音

当山は真言律宗まんじゅさげ

寒暑

秋燕濁りやまざる最上川

随笑

まんじゅさげ菟まり咲けば墳めきぬ

寒暑

ホテルニューグランド前飛ぶ秋つばめ

寒暑

月光に色を奪られてまんじゅさげ

素抱

秋燕の翼返すや伊豆相模

石鏡

石火矢のここに炸裂まんじゅさげ

石鏡

まんじゅさげ薙ぎて悪餓鬼健在ぞ

石鏡

曼珠沙華疾うに御首級あげられて

暮津

いづれ行く彼の世の下見まんじゅさげ

暮津

死人花薬は変じてむらさきに

素抱

悪たれは何處にでも居るまんじゅさげ

暮津

鶏頭 鶏頭花けいとうか

彼岸花彼岸の色を薄めけり

ばら

曲糸に鶏頭明り忌を修す

もも

彼岸花一本咲きぬ宿外れ

燕音

はつはつと山車倉の上に鴉鳴ける

もも

彼岸花ツンツカツンと咲きにけり

寒暑

内祝鶏頭の茎色づきて

もも

彼岸花咲きぬし場所を事細か妻

暮津

鶏頭の数にこだはるすさびごと

さざ

曼珠沙華念ねんび彼観音力以て

ばら

惘然むげんたる鶏頭に似て史の歌

鳩信

長雨に火力衰ふ曼珠沙華

ばら

鶏頭の今年の種を見せに来る

鳩信

日豊線爪先立ちに曼珠沙華

鳩信

鶏頭の頭の塵払ふ雨来たり

燕音

曼珠沙華突撃バンザイ花にして

鳩信

鶏頭の小火出す火の見櫓下

燕音

墓域より人家へ飛んで曼珠沙華

石鏡

鶏頭の駈けだしさうな若冲忌

随笑

描線のみな生きてゐる曼珠沙華

暮津

火の見の下槍鶏頭の小火ありぬ

随笑

曼珠沙華先づは一輪挿にして

暮津

鶏頭の頭かしら化け物めく遠野

寒暑

藪裾に燃え尽きをりぬ曼珠沙華

暮津

鶏頭花空気違へば彩違ふ

寒暑

ポキポキと目で折り行きぬ曼珠沙華

暮津

鶏頭の随筆何とかまとまりぬ

素抱

かまつかに殴りかからむばかりの雨

石鏡

種子零す鶏頭いやはやひどい形なり

石鏡

かまつかのこれが限度といふ紅蓮

石鏡

喜多方の蔵もつ宿の鶏頭世屋旅館図

石鏡

かまつかの繪手紙暫し繪のちから

暮津

墓を守るはらからも絶え鶏頭花

暮津

幅跳の助走路に浴ひ雁来紅

ねず

鶏頭を引っこ抜くとき土けむり

暮津

雨のあと直ぐ日が射して雁来紅

宿好

鶏頭のいたくうらぶれ霧雨に

暮津

一段と空深くなり葉鶏頭

燕音

鶏頭のとつとと昏れてしまひけり

暮津

葉鶏頭勢いづいて来たりけり

随笑

葉鶏頭 かまつか 雁来紅がんらいこう

ねず

魂棚の賑やかしとて葉鶏頭

素抱

夜顔の実

かまつかに出陣の下知下るごとし

ねず

夜顔の実のたんと生り何と野暮

暮津

かまつかの旭にむせぶ斜面畑

さざ

芙蓉の実

かまつかの彩なかなかに鄙ぶ寺

鳩信

閑日の昨日今日明日芙蓉の実

宿好

かまつかの紅蓮を見栄とおもふ日も

宿好

早稲わせ

かまつかのてんでこ舞の風の日よ

随笑

早稲の香の沸きかへる中巡礼道

宿好

かまつかの赫つとイスラム原理主義

随笑

秋の海 秋の浜

かまつかや報道一ト日テロ一色

随笑

秋の浜流木を目に収むのみ

寒暑

御用邸巡查眺むる秋の海

素抱

いわし雲天龍寺船穹駈けて

宿好

氷頭膾ひずなます

独善は他にも及ぶ氷頭膾

燕音

鮭はらごい

生きあせり無くもがなとも氷頭膾

素抱

独り酌む筋子にたうたうたらの灯

さざ

秋刀魚さんま 初秋刀魚

妻と吾と旬の秋刀魚を二等分

宿好

はららごに伍してかがよふ飯の粒

ばら

酸橘得しされど秋刀魚は旬ならず

素抱

鮭トバでちびりちびりと男山

素抱

はるばると秋刀魚は南下この刻も

石鏡

鱸すずき

ここ残し秋刀魚の食べ方知らぬ妻

石鏡

鱸跳ね天羽漁協のトロ箱に

石鏡

初秋刀魚世話焼き口調殖ゆ妻と

石鏡

鰯ぼら 鰯

秋刀魚食ふ敢えて値段は聞かずにおく

暮津

鰯飛んで深川鼠の川面かな

ばら

秋刀魚の骨代はつて外し遣りにけり

暮津

躍る身をあびせ倒して鰯墜ちぬ

燕音

秋刀魚焼き年金暮し帳尻合ふ

暮津

逆光の鰯の間髪入れず跳ぶ

随笑

鰯

水ごと背黒鰯を揚げて漁仕舞ひ

石鏡

朝の入江ええ恰好して鰯飛べり

素抱

鰯雲

残照の退く中鰯でも見にゆかん

素抱

広がる鯿の水輪のゆき着く岸  
朝の川鯿の一つも跳ばぬかと  
鯿跳ばぬ川を淋しみるたりけり  
橋渡り了ふまでに鯿跳ねたまへ

鯿はせ

砂蹴つて鯿の子姿くらませり  
だぼ鯿の無茶苦茶走りまたしたり  
糸を垂るそばから鯿が掛かりけり  
自転車の遠乗りをして鯿の海  
江ノ電の一寸走つて鯿の海

鯿釣

鯿を釣る舟が出てゐる大日向  
鯿釣の装備の一つ烏龍茶  
鯿を釣る頭上を鳶の胴ながれ  
琵琶島の端はなにて鯿のよく釣れる  
鯿釣の君らの今日の釣果はと・・・  
少年

釣人の呟き鯿に落としけり  
鯿は水底で釣師は岸辺で虎視眈々  
水底の冥さ帯ぶ鯿釣られたる

根釣ねづり 根釣人

根釣して葉山の鳶に啼かれける  
草叢にラジオ響かせ根釣人  
根釣人脳梗塞のことをぽつり  
突堤にリハビリ兼ねて根釣人  
突堤に半日ねばる根釣人  
根釣人帰り支度の函一つ

鰍かじか

湯田人の朋もてなしの鰍揚げ  
平皿に呆と口開け揚げ鰍

竹の春

嗟峨竹の春にしてなほつづく径  
報国寺  
五輪塔片寄せられて竹の春

草の花

草の花氷室名残りの上り坂  
草の花鉄路のつくる三角地  
道形に風のくるなり草の花  
草の花氷河すさりし跡に充つ  
野草観察みんなほほうとシモバシラ  
草の名はそこそこ虫の名はぜんぜん  
土盛りせしそこが山頂草の花  
句作りに博識要らずイヌコウジュ  
半歩でもともかく前へ草の花  
ずるずると日の経つばかり草の花

秋海棠しゅうかいどう

精一杯立ってゐるなり秋海棠  
閑節を秋海棠も持ってをり  
秋海棠思ひ至るは相田サク  
沢沿ひにのぼり満山秋海棠

紫苑しをん

秋海棠情にほだされ易く生れ  
雨撥ねて葉ばかり大き秋海棠  
祇王寺はその紫苑の右を行け  
遠来を寺の紫苑にねぎらわれ

蘭

ラン棟に舌噛みさうなランの名も  
洋蘭展  
蘭展へ軽き足取り銀座まで  
妃殿下の出品の蘭とつきに  
蘭展の蘭の招きにあづかりぬ  
洋蘭の種を明かさぬ咲かせ方  
蘭展の客層もまた見ものなる

奇天烈も奇天烈蘭の仲間とよ  
場違ひのやうにおもへる蘭展に  
洋蘭展鼻が華やぎ始めけり  
蘭展出で銀座通りの人となる



釣舟草

釣舟草霧に溺るる女坂

もも

監視員詰所の前の濃りんどう  
八幡平  
エゾオヤマリンドウ秋を告ぐ峠

随笑  
寒暑

釣舟草水は百代の過客にて

暮津

畚岳遠望りんどう咲く峠

寒暑

松虫草

風混める大谷地をゆく松虫草

燕音

熔岩原のりんどうしやしやりこしやんと咲き  
鳥頭とりかぶせ

暮津

木道に人影を見ず松虫草

燕音

鬼女祀る堂出て日暮とりかぶと

ねず

松虫草霧来る方を知れるなり

燕音

コスモス 秋桜

ねず

風の道即ち松虫草の道

宿好

形ばかり長けし子に似てコスモスは

ねず

松虫草ひるがへるここ天界か

暮津

秋さくら川を優しく曲げにけり

ねず

吊鐘人参

吊鐘人参羽虫においておいでせり

随笑

コスモスのそこを折れ穂高町

もも

竜胆

りんどう 濃竜胆

ばら

コスモスの脇をぶると馬体過ぐ

もも

りんどうのほとり真つ黒火山弾

ばら

コスモスの空のあなたに祝儀あり

さざ

りんどうに霧のわいわい押し寄せぬ

ばら

コスモスのやうに浮かれてゐたき日や

さざ

サロマ湖の空冷え来たり武者りんどう

燕音

コスモスの縁へりを掴みて虻沈む

さざ

武者りんどうこそぞりて砂州に咲く

燕音

私語多きコスモスを風咎立

さざ

コスモスの汚れ下葉の縮れ気味

さざ

コスモスに配色といふ一語あり

暮津

コスモスの横に吾が顔ぶれてゐる

さざ

吾亦紅われもかう

さざ

祖母山の裾のコスモス高かばい

鳩信

くりくりの空があるなり吾亦紅

さざ

コスモスや奥羽に廻る碧梧桐

鳩信

吾亦紅指で突くごと風の出て

ばら

コスモスの人気ひとけなければ昇天す

鳩信

吾亦紅高峰温泉ミロの構図を想ひをり

燕音

コスモスの佳人の如きたたずまひ

鳩信

混むでもなくまばらでもなく吾亦紅

宿好

コスモスに遠ざかりゆくをみなごゑ

鳩信

吾亦紅霧の冥さを帯びつゝあり

随笑

左京区の雨のコスモス高う咲く

宿好

吾亦紅独りごころを通す黝

随笑

コスモスの風にのんのん舟着場

随笑

杜鵑草ほととぎす 油点草

随笑

コスモスの空へ風船離せし子

随笑

杜鵑草手にし座興に啼かせみぬ

随笑

あきらめがつきコスモスの吹かれさま

随笑

紅毛もすなる俳諧杜鵑草

暮津

なほつづくコスモス街道ナイスデイ

寒暑

陶片の出でくる畑油点草

暮津

コスモスの雨来ぬうちの器量佳し

石鏡

雄ひじわ 雄日芝 相撲草

暮津

コスモスにぼろんぼろんと雨の降る

石鏡

力草

ねず

コスモスに高原の日の乗つてをり

暮津

相撲草強く吹かれて立ち直る

ねず

コスモスの上に市街地展け見ゆ

暮津

雄日芝の引張り返すちからかな

さざ

雄日芝にくさやのほひ移りけり  
相討ちのごとく雄日芝雨に臥せ

さざ  
さざ

ゑのころの光れる試歩は朝の内  
月祀る芒に添えてゑのころも

鳩信  
宿好

雌日芝は引き雄日芝は引っこ抜く

さざ

ゑのころはうぶで真青で澄みきるそら

随笑

雄日芝のすれっからしのその穂先

さざ

狗尾草の向きを一つに揃へたし

さざ

雌日芝に降り癖つきぬ野辺のそら

宿好

狗尾草の魂のぬけがら枯月夜

鳩信

雌日芝を抜く寄り道の手始めに

寒暑

風が風追ひ越しゆけり狗尾草

石鏡

雄日芝はいつか芒になりたくて

寒暑

狗尾草も庭草の裡愛で暮らす

石鏡

力草飛弾国府・清峯寺田空佛見に寄らむ

素抱

狗尾草濡れぬやう穂の出来てをり

石鏡

雄日芝に雨透きとほり透きとほり

石鏡

錆錨狗尾草の穂の古りて

石鏡

雄日芝はざつくばらんを通しけり

石鏡

擦り寄りて馴れ馴れしいぞ狗尾草

暮津

### 鼠の尾

頼りなき日のまだ差せる鼠の尾

さざ

イヌビエとも相性のよきねこじやらし

寒暑

### 狗尾草

えのころ えのころ

湯元の辺穂の真つ黒な猫じやらし

素抱

猫じやらし

さざ

曇日のひかり押さえてねこじやらし

石鏡

相俟つてゑのころ草のすがれそむ

さざ

除けきれぬ雨の小道の猫じやらし

石鏡

脚力をつけんとゑのころ草の道

鳩信

金網の外にも内にも猫じやらし

石鏡

ねこじやらし老若の穂の入り混じり

石鏡

青花を摘むとき露が手に当り

素抱

英名は緑の狐のしつぽ草

燕音

引く草がみんな露草なららくちん

暮津

えのこ草コップに挿せば茎交叉

寒暑

露草がひよろりと長けて命日来

暮津

駆け足で雨くるアキノエノコログサ

素抱

蕎麦の花がひよろりと雨受けて

ばら

### 風船葛 草風船

風船かづらぼんやりと目を過ごしをり

燕音

蕎麦の花はや戻りてよそよそし

随笑

風船かづら祖霊送りも済ませしよ

宿好

十五夜の空へこぞれる糸瓜加持

ねず

目の馴れてふうせんかづらの在りどころ

随笑

揃へ脱ぐ中に長靴糸瓜加持

もも

褒貶はふうせんかづらのあなたなる

随笑

糸瓜吊る茎の付け根のもつこりと

さざ

ふうせんかづら唯見てゐてはつまらない

素抱

来宅の途次の糸瓜の棚のこと

ばら

鉢植えの蕎麦屋の風船かづらかな

暮津

子規庵の屋根這ふへちま蔓八方

随笑

色古りて風船かづらにも老境

暮津

子規庵の糸瓜こづきて立去らむ

随笑

草風船いつそ昔のまゝがいい

暮津

瓢箪

随笑

ゆつくり枯れ草風船の風流は

暮津

瓢箪

### 露草 青花

踏み見る露草の露鳴りさうな

もも

「中原道夫俳句日記」恵送受く  
ひょうたんから俳諧を出す粋なひと

随笑

### 鬼灯 酸漿

鬼灯を雨に打たせて船世帯

ねず

晚酌の松魚にちよんと擦り生姜

素抱

清方のほゞづきの絵のほゞづき鳴る

宿好

貝割菜

良寛の桑門の道酢漿草より

寒暑

貝割菜整列足踏みせるごとし

ばら

ほゞづき揉む女の手許よく描けて

寒暑

間引菜 菜を間引く

もも

前後して友の逝くなり蟲ほほづき

寒暑

おろしがね  
下金色の夕日に菜を間引く

もも

市立ちて一鉢なんぼの鬼灯売る

暮津

おろぬきどき大根台地を抜けにけり

さざ

亀虫の一団鬼灯荒らしに来

暮津

間引菜に昼酒の箸上げ下ろし

寒暑

唐辛子 鷹の爪

隠元豆 いんげん

唐辛子ひとりよがりの癖が出て

もも

どぜういんげんこまめに摘んで生身魂

ねず

身勝手を通してきたる唐辛子

さざ

隠元豆摘みかと問へば婆むむと

ねず

冬兆すスパゲッティに鷹の爪

随笑

いんげんの白花むつと曇りづめ

もも

朝市の地べたを覚ます鷹の爪

素抱

紅花隠元咲けば秩父に盆が来る

宿好

万願寺とうがらしとや火恋し

石鏡

いんげんの季節の三色御飯かな

素抱

紫蘇の実

胡麻

紫蘇の実を好物として食細し

寒暑

胡麻餡の油湿りの月餅食ぶ

寒暑

生姜

玉蜀黍 もろこし

ただ甘き玉蜀黍を蔑めり

随笑

丸顔の多摩川梨の送り主

さざ

茹で上がるもろこしの黄は僧衣の黄

寒暑

酒・飯・梨うまくて人間好時節

さざ

湯けむり上げ和賀流の里のたうもろこし

素抱

供へらる二十世紀に今日の月

さざ

開戦シーンポップコーンの香が流れ

暮津

そこそこの梨買うて来て褒めらるる

鳩信

葛嵐

二軒目の八百屋に在りぬラ・フランス

鳩信

葛あらし葛の横腹見せにけり

素抱

人物評ざつくばらん梨の味

燕音

稗

西洋梨ごろんと一つ静物画

燕音

稗田に交りて稗のまんめんじん

随笑

洋梨のおいど優しきものの一つ

宿好

桃

梨貰ひ大きい方をののさんへ

随笑

この水気類つぺた落つちちさうな桃

燕音

梨を剥く皮のぶらぶら定年後

随笑

福島の桃の夕焼けどき長き

随笑

梨といふ天然ものの水の味

随笑

桃剥くと妻のむっちりせる上肢

暮津

訃報聞く梨の皮剥く音の中

素抱

香煙の立ちのぼる中匂ふ桃

暮津

二人して食ふには大き梨折半

石鏡

秋果

梨を剥きその一片に楊子立て

石鏡

コンビニの老人向けに売る秋果

石鏡

梨なんぞ剥いて無聊の手を濡らす

石鏡

梨 洋梨

洋梨の油絵掲げ洋菓子店

石鏡

梨重たけれど甘味の保証無し  
洋梨の器量も含めし値段なり

暮津  
暮津

おほらかに露の凝りしが葡萄とも  
昇天の心地ぶだうの一粒に  
曰く言ひ難しぶだうの果肉とは

暮津  
暮津

### 葡萄

炎帝に葡萄の種を抜かれたる

もも

口皺の深々ぶだう食うべけり

暮津

口もとにぶだう運ぶは蟹めくも

さざ

### 木犀 金木犀

くちびるに残るぶだうの皮の渋

さざ

唐突と云へば米屋の金木犀

石鏡

ひろがれり葡萄の味の交響樂シンフォニー

ばら

また一寸行つて金木犀の家

石鏡

ぶだう酒のやうに日差しの冷えて来し

ばら

金木犀腐くたしてふ雨なかりけり

石鏡

ぶだう食ふ渋ある故の甘味なれ

鳩信

金木犀零れ土塀の瓦に跳ね

石鏡

小粒なる葡萄摘むに千手欲し

燕音

金木犀掃く身にもなつて下さいと  
家人の云へる

石鏡

ちまちまとよく抓みしよぶだうの皮

随笑

日々通る靴音日々散る金木犀

石鏡

ぶだう食ひ見合はず顔のちよと酸っぱ

寒暑

金木犀台無しにする雨ならめ

暮津

黒ぶだう閻魔の舌となりにけり

寒暑

紙飛行機木犀の香によく飛べり

ねず

ぶだう一粒地球のやうな愛しさに

暮津

木犀のかをる出鼻を雨叩き

ばら

つまむ手のひつきりなしに夜のぶだう

暮津

木犀の花の付き方はと見れば

ばら

このぶだう旨し笑顔を御礼とす

暮津

木犀に頭すつきりする机辺

ばら

木犀の例へて云へば深情

燕音

初孫 美雨 誕生  
飲みしやぶる爽やか赤ちゃんあくびする

燕音

木犀のこまごま蓄むこと一途

宿好

船頭の地下足袋さやに舟下り

随笑

街騒に木犀零れ初めにけり

宿好

遠野民話聞きゐる両の耳さやか

寒暑

ご町内木犀の香のつなぐ路

宿好

指圧爽やか突手柳手拍打叩打

素抱

おのが香に木犀我を忘れたり

随笑

御所車金具さやかに大八台  
屋台曳き廻し

素抱

降り出して木犀我に返りけり

随笑

爽やかに土地人の云ふ乳首山  
安達太良山別称 ちちくびやま

石鏡

木犀の家木犀の家隣

随笑

長生きしてさやかに使ふ象牙箸  
岳父

暮津

あり余るもの木犀の香と時間

随笑

粗穀枕爽涼の声挙げにけり

暮津

木犀や同窓会に出向く道

素抱

風爽やかピザは高原野菜入り

暮津

木犀も記憶も薄るるばかりにて

素抱

### 冷やか 秋冷 冷ゆる ひやつく

くだくだしき木犀の香に突つ込みぬ

石鏡

引声念仏畳めつぼう冷ゆるかな

ねず

木犀の花屑カレー粉めく散歩

石鏡

屯田兵絵巻冷ゆ手をさすりつつ

ばら

木犀を散らして夜間飛行音

石鏡

ぶだう酒のやうに日差しの冷えて来し

ばら

### 爽やか さやか 爽涼

デコ絵付け関羽の髭のさはやかに

ねず

お茶の実がしんしん冷ゆる高山寺

宿好

阿蘭陀栄町 阿蘭陀万才万才手書きの髭も爽やかに

燕音

風冷えて蕎麦うまき日の上根岸

随笑

ひやつく日笠森おせんに逢ひそな辻 随笑 澄み澄みて水も心も方円に  
柿冷ゆるそんな季節となつてをり 随笑 青松に金閣の金ン飛ばしけり  
冷え込みのかう強ければ賜も来ず 随笑 水澄める宗猷寺町たもとほり  
ぐんと冷え今日着るものに大わらは 随笑 古川の町貫きて川澄めり  
膝小僧冷えて来たれば酒支度 随笑 白樺のほとりをながれ水澄めり  
出あいがしら朝の冷え込み口にする 随笑 屁理屈の一つもなくて水澄める  
秋冷のさし込む膝をニタさすり 素抱 山はそのあるべき姿映す水  
■十月 葦の間の方寸の水澄みぬたり  
十月 十月 暮津  
林間にたまりては干ぬ秋の水 寒暑 十月の日の温み程ハムスター  
出流山一足早く水の秋 素抱 十月の日の入る後部座席占め  
水の秋石樋渡す江名子川 素抱 十月の催しものも全て果て  
鯉一転秋水を遡るあり 素抱 鳩小屋に十月の砂敷き込んで  
シナノザサ秋水音もなく流る 石鏡  
尿管は腎臓を出て水の秋 石鏡  
水澄む 川澄む 赤い羽根 愛の羽根  
水馬総出で水を澄ましをり ねず 赤い羽根赤信号と向き合うて

上野駅出て直ぐ共同募金のこゑ 燕音 片づけてはならぬ机の物に秋日  
赤い羽根つけて上野の森に入る 燕音 混浴の五人に秋日あけすけに  
人混みに巻き込まれゆく愛の羽根 寒暑 秋日受く額うっすら膩じみ  
栗材の台輪屋台秋日差す 素抱  
料亭の一繋舟に秋日差 さざ 辻々に秋の日を浴み秋葉さま  
虫一つ水平飛行秋日中 さざ とりとめなく秋の日注ぐ草つ原  
秋日差し湯釜水釜涸釜に ばら 湯立神楽日に日に秋の日は透きて  
小刻みに蠅の向き変ふ秋日中 ばら 二本松十万石の秋日和  
岳樺幹の阿修羅に秋烈日 ばら ユーカリにつれなく落つる秋日とも  
くわりんの実なりし秋光集むるは 燕音 秋日中手をもてあます手長猿  
とりすます陶器のポット秋日差 燕音 秋晴  
赤松に秋の陽赤と鹿苑寺 宿好 秋晴のポニーの鼻をまさぐる子  
方形に秋の日容るる石ノ庭 宿好 秋晴れの日の子規庵のガラガラ戸  
嵯峨野 宿好 化野の人肌ほどの秋日差 揚げコロッケ油噴きある秋日和  
秋の日にカキノ木ダマシといふ樹木 宿好 秋晴れのヒバを降りくる猫の爪  
秋の日にぬくむ渡しのごろた石 随笑 秋晴れの天守閣より生徒のこゑ

秋晴れにちよつと自慢の出来る花

暮津

命蓮の法力使ふ秋天下

鳩信

典型的秋晴れ球形ガスタンク

暮津

日田杉のずんと高むや秋の空

鳩信

秋晴をだうかうもなく家に居り

暮津

あっぱれの阿蘭陀万才秋天下

燕音

秋麗 しうれい 秋うらら

燕音

秋うらら河童と馬コの物語

寒暑

赤ん坊をあづかる秋の空のもと

燕音

秋うらら山辺の寺の一位垣

素抱

最上峡秋天を抜く土湯杉

随笑

秋麗ら眼にせる白樺一本目

素抱

湯花咲く湯川のうへの秋の空

随笑

秋麗の宮司は佐野家湯立舞

石鏡

秋天下ポケット押え探しもの

寒暑

秋高し 天高し

素抱

けふ殊に天高けれど家に居む

さざ

布袋からくり神髓見する秋の空

素抱

天高く法螺貝吹けりテロ退治

随笑

秋空へ打つてこどもの鬨鶏樂

素抱

天高くからくり繰れる布袋台

素抱

秋空にジラフ仕立てのトピアリー

素抱

看取るもの看取らるるもの天高し

石鏡

秋空にかざし獣医の注射針

石鏡

秋の空 秋空 秋天

暮津

方丈に鯉の一ト跳ね秋天下

ねず

自転車のブレーキキュツと秋の空

暮津

秋空に鳶の打つたる感嘆符

ばら

秋澄む 空澄む

随笑

秋澄みて一連なりの山のいろ

寒暑

練り歩くやっこの毛臍秋の風

石鏡

空の澄み一つとっても奥会津

石鏡

苦吟してとつてつけたる秋の風

もも

大鳥毛真澄みの空に投げ渡し

石鏡

二の腕の歴然とあり秋の風

鳩信

空澄むと旅する定年万万歳

石鏡

十団子の碑秋の風招べり

燕音

秋の雲 秋雲

随笑

秋雲の移ろひ易く鶴ヶ城

石鏡

最上川舳へどんと秋の風

随笑

山粧ふ 粧ふ山

寒暑

粧はず俵藤田の唐沢山

ばら

秋の風最上川面を吹き広げ

随笑

大佛の夢のお告げに粧ふ山

鳩信

いきさつはどうでもよけれ秋の風

寒暑

山化粧ふケシヨウヤナギも化粧して

素抱

さう思ふことのとびたび秋の風

寒暑

安房峠平湯温泉 神の湯まだら模様神の湯に化粧う山

素抱

牧牛の尾を振る他は秋の風

石鏡

秋の野

もも

活け込みて卓上秋の野辺とせり

素抱

秋の風翳を何處かに忘れ来し

暮津

雑草あらしぐさにいちいち名あり秋の野辺

石鏡

泥亀の鼻もたげゆく秋風裡

もも

秋風 秋の風 秋風

鳩信

色無き風

唐物を揚げし湊や秋風裡

鳩信

秋風も紅燈趣味もそれとなく

もも

唐物を揚げし湊や秋風裡

鳩信

\*相模 金沢に三艘といふ地名ありて

宇津山 慶龍寺

茲に許六秋風の吟遣しけり

燕音



ぐづぐづの桜の幹に秋微雨  
秋ついでり紛々天の篩より

さざ  
ばら

平茸を栗茸を指す箸の先  
山鳥の脂浮くなり茸汁

燕音  
燕音

秋微雨野草画展に長居して

寒暑

真つ白に明恵の咲かす茸なり

宿好

秋口に降りては埃くさき雨

宿好

茸どき宿より出せる宅急便

寒暑

一鳥も降ろさず秋の沼の雨

石鏡

又喰うてニュースとなりし月夜茸

寒暑

### 薄紅葉

何處となく色づいて来ぬ瘤櫛

宿好

茸槽猿の齒形の生々し

石鏡

先代の苦勞咄や薄紅葉

寒暑

### 茸狩

菌狩

### 桜紅葉

野毛山動物園  
水の面に桜紅葉の心ばえ

鳩信

拾得の装いで来て菌狩

寒暑

長雨に櫻もみぢの目減りして

鳩信

### 新米

今年米

新米に葉唐辛子を目分量

さざ

桜もみぢどつちつかずの色合にて

燕音

新米の穫れ高「んだな二十俵」

宿好

幸田文  
櫻もみぢ一片文の閑伽水に

随笑

今年米うまかり今日に明日に処す

宿好

### 菌

茸 月夜茸

ばら

新米と後ほど聞いて道理とも

暮津

湯西川  
滑茸ののらりくらりをかっ込めり

ばら

新米といはれ一粒灯にかざす

暮津

茸の名いちいち聞いて宿夕餉

燕音

通販の庄内米をファックスにて

暮津

### 新酒

今年酒

新走

新走りふふみ日向に出づおもひ

ばら

川地藏供養稲の香むせるなか

ばら

願はくば生のまま召せと新酒着く

宿好

稲穂波そぞろ打ち合ふ神樂の里

鳩信

試し飲み弥右衛門さんの今年酒

石鏡

霍乱を起して倒る稲あらん

燕音

一升瓶千本分の新酒樽

石鏡

虫のこゑじんじんいと稲稔る

宿好

### 濁酒

濁り酒 どぶろく

鳩信

いちめんの稲穂明りに目の馴るる

随笑

旅仲間雪つこといふ濁り酒

鳩信

首都圏ニュース稲の作柄稍良と

随笑

濁り酒とろつと炬燵火は赫つと

燕音

途方もなき稲穂の寄する小学校

随笑

どぶろくに白川の夜を更しけり

随笑

本合海渡しの向う稲の海

随笑

どぶろくに酔ふて凭れる煤柱

随笑

稲明りさし込む中や湯葉造り

寒暑

どぶろくの上澄み雪は夜に入りて

随笑

上気多の段々畑の稲の株

素抱

濁り酒入っていますか酒屋さん

随笑

磐越西線稲の睡気が移りさう

石鏡

濁り酒銘も凜々しく「美少年」

寒暑

稲積みのみしや狸の化け損ね

石鏡

抱えくる五郎八といふ濁り酒

暮津

### 秋の蜂

いきり立つ秋の蜂見て眼が荒れる

寒暑

### 稲

稲穂 垂穂 稲実る

もも

古川の秋の蜂みる総鎮守

素抱

かそけしや垂穂を垂穂うてる音

もも

### 浮塵子

古川の秋の蜂みる総鎮守

素抱



大正池雨にもめげず浮塵子飛ぶ

素抱

しょうりょうばった一巡りしてわが足許

宿好

蝗いたし 稲子

道三の国の蝗の闇魔顔

ばら

バッタ跳んで横浜未来都市のうへ

随笑

これはこれは喪服にぶつかる稲子磨

素抱

はたはた翔つさうかと云つてやりたくなる

寒暑

佃煮の蝗の脚に突つ張られ

石鏡

きちきちの一途な翅音径外れず

素抱

ばった はたはた きちきち

古里のはたはたみんな祖おやの貌

素抱

精霊しょうりょうばった きちきちばった

静岡静岡島田宿 大井川越遺跡  
はたはたが何血迷ふて大井川

石鏡

跳ばむとすバッタ眼を整へて

さざ

しやくれたる貌のショウリヨウバッタかな

石鏡

円墳の空をバッタの脚曳きて

さざ

ばった跳ぶはた迷惑な跳び方も

石鏡

跳ぶ前をおんぶばったのゆうらゆら

さざ

飛ぶときは貌を斜めにしてバッタ

石鏡

素破こそとばかりバッタの跳べる貌

ばら

神主のやうな顔してバッタ現る

暮津

おんぶさるバッタの脚の懸け具合

ばら

つたなきをぬぐひきれずにあるばった

暮津

葉っぱに貌ぶつつけ跳べるバッタあり

ばら

永六輔精霊ばったの裔ならむ

暮津

会心の音色きちきちばった翔ぶ

鳩信

稲雀

飛び方が目に見ゆきちきちばった翔ぶ

鳩信

稲雀立てりばらばらばらと

さざ

罷り出て精霊ばったの御曹司

鳩信

稲雀舞ひ降るてんでんばらばらに

さざ

稲雀上げ下げ崎の棚田かな

宿好

豊年の糊のねばりにデコ作り

ねず

稲雀飛来選り取りみどりの田

随笑

俳諧の奉行何処に豊の秋

鳩信

稲雀何處か窃盗団に似て

随笑

風おさまる如く豊年踊果つ

宿好

山麓を横へ横へと稲雀

石鏡

鮭杉田湯岳で二膳軽々豊の秋

暮津

稲雀何處へ飛んでも磐梯山

石鏡

出来秋のわが体重を量る湯屋

暮津

転進といふ語のふつと稲雀

石鏡

凶作 不作

案山子かがし

稲小安峽温泉不作うつたふ婆の冷夏の眼

素抱

案山子見る男チェックのシャツを着て

もも

秋の川

月下にて山田の案山子隙だらけ

寒暑

乳ちちどし通七十八文川の秋

石鏡

先頃の案山子の装なりのモダンなる

素抱

落鮎

だいぶ手を抜かれ案山子のご面相

石鏡

和賀川の鮎瘦せ瀬につく頃ならむ

素抱

案山子見て思いつくことほぼ同じ

暮津

渡り鳥 鳥渡る

ねず

鳥威とりおとし

羅須地人協会跡地の鳥威し

寒暑

鳥渡る空傾けて棒倒し

暮津

温泉は近場がよろし鳥威

寒暑

浦のつく駅名多し渡り鳥

暮津

豊年 豊の秋

先達あり渡る鳥にも吾が身にも

石鏡

色鳥

ゆふいんに妻と遊べば色鳥来

鳩信

えつさ丸素木の箱に朱鷺基金

寒暑

色鳥の出入りゆかし御室御所

宿好

鶺鴒 ひよ

寶物に加え色鳥蔵す寺

宿好

首伸ばしすくめつ鶺鴒の花食める

もも

色鳥のこゑを引出す梅擬

宿好

花乏し降られづめなる鶺鴒に

さざ

色鳥来これだけ森のもみづれば

随笑

枯幹に抱きつきざまに鶺鴒止まる

さざ

色鳥の目も覚めやらぬ御神域

素抱

ふくらんで風除く鶺鴒の不格好

宿好

色鳥は山から来たり宗猷寺

素抱

花どきの鶺鴒のうわまえはね雀

随笑

常磐木の大臣山より色鳥来

石鏡

鶺鴒の花懐にかしましや

寒暑

小鳥 小鳥来る

法然院雨に紛るる小鳥こゑ

宿好

鶺鴒来頬にちよっぴり紅さして

石鏡

小鳥来る樟は見通しよき樹にて

随笑

鶺鴒 初鶺鴒 百舌鳥 猛り鶺鴒

暮津

小鳥来て中村八大ねむる墓

随笑

鶺鴒日和 鶺鴒の声

さざ

横浜市立 金沢動物園

石鏡

雨の鶺鴒後姿のずんぐりと

さざ

平日の動物園にくる小鳥

石鏡

ずぶ濡れの鶺鴒の平氣の平左かな

燕音

八幡宮ばらばら小鳥来そめけり

石鏡

雨衝いて啼き出す鶺鴒の直心

宿好

鶺鴒聞きて雨の一乗下り松

宿好

朝の鶺鴒切り裂きやすき大氣かな

暮津

鶺鴒切なし雨止む氣配さらさら無く

随笑

鶺鴒の朝頭機敏に立ち働く

暮津

濡るる身を固く引締め雨の鶺鴒

随笑

甲高く百舌鳥が雀を制しけり

もも

かう雨が続けば鶺鴒もつらからう

随笑

高齢化社会と百舌鳥啼けり

燕音

強くなる雨にたまらず鶺鴒去れり

随笑

ひもじさののつびきならぬ日暮鶺鴒

もも

花巻ノ雨ニモマケズ初鶺鴒来

寒暑

暮れなづむ庭木に鶺鴒のシルエツト

さざ

雨の鶺鴒隣へ移る諍ひこゑ

素抱

締まりなき一日鶺鴒も聴かず暮れ

随笑

柏楨の茂み宿りの雨の鶺鴒

素抱

猛り鶺鴒を強くせる宮柱

ねず

中継ぎに吾が家の一樹雨の鶺鴒

素抱

死してなほ墓に大小猛り鶺鴒

随笑

初鶺鴒にしては早すぎでは何か

さざ

すぐ人のせいにする癖猛り鶺鴒

随笑

ひとしきり初鶺鴒聞いて座につける

ばら

俳諧奉行去来の庵に夕鶺鴒来

燕音

初鶺鴒の喋々来意告げてをり

素抱

古傷をつゝかれしごと鶺鴒啼けり

鳩信

初鶺鴒のキイーツとあれもなきこゑよ

石鏡

タタツキルタタツキルぞと鶺鴒啼ける

燕音

けふも亦来啼く初鶺鴒メーブルテイ

石鏡

けふひどく冷え込み鶺鴒の畳み啼き

随笑

朝の鶺鴒空気震はせもう来たか

もも

枯山水風化すすむる鶺鴒のこゑ

宿好

朝な朝な鶺鴒に親しみ机拭く

随笑

雷蔵の墓を袈裟切り鶺鴒のこゑ

随笑

自選とは由々し朝鶺鴒けたたまし

随笑

初鶺鴒のこゑ近隣を巡りをり

随笑



鶴鶴とただちに判る翔び方よ  
鶴鶴もとことこ師走歩きして  
浜金谷驛前セキレイ歩みをり

素抱  
石鏡  
石鏡

見夜火堂夜又倍子の実のくろぐろと  
\*見夜火堂は灯明台(灯台)のこと  
醸造元飯桐の実のたわわなる  
弘明寺十一面観音立像  
木の実どき鑿目を残す観世音

鳩信  
鳩信  
鳩信

### 海桐の実

海桐の実弾けむばかり漁日和

ねず

木の実落つダーウインレアは真顔にて

鳩信

### 木賊 とくさ

木賊刈る

ねず

多羅葉の青き実善根積めとこそ

燕音

日陰りて木賊に引立てらるゝ家

もも

木の実どき落葉どき過ぎ落人村

燕音

青空に木賊の節を継足せる

もも

いっぽんの山毛櫨の実二萬猿漁る  
松本幸四郎

宿好

今在りし冬日の何処へ木賊刈

ばら

墓所に降る木の実を聴いて露伴・文  
あや

随笑

丈山の清貧ゆかし木賊の辺

宿好

木の実降るぼっくりさんの寺日向  
凡そ軍勝五分を以て上と爲し・

随笑

靴の紐結び直せり木賊の辺

石鏡

木斛の大き実信玄戦陣訓

寒暑

### 木の实

木の実拾ひみほとけの掌に眠らす

ねず

この丘の木の実が主食縄文人

素抱

木斛の実の赤らめる書院窓

さざ

岩崎邸木斛の実のあかがね色  
カンボク

素抱

これといふにほひのなくて雑木の実

さざ

肝木の熟れ実は鳥に美味からず  
孫 珠海

石鏡

霜げたる何の木の実か赤茶けて

ばら

木の実どき己が弾みで珠海歩む  
孫 珠海

石鏡

### 林檎 りんご

林檎園脚立を夕陽あたたむる

もも

麗しき石榴新作見る如し

鳩信

皿セザンヌ展に盛るリンゴ崩るるところを描く

燕音

石榴より硬き頭のテロリスト

随笑

林檎割りことしの蜜の多寡云へり

燕音

これ以上裂けやうもなき石榴描く

随笑

今宵煮るべし国光といふ林檎  
聖夜

随笑

徒食の身ぶらぶら石榴にも似たり

随笑

電話繋がりりんごの弘前観光課

寒暑

舗道に石榴落ちなば快音放つらむ

石鏡

朝市の婆の勧める早生りんご

寒暑

### 榊 くわりん

かりんの実 かりん酒

石鏡

りんごお早うお岩木お早う旅早立ち

寒暑

かりん

かりん

林檎の荷解かんと鼻唄交りかな

寒暑

法要の集りよくてかりんの実

ねず

林檎は駄目柿はなんとか衰ふ齒

石鏡

十夜僧くわりんのごとき頭をしたり

ねず

紅玉煮る砂糖どっさり使ひけり

石鏡

たそがれの肉眼可視星花くわりん

もも

林檎煮る香が厨より本を読む

石鏡

びちびちとくわりん青実に雨跳ねて

もも

### 石榴 ざくろ

実ざくろの木乃伊めく枯れ祖父の忌よ

ねず

病閑やくわりんのおいど日を受けて

鳩信

拾得しつてくの笑ふがごとく裂け石榴

もも

青くわりん既に一徹者の貌

鳩信

不可思議光放つ石榴の暮れずあり

もも

あまりにも人間臭きくわりんの實

鳩信

二つ三つ爆ぜし石榴に盆地の日

さざ

くわりんの実なりし秋光集むるは

燕音

いかつくて何處か優しき青くわりん	宿好	黄くわりんのおでこしやんしやん日を浴みて	石鏡
ぼこぼこと明恵が頭くわりんの実	宿好	柿 渋柿 熟れ柿 木守柿	
木も瘦せて二、三箇しけたくわりんの実	宿好	次郎柿 柿の蒂	
悪さする虫に先んじくわりん採	宿好	洛北の雨は大粒柿の実に	宿好
くわりん酒の焼酎二升程と踏む	宿好	雨の柿人間くさくもみづれり	宿好
大きくわりんぐるり廻して斑なき黄	宿好	柿は柿らしくかためを好みけり	さざ
包丁の齒立たぬくわりん閉口す	宿好	柿好きの子規が妹にあたるこゑ	さざ
くわりん皆もがれし後も黄葉して	宿好	人は好きずき楸邨の柿子規の柿	宿好
進みゐるくわりんの尻の虫腐れ	随笑	柿ことごとく落ち裏山の青天井	ねず
くわりんの実蟻の門渡りなかりけり	随笑	柿落ちてたうたう一つ日の入り際	鳩信
虫食いくわりんたうたう落ちてしまひけ	随笑	落柿舎の庭木のそれもこれも柿	宿好
人臭きくわりんの匂ひ掌に移り	随笑	当てなき歩柿の家より樂溢れ	ねず
重くれるくわりんに月のまどかなり	寒暑	柿の家スウィングズビズバダバと	鳩信
くわりん酒のとり後ひく三年もの	石鏡	さういへば家紋に似たる柿の蒂	もも
くわりん酒に目のなき妻のとなとろり	石鏡	里坊の柿の蒂見て夕暮れは	燕音
やたら生ることしのくわりんだうしやう	石鏡	美濃柿の蒂ばかりなる旅の空	随笑

どうしてもそこへ眼のゆく柿の蒂	随笑	木守柿うからやからをもう忘れ	さざ
柿の蒂町内の空つながり	随笑	木守柿のやうやうおちて閑日月	ばら
柿の蒂つまらなさうに日を浴みて	随笑	まはりから徐々に片付き木守柿	鳩信
柿の蒂夕日外れてしまひけり	随笑	山の日のもう一押しに木守柿	宿好
柿の蒂無造作も斯く極まれば	素抱	子と食うぶ柿のあかさの他は欲らず	ねず
柿の蒂つくづく年も詰まりけり	石鏡	目の上のたんこぶの兄柿呉れず	ねず
舌先のぎうと縮める渋柿ぞ	さざ	隣家よりこゑ枝付きの柿貰ふ	ねず
柿渋のやうな評言貰ひけり	燕音	無人店に買ひてすこぶる柿甘し	ねず
渋柿に妻はとほほと云ったきり	石鏡	海に入る夕日見守るおけさ柿	もも
熟れ柿の正体もなく日に酔うて	さざ	だぶだぶの身不知柿に口もてゆけり	もも
熟柿皆承知年貢の納め時	鳩信	柿もみぢ柿に根負けて散りぬ	もも
清閑を楽しみながら柿熟るる	宿好	次郎柿釣瓶落しの日に馴れて	さざ
腫れものに触るが如く熟柿食ふ	石鏡	つやつやの中間色の柿剥けり	さざ
熟れ柿に匙が添えられぬたりけり	石鏡	柿の種ペルリ提督携へて	さざ
安んずること木守に及ばざる	宿好	あはててはいけない柿を滑る蜂	鳩信
木守の余生といふは透けること	宿好	柿主は小倉山下儒医去来	燕音
木守柿油断だんじて許されず	さざ	生酔いの箸運びけり柿繪	燕音

今年また生るだけの柿生りにけり  
郷土色豊かな柿が出回れり  
一つ木に集ふ鳥と柿の数  
化野の柿の下ゆき日暮道

燕音  
燕音  
燕音  
宿好

林檎は駄目柿はなんとか衰ふ齒  
強引に柿ぶつ叩き止めぬ竿  
匙をもてべるべる柿を始末せし  
吊し柿 干柿

石鏡  
石鏡  
暮津  
もも

九度山の柿も売らるる弘法市  
楸邸の柿攻む顔がありありと  
句づくりも柿も分別顔をして  
柿冷ゆるそんな季節となつてをり  
ほたほたの柿に手を焼く啜つちやえ  
柿ほったほたなれば包丁役立たず  
升さんは別格柿の味も亦

宿好  
宿好  
宿好  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑

吊し柿早うつるせと秩父の日  
干柿のこれで五つ目癪な種  
無花果  
かみきりにいちじく甘露用意せる  
いちじくは子供に還り食うぶもの  
追憶の熟れ無花果は蠅呼ぶ木

もも  
随笑  
石鏡  
宿好

手をやれば柿のつめたさ椅子の肘  
蜂屋柿高名なれど見たことなし  
ののさんに一つことしの庭の柿  
頂けり中に生傷ある柿も  
お隣りのなかなか大きくならぬ柿

随笑  
寒暑  
石鏡  
石鏡  
石鏡

茱萸の木より蛾のモスグリーンはたはたと  
茱萸をもぐ女の腕の種痘跡  
榎の実  
少しづゝ山は色づく榎の実  
少しづゝ噉の色貰ひ榎の実

ぱら  
石鏡  
素抱  
素抱  
素抱

山葡萄 野葡萄  
藤沢山野ぶだうに色のり初めぬ  
野ぶだうに雑多な彩を与ふ雨  
野葡萄の不粋紅葉も興の裡  
山ぶだう酒持病直せと賜はりぬ  
野ぶだうに湯けむり流れ町営湯

燕音  
寒暑  
寒暑  
石鏡  
石鏡  
石鏡

試飲の顔大きくゆがめ木天蓼酒  
郁子  
だんだんと見えてくるなり棚の郁子  
陶器めく郁子に紫一寸入る  
郁子は実にこの家の主見たこと無し  
荔枝 蔓荔枝 苦瓜  
蔓荔枝サタンに魔法かけられし  
ひやつこき雨に見舞はれ蔓荔枝  
苦瓜をどうするでもなく置く机上  
苦瓜料理出され箸つけみしもの  
苦瓜の渋面雨に叩かれて

素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱  
素抱

山中の雲にあけびをあづけたる  
灌木に搦めとらるる通草蔓  
ひゆうと手が伸びて編み込む通草蔓  
宇奈具志神社(出田の宮)  
通草蔓良寛の書の筆運び  
裏磐梯  
民宿の帳場あづかる通草籠  
おそろしく乱れてをりぬ通草の藪

ねず  
さざ  
宿好  
寒暑  
石鏡  
石鏡  
石鏡

冬瓜の老人食を出されけり  
とうぐわんを食みし其の夜の大寝言  
俳諧は肚でするもの冬瓜汁  
冬瓜料理病院食に何處か似て

随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑

木天蓼  
またたびの青実おまけの一掴み  
またたび酒漬けゐて羽後の旅名残

素抱  
素抱  
素抱

冬瓜汁  
とうが  
とうがん  
とうぐわん汁

随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑  
随笑

### 山葡萄 野葡萄

藤沢山野ぶだうに色のり初めぬ

燕音

試飲の顔大きくゆがめ木天蓼酒

素抱

野ぶだうに雑多な彩を与ふ雨

寒暑

だんだんと見えてくるなり棚の郁子

燕音

野葡萄の不粋紅葉も興の裡

寒暑

陶器めく郁子に紫一寸入る

随笑

山ぶだう酒持病直せと賜はりぬ

石鏡

郁子は実にこの家の主見たこと無し

随笑

野ぶだうに湯けむり流れ町営湯

石鏡

荔枝 蔓荔枝 苦瓜

随笑

### 通草

山中の雲にあけびをあづけたる

ねず

蔓荔枝サタンに魔法かけられし

ぱら

灌木に搦めとらるる通草蔓

さざ

ひやつこき雨に見舞はれ蔓荔枝

ぱら

ひゆうと手が伸びて編み込む通草蔓

宿好

苦瓜をどうするでもなく置く机上

寒暑

宇奈具志神社(出田の宮)  
通草蔓良寛の書の筆運び

寒暑

苦瓜料理出され箸つけみしもの

素抱

裏磐梯  
民宿の帳場あづかる通草籠

石鏡

冬瓜汁  
とうが  
とうがん  
とうぐわん汁

石鏡

おそろしく乱れてをりぬ通草の藪

暮津

冬瓜の老人食を出されけり

随笑

### 木天蓼

またたびの青実おまけの一掴み

素抱

とうぐわんを食みし其の夜の大寝言

随笑

またたび酒漬けゐて羽後の旅名残

素抱

冬瓜料理病院食に何處か似て

寒暑

総体にとぼけた味の冬瓜汁  
冬瓜をもてあましをる一家族  
冬瓜汁すすまぬ箸を奨められ  
冬瓜の煮方煮崩れ防止策  
吝ん坊のごとく冬瓜煮てとろ火  
冬瓜の銀あんで処理とは何ぞ  
晩年は引き算ばかり冬瓜汁  
冬瓜にこんな食べ方あったつけ  
そこに在るまゝの冬瓜師と仰ぐ  
冬瓜の面々授々に他ならぬ

### 山梔子

降り出して梔子の実に韻く雨

山梔子の実に手をつける鴉なりし

山梔子の実に夕栄えのいつまでも

山梔子や後悔といふ後手踏んで

### 新松子

松ぼくり 青松毬

寒暑

寒暑

素抱

素抱

素抱

素抱

暮津

暮津

暮津

暮津

宿好

石鏡

石鏡

暮津

けざやかに景立ててこそ青松毬

松ぼくり大年の日を懐かしみ

良寛の疑団も斯くや松ぼくり

新松子掠めて飛べるヘリコプター

### 山椒の実

蒲焼に呪文のごとく山椒かけ

紫式部の実 小式部 白式部

実むらさき

小式部の才気走れる色にして

ときめきの色に出でたる実むらさき

白式部孔子基督釈迦の智慧

白式部賢者の智慧を見るごとし

実紫師系を誇るおたんこなす

### 藤の実

藤の実の如く垂れなば涼しからむ

### 色変へぬ松

信貴山縁起絵巻 尼公巻  
色変へぬ松をあふぎて尼の旅

### 烏瓜

快気焰あげてゐるなり烏瓜

何故のあをべうたんのからす瓜

この蔓の先の何処かに烏瓜

しゃれてをり縦縞入りの烏瓜

烏瓜残る一つも飛び去んぬ

烏瓜びりつと肌を刺す大気

烏瓜失せたる色を思ひつゝ

烏瓜どうせ採るなら器量好し

見栄坊の烏瓜照る村はづれ

烏瓜からす天狗が好物の

物音のよく通る空烏瓜

静物画縞のオブリジェの烏瓜

滝なす蔓中に一つの烏瓜

烏瓜粹な青縞装ひて

鳩信

さざ

さざ

さざ

さざ

ばら

ばら

ばら

鳩信

鳩信

燕音

燕音

宿好

宿好

随笑

寒暑

烏瓜縞を装う数寄心

烏瓜配して備前小物売

手の届く所には無し烏瓜

朝顔の実 朝顔の種

朝顔の種も採らずに嵯峨野道

朝顔は花より種子に精出して

朝顔の種こじ開けて下調べ

数珠玉 数珠玉

数珠玉を過ぎてずんずん暮るゝ道

ずず玉の天つ日返す地藏盆

ずず玉のつるんつるんにかえりやんせ

ゆふいんの銀鼠ずずこ雨まみれ

数珠玉を採りて化仏の薬壺にせむ

数珠玉や使い途なき三角地

### 松手入

手入れせる松に根氣を問はること

さざ

ばら

寒暑

素抱

石鏡

石鏡

さざ

宿好

石鏡

石鏡

暮津

石鏡

暮津

ばら

松手入すこし空き過ぎたかとおもふ	さざ	布袋台金冷まじき機関樋	素抱
首尾問へばまづまづの出来松手入	燕音	天高くからくり繰れる布袋台	素抱
その辺の呼吸呑み込み松手入	宿好	布袋台覗けばからくりあやつり衆	素抱
お隣りと同じ植木屋松手入	寒暑	秋空を金欄屋台押し移る	素抱
簡単に見えてどうして松手入	暮津	下三之町の宵闇屋台来る	素抱
軍手・莫塵・脚立を用意松手入	暮津	宵祭屋台の端は神楽台	素抱
ご近所より少し早い松手入	暮津	高山の宵闇屋台の目白押し	素抱
松手入ちよくちよく脚立据え直し	暮津	星空ゆく屋台提灯夢うつつ	素抱
松手入脚立捧げるやうに持ち	暮津	五百提灯屋台の後後から	素抱
松手入素人の域抜けてをり	暮津	屋台曳かるさん法被姿かな	素抱
山妻の見守る中の松手入	暮津	星空に聳えわけても鳳凰台	素抱
松手入新の軍手の昏れてくる	暮津	高山に思ひ知らさる月夜寒	素抱
松手入あとかたづけを待つばかり	暮津	高山の月を歩ませ練り屋台	素抱
松手入済みし脚立のひやつけり	暮津	屋台曳き廻し 御所車金具さやかに大八台	素抱
<b>高山宵祭</b>			
高山宵祭 布袋からくり神髓見する秋の空	素抱	栗材の台輪屋台秋日差す	素抱
		宮司さま馬でばかばか御神幸	素抱

秋空へ打ってこどもの鬪鶏樂	素抱	菓子折の赤き紐もて菊括る	ねず
御神幸一文字笠キツと締め	素抱	畑の菊こごえて朝を迎へけり	もも
御神幸しようごい隆と押立てて *しようごいは神替わりの樹木 冬青の詠りか	素抱	畳屋の菊の出来栄えよかりけり	もも
<b>秋祭</b>			
盛岡秋まつり(盛岡八幡宮) 秋祭り山車の松前鉄之助	寒暑	白菊が机にあがる突然死	さざ
	寒暑	同僚	
風流山車秋の八幡下りかな	寒暑	五つ色もあるうか垣の乱れ菊	ぱら
大井神社小流れ巡らせ秋大祭	石鏡	町内の左官屋の菊三色ほど	鳩信
大井川安堵の神の秋大祭	石鏡	常滑の土管色して咲く菊も	鳩信
		挿し芽してつきたる菊と聞かさるゝ	鳩信
<b>サフラン</b>			
さふらんや一ト日は些事の積み重ね	随笑	納棺の泪は菊の蕾ほど	鳩信
サフラン買ふ客筋それとなく見をり	随笑	菊花賞菊に係わりなき人出	鳩信
サフランの一球おまけこゑ弾む	素抱	かかるのは手間のみ「如何菊作り」	燕音
サフランの花の馬鹿馬鹿しさに惚れ	素抱	菊作り答えがでると勧めをり	燕音
		和服の胸張りていそいそ菊日和	随笑
		検査結果遊走腎とは菊の花	随笑
		妻	
		白菊の月輪黄菊の日輪と	寒暑
		ファイアンセに菊束捧ぐトピアリー	素抱



様子見の開き加減や雨の菊

素抱

菊花展

盆栽菊調度の鉢も凝りに凝る

素抱

一文字咲きを支ふにボール紙

もも

稔の墓お隣りの墓菊とりどり

石鏡

綿詰めがどうのかうのと一文字菊

燕音

菊に佇つ母に一言かけたき日

石鏡

菊花展卒業式のごとくなり

燕音

こりやあびつくり菊に跨りゐる蠮螋

石鏡

展示日に間に合ふ菊の咲かせ方

宿好

菊日和奈良の最中を貰ひたる

石鏡

菊花展日和と家を後にせり

素抱

強くなる雨脚を菊怖れけり

石鏡

東京より俳優招き菊花展

石鏡

菊作り読本仕立てに難易度付し

石鏡

菊花展城の階水打って

石鏡

厠にも菊の明るさ持ち込めり

石鏡

菊花展けふより始まる城目指す

石鏡

黄菊咲く花菱アチャコの笑顔して

石鏡

二本松晴れの或る日を菊花展

石鏡

ヨモギスジハモグリバエの跡か是れ

暮津

城下まで自転車来て菊花展

石鏡

吾なりに菊の好みを云へば野趣

暮津

菊花展初日の菊に氣勢あり

石鏡

菊鉢を提げ新刊書小脇にす

暮津

菊花展即ち煙草慎みぬ

石鏡

日の翳り易きむらさき食用菊

暮津

アンドロメダ星雲さながら懸崖菊は

燕音

清流を下るがごとく菊見かな

暮津

懸崖の舟型菊の五六艘

寒暑

菊活けて後片づけの葉のほふ

石鏡

傾ける銀河系模し懸崖菊

素抱

懸崖菊花に遅速の多々あるを

素抱

晴れ舞台てふ菊苗の色を聞く

燕音

懸崖菊あらまあ真つ正面にかな

石鏡

何處となう畏き菊の前に立つ

燕音

煌々と厚物白菊スプーン弁

燕音

審査員何處見て菊の出来不出来

燕音

厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来

宿好

堅物は菊にもありて塵寄せず

燕音

七本立厚物菊のこころが顔

宿好

望外の受賞と云はんばかりの菊

燕音

白花瓣やつさもつさの厚物菊

石鏡

要するに何處どう見ればよきや菊

燕音

盆栽の菊の松籟聞かむとす

もも

菊の名も誇らか國華晴舞台

宿好

冬至芽の此処をと盆栽菊談義

燕音

管物の盃咲きの濃むらさき

宿好

菊に石抱かせる術に道理あり

宿好

菊作りひとりたのしむ胸の内

宿好

片寄せられ等外の菊白ばかり

ねず

後列の一際誉れ高き菊

宿好

金賞を争ふ菊の目白押し

もも

嵯峨菊のかんざし挿して大夫咲き

宿好

福助に作れる菊に人だかり

もも

伊勢菊の蕾弾けて禿咲き

宿好

足音のびたりと止まる古典菊

さざ

七本立だるま控えぬ葎簀張り

宿好

嵯峨菊は火花打ち出す燧石

ばら

菊人形 菊師

宿好

白菊の朝臣黄菊の臣・連

ばら

おん齡に始まり菊師の行脚談

石鏡

ほぐれ初む嵯峨菊荅おひねりめく

燕音

蹲り菊師むしろに根仕事

石鏡

気に入らぬ箇所をとことん老菊師  
 石鏡  
 莫蔭いちまい引き延べ菊師一仕事  
 石鏡  
 莫蔭いちまい丸め着せ替え了ふ菊師  
 石鏡  
 老菊師修行時代を一くさり  
 石鏡  
 見たきもの先づは菊師の仕事ぶり  
 石鏡  
 城内の厠拝借老菊師  
 石鏡  
 引きつけて離さぬ菊師の話っぷり  
 石鏡  
 家苞は菊師の雑談与太咄  
 石鏡  
 日当れり着せ替え中の菊師の背  
 石鏡  
 老菊師少し生活たつきのことにも触れ  
 石鏡  
 着せながら菊師の一ト生手短に  
 石鏡  
 菊師の談「ここに居付きて五十年」  
 石鏡  
 二ヶ月で生計自ら六へるたつる菊師とぞ  
 石鏡  
 菊人形虻の飛び交ふ千早攻め  
 さざ  
 菊人形直衣の菊むらに斑ありて  
 さざ  
 菊人形池田屋騒動真つ只中  
 石鏡

菊人形吉良上野介平伏す  
 石鏡  
 大砲おおづつを差配の隊士菊人形  
 石鏡  
 繕ひの蘭草はヤロウ菊人形  
 石鏡

\*ヤロウは蘭草の中でもっとも強靱なもので畳などに使う

二本松駅にも佇たせ菊人形  
 石鏡  
 菊人形面輪面輪に目がゆきて  
 石鏡  
 菊人形胸元疎ならず密ならず  
 石鏡  
 馬つこはいささか手抜き菊人形  
 石鏡  
 菊人形「たいしたもんだ」とこゑ拳がり  
 石鏡  
 在来線乗り継ぎ見ゆ菊人形  
 石鏡  
 けふ初日の面うち晴れて菊人形  
 石鏡  
 臙脂なる菊を鎧の草摺に  
 さざ  
 白菊の束帯召せり後醍醐帝  
 さざ  
 観菊の接待二本松婦人会  
 石鏡  
 独眼流正宗の菊差し替え中  
 石鏡

### 菊脛きくすね

内々の話にも触れ菊脛  
 宿好  
 酒注げば朗々と鳴る菊脛  
 宿好  
 菊脛のこる余生をどう使ふ  
 宿好  
 云はるるまゝ膝を崩して菊脛  
 宿好

### 磯菊

磯菊の汐傷みして黄の名残  
 随笑

### 海羸廻しかいり

浜っ子のべえべえ言葉海羸廻し  
 ばら

### 運動会

綱引のづるづる旗色悪くなる  
 燕音  
 空伝ひ町内運動会のこゑ  
 燕音  
 ちびっこの駆け足ばたばた運動会  
 宿好  
 老い進む三町内の運動会  
 宿好  
 運動会近しよプラス風に乗り  
 随笑  
 臙毛濃き運動会のお父さん  
 随笑

ひらがなで大きく書かれうんどうかい  
 石鏡

運動会みんな手を挙げゴールイン  
 石鏡  
 ちよこまかがちよこまか抜いて運動会  
 石鏡  
 徒競走シャツターチャンス一度きり  
 石鏡  
 少女等は昔ブルマー運動会  
 石鏡  
 手と脚が弾んでならぬ運動会  
 暮津  
 運動会びりつけつにも湧く拍手  
 暮津  
 一等は万歳三唱運動会  
 暮津  
 二等賞は万歳二回運動会  
 暮津  
 三等はえいえいおうの運動会  
 暮津  
 目の前で抜かれてしまふ運動会  
 暮津  
 運動会必死になる顔ならぬ顔  
 暮津  
**芋煮会** 芋煮  
 見渡羽前長崎して芋煮の鍋の据えどころ  
 随笑  
 芋煮鍋そら嘖く芋をさあさらえ  
 随笑  
 鍋蓋におたまの鎮座芋煮会  
 随笑

芋煮会差し入れありぬ香の物  
芋煮会蠅も仲間に入りたがる

随笑  
随笑

両の掌を湯呑みにぬくめ御命講

随笑

若冲忌

若冲忌鯉に遊ばせ貰ひをり

随笑

お手綱のこよなき真白御命講  
御命講芙蓉に洩れて医院の灯  
人騒の墓域に及ぶ御命講

随笑  
随笑  
随笑

鶏頭の駈けだしさうな若冲忌

随笑

雀等も連れ立ち御宗祖日蓮忌

随笑

保己一忌

保己一忌

随笑

池上本門寺 日蓮忌屋から混める池上線

随笑

広重忌

箱根越え胸毛の馬子図広重忌

随笑

風吹けば風のいろ帯ぶお万灯

随笑

留女の藤沢宿図広重忌

随笑

万灯の傘浮き上がり浮き上がり  
本門寺坂下に詰めお万灯

随笑

御命講

万灯

随笑

日蓮忌 お会式

さきがけの万灯一つ橋渡り

随笑

お会式の赫つと灯の入る妙見堂

随笑

万灯引く衆の白足袋白法被

随笑

お会式の触れ書き杉の板扉に

随笑

万灯引く法被に山号寺号かな

随笑

堂前に靴の累々御命講

随笑

池上の万灯の湧く星のそら

随笑

御命講鳩の目をして祖師さまは

随笑

万灯の花懐といふところ

随笑

万灯に子を高々とてんぐるま

随笑

うそ寒

夜風出づ万灯いろの綿飴に

随笑

うそ寒の毘羯羅大将より拝観

随笑

団扇太鼓紺の腹掛けして搏てる

随笑

「模聞雅話」鬼の角切りうそ寒し

随笑

うち過ぎぬ団扇太鼓の二波三波

随笑

うそ寒の湯揉み赤帯赤湯文字

随笑

後の月

庭草の二三供へて十三夜

随笑

うそ寒の頬つりあがる円空佛

随笑

庭木より栗名月を外し見る

随笑

組織や器官を出来るだけ生きている  
状態に保存する技法

随笑

家人よりけふよと云はれ後の月

随笑

うそ寒しプラスチックてふ手法

随笑

もう一度見てから寝ねん後の月

随笑

佛性はここにうそ寒神經網  
傲漱石（仏性は白き桔梗にこそあらめ夏目漱石）

随笑

履物に妻の温みや後の月

随笑

うそ寒の犀に向ひてグツドバイ

随笑

やや寒

やや寒の鯉にゆらりと鯉寄りて

随笑

うそ寒の厨に水の吸はるゝ音

随笑

やや寒の朝湯文人気分かな

随笑

肌寒や雨の青どんぐりを見て

随笑

稍寒の投函の音聞いて去る

随笑

朝寒

随笑

秋小寒地魚まとめ買ひしたり

随笑

魚にもある唇やや寒覚えけり

随笑

朝寒の神道のぼる下駄の音

随笑

草津朝寒我慢比べの湯となりぬ  
随笑  
朝寒やまたあべこべに肌着着て  
随笑  
朝寒空「けふははつきりしませんね」  
寒暑  
旅立ちや朝寒の息弾ませて  
素抱  
朝寒し犬は糞まるもの糞りにけり  
石鏡

### 夜寒

夜の寒し一枚多くはおり出づ  
燕音  
草津夜寒こんな湯加減殺生な  
随笑  
やせ我慢して入る夜寒のぐらぐら湯  
随笑  
高山に思ひ知らさる月夜寒  
素抱  
草洪のにほひ抜けずよ夜寒の湯  
素抱  
夜寒さがちやがちやらねば締まらぬ戸  
暮津  
夜寒さの暖をとるとて白湯を呑む  
暮津

### 冷まじ

子規庵の素通しガラス戸冷まじや  
随笑  
布袋台金冷まじき機関樋  
素抱

### 火恋し

川上澄生  
浜っ子の澄生のガス燈火恋し  
燕音  
煤けても不動明王火恋し  
宿好  
ブラウンシチュウ灯と火恋しき頃となり  
随笑  
万願寺とうがらしとや火恋し  
石鏡

### 雀蛤となる

雀蛤になること容易なこつちやない  
鳩信  
物数奇がかうじて雀蛤に  
鳩信  
遠からず蛤となる雀これ  
燕音  
雀蛤と化せる次第をつゆ知らず  
随笑  
旅に出て居る間に雀蛤に  
素抱  
蛤になれざる雀の影あそび  
素抱

### 露寒

露寒やるると草に潜むもの  
暮津

### べったら市

がたぴしとべったら市の屋台組む  
ばら

観音の千手は剣冷まじや  
素抱  
冷まじや地獄絵仕置の白女體  
素抱  
和ろうそく作り冷まじ親爺の手  
素抱  
スダジイの根の暴走の冷まじや  
石鏡  
冷まじや栗の端の蠢けはだつは  
暮津  
冷まじや大根下ろしの山素しろし  
暮津

### そぞろ寒

一室に木乃伊六體そぞろ寒  
燕音  
そぞろ寒誘へるものに秒針音  
随笑  
そぞろ寒自律神経系標本  
石鏡  
道中飛脚奉納燈籠そぞろ寒  
石鏡

### 身に入む 身に沁む

身に沁みてナイルの青の石像護符  
燕音  
養源院  
宗達の竹描の象身に沁みぬ  
宿好  
曲り屋の遠野民話の身に入むよ  
寒暑  
身に入みて湯屋閉屋の主の辞  
石鏡

べったら市べったら市と訪ひ行きぬ  
燕音

もう一枚上からはおりべったら市  
燕音  
べったら市ひやつとする日続きけり  
燕音

もちこたふべったら市の空模様  
燕音  
もちこたふべつたら市の空模様  
燕音

角店に人のはりつくべつたら市  
燕音  
べつたら市麴てかてか粒立てり  
燕音

あびせらるべつたら市の売口上  
燕音  
売ごゑの味見味見とべつたら市  
燕音

折り返しべつたら市を物色す  
石鏡  
落花生 ピーナツ  
随笑

### 馬鈴薯

薄塩に定年過ぎのピーナツツ  
随笑  
馬鈴薯の宅送届く紋別産  
さざ

### 甘藷 藷

あかあかと藷洗ひあげ終戦日  
ねず  
観自在菩薩藷の蒸ふけたるを  
もも  
\*仏前

檻褻くそに云はれ折らるる蒸し諸  
 さま  
 ぶかし諸あてがはれをり留守居役  
 ばら  
 諸蔓を衾ちろの鳴けるなり  
 ばら  
 諸洗ふ笠置シヅ子のブギウギに  
 ばら  
 諸の葉に大いなる穴開けし奴  
 鳩信  
 疎開地の機銃掃射の諸畑  
 鳩信  
 諸堀の意を強うせる風が吹き  
 鳩信  
 雑俳と諸作っても作っても  
 宿好  
 莫迦戦争諸が主食の座につきて  
 随笑  
 いいとこどりして立つ句評ふかし諸  
 随笑  
 雨降嶺晴れ諸の畝々もつこりと  
 寒暑  
 人前をもう憚らぬふかし諸  
 寒暑  
 妻  
 ふかし諸なんつたつて戦中派  
 寒暑  
 お諸蒸す土偶体形疎んずも  
 寒暑  
 これ当り諸は流行りのベニアズマ  
 寒暑  
 浄見寺 大岡越前守墓所  
 石鏡  
 忠相の生れ在所や諸島  
 石鏡  
 美味けりや佳し諸の器量を云ふ勿れ  
 石鏡  
 乾燥諸焙れば月の隕石孔  
 暮津  
 ぶかし諸皮の赤さの切なけれ  
 暮津  
 大学芋食うて戦争あやしまず  
 暮津  
 自然薯 山芋 とろろ汁  
 じねんじよ  
 山の芋 自然薯掘る 自然生  
 燕音  
 旅先の雨脚見つゝとろろ汁  
 随笑  
 うまの合ふ夫婦となりてとろろ飯  
 随笑  
 啜るたび爺むさくなるとろろ飯  
 随笑  
 大盛の飯に穴開けとろろ汁  
 石鏡  
 山芋の播粉木に鉢踊り出す  
 随笑  
 山芋の黄葉せる道のみけり  
 燕音  
 一家言あるべし山芋掘りとして  
 随笑  
 根性の据はり方見ゆ山の芋  
 随笑  
 何で臍曲げてしようた山の芋  
 随笑  
 いち早く自然薯黄葉狐雨  
 ねず

自然薯の包引つ提げ長身に  
 もも  
 とつかかる自然薯掘りの一本目  
 燕音  
 この山の自然薯あらかた抜かれしよ  
 燕音  
 妙本寺  
 山門下自然薯掘の自転車か  
 随笑  
 三浦晴子さんより自然薯を賜る  
 自然薯の偏屈を押し通す形  
 随笑  
 自然薯のそれと知らるる長包み  
 随笑  
 念の入る自然薯の荷を解くとせん  
 随笑  
 自然薯とおもふ荷ほどこき面白く  
 随笑  
 自然薯の荷を解くここをかうやつて  
 随笑  
 自然薯の包み開けば土の香す  
 随笑  
 髻づらの自然薯蝦夷の顔したり  
 随笑  
 自然薯のかうなるまでの紆余曲折  
 随笑  
 自然薯の汝ならではのねぢれやう  
 随笑  
 自然薯の異形は美味の証にて  
 随笑  
 自然薯の髻蓄ふは富貴の出  
 随笑  
 ひようひよう風のごと来て自然薯掘る  
 随笑  
 自然薯播る妻は大佛坐りして  
 随笑  
 自然薯のいやに素直な栽培物  
 寒暑  
 自然薯のすすきの褥取り外し  
 寒暑  
 自然薯の包み方からして律義  
 寒暑  
 三浦晴子さん  
 自然薯の掘り手巧者よ汝が夫は  
 石鏡  
 お見事と云ふべき自然薯屈きけり  
 石鏡  
 一筆箋付の自然薯屈きけり  
 石鏡  
 自然薯のハナガサそこを掘れといふ  
 暮津  
 自然生 背筋一本通りたる  
 \*ハナガサ||さく果  
 じねんじよ  
 横たはる様は涅槃の自然生  
 随笑  
 自然生頂く果報ことしもや  
 石鏡  
 自然生届けに長身配達夫  
 石鏡  
 居心地のよくてかうなる自然生  
 石鏡  
 じねんじよの花笠ひらひら駿河晴れ  
 暮津  
 じねんじよの好みの土は粘土つち  
 暮津  
 じねんじよの髭火で焙り擦り仕度  
 暮津

零余子 むいかし ぬかご

日表に痘痕の零余子法師かな  
晩年の既に始まる揚げ零余子  
むかご落つ人目届かぬ所かな  
ほくと零余子噛めば中年過ぎてをり  
まあなんて言おうかこの味むかご飯  
コンビニで零余子なんぞを買おうとは  
鉛筆でむかご落として一つとや  
金屎かなせの如き零余子を掌に下山  
そこそこ採れ零余子御飯に一寸足らず  
零余子黄葉始まつてをり覚圓寺

隼人瓜 はやとがり

一段と今朝は冷え込む隼人瓜  
もちまへの力出しきる隼人瓜  
隼人瓜姿無類の冬に入る  
冬に入る顔決め込んで隼人瓜

爺さまの口許に似て隼人瓜

隼人瓜弾けば陶の音したり  
隼人瓜当世風を通しけり  
隼人瓜ポパイのつくる力瘤  
隼人瓜ポパイに敵ふものはなし

蕎麦

今云うたそれがよささう胡桃蕎麦  
蕎麦啜る音に人品骨柄出づ  
しつちやかめつちちやか団体客のわんこ蕎麦  
風冷えて蕎麦うまき日の上根岸  
うちまじるもの一つ無き蕎麦畑

芦 葭 葦 芦原

強東風や焦げ目の残る芦の節  
弁慶蟹葭の葉騒に目を上げぬ  
一吹きに鯉魚風葭を鳴らすなり  
直伝の型歴然と蘆鷺圖

燕音

宿好

石鏡

石鏡

石鏡

さざ

鳩信

随笑

随笑

随笑

寒暑

寒暑

ねず

もも

もも

鳩信

芦騒の煽りくらひてコメツキガニ

寒暑

芦刈

蜘蛛の囀もあさみどり帯ぶ芦の間に

素抱

刈り頃の芦擦りあふて湖日暮

燕音

チゴ蟹の小心者に芦の風

石鏡

萱刈る

行々子もぐり込んだる葭っ原

暮津

萱刈の廃る日そこに見えてをり

石鏡

葦の間の方寸の水澄みあたり

暮津

萩刈る

草の絮飛びそむ空の雲母刷きらずりに

ばら

一頻り萩刈る音か高山寺

宿好

草の絮何時までつづく有頂天

鳩信

薬掘る

昼月の辺りで穂絮ついと消え

宿好

その君が薬掘りとは爺むさい

寒暑

手に取りぬ何の錆穂か判らぬを

寒暑

破芭蕉

萱初穂泥亀新田たりし地に

石鏡

風体をとやかかく云はれ破れ芭蕉

燕音

秋草の風に打合ひ古ぶ穂よ

石鏡

屈服の仕方まちまち破蓮

さざ

穂絮の他軽んずものに植物通

石鏡

一念にかられて来たる敗荷

ばら

穂絮も我もいづれは消えてなくなる日

暮津

敗荷を見にゆくといふ酔狂な

寒暑

蒲の穂絮 蒲の絮

蒲の絮飛ばす合図をそぞろ神

石鏡

敗荷より俳句授かるまで長居  
大船植物園  
敗荷にたぶらかされてゐることし

素抱

敗荷に風のつれなくなりけり

素抱

山妻旅先等にて路傍の石を拾い集め来る癖あれば

敗荷の顔向けならぬてい体ていに悄気

素抱

石拾ふ要領をもて椎の実も

石鏡

敗荷の無頼たること尚止めず

素抱

椎の実はあらかた落ちたか落ちたやう

石鏡

敗荷の全うせるものここに見き

素抱

まてば椎

腹藏なき敗荷となり天が下

素抱

まてば椎若葉もりもり小公園

随笑

世間体そんなものはと破蓮

石鏡

甲斐甲斐しく若葉日を撥ね馬刀葉椎

随笑

敗荷の辺に千年も居ることし

石鏡

栗 栗飯 みなし 虚栗 焼栗 落栗

随笑

敗荷に天下泰平たるまなざし

石鏡

青栗 山栗 毬栗

随笑

物音をたてたくなりぬ敗れ蓮

暮津

栗をむく間縫ひ雑用足しに妻

さざ

蓮の実飛ぶ 蓮の実

旅先の加賀の地酒に蓮の実

宿好

栗剥けば手が莫迦になり小休止

暮津

蓮の実の青き実弾抜きて見す

素抱

山と盛る栗をののしりののしり剥く

暮津

榎の実

三乗 選ぶなら榎の木食頭陀行派

随笑

剥きづらき栗を手にして長丁場

暮津

椎の実

椎の実にづるりと滑りずでんと尻

石鏡

栗剥いて見るのもいやといふ顔す

暮津

栗飯一家よく喋ること喋ること

ばら

高山の護国神社の栗小粒

素抱

土産の栗栗飯にしてなほ余る

寒暑

風小僧落としてゆきぬ山の栗

石鏡

栗飯の二膳目もまたうはの空

寒暑

毬栗の淡彩愛づる草の上

石鏡

栗おこわ持つて実家へ妻いそいそ

素抱

落栗の路考茶いろ帯び幾日経し

石鏡

誕生日より栗づいて栗ご飯

石鏡

団栗 どんぐり

栗ご飯お焦げうれしく釜払ふ

暮津

どんぐりも首をすくめる寒さかな

宿好

栗飯の栗をごろんと箸に乗せ

暮津

どんぐりの帽子がとれて仕舞ひけり

宿好

栗飯の栗の角々灯に栄えて

暮津

青どんぐり湯川高鳴り流れけり

随笑

転げ出て故山の匂ひ虚栗

ねず

日々鈍る足を鍛えにどんぐり山

随笑

香ばしき焼栗御説ごもつとも

燕音

肌寒や雨の青どんぐりを見て

素抱

平野 民宿の茶請けの栗の渋皮煮

燕音

青どんぐり雨明りして山の道

石鏡

落栗の真新しきはこれとこれ

燕音

団栗一つ供ふ湯神の御神体

寒暑

十六夜の小腹に納む里の栗

燕音

日光澤温泉 団栗の青きが打ちて磐の音

寒暑

青栗にさしもの秩父の雨上がる

宿好

野毛坂に団栗落ちて転ぶ距離

寒暑

栗硬きは茹で足らざるや出来悪しや

随笑

団栗落つ得たりや応と鋪道受け

寒暑

茹で栗の当りばかりと言う訳には

素抱

水楡の実の落つなかに休憩す

素抱





雑草の実にもうち捨て難きもの

石鏡

列車音稲田をキタカタキタカタと

石鏡

牛膝あらいしぢ

みのこづち払へるこゑの大わらは

石鏡

鶴巢村刈田越しなる円空堂

素抱

あらぬこと言ひては払ふ牛膝

暮津

スクーターとばす農道刈田晴れ

素抱

草虱くさいしらみ

草虱まだくつつ着かぬ穂の若し

寒暑

俳諧の落穂拾いの夜は更けて

寒暑

草虱はたき合ひある音のする

石鏡

稲架はざ 稲架ぼうち 稲架はく

もも

ホームにて振り払へるは草虱

暮津

稲架棒の取り入れ後もふんばれり

もも

稲刈

鬼無里晴れ稲を刈る音蕎麦刈る音

ねず

稲架棒の使ひ古しに露降りて

さざ

羽前山辺羽前金沢かねさわ稲刈りどき

随笑

日差しにも奥行のある稲架襖

鳩信

稲刈りがもう済み虚空蔵さんの村

石鏡

空稲架はあたかも牛の四つん這ひ

素抱

稲田

稔田に交りて稗のまんめんじん

随笑

出で立ちは郷士のさまに群むれ稲ぼうち棒

石鏡

鈍行の中まで稲田の照り返し

随笑

稲を焼くうしろ鬼無里の真暗闇

ねず

稲田描く油絵の具を盛り上げて

寒暑

稲殻もみの音の中なる暁蝸

暮津

稲殻枕爽涼の声挙げにけり

暮津

七竈ななかまどの実

ななかまど白根百度霧流れ

ばら

南天は本来のいろ美濃馬場ばんば

ばら

乗鞍乗鞍高原のことし色悪しななかまど

素抱

比叡坂本より一雨あるか実南天

燕音

梅檀せんたんの実

梅檀の実のまだ青き寺に寄る

随笑

珊瑚樹の実やご本尊修復中

素抱

藟ももの実

藟の実の風味を鴟の熟知せり

もも

梅擬つらねの霧に目の慣れ梅擬

鳩信

藟の実の数ほど福が来ればいい

随笑

日金閣寺が当り轉りさうな梅擬

宿好

藟の実のあらむかぎりを鴨漁る

随笑

色鳥銀閣寺のこゑを引出す梅擬

宿好

櫨はせの実

つぶらなるなんきんはぜの実好日や

素抱

梅擬この粒花があんな実に

暮津

南天の実 実南天

実南天笑みのこぼるるばかりなり

ねず

まだ青実なれどそのうち梅擬

暮津

尾長の目南天の実をズームイン

さざ

爆ぜるよな朝の鳥つらねつるもどき

さざ

日当りに南天の実の笑初

さざ

もたついてつるうめもどきといひなほす

石鏡

英蒨の実 がまづみの実

がまづみの實やこの谿の鳥たちに

燕音

どれ一つ話のたねに仏手柑

石鏡

がまづみを漁れる小鳥無我夢中

燕音

檸檬 レモン

レモン添え外食めきぬ牡蠣フライ

寒暑

がまづみの色づく頃の山の湯に

素抱

金柑

金柑のありたけ点る観音堂

寒暑

玫瑰の実 はまなすの実

はまなすの実の生る頃の密航者

寒暑

金柑を生らせ死ぬまで棲む家ぞ

素抱

橙 かぼす

通るたび橙の木の似合ふ家

ねず

和田浦の金柑海に照り負けず

石鏡

臭橙採る畑のあなたに周防灘

鳩信

酢橘

酸橘得しされど秋刀魚は旬ならず

素抱

相まみえ臭橙の里の大日如来さん

鳩信

柚子

長湯の子柚子もろともに掬はんか

ねず

文旦の天然のいろ出し渋る

ばら

柚子絞り酢牡蠣ほたは旬のもの

宿好

文旦は親分その他はその子分

素抱

皺む柚子若年寄といふ風情

随笑

仏手柑

総領事ハリス好みの仏手柑

鳩信

並び泛く柚子の寒山拾得と

石鏡

柚味噌

文面は至れり尽くせり柚味噌のこと

寒暑

種採の封筒ふうと膨らませ

暮津

万年青の実

いちばんの庭の古株瘦万年青

ばら

種採りをしたり片づけごとしたり

暮津

粟田御所大玄関に万年青活け

燕音

種採のほか用無き庭となり

暮津

先代は大の庭好き万年青の実

燕音

もそもそと種採るほかに人気なし

暮津

古俳諧ほどの目出度さ万年青の実

素抱

二回目の種を採るとて小雨の中

暮津

万年青の実陳ていやはや面白し

石鏡

種を採る蝶々夫人の唄声に

暮津

種瓢

蕪村また大器晩成種ふくべ

随笑

晩節を種採ることに安んじては

暮津

かにかくに人は生きやう種ふくべ

寒暑

秋寂び

秋寂びて縦一文字手術痕

鳩信

種茄子

種茄子に晴れてまた降る雨のあり

もも

箒・塵取・秋寂ぶ板の間共同湯

随笑

種採

種を採る音の暫くしてみたり

寒暑

秋深し

「他不知思染井」に深む秋

燕音

下駄履きの種採日和とはなりぬ

暮津

禪寺の油土塀に秋開けて  
秋深む観音一体修復中

宿好  
宿好

メイプルのみぢ押し葉にして機内  
言葉かけ合ひ楷樹のみぢの愛好家

ばら  
ばら

子規庵の見取り図秋も深まるに

随笑

冬近し 冬隣

もみぢ葉は真言陀羅尼 義趣を秘む

宿好

「ただいま」は隣のぼうず冬隣

宿好

諸鳥のこゑも染るやもみぢ御所

宿好

これ煮れば冬が近づく焼豆腐

随笑

さるすべりもみぢ見ながら渡り廊

宿好

風の日は湯が愉しくて冬隣

素抱

横笛をおもひ染めたる色もみぢ

宿好

新聞の切り抜きジョリジョリ冬隣

石鏡

落柿舎の虫喰いもみぢ栞とす

宿好

冬迎ふ暮しのリズムアンドンテ

石鏡

一葉よりもみぢ始まる曼珠院

宿好

反古ひねる快感冬はもうそこに

石鏡

葉末よりもみぢ始まる詩仙堂

宿好

紅葉 もみぢ もみぢ葉

心鏡に写し参らむ照もみぢ

宿好

紅葉川 紅葉山 紅葉冷

つまらなき色して梅のもみぢ葉は

随笑

もみづる

もみぢして学問処の孔子木

寒暑

もみぢれりオランウータンの体毛も

鳩信

実習の指圧のいろはもみぢの手

素抱

手始めに山の頂もみぢれり

素抱

山寄りに町は造られ朴もみぢ

素抱

サワグルミ端正な葉のもみぢれり

素抱

赤もみぢ黄もみぢとことん愉しめり

素抱

梓川ヤナギもみぢの散り込む瀬

素抱

秋楡のもみづる日比谷公会堂

濃尾バス尻を振り振りもみぢ山

素抱

天下の險もみづるにせよせぬにせよ

石鏡

もみぢれるカナダを机上プランかな

ばら

人體展もみづるものに骨格筋

石鏡

大櫓もみづる「天下禅林」に

燕音

そこはかともみづる沼の名無し草

石鏡

不細工は不細工なりにもみぢれり

宿好

てつきりもみづる筈の漆が小火程度

石鏡

虫瘤ももみづる頃となりにけり

宿好

宿の餉にけとばしの出で紅葉季

ねず

もみぢれる高雄ホテルの絨緞も

宿好

天柱山その脇山の紅葉かな

もも

もみぢれる楓のいろは兵火のいろ

宿好

紅葉山人語鳥語に匹敵す

鳩信

もみぢれる寺に預かる幽霊凶

宿好

拾ひ上ぐ紅葉の中の艶紅葉

燕音

雨の柿人間くさくもみぢれり

宿好

上々に紅葉仕上がり龍王峡

燕音

ぼけ封じ三尊に山もみづるよ

随笑

息づける紅葉に急所あるごとし

燕音

色鳥来これだけ森のもみぢれば

随笑

神業の柱状節理崖紅葉

燕音

もみぢれる山の快挙と申すべき

寒暑

神護寺のここで一服紅葉茶屋

宿好

山深くもみづるものの一変す

寒暑

神護寺の紅葉明りに一凡夫

宿好

ロッジ風湯宿丸太ももみづるか

寒暑

祇王寺の日暮紅葉の佛間にゐ

宿好

今正にもみづる加仁湯の掛け湯浴ぶ

寒暑

祇女尊女祇王尊女と紅葉観る

宿好

日光沢しぶける岩ももみづらん

寒暑

紅葉冷え佛御前のおん膝も

宿好

兵火八度かうむる寺にして紅葉	天竜寺	宿好	山麓と温度差五度の早紅葉	ロープウェイ	寒暑
永観堂早紅葉雨に色づけり	さもみじ	宿好	履物のとり散らかって紅葉宿	加仁湯	寒暑
朗々とわたる紅葉の回廊ぞ	東福寺	宿好	団体さん今到着の紅葉宿		寒暑
会心の紅葉むらぎも熱くせり		宿好	良寛の草書さながら色葉散る	いろは	寒暑
裸木と紅葉半々山手線		宿好	紅葉沢落石すんでのところにて		寒暑
間引かれて残る紅葉をうち仰ぐ		宿好	紅葉して引湯泉質二系統		寒暑
それならと紅葉の頃の宿をとり		随笑	乗鞍の紅葉如何と登りつめ		素抱
この彩に安んじ梅の紅葉せり		随笑	湖畔亭紅葉そこそこ客そこそこ	檜原湖	石鏡
打ちつけてめりこむ魚板紅葉寺		随笑	ポスターに紅葉づる鎌倉始発駅		石鏡
山麓駅造花紅葉も酣に		随笑	これはこれだと云ひつゝ桜紅葉褒む		石鏡
やあ紅葉八番札所のぽっくりさん		随笑	紅葉冷猛禽類は眼をつぶり		石鏡
ぼけ封じ肌着購ふ紅葉寺	御婦人	随笑	吾に優るもみぢ葉拾ひ来て見する	孫美雨	石鏡
おびんづるさまに前山紅葉して		随笑	雨ありて一色増しぬ山紅葉		石鏡
同型の楓紅葉の全しや		随笑	紅葉谿手すりがありて大助かり	鳩ノ巢溪谷	石鏡
塩原高尾辞世句 寒風にもろくもつる紅葉かな			紅葉づれる断崖秩父古成層		石鏡
雪の上に高尾ゆかりの寺紅葉		寒暑	紅葉川聞けばカヌーで下るとよ		石鏡
南部ばやし造花紅葉を稚児負ふて		寒暑	鳩ノ巢の紅葉愛でつゝ見ず知らず		石鏡
紅葉冷え薄着後悔してみても		石鏡	紅葉狩こゑ掛けられてこゑ返し		石鏡
二つ目の吊橋こども紅葉佳し		石鏡	紅葉狩雨の足許ばかり見て		石鏡
山女釣れ紅葉に腹を返しけり		石鏡	紅葉狩眼鏡を拭いてさあこれから		石鏡
滝見茶屋ざつくばらんな紅葉かな	アフラチヤン	石鏡	紅葉見る吾らに 階魚道にも	きさばし	石鏡
油漑青紅葉づる日原街道ゆく		石鏡	無線もて後尾と交信紅葉狩		石鏡
山寺の紅葉の日照時間かな		石鏡	危ふきに女近寄る紅葉狩		石鏡
明るさは桜紅葉に優る君		石鏡	紅葉見の序で氷川の三本杉		石鏡
大巖が行く手を塞ぐ紅葉川		石鏡			
<b>紅葉狩</b> 紅葉見る			いち早く自然薯黄葉狐雨		ねず
紅葉狩えらい上りとなりにけり		さざ	そろそろと野老黄葉の竹のぼる		もも
紅葉狩薩摩おごじよのバスガイド		鳩信	日が差して境内檜黄葉いろ		さざ
紅葉狩落柿舎辺りで日が暮れて		宿好	凋落の一步手前の黄葉とも		さざ
好事家の嵯峨野もみぢといふを見に	常寂光寺	宿好	そこそこに山吹黄葉したりけり		さざ
町内の紅葉処を一巡り		随笑	独特の板谷楓もみぢの明るさで	いたや	さざ
取敢へず終点で降り紅葉狩	女夫淵温泉	寒暑	うねる丘ぶだう黄葉の幾区画		さざ
紅葉狩内助の功に報ゆべく		寒暑	いくらかは山吹黄葉してゐたり		ばら

葉先まで綺麗に蘿蔔黄葉して  
 葛黄葉遠慮がちなる色合ひに  
 神品の桂黄葉とうち仰ぎ  
 山芋の黄葉せる道のみけり  
 市庁舎のユリの木黄葉始まり  
 初老とは櫛黄葉を潜るに似て  
 くわりん皆もがれし後も黄葉して  
 胸を張るスクリバ石像黄葉冷え  
 貴人のごとく桂の黄葉みる  
 天つ日に透けざるは無し沢黄葉  
 捨聖片瀬の黄葉舞ふ中を  
 自然薯黄葉城山の径明るうす  
 亜高山帯のみぢの色はと見て  
 乗鞍の黄葉にスリッブして下山  
 栃黄葉打つ雨音に包まれし  
 阿弥陀光桂黄葉の押し照るは

ばら  
 鳩信  
 燕音  
 燕音  
 宿好  
 宿好  
 宿好  
 宿好  
 随笑  
 寒暑  
 寒暑  
 寒暑  
 寒暑  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱

乗鞍の雨来て黄葉素つ飛び  
 檜の木沢もとより水檜黄葉して  
 黄葉どき髪膚完爾と硫黄泉  
 乗鞍の黄葉嵐と云ふに遭ふ  
 先づ洒落た葉なりハルニレ黄葉とよ  
 週末のユリの木黄葉散り空きて  
 湘南キャンパス黄葉のもの生演奏  
 零余子黄葉始まつてをり覚圓寺  
 照葉して五體あられもなき岩湯  
 雑木紅葉  
 金時山もこも雑木紅葉せり  
 自転車にて近場の雑木紅葉見に  
 柿紅葉  
 柿もみぢ柿に根負けして散りぬ  
 朝露のまだ干ぬ内の柿もみぢ

素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 素抱  
 寒暑  
 寒暑  
 寒暑  
 寒暑  
 ねず  
 石鏡  
 石鏡  
 石鏡  
 鳩信  
 もも

しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ  
 柿紅葉やつぱりよかつたこの径で  
 柿紅葉葉にしたき一級品  
 柿もみぢ明りに何ぞ云ひたくなる

漆紅葉

山漆紅葉急なり滝の前

櫛紅葉

ちよんちよん  
 〆と夏櫛紅葉したりけり  
 櫛紅葉十を数えて湯壺出づ  
 讚集めをり山中の櫛紅葉

銀杏黄葉

二大樹の銀杏黄葉の消耗戦  
 銀杏黄葉落つときスイッチバックして  
 大銀杏黄葉間引かれ素寒貧  
 縣廳前馳すバス銀杏黄葉いろ

燕音  
 宿好  
 宿好  
 随笑

水草紅葉  
 いち早く湯川水草黄葉せり  
 家鴨があが云ふなか水草紅葉せり

石鏡  
 随笑  
 石鏡

錦木

飛倉は野山の錦一っ飛び

鳩信

仁丹の看板のこる野の錦  
序の口の山の錦といふべかり

寒暑  
寒暑

蝦夷鹿のきよとんとせるに出逢ひけり  
猪みのしし

寒暑  
寒暑

紅葉且つ散る

紅葉且つ散りて溪流走らす

寒暑

利口者猪にまたやられけり  
川渡りかう来し猪と事細か

寒暑

黄落 黄落期

黄落のいてふ男時の杜抜けて

寒暑

余所者に聞かせて猪の悪さごと

寒暑

黄落の骨うづむなら西林寺

寒暑

かうすればああ出る猪のいと憎しと

寒暑

アムール虎右往左往の黄落期

寒暑

峡住みの畑作猪と根ン比べ

寒暑

乗鞍の巖も黄落せんとせり

寒暑

末枯うらがれ

寒暑

黄落上高地乗鞍林道の泡の湯で乗る五人組

寒暑

末枯れの百草を刺す野路の雨

寒暑

大正初期植ゑしカラマツ黄落期

寒暑

稽ひつじ 稽田 ひつじ

寒暑

黄落の雨の跳ね見ゆ木道に

寒暑

ひつじ田を田螺のあるく鬼無里晴れ

寒暑

木道の終端黄落振返る

寒暑

ひつじ田のほとりで列車列車待つ

寒暑

黄落どき葉っぱのフレディ舞ふ林

寒暑

ひつじ田の照る中往けば老け込みさう

寒暑

デイケアバス黄落に頭を振り振り来

寒暑

車輛音カタカタひつじの二番穂に

寒暑

鹿

文化の日

二階にて目覚まし鳴りぬ文化の日

鳩信

玄冬の地蛸粗塩すり込まれ

寒暑

新聞を裏返す音文化の日

鳩信

冬帝の欠伸催しさうな日々

寒暑

叙勲記事相も変はらず文化の日

宿好

冬將軍声を囁らして何を下知

寒暑

とつかかり要得ぬ電話文化の日

宿好

大衆魚真鱈の顔の冬親し

寒暑

文化の日形状記憶シャツ干せり

宿好

冬景色殊にビュッフェの垂直線

寒暑

にんにくと煙草の話文化の日

随笑

懐旧二句 たたみいわし焙る祖父の手見え冬へ

随笑

眼鏡拭き浄めて拝観文化の日

随笑

雲脂飛ばす遊すまびごとして冬机

随笑

文化の日ふうせんとうわた活け込みて

寒暑

ザトペック逝けると冬のチェコ通信

寒暑

魚食べ骨太らしむ文化の日

石鏡

ポーナスのもう出ぬ冬を迎えけり

石鏡

お年寄り許りの結社文化の日

石鏡

てのひらに移して冬の蟻這はす

石鏡

札つきの三毛猫通る文化の日

石鏡

遣り残すことがいつしか溜りて冬

石鏡

とり落とす画鋏を採す文化の日

石鏡

ファックスの吐き出す紙の徐々に冬

石鏡

文化の日柄の揃はぬ茶碗蒸し

暮津

同床異夢冬の花火を俱に見て

暮津

十一月

冬 冬帝 玄冬

玄冬の海に百の目啼鷗

さざ

日が入り過ぎても困る冬机

さざ

冬廁かはりばんこに席起ちて

さざ

川風に鼻昂然と冬磧

さざ

冬帝に云はれてそこに立つてゐる	石鏡	經濟てふからくり空回りして冬へ	宿好
様変れど冬の子供の遊びかな	石鏡	ブルゾンの浅きポケット冬が来る	宿好
潔き起床が凡て冬百日	暮津	けん玉の腰を屈めて冬に入る	随笑
ようそろと鴟添ひ翔ぶ冬の航	暮津	首筋の辺りがすうと冬立つ日	随笑
隣室てふ一語に冬の響きあり	暮津	アナウンサーけふ立冬と前置きし	随笑
<b>立冬</b> 冬に入る 冬来る		冬来ると櫂の聰明櫂の鈍 <small>ドシ</small>	随笑
冬立つ		質屋の路地小走りに冬が来て	寒暑
隼人瓜姿無類の冬に入る	燕音	寄せ植えの多肉植物冬に入る	素抱
冬に入る顔決め込んで隼人瓜	燕音	立冬と聞けば内心ああさうかと	石鏡
立冬に要らぬ雨など降り出して	宿好	冬に入り兀と鷺鳥の鼻の瘤	石鏡
立冬の床起ち羽織るもの探す	宿好	冬が来る睫毛のいっぽんいっぽんに	暮津
立冬の雨止んでまた降りさうな	宿好	<b>十一月</b>	
立冬の雨にユスリ蚊でんでこ舞	宿好	くしゃみして十一月に入りにつけり	燕音
立冬の我がものとなる新刊書	宿好	十一月しよっぱなの風邪貰ひけり	燕音
目につくもの皆がさついで冬は来ぬ	宿好	義理欠くまま十一月のこゑをきく	随笑
こめかみの辺りしゃきつと冬立てり	宿好	十一月ホンドタヌキの空寝入り	寒暑

十一月こんな日和が宜しくて	寒暑	神の留守ゴミの分別微に入り細	石鏡
何處となく尻に火がつく十一月	石鏡	<b>十夜</b> 十夜寺 十夜僧	
スケッチす十一月の塀と坂	石鏡	十夜講 お十夜	
<b>初冬</b> 初冬 冬初め 冬浅し		下着売るお十夜の灯のらくだ色	ねず
福助の面テ起こせる冬はじめ	ばら	十夜僧くわりんのごとき頭をしたり	ねず
コアラは初冬のユーカリの葉をよく噛んで	鳩信	お十夜の小菊嗅がれて買はれけり	ねず
一刹那初冬の鳶の影浴びぬ	宿好	十夜僧すつぽりと入る傘買へり	もも
性根据え大楠冬を迎へけり	宿好	十夜僧ずしんずしんと廊渡る	もも
冬浅き畳にひろく肌着類	随笑	十夜講持味出してひとくさり	ばら
冬兆すスパゲッティに鷹の爪	随笑	十夜講お婆の白河夜船かな	随笑
三毛猫の木に爪研ぐ冬はじめ	石鏡	十夜寺 <small>光明寺</small> 十夜	随笑
白湯もつてポットを充たす冬始め	石鏡	鎌倉の波おとなしき十夜かな	随笑
<b>神無月</b> 神在月		十夜法要堂を破らんばかりの鉦	随笑
槽底に豆腐屯す神在月	石鏡	堂抜いて心耳を洗ふ十夜鉦	随笑
<b>神の留守</b>		十夜講凡夫に交り尼ごぜも	随笑
神の留守タンス預金に手をつけず	石鏡	十夜講畳を擦りて坐につける	随笑

十夜僧肅と引声阿弥陀経 随笑 西の市人の流れに蹤くばかり  
 十夜法要囃す鉦方念仏方 随笑 お西さま戻りの道の落葉風  
 堂上に車椅子上げ十夜講 随笑 ぶつかられ躰くると西の市  
 婆の眼をこすりこすりつ十夜講 随笑 もういつぼん先の道だよお西さま  
 潮の香す十夜参りの戻りみち 随笑 西の市櫻落葉がすつ飛び来  
 婆同志お十夜の灯に濡れにくる 寒暑 お西さま神武景気の世は遠く  
 西の市 横浜真金町 一の西 お西さま 灯がついてよりの賑はひ西の市  
 三つ目で地下鉄を降り西の市 燕音 くらがりに襟を立てゆく西の市  
 真金町交番裏のお西さま 燕音 お西さま人出ぬうちの車椅子  
 灯が点り枯木の間のお西さま 燕音 起つ風に身震ひ一つ西の市  
 神鈴の三つは忙しお西さま 燕音 電球も黄金光りに西の市  
 半月に風の納まる西の市 燕音 角店で酒ひっかけて西の市  
 とつくりセーター人波をゆく西の市 燕音 西の市すれ違ひざま脂粉の香  
 射的屋の音の中抜けお西さま 燕音 西の市見て来て牛の荒井屋に  
 手締めには手締めの応酬一の西 燕音 バラ銭が箆に鳴り落つ西の市  
 暮津

## 熊手

かどはかされて熊手ゆくごと夕日の中 もも 熊手持つつ空似の人や西の市  
 新旧の熊手高々行き交へる 燕音 熊手売使い込んだる法被着て  
 熊手の値耳打ちすれば「そりや無理だ」 燕音 お手頃の熊手は店のとつつきに  
 値のあつて値の無き熊手よく売れる 燕音 熊手買う人を立見の人の群れ  
 むにやむにやとやりて熊手に値のつきぬ 燕音 温言のごとき日を載せ茶の咲けり  
 縁起物働きの熊手だよ 燕音 梅尾のお茶の実に凝る雨霽  
 熊手また売れたり火打ち石をちよい 燕音 茶の青実曰く「阿留辺幾夜宇和」とは  
 熊手買ふ気つぶのよさが身上ぞ 燕音 茶が咲けば清貧一途の明恵見ゆ  
 大熊手売れて手締めのよよいのよい 燕音 山茶花に大きく物の割れる音  
 にぎにぎしく熊手鯛やら小判やら 燕音 さざんかの目を泣きはらすやうな花  
 熊手売手持ちぶさたの股火鉢 燕音 磯滅の白山茶花でありにけり  
 どれにせうずんと下がって熊手見る 燕音 山茶花に毛虫一騒動ありぬ  
 派手好きの御代のきらきら熊手かな 燕音 山茶花のうち崩るるは自刃に似て  
 熊手持つ拳と拳行き交へり 宿好 ズバリ散る白さざんかでありにけり  
 手締めしてそれぞれ熊手又売れた 宿好 宿好

## 茶の花

## 山茶花



ざんかの会心の白龍安寺 宿好 柀の人目にふれぬ零れ方  
 山茶花も人もいずればガタツと来 宿好 柀の徒ならぬ花の数  
 蒼解く山茶花これは明明後日 宿好 柀の潰えし花の埃じみ  
 ざんかの落胆甚だかりしかな 宿好 柀や人を評すに言葉揺れ  
 山茶花の花立て直す暇無く 宿好 柀の銀漢なせる葉叢中  
 山茶花をいたぶる霜の手をゆるめず 宿好 肌身には感ぜぬ余震柀に  
 ざんかのはや花零す粗忽者 随笑 柀は気が付く前に散つてゐる  
 夕鴟お風入れのこゑの一撃ざんかに 随笑 八手の花 花八つ手  
 かうなつて仕舞へばざんか散る他ない 素抱 八つ手咲く  
 医師の云ふ風邪軽んぜず山茶花どき 素抱 蠅が脚長く使へり花八つ手  
 高々とざんか垣の壁なせり 素抱 蠅が来て蠅追ひ払ふ花八つ手  
 今朝みれば柀咲いてをりにけり ざざ はきはきと答へてをりぬ花八つ手  
 柀の小出しに咲ける角の家 ざざ めいっばい時間をつかふ花八つ手  
 柀が咲いて四五日ほど経つか ざざ 歩かぬは万病の因花八つ手  
 柀のこゑにならざるこゑ交す ざざ 作麼生そまさんと実ざくろ問ひ掛けくるごとし  
 花八つ手瞬くやうに朝が来て 鳩信 花八つ手瞬くやうに朝が来て

柀の花

掛かりつけ大田医院の八つ手咲く 燕音 古障子色の日差しが花石路に  
 首筋の辺りすうすう花八つ手 宿好 参道の両側に石路呼応して  
 はつらつと通りすがりの花八つ手 宿好 石路浄土金ンのくしやみをしたりけり  
 八つ手咲き板塀が反る日向路 宿好 郷土史に明るき人と石路をみる  
 花八つ手気安く詠めて貧乏性 随笑 石路の花世間話をせるごとく  
 改めて妻の冷え性花八つ手 随笑 虻去るとはつかに石路の独り言  
 花八つ手晦日払ひの世のはるか 随笑 仏壇の鉦の色もて石路が咲く  
 花八つ手敵の母艦が潜む庭 随笑 いっこうに何も起らぬ石路の日々  
 この路地の日照時間花八つ手 石鏡 咲き出せる石路に阿弥陀の頬ゆるめ  
 石路の花誰も来ぬ日と決めてゐし ねず 石路蓄む虻の翅音にあやされて  
 自転車に空気を入るる石路日和 ねず 二階鎌倉 大巧寺にて謡ひの稽古石路日和  
 家に居ることにおちつく石路の花 もも 石路日和とここでこれから何處へ行こ  
 庭に出て点呼取りたき石路の花 ざざ 石路綻ぶその数好日とや云はん  
 屹きつとして瑞鹿山の石路咲けり ざざ 褒貶は成り行き任せ石路の花  
 そこまでと云ひて出で来ぬ石路日和 ざざ 一団の黒の礼服石路日和  
 安穩に馴らされゆく身石路の花 素抱 安穩に馴らされゆく身石路の花

石路の花

送金を了へたる安堵石露の前  
雲脂光り衣をまるび落つ石露日和

素抱  
石鏡

袴着のとんとんのぼる五十段  
隣席の袴着袴こそつかす  
油断して地を擦るまいぞ千歳飴

さざ  
ばら  
鳩信

七五三 袴着 千歳飴

繰上げて海晴るる日の七五三

ねず

千歳飴一寸持たせて貰ひけり

寒暑

七五三あつさり組と凝り組と  
紅葉坂 伊勢山皇代神宮

鳩信

髪置

もどかしく磴を登るも七五三

鳩信

簪やりボンや髪置迎える子

寒暑

おねだりの僕は僕はの七五三

鳩信

落鱸 おちすずき はらふと

ぼつくりのしゃんしゃん歩き七五三

鳩信

落鱸漁東京湾のとば口に

石鏡

日の差しておべべほかほか七五三

鳩信

蕎麦刈

略服に済ますもよけれ七五三

燕音

鬼無里晴れ稲を刈る音蕎麦刈る音

ねず

七五三辺り走れる櫂の根

宿好

麦蒔

三世代みんなめかして七五三

随笑

秋つこと土地人の云ふそのみどり

素抱

七五三着くずれ直し処あり

寒暑

大根

七五三気ばってあげるお賽銭  
伊勢山皇太神宮

寒暑

大根の形よき葉に旭さし

もも

神の鳩そこ退けそこ退け七五三

石鏡

二股のすずしろ涅槃し給へる

ばら

袴着のそのままそのまま目つむるなよ

さざ

葉先まで綺麗に蘿蔔黄葉して

ばら

おんがひ 煤逃げの地は三浦半島大根台地  
御三方 せい 大根台地の風鳴れり

鳩信

切干に午後から波の納まりぬ

鳩信

大根の清さん水の流れ見て

随笑

切干は紐に跨り相模灘

鳩信

大根台地葉つばが眩し眩しとも  
三浦岬

随笑

割干に日の経ち方といふがあり

鳩信

大根を洗ふ機械か人氣なし  
ひしけ

素抱

鏡風切干は瘦せ細りけり

石鏡

大根畑西風に雀の顔細め  
にし

石鏡

割干の辺の雑談が最期となり  
下田総兄

石鏡

大根下ろし辛しと老いの舌曲る

暮津

浅漬 あしづけ べったら漬

石鏡

大根引

軽トラック横付けにして大根引  
三浦半島 盗人崎

石鏡

市初日べったら漬の値踏みせり

燕音

光降る大根台地の大根引

石鏡

宮内庁御用のべったら漬も売る

燕音

大根台地涯に狂ふ沖つ波  
はたて

石鏡

蒟蒻掘る

覆る白涛を背に大根引

石鏡

こんにやくの茎しげしげと見て秩父

宿好

潮けむり大根台地のどん詰り

石鏡

蓮根掘る

背をどつく新手の風や大根引

石鏡

蓮掘のここぞと力入るゝ顔

もも

天つ日と風を糧とし岬大根

石鏡

蓮根の連れ子つぎつぎ現はるゝ

随笑

崎人に白群青の空大根引く  
びやくべん

石鏡

蓮根の穴のあなたに黄泉路見ゆ

随笑

切干 割干

竹瓮

最上川あきつの止まる破れ竹瓮  
最上川べりに捨てられ古竹瓮

随笑  
暮津

冬日和忘れぬ裡に用を足す  
冬麗ふゆうらら 冬麗とうれい

素抱  
ばら

鼬いたち

ぎつくり腰悪寒は鼬のやうにくる

寒暑

湧水の冬麗の日を織り込めり

宿好

綿虫

綿虫清浄光寺、一ツ火 七句を割つて総本山に入る

ねず

冬麗の石尊浄土を踏みゆけり  
流木に冬麗の砂零しみぬ

随笑

綿虫に道を訊きゆく多聞院

石鏡

冬麗の砂山一つ作り去る

暮津

小春 小春日

鶇の目ついと流れて安房小春

さざ

冬暖の家鴨日和となりにけり

さざ

小春日に水栽培の根が出たか

鳩信

暖冬のいたづらに梅騙されて

石鏡

小春日に犀の短軀を横たへぬ

宿好

冬あたたかシルバー料金映画にも

石鏡

ポプコーン抛り込むとき小春雲

宿好

帰り花 返り花

石鏡

小春日に大滝秀治の話術冴え

随笑

水面を押しくる風や返り花

さざ

痴呆すすむ母と小春のメープルティ

石鏡

二度咲きの一つこつきり小米花

ばら

小春日の声が先づして猫がゐる

石鏡

ごたごたがやつと片付き帰り花

ばら

冬日和

ため息を一つつくごと帰り花

鳩信

ちよつとしたことできさかひ返り花

鳩信

落葉掃くことめんだうな目つきして

おいそれと返事も出来ず帰り花

宿好

躰なまらぬ程度にぎつと落葉掃く

暮津

わだかまりとある日解けて返り花

宿好

編みシューズ落葉の匂ひ搔きたてて

燕音

疎遠また致し方なし帰り花

石鏡

百段かみの上から落葉搔始む

宿好

水の上に返り咲くもの日曜日

石鏡

背負籠より十歩が程の落葉搔く

宿好

散歩道こんどは何の返り花

石鏡

落葉搔き朝から母の甲斐甲斐し

宿好

授かれる名案に似て返り花

石鏡

とある日の氏子総出の落葉搔

宿好

冬紅葉

石山の石壇々と冬紅葉

燕音

落葉搔擗大樹にとりかかる

随笑

冬紅葉俗塵払ふ麓寺西教寺

燕音

落葉搔擗の根っこをガリガリと

随笑

松蔭の教へしところ冬紅葉

宿好

植物園リヤカー持ち出し落葉搔

石鏡

紅葉散る 散る紅葉

祇王寺の籠もようと音してちるもみぢ

宿好

西の衛士詰所の前の落葉搔

石鏡

落葉 落葉掃く 落葉搔く

落葉焚 落葉風 落葉どき

さざ

落葉焚午後の落葉を加へけり

ねず

掃けば飛ぶ落葉始末に悪き日や

さざ

青き葉も意気のあがらぬ落葉焚

ばら

落葉風かさと賓度羅跋羅惰闇に	さざ	落葉日に日に少くなりて朝の舗道	鳩信
お酉さま戻りの道の落葉風	燕音	プールサイド雨の落葉のわっさわっさ	鳩信
酔漢の背を押す夜の落葉風	石鏡	落葉もて机塚埋めん合点じや	鳩信
遅ればせながら駈け出す落葉あり	もも		
一二枚落葉挾める葉水仙	もも	<small>*山東京伝机塚句碑 耳もそこね足もくしけてもろともに 世にふる机なれも老たり</small>	
落葉径小さき流行の犬つれて	さざ	梅落葉散るにまかせて始末せず	燕音
日にまどろむ幹にぶつかる落葉あり	さざ	木の実どき落葉どき過ぎ落人村	燕音
葉柄の赤くて長き落葉得し	さざ	共同湯屋根の落葉の分厚かり	燕音
われ勝ちに櫛落葉の駈け出せり	さざ	犬の踏む櫛落葉の音ぬくげ	燕音
闇籠めに杜は落葉を匂はする	さざ	林道の細長落葉丸落葉	燕音
動物園ユーラシア区の落葉季	さざ	落葉道どっこいここに走り根が	燕音
水面の落葉も日差し受けながら	ばら	ユリの木の皆落葉して木偶の坊	燕音
落葉の灰風に壊れて仕舞ひけり	ばら	路上に舞ふ落葉とブエノスアイレスの雀	燕音
アナグマに落葉臭さと尿くささ	鳩信	切通し落葉朽葉を踏み付けに	宿好
落葉手にとり霊長目人間科人間	鳩信	落葉一枚頭に載せてちちんぷい	宿好
紛れ込む落葉一片脱衣籠	鳩信	葉を落とし櫛そびゆること想ふ	宿好
泰山木落葉木片降る如く	鳩信	西の市櫛落葉がすつ飛び来	宿好
落葉には熊手ステーキにはフオーク	宿好	図書館へ雨のユリの木落葉踏み	素抱
鳩止めて落葉終る木終らぬ木	宿好	寐溜めせるバクに落葉のはらはらと	石鏡
早々と葉落とし清々しき櫛	宿好	苑の芝桜落葉の突っ立てる	石鏡
読みさせば落葉済ませし木々が見え	宿好	縣廳前落葉と市バス駆け抜けて	石鏡
落葉駈く慌ただしさに立ち止まる	宿好	陸続と落葉降る中市バス来る	石鏡
葉を落とし往時のままの瘤櫛	宿好	落葉臭き街歩き来て天井	石鏡
この谿の落葉に肥ゆる二輪草	随笑	鈴懸散る一寸だらしのない木々で	石鏡
櫛落葉軽く肩打つ化石句碑	随笑	踏み鳴らし甲斐ある鈴懸落葉とも	石鏡
<small>光泉寺</small> 自転車が踏みつけゆきぬ楓落葉	随笑	練兵場たりし跡地を落葉馳せ	石鏡
公務員银杏落葉を踏みしめゆく	随笑	東京の落葉こそつく通院日	石鏡
桜落葉して界限を鏝びつかす	随笑	落葉踏みしだく韻きの新世界	石鏡
夜の落葉ヘッドライトをよぎり消ゆ	随笑	滑り台欠伸してゐる落葉どき	石鏡
皆楓落葉紛るゝものの無し	随笑	てのひらに桜落葉の移り香す	石鏡
弔ひに落葉臭さを持ち込みぬ	随笑	走り根を入れて落葉の吹き溜り	石鏡
落葉の中踏み当つ走り根の撓み	素抱	薬局の前を転べる落葉かな	石鏡
日時計は落葉に埋もれ時刻む	素抱	腐葉土作り大学構内落葉もて	暮津

朽葉

溪間の朽葉の八寒地獄かな  
山清水鳴れり朽葉を潜り出て  
朽葉どき蓮台野より化野へ  
道迷ふ朴の朽葉の幽界に  
切通し落葉朽葉を踏み付けに  
田の底の朽葉に蝸蚪の身を寄せて

朴落葉

朴落葉山の曆日重ねけり  
拾ひあぐ落葉に朴の木の遠し  
朴落葉掃くといふより片づけぬ  
ほうほうと云ひて拾へる朴落葉

靴先で朴の落葉を返すべく

片づけて片づけきれぬ杜落葉

否応なく踏むべくありぬ朴落葉

銀杏落葉

銀杏散る

木の葉

木の葉散る

木の葉時雨

いつまでも隣家へ木の葉降らせる木

散る木の葉とよ十に一つは急降下

女郎蜘蛛木の葉外しにかかりけり

タンバリンもつて木の葉は舞はずべし

枝っ先吹きもがれずに櫟の葉

川向ふ今しも木の葉時雨かな

次々降る山の木の葉と歩を一に

枯れ木路線バスつ葉臭き湯町の子が乗り来

網目キリンに木の葉旋回して落ちぬ

木の葉高降るお品嘉助の山墓に

青空に飛距離を伸し散る木の葉

青空に木の葉一枚吸はれゆく

木の葉ひゅうと飛ばして山の風走る

セーターの試着好みの木の葉いろ

葉を落しずんとあかるき銀杏の樹

いちどきに散るを好めるいてふとも

中国語あやつるやうにいてふ散る

散るあとの手間弁へずいてふちる

一両日中に散り尽くいてふとも

たんたん昼のいてふの散るばかり

皆散るは文無しに似て大いてふ

いてふ散る輪舞に吾等瞬きづめ

強いられて大銀杏葉を落としそむ

柿落葉

ざっと見ていちいちは見ぬ柿落葉

枯葉

滅燈会枯葉の精も加はれる

胸中に枯葉降らせる高英男

からたちの棘の挟める一枯葉

蝙蝠のやうに下りて枯るゝ葉あり

もも

もも

さざ

さざ

さざ

さざ

宿好

宿好

宿好

宿好

宿好

ねず

ねず

さざ

ぱら

燕音

木の葉髪搔いて訴ふ忘れ物	宿好	明治神宮 風に乗馬倶楽部の看板鳴る	石鏡
木の葉髪妻居てけふも本を読む	宿好	時雨 しぐれ しぐるる	
採血の針見ぬやうに木の葉髪	宿好	空ら拭きの机にひびくしぐれかな	ねず
生返事たしなめらるゝ木の葉髪	宿好	多羅葉 <small>日吉大社</small> に一時雨あり日吉造 <small>ひえ</small>	燕音
きな臭きものには倚らず木の葉髪	随笑	うしろより躓き来る嗟峨の夕しぐれ	燕音
人の言気にしてゐては木の葉髪	随笑	時ならぬこれは時雨ぞ一乗寺	燕音
無駄骨をおる事嫌ひ木の葉髪	随笑	総門の白蛙股時雨けり	燕音
蓬髪に分け方問はる木の葉髪	随笑	去來の墓いかにも時雨來さうな空	燕音
木の葉髪とどのつまりは年経たり	随笑	しぐるるや黒みてここに去來の墓	燕音
横文字を車中に拵げ木の葉髪	石鏡	しぐれ聞きちりめん山椒一トつまみ	宿好
先生になかなか呼ばれぬ木の葉髪	石鏡	しぐれ避け北山杉の見ゆる簷	宿好
木の葉髪刈られ仕上げに耳の毛も	石鏡	しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ	宿好
木枯 <small>こがらし</small> の夜間働く温水器	宿好	川砂 <small>西明寺</small> を敷きて時雨の通る庭	宿好
風 <small>一遍像</small> に杖を進むる捨聖	随笑	つつつと蕪村棕栢図にしぐれ馳せ	宿好
読みさして聴ける風挿話めき	随笑	風入れの案内当山方丈にて	さざ
		風入れ お風入れ	

風入や軸物入れの箱いろいろ	さざ	王者の治世に出現。建長寺では風入れの守護神とする	
背合せに吊らる軸物お風入れ	さざ	無準師範筆「菩提」	
経櫃の参之内参お風入れ	さざ	ぐぐぐいと引ける渴筆お風入れ	燕音
経行のごとく巡れる曝書の辺	さざ	方丈を大きく使ひお風入れ	随笑
風入れの役僧舟を漕いでをり	さざ	お風入れ丸山応挙は虎が得手	随笑
地獄絵の飯の炎となるお風入れ	さざ	風入れの絵図の地獄の責め道具	随笑
曝涼の応挙の虎に真向へる	さざ	一ツ火 滅燈	
伝牧溪伝何くれとお風入れ	さざ	清浄光寺、一ツ火 七句	
お風入れ涅槃図ごとと畳まるる	さざ	綿蟲を割つて総本山に入る	ねず
一祖二祖六祖祖師像お風入れ	ばら	滅燈会枯葉の精も加はれる	ねず
時頼公強装束のお風入れ	ばら	一ツ火に白道濡れむばかりなり	ねず
祥啓の耳毛の達磨お風入れ	鳩信	白道の左右より咳御滅燈	ねず
お風入れ慧可のぎよろ目に立ちすくむ	燕音	わらわらと白息称名起りけり	ねず
お風入れ道隆さまの洗面具	燕音	引声念仏畳めつぼう冷ゆるかな	ねず
白描の三つ目の白沢お風入れ	燕音	甘酒に六腑の在り処滅燈会	ねず
		大師講	
		握りよき播粉木選りぬ大師講	ねず

\*白沢は中国で想像上の神獸。よく人語を解し有徳の

報恩講 御正忌

御正忌の鯉を空輪の一仕事

石鏡

「その内」はもう目の前に十二月

宿好

恵比須講

恵比寿神社

タクシーで乗りつけ二十日えべっさん

宿好

十二月八日の薄きおみおつけ

随笑

旅人も多びす顔してえべっさん

宿好

一円玉邪険にされて十二月

随笑

細路地の四通八達多びす講

宿好

喜んでピザ生地を伸す十二月

素抱

一葉忌

冷え込んだまま一葉忌暮れにけり

ばら

振り込みの控隠しに十二月

素抱

閒石忌

天を衝く俳諧弔花閒石に

さざ

旧く狭く深き地下鉄十二月

石鏡

桂郎忌

お香々と酒あれば佳し桂郎忌

寒暑

探偵社の車内広告十二月

石鏡

十二月

何事も先手取るべし十二月

鳩信

トンカチはリズムと心得十二月

石鏡

書きとめてそれ清書して十二月

鳩信

渡り蟹の食べ殻を捨つ十二月

暮津

蟪蛄の翅まだ青き十二月

燕音

寒波来桜は樹皮につつまれて

さざ

短日のぬいぐるみ置く心臓外科

随笑

短日のおでこが見えて来ぬ

随笑

マネキンに更に短くなる日差し

石鏡

赤松に冬日押し照る豪徳寺

宿好

冬日

何よりも冬日が馳走仏日庵

さざ

冬日消ゆオコジョのやうにすばしこく

寒暑

冬日差烏山椒の枝を研げる

さざ

何もせねば木石の類枯日向

素抱

冬の日に駱駝の鼻先白っぽく

鳩信

段取りをさらってをりぬ冬日向

素抱

唐突に冬の日暮れて犀の尻

随笑

手狭なる机の上の冬日差

素抱

足柄古道よぎる蜥蜴の貌に冬日

もも

そこ起てば冬の日に透く部屋の塵

石鏡

根方まで冬日が当り気さくな木

もも

庭木にも庭木の晩年冬日差

石鏡

瘤櫛すんなり櫛冬日浴ぶ

ばら

雲間よりスポットライトめく冬日

石鏡

冬日宙湧水八重にひらきけり

ばら

寒暁を聞きしに勝る利尿剤

燕音

今在りし冬日の何処へ木賊刈

ばら

寒暁の国道をゆく貌つんつる

宿好

机塚あたじけなしの冬日差し

鳩信

寒暁の光の痛棒啖ひけり

石鏡

愛着の古着のやうな冬日差し

燕音

寒暁の矢面に立つわが瘦軀  
曙光に射し貫かれ地の一切  
寒暁のその光が徐々に白を増し  
寒暁の強き新聞掌に重る

石鏡  
石鏡  
石鏡  
暮津

冬夕焼会社勤めも大詰めに  
妻の云ふ冬夕焼けをどれどれと  
寒茜けふの一切了はらせて

宿好  
石鏡  
暮津

冬の暮

冬の暮切羽詰まつて翔つ羽音

暮津

詩は言語道断冬の虹立つも  
みなとみらい二丁目で見る冬の虹

さざ  
随笑

冬の雲 冬雲

禅林の冬雲動く潦

石鏡

冬の虹のこのこ蟹が這ひ出して  
横濱のハイカラ橋に冬の虹

石鏡  
石鏡

坐禅堂上を肅々冬の雲

随笑

冬の空 冬天 冬空

冬青空

冬雲のおもおも水平線迄覆ふ

随笑

髪刈つて頭の頼りなき冬青空

燕音

冬靄 冬の靄

冬靄の和気あいあいの川景色

石鏡

ザトペック冬天を馳す登音す

宿好

冬の靄東京湾は事もなげ

石鏡

世間体一つ外せば冬青空

素抱

冬夕焼 寒茜

寒茜浴びゆく赤肉団上に

燕音

冬青空歩きたくなる日を歩く

石鏡

寒茜浴びゆく赤肉団上に

暮津

冬青空噴水勢ひ取り戻す

石鏡

冬の鳥 寒禽

頭を掠め空林に入る冬の禽

燕音

文鎮の鼻の貌夜も更けた

随笑

寒禽の潜めり護良親王廟

暮津

とんでもなき縞鼻の胸の内

随笑

冬の鴟 冬鴟

冬鴟のぎうと落柿舎暮れにけり

燕音

鼻を師とせるおもひなくもがな

随笑

目端利く冬の鴟とはなりゐたり

随笑

鼻にはぐらかされて帰るのみ

随笑

冬の鴟素寒貧とはなりにけり

寒暑

もんもんのもんを破れず縞鼻

石鏡

鼻 縞鼻 ふくらぶ

後生楽な縞ふくらふの貌のぞく

さざ

みみづくの雨は苦手と見ゆ素振り

さざ

ふくらふの目蓋開けて吾を見る

さざ

俳諧は破格破格と木菟の云ふ

燕音

ふくらふの振るつたことをいふごとし

さざ

水鳥

水鳥の日がなびしゃびしゃやつてをり

鳩信

鼻の貌立て直す真暗がり

ばら

水鳥の水破る音夕間暮

鳩信

吸ひ込まるふくらふの目のレモン色

ばら

日当りて鳥羽の水鳥真珠粒

燕音

鼻の魔法仕掛けのこゑ出せり

ばら

水鳥に水の一年明けにけり

燕音

鼻の真に受けし貌そこにあり

宿好

水鳥の幽紋あたり暮れかかる

随笑

鼻好きピカソの遊びごろの壺

随笑

水鳥の羽搏ちごたへのある寒暮

随笑



水鳥の睡りに徹す直心ひたしころ 随笑 割り込ませてもらひますよと鴨のこゑ ばら

水鳥の行方追ひある鼻に風 寒暑 首猶も前へ前へと鴨助走 ばら

水鳥の羽ばたくことの終に無し 石鏡 派手好きな鴨の二三羽交じりゐし ばら

### 浮寝鳥

浮寝にはすこし間のある日向鳥 さざ 鴨の首振って大きな波を越ゆ ばら

いざこざのなき隔たりに浮寝鳥 ばら 川端の鴨の口々雪来ると 鳩信

浮寝とはゆかざる鳥羽のゆりかもめ 燕音 鴨着水ざんぶとやつてみせにけり 鳩信

痩せ杭の彼方に一つ浮寝鳥 宿好 鴨の名にいやに詳しき女ゐて 鳩信

旧軍港浮寝の鳥もなかりけり 宿好 湖上に降り鴨の比良組比叡組 鳩信

鴨を見に常連さんの身拵へ ざざ 百千の鴨の一つとなり湖上 鳩信

手前より杭・葭・鴨の睡る水 さざ 尻振りて玩具めく鴨近寄り来 燕音

鴨の水脈家鴨の水脈を打ち消して さざ 人を見て寄り来る鴨の日和貌 宿好

迂る鴨うづくまる鴨雪降り さざ 哲学の道沿ひ鴨も散歩する 宿好

先口の鴨南蛮忘れ居らぬかや ばら 鴨を見て京の五条の橋の上 宿好

風上へリズムをととりて鴨の首 ばら 観察小屋窓を覗けば鴨ばかり 宿好

くつくつと鴨も寒さを諾へり 随笑 被写体とするには動き過ぎる鴨 寒暑

納税期鴨は汽水に遊びをり 随笑 底冷えに遇ひたる鴨の真顔かな 寒暑

風少し吹いて真鴨のよるけ縞 随笑 鴨の陣崩してしまふさあ知らぬ 寒暑

花の間鴨千鳥ヶ淵広がりて広がりて 随笑 鴨蹴つて水裏返る春なりし 素抱

鴨群るゝは寄合に似て池の央 随笑 風きつく崩れ出したり鴨の陣 素抱

茶のベスト着込み鴨見と洒落込まむ 随笑 これは粹キンクロハジロ小さきちよん鬣ある鴨で 素抱

鴨池を発たんとやっさもっさして 随笑 称名寺鴨も花見と洒落にけり 素抱

一団の鴨を脇見の鴨一団 随笑 花啄まむと鴨身をひねり 素抱

夜の鴨に騒ざぶきのありぬ納りぬ 随笑 広がりて氷らぬものに鴨の水脈 石鏡

おのづから一団を為し鴨すすむ 随笑 鴨急ぐ方面白きことあらむ 石鏡

鴨群るゝ日向つづきに家鴨ゐて 随笑 鴨すいすい日曜画家の視野よぎり 石鏡

がやがやと鴨ゐて池を凍らせず 随笑 ハイカラな瑠璃首立てゝ鴨巡る 石鏡

箒川鴨横向きに流されて 寒暑 分隊の鴨本隊に合流す 石鏡

これとても着水の裡鴨滑る 寒暑 掛茶屋に鴨見て風のひやつきぬ 石鏡

雑談の合間に鴨の移りをり 寒暑 泛く原理鴨と同じや軍艦は 石鏡

税務署の窓越しに見る鴨の池 寒暑 口鉄砲あまりに鴨の多ければ 石鏡

確定申告済ませ鴨見て帰らなん 寒暑 くいぐいと鴨鳴く蓮の池之端 暮津

鴛鴦 をし

鴛鴦は分に過ぎたる晴着被て  
塵一つなき禅林の鴛鴦の水  
映るもの枯れ一色や鴛鴦の水

随笑

大津  
かいつぶり潜り出でたる比良面

燕音

鴛鴦装う晴着は大正浪漫風  
おしどり大岡川 観桜に吹雪ける花の余り風

素抱

水破る音も夕づくかいつぶり  
かいつぶり素潜り芸の荒削り  
鴛鴦を面白さうに見る

随笑

鴛鴦がゐる増水の梓川  
一塵も止めぬ鴛鴦の身だしなみ

素抱

丹頂に日本の色極まれり  
姿見の在らばとおもふ丹頂に  
羽搏ちては凍ることなき夫婦鶴

鶴 丹頂

鳩信

鴛鴦映す水の最も美しき季

暮津

白鳥が来るやうになり本埜村

寒暑

鴛鴦 かいつぶり かいつぶり には

には鳥

白鳥 はくいてう

鳩に跳んでみせたる沼の稚魚

さざ

白鳥の飛来足掛け十五年

寒暑

水音にきよとんきよとんと鳩

さざ

白鳥の青空目がけ翔つ十字

寒暑

鳩は潜水精進吾は句精進

鳩信

白鳥をかぞふる頭揺れぬたり

寒暑

練達の士なり堅田のには鳥は

燕音

白鳥のために屑菜を切つて遣る

寒暑

瀬田唐橋くぐり遊びの鳩一つ

燕音

腹臑は吸盤をなし、吸物等にして食す

寒暑

浜頓別  
押麦を白鳥に撒く作業員

素抱

磯に沿ひあゆむ寒さも本格的

もも

白鳥のあれゆく浜頓別のそら

素抱

男鹿半島、戸賀  
顔寒くこんこの如く目覚めけり

もも

皆若く白鳥撮りのテレビクルー

素抱

\*こんこはコンペイトウ科の魚、体形は球形。

白鳥の録音係こゑ拾ふ

素抱

前以て寒さ強調しておきぬ

さざ

白鳥の放送中継風の音

素抱

風募るうへに寒さも見合はせり

さざ

目の子算ざつと一万コハクチョウ

素抱

滑り込むシート寒さも底打つて

さざ

白鳥の来る村の地理電話にて

石鏡

心臓の鼠鳴きする寒さかな

ぱら

初雪 新雪

新さきの雪踏み来て宋代禅講座

さざ

琵琶湖  
疾うに鳩目覚めて居りぬ堅田寒

鳩信

初雪のそれがこんなに降ろうとは

随笑

大津繪の弁慶かざす薙刀寒

燕音

丹沢山系新らの雪置きだるま市

寒暑

心臓が縮まるけさは寒いねえ

宿好

初雪をはたけり鳥の発つやうに

暮津

玻璃越しに雀を覗く寒がり屋

宿好

初氷

手にとりて豊平の初氷

素抱

寒がりには内弁慶に似て家居

宿好

寒し 寒さ 寒気

くわんのんの手の厚かりき寒さくる

ねず

シベリアよりどんと吹き込む寒気団

宿好



枯木越し円空さんの寺が見え

ばら

冬枯 枯るる

残る葉の幾枚枯木のプ・ラ・タ・ナ・ス

鳩信

枯月夜燭入りて堂膨らむよ

ねず

町内に枯木と月と銭湯と

燕音

実ざくろの木乃伊めく枯れ祖父の忌よ

ねず

街の木は枯れてタンゴの鼻濁音ダリエンソ 賛歌

燕音

不整脈葉で押へ枯るゝ中

さざ

バンドネオンに翼枯木の宙を舞ふ

燕音

枯るる頭を潜望鏡のやうにリス

ばら

街路樹の枯木のパントマイムかな

宿好

枯れに入るもの一つに床擦れも

鳩信

行き来して句作り算段枯木中

宿好

鈴懸の尾羽うち枯らすまでのこと

鳩信

柿の木へのうへうとイッつ枯れてイッつ

随笑

一山の枯れ清水の舞台お圧す

燕音

鏡なす空に枯木の物狂ひ

随笑

枯篠にひねもす東京湾の照り

燕音

脱帽といふ他はなき枯木瘤

随笑

冬枯れに長寿の象のハマ子さん野毛山動物園

燕音

枯木攀ずあの猫金魚盗った猫

石鏡

枯るゝ身に熱湯をこそ湯西川

燕音

怪人二十面相枯木の合間より

暮津

枯るゝ夜をジラジラと唄い出す

燕音

けんちん汁伝はる寺の総枯木

暮津

口許が割れて洩れだす夜のタンゴ

燕音

国産マツチ創始者 清水誠の碑  
ボウボウと枯れ木 国産マツチの碑

暮津

ジョーカーの裏でくすりと夜の笑ふ

燕音

枯鶏頭

バイオリンずいこざいこと「颱風」ひく

燕音

断乎たる枯鶏頭の大頭つむじ

さざ

鈴懸の意地といふ他なき枯れ瘤

宿好

枯れてをりウツボカズラの壺半分

宿好

枯草

枝先に合歡の枯れ莢ひいふうみい

宿好

錆鏝アロエ枯草部落の端

石鏡

つくねんと柿の木いっぽん枯月夜

宿好

枯蔓

青空のまま昏れ柿の華月夜

宿好

がむしやらの姿とどめて枯蔓は

さざ

サンテグジュペリ  
枯るゝ夜を飛行機野郎の本を読む

宿好

枯蔓の零し損ねし実の二三

ばら

枯るる身に探りを入るる聴診器

宿好

枯蔓の乱脈透きて日の差せり

ばら

島の鳶こゑ逆落とし篠枯らす

随笑

朝比奈峠越  
枯蔓のずるずる引けて土埃

鳩信

不細工よ牡丹の木の枯れざまは

素抱

枯蔓のやみくもをまのあたりかな

鳩信

映るもの枯れ一色や鴛鴦の水

素抱

枯蔓の嘗ての一途なべて見ゆ

鳩信

年寄りには平屋を好む枯十賊

素抱

ターザンが目をつけさうな枯蔓も

鳩信

枯るゝ夜をダイナマイトの綾戸智絵

石鏡

枯蔓に巻かれ混迷深める木

燕音

鼻毛まで枯れてゐるとは壁鏡

石鏡

枯蔓の横暴極まりなき立木

燕音

一芝居搏ってやろうか枯月夜

石鏡

枯蔓の末路を晒す川つぷち

燕音

冬くれ

冬づゝん

ひざら貝冬ざるる身を張り詰めて

鳩信

ざうざうと山の枯蔓滝なせり

宿好

冬ざれの天道虫は能く歩く

素抱

枯蔓の系図を横に拡げけり

素抱

枯葎

素浪人風に立ち枯れ棒葎

石鏡

鳴がやがや云うて蓮葉枯らすなり

随笑

枯柏かれかしは

枯尾花

義仲寺  
駈け巡る夢のほとりに枯尾花

燕音

枯柏青天井の何処か鳴る

ねず

捌けたる人のごとくに芒枯れ

随笑

悴める掌のかたちして枯柏

もも

枯萱

枯萱に磧のただつびろき空

寒暑

枯柏つひに強情通しけり

ばら

枯芦

たまさかに日当るは贅枯芦原

燕音

冬木の桜

枯桜突つかへ棒が利いてをり

さざ

枯芦の日に呟くを俳言と

燕音

枯櫟

枯芦に対す先師に対すごと

燕音

根方よりずいと見上げぬ冬櫟

ねず

枯芦の水路は鮒の通りみち

燕音

生真面目な木と誰もいふ冬櫟

さざ

枯芦の葉屑浮く水動きをり

燕音

銅鐸のごとき手ざはり冬櫟

さざ

枯芦の明るさあふみに来た甲斐あり

燕音

宿木を寄せぬ櫟でありにけり

さざ

横十よこじゆつげんがわ間川に日が射し芦枯らす

暮津

立姿どこをおしても冬櫟

ばら

枯蓮

寛容と厳格同居冬櫟

宿好

力みなき冬の櫟と見てゐてる

随笑

女貞の実ねずみもち

戻れば肅然として冬けやき

素抱

掃き了へて夕凍みねずみもちの実に

ねず

櫟今すっぽんぼんに気負ひなし

石鏡

この駒きをねずみの糞とはよう云ふた

さざ

枯銀杏

入り組めるいてふの枯枝枯枝に日

もも

冬林檎

大往生遂げむばかりの枯公孫樹

さざ

大将が蜜をうんぬん冬林檎

石鏡

青天に米点打ちて公孫樹枯る

さざ

哲学の一つも持てと冬林檎

石鏡

枝ぶりのどうしてかうなる枯いてふ

さざ

枇杷の花 枇杷咲く

さざ

いてふの木枯れて素性といふが見ゆ

鳩信

新薬の効き目追ひ追ひ枇杷の花

さざ

枯櫟

枯櫟日和小枝の山繭に

さざ

枇杷の花海に陰謀あるごとし

さざ

枯芭蕉

建長興国禅寺破格の枯芭蕉

燕音

枇杷の花われらかうしてまた会へて

ばら

破れ着の大燈国師めく芭蕉

燕音

枇杷の花そこはかとなく癒ゆる傷

鳩信

枯れ三昧一人愉しみ居る芭蕉

燕音

本郷の学生寮の枇杷咲けり

鳩信

全うの一語に尽きぬ枯芭蕉

燕音

養生のその後は如何に枇杷の花

燕音

野暮ったき枇杷の咲き出す頃もよき

宿好

この家には犬が居る筈枇杷の花

随笑

定かなり得難き人と枇杷の花

寒暑

有難味薄るゝ旗日枇杷の咲く

石鏡

度忘れは人ごとでなし枇杷の花

石鏡

冬萌 冬芽 冬木の芽

餅腹にもくれむの芽を見に出づる

ねず

辛うじて木五倍子と判る程の芽が

さざ

枝先にかけて冬芽の間話り

ばら

山歩き煤け木五倍子の芽に出会ふ

宿好

なあるほどこれが冬芽の付き方か

宿好

冬木の芽篤くと見て其処離れけり

宿好

もくれんの雫立つ冬芽こんなにも

素抱

陽気まだどつちつかずの冬木の芽

石鏡

寅彦忌

抜書きの反古をかかえて寅彦忌

寒暑

雑炊 おじや

職引いて雑炊好きな母のそば

随笑

昼は雑炊夜はシチューに風邪寄せず

随笑

おじやして一息つける雨の昼

素抱

利尻メカブおじやうましよ当店は

素抱

葱

祖父の忌の雨たつぷりと葱焔

ねず

月光のあまねく葱に性根入る

もも

野菜涅槃葱の高足侍りけり

燕音

歳末商戦泥つき長葱もつてゆけ

宿好

下仁田葱煮ゆる前から崩れさう

石鏡

葱の管後生大事に何封じ

石鏡

暇人の覗いて不思議葱の管

石鏡

冬菜

冬菜沿ひずんずん下りて一乗寺

宿好

白菜

白菜をどかと仏へ飛鳥人

ねず

白菜干す御天道様に尻向けて

随笑

カリフラワー ブロッコリー

ブロッコリー茹でて数へ日籠らふか

ねず

カリフラワー剪られ空なる空を抱き

ねず

人参 胡蘿蔔

人参の葉っぱのやうなやつはアネモネ

ばら

人参も余さず食ふぞ新患者

鳩信

松前漬先づ人参の歯当りよ

随笑

さういった訳で胡蘿蔔喰はぬ訳

随笑

人参は三月のいろ煮て和えて

素抱

人参を撰らねば生活習慣病

素抱

吾がかぶり振る人参を妻買へり

素抱

セロリ

義父は慶應ボーイにて初期アイスホッケー選手なれば

ハイカラで明治生まれでセロリ好き

暮津

蜜柑

六郎の絵の中の子もみかん剥く

ねず

みかんの皮二つ重ねて暇乞ふ

ねず

二つ目の蜜柑の臍のずれてをり

もも

師走妻剥きかけみかん置いて起つ

宿好

デザートのみかんに灯影殺到す

宿好

炊事了へ一息つけり蜜柑のまへ

随笑

蜜柑置きよいしよと妻の割り込める

随笑

冷凍みかん齧り旅路の汽車ぽつぽ

寒暑

めでたかり蜜柑に種子のあることも

素抱

晩生なる蜜柑に当り外れなし

素抱

蜜柑まだ酸きものと手を控えをり

素抱

朝日影海より根府川蜜柑かな

石鏡

なんだこれ皮のぶかぶか蜜柑なる

石鏡

飴・蜜柑など物色し船待つ間

石鏡

長谷柑生さんよりみかん贈られて

石鏡

紀州より蜜柑文左の心づけ

石鏡

留守居して残り福めくみかん剥く

暮津

けんちん汁伝はる寺の総枯木

暮津

ぼんかん デコボン

デコボンに瀬戸の夕日の大きこと

寒暑

鱈ちりの箸を落としてもう酔ふや

石鏡

先づ以てデコボンのこのデコボコ感

素抱

鱈ちりが冷めて話のちぐはぐに

石鏡

燕 かぶらな

聖護院かぶらな漬の送りどき

ばら

上つぱり脱いでしよつたる招ばれけり

もも

水切りてキューピーの頭の赤燕

ばら

これやこの男鹿のしよつたる賞味せむ

もも

むまさうな燕かぶらなに似て円相圖

随笑

しよつたる鍋煮えて飛び交ふ秋田弁

もも

燕の禅画禅味の風吹かす

随笑

すき焼 牛鍋 鋤焼

朝市の味見くさくさ赤燕かぶら

素抱

浅草の師走に遊び牛鍋屋

燕音

納豆

納豆菌掲げて健康食品売る

素抱

鋤焼がご馳走世代玉子割る

随笑

熊蟬が朝から納豆粘り出す

素抱

牛鍋を待つ間マフラー横に置き

石鏡

納豆のやつかいな糸朝ぐもり

暮津

牛鍋を堪能しましたモウと立ち

石鏡

巻織汁 けんちん

あつあつのけんちん汁に風邪抜かん

鳩信

鋤焼をつつくに淋し頭数

石鏡

鋤焼の煮えてぐつぐつしか言はぬ

石鏡

パチンコの勝組のある焼鳥屋

鋤焼の鉄鍋大方漁り了へ

石鏡

横丁に屯し立喰ひ焼鳥屋

石鏡

桜鍋

生前の話となりて桜鍋

随笑

焼鳥の串を数へて扱てなんぼ

石鏡

鍋焼

鍋焼の鳴門の渦も煮え立ちぬ

ばら

焼鳥屋提灯一つ椅子七つ

石鏡

おでん おでん酒

おでん酒当を得ているその見方

ばら

焼諸屋まだまだ遠しやきもきす

寒暑

高飛車に決め付けらるるおでん酒

ばら

一区切りつけんか焼諸など食して

石鏡

おでん種白の大根をたばさみぬ

宿好

湯豆腐

石鏡

選り惑ふ箸にぶつかるおでん種

宿好

火がとほつて来たと湯豆腐動きけり

鳩信

言外にくみとれるものおでん酒

石鏡

湯豆腐のしかじか是を叙したとて

随笑

焼鳥

焼鳥やカワ・ネギ・ハツと声とんで

ばら

蕎麦湯

石鏡

焼鳥の串まで焦げて酔迅し

素抱

蕎麦湯のみたうたう降り出しきやがったか

さざ

きなくさき戦が間近焼鳥シシカバブ

素抱

葛湯

さざ

ちり鍋 鱈ちり

鱈ちりの箸を落としてもう酔ふや

石鏡

塩汁鍋 しょつたる

しよつたる鍋煮えて飛び交ふ秋田弁

もも

上つぱり脱いでしよつたる招ばれけり

もも

これやこの男鹿のしよつたる賞味せむ

もも

しよつたる鍋煮えて飛び交ふ秋田弁

もも

すき焼 牛鍋 鋤焼

浅草の師走に遊び牛鍋屋

燕音

鋤焼がご馳走世代玉子割る

随笑

鋤焼を漁り尽くして鍋残る

随笑

牛鍋を待つ間マフラー横に置き

石鏡

牛鍋を堪能しましたモウと立ち

石鏡

牛鍋屋ぎうとベルトを締めて出づ

石鏡

鋤焼をつつくに淋し頭数

石鏡

葛湯とく呪文唱ふるこちして  
葛湯溶き年金ぐらし長丁場

葛湯とく呪文唱ふるこちして  
葛湯溶き年金ぐらし長丁場

ホットドリンクス ホットレモン

注射あと何處かだるくてホットレモン  
ポンジュースなどに温もり冬籠  
\*ポンジュースは夏みかん汁入りの砂糖湯  
湯気上げて祖母の世の味ポンジュース

注射あと何處かだるくてホットレモン  
ポンジュースなどに温もり冬籠  
\*ポンジュースは夏みかん汁入りの砂糖湯  
湯気上げて祖母の世の味ポンジュース

熱爛 爛熱し 爛酒

熱爛を一気に呷り口火切る  
熱爛こんな夜はに限る限ると注ぎ合ふも  
熱爛党麦酒党相半ばして  
二本目の熱爛持ちちてさあさあと  
熱爛の余勢をかつて人物評  
熱爛に林火一辺倒の人  
従つて云ひたきは何爛熱し  
熱爛に酔うて全く何をいふ  
熱爛をすすむるときの汝が声音

爛熱し日和見主義をとつちめむ  
熱爛にてやんでえばかりやるめが  
すこたんのへったくれのと爛熱し  
其の段になると熱爛ほすばかり  
爛酒にさようさようと応ず人  
爛熱し当節流行らぬこと云ふな  
熱爛もここまでといふ自覚あり  
怖れ入る君の一言爛熱し  
爛熱し泣かされましたよあなたには  
熱爛や出逢へるひとを大切に  
熱爛やこの徳利と幾星霜  
爛熱し弁明する気さらさら無し

玉子酒

志ん生の呂律恐ろし玉子酒

神楽 神遊び 庭療

稲穂波そぞろ打ち合ふ神楽の里

囃子方庭療にわびに浮かび上がりけり

繰り出すは屋台鯨の親爺舟

神楽笛火の粉が先に舞ひにけり  
神真似て神の遊びを巫女の舞

お使ひはさらし鯨よ爺ちゃん子  
ロシア船籍二万噸  
ラバウルへ南下勇魚のシヤリアピン

神楽歌和すわごんに和琴の蛙こゑ  
楽人は埴輪のごとし神遊び

絵看板潮噴く鯨が泳いじよる  
高知  
和田浦に遊んで鯨のステーキを

熊 罨

神々の遊びを三日月見そなはず  
神遊び笛はしゃかりき中天へ

白熊の公爵白き息つけり  
押し迫る青嶺や罨棲息地

笛颯颯和琴淙淙神楽歌  
笛走り和琴は転び神遊び

村営バス揺るたび熊除け鈴鳴れり  
夏川ほつと湯田 湯本温泉のこころが熊の通り道

夜神楽

夜神楽や些細なことを大仰に

熊ことし荒れて在所に出るニュース

鯨 勇魚

大南風勇魚いさなの息をつくやうに

麻酔銃もて撃ち山に戻す熊

何笑うて波間に消へし鯨の目

伊藤久夫  
肺活量大き歌手にて熊祭

シーボルト挿し絵に遺す鯨曳

狩 猪狩 猟犬

おくんちのカラクリ鯨潮を吹く

猪撃ちに取り憑かれたる脂顔



猪撃ちの口鉄砲をつづけをり  
猪撃ちの黙殺に遇ふ峠道

ばら  
ばら

何とこの日本あなぐま 目まぐるし  
アナグマに落葉臭さと尿くささ

さざ  
鳩信

獵犬のごとく切り込み初ゴール

暮津

兎

猪鍋ししなべ

暮津

兎出づ村に小さな浅間さんせんげん

ばら

猪鍋のもう煮えたらうまだ煮えぬ

ばら

秋草を鳥羽絵の兎高掲げ

宿好

狐

動物園上野動物園 兎の点呼うさぎの前

寒暑

冷え性の本土キツネとおもひけり

さざ

笛鳴

ねず

夜長咄狐が人を騙す型かた

鳩信

しかと笛鳴瑞鹿山円覚寺

ねず

檻隣りホンドキツネのお忙氏

鳩信

島の地理頭に入れをれば笛鳴けり

さざ

大名行列白狐にたぶらかされぬ

燕音

笛鳴いて洗濯物の脇抜けぬ

さざ

行列の狐のあねさんかぶりかな

素抱

笛鳴のそつちへ行けば島の端はな

石鏡

狸

冬鶯

笛子

おはじきを二つ並べし狸の目

ばら

降る雪に弾み付ききし夕笛子

ねず

十一月ホンドタヌキの空寝入り

寒暑

笛子来と云へば目白と正さるる

ねず

朝鮮唐棉たんたん狸のふぐりぞな

素抱

目を皿のやうにして追ふ夕笛子

もも

獺あなぐま

あなぐま

冬鶯吸ひ付くやうに梅が枝に

宿好

ニユアンスを変へて小藪の笛子鳴く

宿好

冬鷗

さざ

笛子来て島の竹藪こそつかす

石鏡

冬鷗キツと長谷川一夫の眼

さざ

谷戸尽し鎌倉に聞く笛子かな

暮津

冬鷗素数の如くとびとびに

ばら

鷓鴣みそさざい

みそさざい

横腹に知多の朝日よ冬鷗

鳩信

みそさざい白に囲まれ白を剝る

ねず

酔を運ぶ舟の往来冬鷗

鳩信

裏山より年を届けにみそさざい

ねず

風に乗る手際宜しも冬鷗

鳩信

凍むこゑに電光石火みそさざい

もも

風筋を掴み滑空冬鷗

燕音

物音を立てぬ向ひ家みそさざい

ばら

格好悼いい川崎洋は冬鷗

石鏡

みそさざい寝床はなれも潔く

寒暑

腋の下締めて降り立つ冬鷗

暮津

都鳥

百合鷗

千鳥

百合鷗浜より翔ちて伊勢の方

鳩信

碑良寛堂に千鳥を慕ふ以南の句

寒暑

橋越へて水もしたたる都鳥

鳩信

江ノ電の昔千鳥の翔ぶ砂丘

寒暑

その昔膳所で越年都鳥

燕音

冬の波 冬浪

浮寝とはゆかざる鳥羽のゆりかもめ

燕音

石廊崎沖ターナーの冬白浪

鳩信

ゆりかもめ女め顔をすいと寄せてくる

燕音

冬浪の白起つばかり鯨望荘

燕音

下積みのあくせく知らぬ都鳥

素抱

冬浪の彼方鷗の千里眼

燕音

鮫 鱻

離陸機の鱻のやうなる胸露けし  
執刀はノコギリ鮫の某教授  
ボンネットヘッドシャークの涼気過ぐ  
土佐鶴に鱻の湯晒し春の雨  
チョウ鮫が鰐の顔して冬休

海馬

指庄教室海馬のごときを稽古台

河豚

箱河豚に酌みて無月の泊りかな  
虎河豚に三段腹はなかりけり  
河豚の吻つき嘘ばつかしといふごとし  
草河豚のどうにかこうにか喰へる奴  
見つめられ居りて箱河豚ぼつとせり

たじろ蟹

たらば蟹ずばと包丁入れにけり

ずわい蟹 松葉蟹

こうばく蟹波陸削る夜なりけり  
ずわい蟹腕組んで豪のもの  
酒やれば風が募りて松葉蟹  
せいこ蟹蟹井にして唐錦

鮫 鱻

鮫鱻煮え巧言令色鮮矣仁

昼行燈鮫鱻向きを変へにけり  
鮫鱻の毀れし貌が競られけり  
鮫鱻の強つくばりの口許よ  
あんかうは癖のなき魚箸伸ばす

鮪

奨めらる鮪の三味線・潜水板

鮪

これが彼の秋田音頭の男鹿雷子

鱈

大衆魚真鱈の顔の冬親し

鰯

鰯の口この一年をしめくくる  
炬燵して飛騨鰯談義一頻り  
妻は鰯わたしは平目熱帯夜

金目鯛

金目鯛よく見る為の大きな目  
金目漁さうさな八丈島辺りまで

鰯

一政の上目使ひの鰯かな  
夕べは鰯の煮付けに一家満ち足りぬ  
煮凝の半信半疑鰯の目

八目鰻

八目鰻捕る川の向かうの頑固爺  
秋霖について朝より八目鰻漁  
寒八ツ目吸ひ付くものを選ばざり

潤目鰯

潤目鰯干す美しく干す波切の婆  
眼が生きて佐島の潤目鰯活魚店  
むかしから肥れぬ質よ干潤目鰯

海鼠

なまこ啗む音こめかみに伝はりて  
海鼠なり風邪こじらせて臥せる身は  
寝て覚めて脈をとらるゝ病みなまこ

ふつつかな海鼠物云ふ患者食  
人づてに聞けり海鼠の不料簡  
一通り聞きて入院梅雨海鼠  
術後十日重湯すすりて病ミ海鼠  
一病を持ちて海鼠の類ひなる

風向きがガラリと変り海鼠突  
もう一つ呑み込めないでゐる海鼠  
海鼠拾ふ相州の浜その昔

東夷 <small>あつまひ</small> でよろし海鼠が大好きな	燕音	海鼠酔に漬ける殺生いたしけり	素抱
心配はご無用顔の海鼠とも	燕音	硬直の酔のもの海鼠勘弁な	素抱
味はうて間石翁の海鼠の句	宿好	酔海鼠に錆つく顎を使ひけり	素抱
海鼠の句大いにうけて羽振りよき	寒暑	これやこの身につまさるゝ海鼠の腸	素抱
これちようだい まつころ黒助凍てなまこ	寒暑	酔海鼠に顎の運動いちにつきさん	素抱
海鼠噛むその眼返事を保留して	寒暑	このところ海鼠倅うて黙しをり	素抱
孫と瞻てナマコ忍者の黒装束	素抱	大海鼠無理難題のごと置かれ	素抱
潮水に海鼠生かして風鳴る日	素抱	裏返し海鼠の何だこの突起	素抱
晩酌に海鼠おだぶつする夕べ	素抱	海鼠の脚あらかた疣に退化して	素抱
海鼠に髻あらば弁士にうってつけ	素抱	優海鼠何を付度して寸評	石鏡
海鼠に小便そんな愚行もしてみたく	素抱	何やかや云ひては海鼠に手を出しぬ	暮津
頭搔く海鼠なんぞも見てみまし	素抱	豊饒の海を海鼠の語りぐさ	暮津
海鼠食ふときは鳩尾暗くして	素抱	牡蛎 <small>かき</small> 牡蛎 <small>かき</small>	
指さしてこれが海鼠の中の首領 <small>ドレン</small>	素抱	牡蠣食うて夜風にあたるダウンタウン	ばら
海鼠噛む顔を四角に三角に	素抱	塗箸がはたまた牡蠣が滑るのか	宿好
海鼠噛む歯がまだありて好々爺	素抱	ひろびろと酔牡蠣味はふ舌があり	宿好

旬も旬々の酔牡蠣に若くはなし	宿好	おっとりとお大柄にして冬の蠅	宿好
柚子絞り酔牡蠣ほたはた旬のもの	宿好	冬の蠅頭がだんだん澄んで来ぬ	宿好
お手本と云へれば云へる牡蠣の意地	随笑	冬の蠅球 <small>たま</small> の躰をぶん廻し	宿好
吸はる牡蠣舌同類と思ひけり	寒暑	飽食は冬の蠅にもヤツと発つ	随笑
レモン添え外食めきぬ牡蠣フライ	寒暑	冬の蠅見直す素早き翅使ひ	暮津
牡蠣啣へこれから喉の滑り台	寒暑	枯蠅螂 <small>かれたらうら</small>	
橋脚にへばりつく牡蠣歳晩へ	石鏡	其の斧に歯こぼれなかり枯蠅螂	宿好
冬 <small>冬の</small> の蠅		日向好き枯蠅螂の妙好人	随笑
膝小僧へ海辺育ちの冬の蠅	鳩信	枯蠅螂一太刀手合はせ願います	石鏡
捨て積みの焼酎瓶に冬の蠅	鳩信	必殺の機を窺ふや枯蠅螂	石鏡
冬の蠅小さき翅を折り畳み	燕音	冬籠 <small>冬籠る</small>	
顔洗ふ仕草幾たび冬の蠅	燕音	冬籠動かざること鰯のごと	宿好
飽食の日々を共にす冬蠅と	宿好	職引きて冬籠る図は鰯のうたた寝	宿好
冬の蠅発着ふとんの飛行場	宿好	買ひ置き <small>焼栗つまみ冬籠</small>	宿好
青空へ飛び去る冬の蠅の音	宿好	埃じむ眼鏡磨きて冬籠	宿好
めちやくちやな翅音愉しむ冬の蠅	宿好	冬籠葉袋を身ほとりに	宿好

暈けて映る写真眺めて冬籠  
ぶるぶるとファックス始動冬籠

随笑  
寒暑

云ふことをきかぬ障子を外し遣る

石鏡

足の筋違ふへまして冬籠

石鏡

炭

ゆるゆると熾りて美濃の桜炭

ばら

鉛筆は皆とんがらせ冬ごもり

石鏡

それぞれと招ばるゝ美濃の桜炭

ばら

ポンジユースなどに温もり冬籠  
\*ポンジユースは夏みかん汁入りの砂糖湯

石鏡

炭を焼く山が冷え込むまへの籠

寒暑

冬籠り妻と足型見比べて

石鏡

焚火

屏風

銀屏

夜焚火となりて炎のいま丈余

ねず

銀屏に蕪村の打てる凍み米点

随笑

大楯の根方に隆と焚火跡

さざ

連れ立ちて屏風の裾より雁どち

寒暑

ばうとして昼の焚火にあたりゐる

随笑

襖

叭叭鳥を四方に翔ばせ露襖

宿好

焚火して何だかゆとりのやうなもの

暮津

障子

十六夜の宿の障子を走らす

燕音

茸樽猿の菌形の生々し

石鏡

雨の日の障子明りに幽霊図

宿好

年の火の樽の芯から爆ぜにけり

暮津

来来世世見ゆるが如く堂障子

宿好

炉

語り部の火箸叩いて締めくくる

宿好

電気すとうぶせつせと部屋を暖めをり

さざ

絨緞

絨毯の上を温風這ひ廻り

ばら

山小屋はヴォイラー焚いて昨日まで

素抱

もみづれる高雄ホテルの絨緞も

宿好

汽車走らす石炭一屯水七屯

石鏡

煖房

床起つて暖房入れにゆきにけり

さざ

貸し練炭貸し莫産夜桜真つ盛り

寒暑

さうざうと暖房音も心音も

さざ

炭団

暖房の音みしみしと試し焚き

鳩信

魂抜けし炭団法師と年越せり

もも

手をこすりつゝ云ふ暖房入れやうか

随笑

炬燵して芋銭の狐隊行圖

もも

暖房がどかんと入るにぎっくり腰

寒暑

炬燵して絵本の蟻の穴倉図

もも

暖房音せはしく朝が始まりぬ

寒暑

炬燵して脛を焙りて「安愚楽鍋」

さざ

暖房を焚けばあぶれ蚊のこのこと

石鏡

なまぬるき炬燵のやうな年なりき

さざ

暖房音どすと耳から温もれる

石鏡

置炬燵出てがさ市の客相手

ばら

くすくすして漫画に魅入る暖房車

石鏡

宿炬燵山の夜長を如何にせん

鳩信

あたたかく家族をつつむ暖房音

石鏡

山宿の炬燵の酔ひがまはりけり

燕音

ストーブ

燕音

濁り酒とろつと炬燵火は赫つと

燕音

中越地震 三句テッ  
地震襲ふその轍忘れ紙懷炉

石鏡

炬燵火をいっそう強くまたぎ宿

燕音

懷炉などみつともないが取り敢えず

石鏡

炬燵して飛驒鱒談義一頻り

随笑

手焙り

さざ

茶碗蒸し腹に行火を入るるごと

随笑

手焙に五指峙そはだてて牡丹見る

さざ

炬燵一つ真ん中に置く間取かな

寒暑

湯たんぽ

ねず

火鉢 長火鉢 火桶

鳩信

もてなしに大き湯婆年の宿

ねず

それはまたそれでけっこう長火鉢

鳩信

湯気立て

ねず

熊手売手持ちぶさたの股火鉢

燕音

もうもうと湯気立て蒸籠の朝ばたらき

随笑

乾燥芋焙り上手よ婆ちやん子

宿好

風邪 鼻風邪 風邪神

宿好

ぜいたくなもんや火鉢が懐しき

随笑

流行風邪

随笑

火桶より火桶の見ゆる牡丹園

暮津

鼻風邪を追出す手だてなかりけり

燕音

三箇所に火桶設え牡丹園

暮津

鼻風邪の鼻にかりし頼み事

燕音

遠近の牡丹に目遣り火桶に手

暮津

鼻風邪の妻に味見を頼まれぬ

燕音

懷炉 紙懷炉

石鏡

鼻風邪の妻の言づて事細か

燕音

それではともものは試しの紙懷炉

石鏡

鼻風邪の寝付きよければ直るべし

燕音

紙懷炉そんな齡では無けれども

石鏡

鼻風邪の昼餉を問へる鼻濁音

宿好

鼻風邪のやる気なき身に鞭入るる

宿好

梅林をざつと見て来ぬ鼻つ風邪

鼻風邪を温存するにはあらねども

宿好

鳥のごと眼つむり風邪の床に臥す

さざ

鼻風邪に愚図る頭を整理せむ

宿好

片付けてをると風邪ごゑ返しけり

さざ

鼻風邪を直す呪文のもしあらば

宿好

海鼠なり風邪こじらせて臥せる身は

さざ

鼻風邪の鼻がむずむず直るらし

宿好

風邪貰ふ妻は何でも欲しがり屋

鳩信

鼻風邪を引いてずぼらな仕事ぶり

随笑

流行風邪吾が屋台骨揺らすなり

鳩信

鼻風邪を紛らすための根仕事

随笑

あつあつのけんちん汁に風邪抜かん

鳩信

鼻風邪にだうだう巡りの考えごと

随笑

こんなにも朝昼晩の風邪薬

鳩信

温泉三昧はたして鼻風邪心地かな

寒暑

居直れる風邪を追い出す粉薬

鳩信

風邪神の有無を云はさず擦り寄れる

宿好

山妻に風邪移りたる移したる

鳩信

風邪神に煙草の味を抜かれけり

宿好

襲はれてあいたた筋肉痛の風邪

燕音

風邪神のもう四五日と居直りて

宿好

こたびは喉イタイタウイルス引当てし

燕音

風邪神のけふ打晴れて御出立

宿好

こたびは胸ムカムカウイルス引当てし

燕音

腰だるしさでは取り憑く風邪の神

暮津

一日を臥して風邪寝の薄まぶた

燕音

風邪に臥す一日梅の光りざま

ねず

風邪抜けの目鼻外気に心地よし

燕音

大仏に見下されぬて風邪貰ふ

ねず

春先の風邪こじらせてああしんど

燕音

売れのこる芒みみづく風邪引くな

ねず

十一月しよっぱなの風邪貰ひけり

燕音



布団皺直して布団干せる妻  
 随笑  
 家内うちよりこゑそこらの布団取り込めと  
 随笑  
 布団取り込むは一日を蔵ふごと  
 随笑  
 蒲団ムシウオーグ出て月面歩行のぎっくり腰  
 寒暑  
 干蒲団取り込めといふ例のこゑ  
 寒暑  
 あさつての方に日移り干蒲団  
 石鏡  
 衣食足り団地布団の満艦飾  
 石鏡  
 マンションのおねしよの布団あつかんべえ  
 石鏡  
**毛布** 電気毛布  
 妻  
 電気毛布なんぞと云ひて取合はぬ  
 もも  
 寝支度の電気毛布をぬくめに行く  
 鳩信  
 もうそろそろなどと話して毛布のこと  
 燕音  
 毛布など一枚足して寝る夜かな  
 寒暑  
 あらよつと電気毛布に滑り込む  
 素抱  
 電気毛布先づ強そのあと適温に  
 暮津  
 古電気毛布温度に斑のあり  
 暮津

電気毛布妻に勧めて受け入れられ

暮津

**襦袍**

懐古  
平熱と体温計を振る襦袍

宿好

襦袍被てぎっくり腰の言ひなりに

寒暑

**綿入** 綿子

綿入に行方不明の本やあーい

ばら

角力好き患者綿子にくるまれて

ばら

**ちやんちやんこ**

ちやんちやんこ着て神頼み長かりき

もも

日曜は読書に当ててちやんちやんこ

さざ

職退きて只の親爺のちやんちやんこ

寒暑

常着にして見苦しからぬちやんちやんこ

寒暑

煙草買ひにちやんちやんこではおかしいか

石鏡

**ねんねこ**

ねんねこに当つて跳ねる鬼の豆

ばら

ねんねこに肌着乗つけぬ脱衣籠

鳩信

**毛衣** 袷かほころも

鎌倉の日向をあらく袷かほころも

もも

袷袷見て振り返る

宿好

毛衣の試着鏡よ鏡よと

宿好

袷匂ふ女と相席す

宿好

頭から見下ろされぬ袷

宿好

袷女だてらに腕組みす

宿好

毛衣の品定めする旅車中

宿好

袷似合ふ大柄スタイリスト

石鏡

**毛皮**

毛皮臭き御仁と同車東京まで

暮津

**重ね着** 厚着

厚着よりもこと手を出し仏撫づ

もも

コアラ見るコアラ色なる厚着の子

さざ

強く吹く日なりその分厚着せり

ばら

厚着して俳句はこの眼この脚で

鳩信

着膨れのもたもた脱いで診察室 宿好  
 着膨るゝ人を見上ぐる鯉の目見 宿好  
 着膨れて財布まさぐる一患者 宿好  
 患者皆着膨れ病院狭くする 随笑  
 着膨れたやうな俳句の道具立 素抱  
 着膨れて身につくものは唯ものぐさ 石鏡  
 着膨れ妻よると手貸せば「だいじょうぶ」 石鏡  
 着膨れて福神漬を零しけり 石鏡  
 著ぶくれてこの一着に終止せり 石鏡

セーター  
 セーター出すそんなきのふが過ぎてけふ 燕音  
 着古しのセーターはおり古本市 燕音  
 とつくりセーター人波をゆく酉の市 燕音  
 セーターの試着好みの木の葉いろ 宿好  
 一張羅カシミアセーター来て参拝 随笑  
 一張羅カシミアセーター来て参拝 随笑

股引  
 股引をもう手放せぬ太郎月 素抱  
 股引を履いてゆけとよ事事し 素抱

ジャンパー  
 乗り合はす電車にぼつぼつ皮ジャンパー 石鏡

冬服 冬着  
 冬物を著るといふより身を容るる 鳩信  
 冬物の出し入れに妻余念なし 燕音  
 冬服の右ポケットの底の塵 宿好  
 冬ものの洗濯鼻唄バズデンポー 宿好  
 中年には中年の冬服のいろ 随笑  
 散歩途上出合ひし犬も冬着著て 寒暑  
 壁際につんつるてんの冬着垂れ 暮津

冬帽 冬帽子  
 一列車遅れて着きぬ冬帽子 ぱら  
 建前をとらずにずばり冬帽子 燕音  
 毛糸帽うるさくなりて取り捨つる 燕音

クイと啼き鴟冬帽掠めゆき 石鏡  
 野毛飲屋街に繰り出す冬帽子 石鏡

頬被  
 頬被正月ものの覗突漁 鳩信

耳袋  
 宿木にほうと佇む耳袋 鳩信

襟巻  
 動物園 マフラー  
 花冷えのコンドル無垢の襟巻す 随笑  
 手に取りぬただ何となくこのマフラー 石鏡  
 首筋にマフラー絡めカーフェリー 石鏡

マスク  
 マスクとつて白子の味見せり ねず  
 よく喋る女マスクで蓋をせん 鳩信  
 マスクして蛙めき来ることのおもしろ 燕音  
 マスクしておのづからなる女の日 燕音  
 マスクして疾うに観念してゐる目 燕音

手袋  
 会場にマスクの市松模様かな 素抱  
 肝心な話はマスクとつてせむ 素抱  
 マスクして歩行の何處かしやちこぼる 石鏡

手袋  
 手袋の布地薄れし処かな さざ  
 手袋をしてみてうっかり落し物 宿好  
 手袋の片方拾ふてみたものの 素抱

足袋  
 万灯引く衆の白足袋白法被 随笑

外套 オーバー  
 首筋のすうすうオーバー羽織り初め 鳩信  
 親方の漁場差配の赤毛套 素抱

懐手  
 懐手する手の無くて大櫂 ねず  
 こんなこと似合はざれども懐手 素抱

日向ぼ 日向ぼっこ



まなうらに駱駝の現るる日向ぼこ

もも

紙漉

籠りきり日向ぼこのやうな日々

さざ

紙を漉く技も曾ての武蔵紙

ばら

日向ぼこ鳥の死に処に思ひ馳せ

さざ

北風

日向ぼこ頭の抽出より挿話

燕音

荒神松買ふにがま口北風晒し

ねず

目つむれば宙に浮く吾日向ぼこ

宿好

ユリの木のまばらなる葉を北風鳴らす

さざ

日向ぼこするにも何處か気の引けて

随笑

喜多方ラーメンずすと啜れば北風ひゅう

随笑

日向ぼこ猫に去られてしまひけり

随笑

甲板に出づれば北風に面張られ

石鏡

日向ぼこめく一年がもう仕舞

随笑

SOUVENIR SHOPスカジャン北風に吊り

石鏡

日向ぼこ年内といふ柵の内

随笑

べっとう べっとう時化

鳩信

日向ぼこするコンドルに成り下がり

寒暑

べっとう時化鳶大胆に急降下

鳩信

おでこよりふらふらと起つ日向ぼこ

石鏡

改札にべっとう時化の欠航札

石鏡

身に芯のごときものあり日向ぼこ

石鏡

空風 空つ風

石鏡

日向ぼこ吾を脱け出て吾を瞻る吾

石鏡

吹き寄せられてゆく東京の空つ風に

ねず

昇天をまぬがれゐたり日向ぼこ

暮津

空つ風どんと吾が家を衝きにけり

さざ

日向ぼこ長身瘦軀折り畳み

暮津

すがれたる蔓の蔓打つ空つ風

ばら

日向ぼこよいしよと起てば目がさまよひ

暮津

百獣の王寝てばかり空つ風

寒暑

空風や鎖骨に触るゝ主治医の手

寒暑

山茶花をいたぶる霜の手をゆるめず

空風にガサツな歩き方通す

寒暑

満目の霜に一步を踏み出せる

随笑

隙間風

隙間風どのみち立て付け直す家

宿好

予報士が雲を動かし霜予報

石鏡

霜

霜晴 朝霜 霜旦

宿好

霜旦の大地寢音返すなり

石鏡

霜の声

清里、聖アンデレ教会

ねず

硬直し国道ゆけば霜の声

暮津

霜旦のイエスに通す緋毛氈

ねず

消灯の紐の音霜でも踏むやうに

暮津

啖呵切るごとく大空霜晴れて

さざ

霜柱

踏んづぶしをるなり甲斐の霜柱

ばら

霜の朝一路軌道の如くあり

ばら

霜柱意志を通して阿らず

素抱

燃えさしの一つ一つに霜降りて

ばら

敷松葉

霜柱意志を通して阿らず

素抱

霜げたる何の木の実か赤茶けて

ばら

クレッシェンド、デクレッシェンドの散松葉

さざ

恐らくは霜バリバリの朝ならむ

燕音

雪吊

クレッシェンド、デクレッシェンドの散松葉

さざ

朝日さす霜の空林空山に

燕音

雪吊の手持ち無沙汰といふべかり

ばら

共同湯霜にこはばる身をほぐす

燕音

雪吊りて陣屋等伯ぶりの松

随笑

せきれいの霜の色して岩畳

燕音

雪吊りて陣屋等伯ぶりの松

随笑

人間機関車全力疾走終ゆ霜旦

宿好

藪巻

雪吊りて陣屋等伯ぶりの松

随笑

藪巻に雪まじり雨比叡より

燕音

冬景色

近景に巨岩を配す冬景色

鳩信

冬の雨 冬雨

冬雨といふ物音の今四辺

石鏡

火事 小火

冬の雨明け方一度降ったきり

石鏡

鶏頭の小火出す火の見櫓下

燕音

霰

夕霰光琳笹を鳴らし過ぐ

ねず

火の見の下檜鶏頭の小火ありぬ

随笑

高橋阿伝夜刃 譚 霰る夜に

さざ

てつきりもみづる筈の漆が小火程度

石鏡

みぞれるといふこゑありて霰れけり

燕音

火の用心ポスターに「火はおこりんぼ」

石鏡

霰にも雪にもならず唯の雨

宿好

冬の夜 寒夜

植込みにしゃらんしゃらんと初みぞれ

暮津

暴君の腰痛なだめ寝る寒夜

寒暑

冬の水

冬の洗面真水を顔に打ちつけて

暮津

冬銀河何處ぞとあふぐ千鳥足

随笑

冬の泉 冬泉

雉子の目のやうな水輪を冬泉

ばら

町内に湯屋が健在冬の月

寒暑

水涸る 涸川

涸川の涸れ灌木に移りけり

鳩信

冬至

寺寶なき寺こそよけれ冬満月

石鏡

気泡湯にもんどり打ちて冬至柚子

暮津

一茶忌

柚湯 冬至湯 冬至風呂

妙案の浮かべるごとく柚子湯の柚

宿好

一茶忌の小遣い少なくなりけり

随笑

かさつける五體にじんわり冬至の湯

宿好

一茶忌の福神漬を噛み鳴らし

随笑

柚子湯して柚子より軽く浮ける身の

宿好

手強さと手強さ違ふ鉄斎忌

さざ

冬至湯に絆創膏も浸りあて

宿好

青畝忌

冬至湯の湯気まうまうを纏ひ出づ

随笑

青畝迎へ俳人協会黄泉路支部

さざ

冬至風呂上面うめたぐらいでは

随笑

白隠忌

下履きをボタンと冬至の湯屋を出づ

随笑

鳥ごゑの弾ける如し白隠忌

鳩信

手に足に掛け湯じんじん冬至風呂

石鏡

ポインセチア 狸 々木

柚湯の柚鎖骨の辺りに寄り着きて

石鏡

リア王読むポインセチアを足許に

ねず

こすりてもおちぬ柚の煤冬至風呂

石鏡

ギフトカードにポインセチアのカットかな

さざ

杉田湯の槽の柚の数半端でなし

暮津

ニナリツチコーナーのポインセチアかな

ばら

冬至湯の柚子にこゑかけ上りけり

暮津

唐突の真紅がよけれ猩々木

鳩信

冬至湯にざぶと一物沈めけり

暮津

ポインセチア飾り立てつつ「主は来ませり」

鳩信

おだてには乗ってみるもの狸々木  
ポインセチア十鉢並べて景気付  
内祝ポインセチアを買うて来ぬ  
早々とポインセチアの囲み記事

フルーツパーラーポインセチアに隣る席

蝦古葉仙人掌  
しゃこばさぼてん

手のこんだ咲き方をする蟹さぼてん  
シヤコバサボテン咲くと泡立つやうに云ふ

クリスマス 聖樹 聖夜

七面鳥 サンタ イヴ

おもちゃ屋のお猿ブンチャカクリスマス  
紅玉の皮煮崩れずクリスマス  
クリスマス嘉す発光ダイオード  
クリスマスセールにZENOの軍服も  
クリスマスカード日系三世より  
うる覚えの聖歌ミッシェンスクール出

駅前の木のそこかしこ聖樹の灯 燕音

おもちゃ屋の聖樹ちやかびか景気付け 宿好

幾たびも使へる聖樹飾り立て 宿好

聖樹の種証あかせば発光ダイオード 素抱

シーサイド・マリーナ聖樹の辺のデイト 素抱

そのうち皆聖樹に伊勢佐木町並木 石鏡

駅前の木の五、六本聖樹とし 石鏡

待ち合はすその眼に聖樹とハチ公と 石鏡

世は進み飾る聖樹は新グラスファイバー素材 石鏡

助っ人に聖樹歳末商店街 石鏡

毎年のことよ聖樹の新趣向 石鏡

聖樹置きどぶ板通りの福引所 石鏡

七面鳥ぼろぼろの声発しけり ねず

鮮紅のサーモン切身聖夜くる 宿好

茶房の窓スプレー描きのサンタかな 石鏡

イヴの電飾庭木をうまく使ひけり 石鏡

サンタも出て歳末商戦巻き返し 石鏡

電飾の仕掛け昼にてあらはな樹 石鏡

イヴ近き街ゆくブルゾンポッケに手 石鏡

師走 師走空 町師走

長梯子何処へ掛けても師走空 ねず

前輪を後輪追へる街師走 もも

心電図師走の波形出でをらむ さざ

黄金狂時代抜け出し師走妻 さざ

マカダミアナッツ師走の船便にて ばら

目前の師走手帳に走り書き ばら

師走妻うしろをよぎり前よぎり ばら

梅鶯の南部坂聴き早や師走 鳩信

じたばたのじたの師走のちんどん屋 鳩信

僕キツネ私タヌキの店師走 燕音

浅草の師走に遊び牛鍋屋 燕音

雷門脇の日向の師走猫 燕音

師走妻剥きかけみかん置いて起つ 宿好

師走てふ物入り月が目の前に 随笑

自転車のベルに追い立てられ師走 随笑

師走妻算盤はじく眼をしたり 随笑

鶴もとことこ師走歩きして 石鏡

郵便貯金記帳の音もはや師走 石鏡

師走妻少しは休めここに坐せ 石鏡

千両にいい値がついて街師走 石鏡

極月

極月の蛇屋の壇の蛇覗く さざ

掌を組んで目つむる車中極月へ 鳩信

極月のちよろちよろ動くおもちゃかな 燕音

極月の火に煽られて中華鍋 燕音

極月の趣常の日差しさえ 随笑

極月海はたるの東京湾に船ごちやごちや 寒暑

極月の針跳が ALMA TANGHERA 石鏡  
\*ALMA TANGHERA=タンゴを踊る人の心

極月の魚佐次に魚漁りをり

石鏡

青空より枝下ろされてユリ並木

寒暑

賀状書く

試し刷り龍の賀状をおしゃやかにす

宿好

ボロ市や衣の厚きトンカツ屋

宿好

あと五枚だうにかかうにか賀状書

石鏡

ボロ市や枝に引っかけ策を売る

宿好

古曆

痩せ痩せて閉じ金現るる古曆

石鏡

ベトナムの竹の鳥籠ボロ市に

宿好

古曆太田とあるは通院日

石鏡

ボロ市のビルマヒスイと言ふけれど

宿好

ボーナス 賞与

賞与の日そら豆が出て湯も沸いて

ねず

ボロ市のやかん頭の骨董屋

宿好

ボーナスでよろしがさうは云ふものの

ばら

ボロ市に選ぶ和服の裾つまみ

宿好

ボーナスのもう出ぬ冬を迎えけり

宿好

ボロ市の戻り足腰くつたたくた

宿好

年用意

錆止めをあかあか塗りて年用意

随笑

がさ市の山と荷積まれ立て掛けられ

さざ

愛車さる家のボルシェビじよびしよにして年用意

石鏡

年の市海山の幸積み上げて

さざ

年用意年々妻は手を抜きけり

石鏡

がさ市の風素つとんで来たりけり

ばら

枝打 枝下ろす

置炬燵出てがさ市の客相手

鳩信

がさ市のけふを強気に吹く風よ

随笑

飾売

羽子板市

傾城も手玉に取られ羽子板市

鳩信

飾売だいたいの値をいいかげん

さざ

売り顔も商ひの内羽子板市

鳩信

人集まる集まるところに飾売

石鏡

一生もの羽子板なりと売り口上

鳩信

門松立つ 松飾る

石鏡

志ん朝の買札付きぬ羽子板市

鳩信

時節柄小ぶりの松を飾りけり

宿好

横顔の誰ぞに空似羽子板市

鳩信

松立てゝひとり呟くこれでよし

随笑

羽子板市東都ツアーに組み込まれ

鳩信

注連飾る

随笑

ちよつくら前ごめんなすつて羽子板市

鳩信

日の在る内購ひおかむ注連飾

さざ

二代目も笑顔で対す羽子板市

鳩信

注連飾り手つ取り早く済ませけり

燕音

灯が点いて寝ずの商ひ羽子板市

鳩信

煤払 煤籠 煤の日 煤逃げ

鳩信

一回りして元の店羽子板市

鳩信

煤湯

鳩信

角店の助六よかり羽子板市

鳩信

煤払ひどうにもならぬ本そのまま

さざ

羽子板の値踏み群がる頭越し

鳩信

本の塵本に舞ひ降る煤払

さざ

ねずみ小僧見得切る羽子板それがよし

鳩信

ほかならぬ妻の頼みの煤払ひ

鳩信

新仲見世仲見世抜けて羽子板市

燕音

新刊書二三手にして煤籠

宿好

煤掃了ゆ不服と云へば本の位置

随笑

御用納 仕事仕舞

煤の日の片づけ本の拾ひ読み

随笑

屋上に御用納めの日の鴉

さざ

出番なき古事類苑の煤払ひ

随笑

東京に出でゆく御用納の日

ばら

これは観たことある映画煤籠

随笑

職引いて  
人ごとの御用納の日となれり

随笑

煤の日の妻の届かぬところを拭く

随笑

畳屋の畳のしごき納めかな

石鏡

ビーフシチュー煮詰めておいて煤払

随笑

カーフェリー渡り納めの水脈太し

石鏡

煤逃げも小遣銭でゆける処

随笑

頓挫して御用納の日のクレールン

暮津

晦日の風出て空の煤払ひ

寒暑

納の水天宮

暮津

煤の湯に新しき創古き創

石鏡

海軍の街に納の水天宮

石鏡

煤の湯に冬もすててこサと脱げり

石鏡

年忘 忘年会

もも

煤の日をふぐり突き上ぐ気泡湯に

暮津

ぞろぞろと二階へ通され年忘

もも

冬休

チョウ鯨が鰐の顔して冬休

寒暑

忘年の駅乗り過ごす為体

さざ

鉛筆削りごりごりと冬休

暮津

年忘れ一本杉の唄が出て

さざ

歳暮

お歳暮に庄助さんの國の酒

随笑

同人会忘年会と金嵩む

ばら

へべれけのお手を拝借年忘れ

随笑

さそひには口を濁して年忘れ

鳩信

酒量落つ話さらりと年忘

燕音

餅に飽きバリリとやりぬクラッカー

鳩信

新橋の奥の細道年忘れ

宿好

年の暮 歳末 年の瀬

鳩信

それぞれの星に名のあり年忘れ

宿好

年詰る 歳晩

鳩信

忘年会妻にはありて吾になし

随笑

歳末商戦泥つき長葱もってゆけ

宿好

御勝手に唄ひなされ年忘

随笑

一体に年寄りじみる歳末吟

宿好

岡晴夫オカッパルたうたう出たか年忘

石鏡

サンタも出て歳末商戦巻き返し

石鏡

亡き人の十八番を唄ふ年忘

石鏡

紙角力とんとん年の詰るかな

ねず

熱唱に六十余州年忘れ

暮津

天井の海老のいい色年詰る

宿好

餅

餅腹にもくれむの芽を見に出づる

ねず

職引きし年も詰りてやれ一年

宿好

餅腹に昼過ぎの空展けたる

さざ

目の粗き脱衣籠年詰りたり

随笑

餅焙り一病息災冥利かな

ばら

柿の蒂つくづく年も詰まりけり

石鏡

餅腹に相模の海のにほふかな

ばら

修理費でふ伏兵に遭ふ年の暮

宿好

黄粉餅喰ふたる顔の撫で掃除

随笑

臨時出費あれこれ出でくる年の暮

宿好

餅腹を暫し伸ばして貉の湯

素抱

年の瀬の煤ばむ顔を剃られをり

宿好

年祝ぎの餅召せ井戸神廁神

石鏡

年の瀬は露天湯なんぞ願はくば

随笑

年の瀬の散髪待つ間の漫画本	随笑	気のつけば財布も持たず暮の町	石鏡
年の瀬の裏番組も鍋料理	随笑	くるぶしを暮れにぶっつけ大しくじり	石鏡
年の瀬の何と云つても紐育	随笑	努めみて努め足らざる今年もや	石鏡
年の瀬の黄泉にも句会あるならむ	随笑	暮の海一光芒を遺しけり	暮津
年の瀬の渡しにゐたりそぞろ神	石鏡	年の内 年内	
年の瀬の柱に凭れ虎造節	石鏡	床の間に積み置く本も年の内	もも
膠釜あたたかく年送るかな	ねず	本に本寄りかかりをり年の内	さざ
隣席に日の射し込める年の旅	ねず	年内に片づけるもの抜き書きす	燕音
第九歌ふ誰も明眸瞳きて	宿好	数へ日	
出すさぬ一悶着あり暮の金	宿好	ブロッコリ茹でて数へ日籠らふか	ねず
氷川丸年の湊に繋がれて	石鏡	数へ日の日にまどろめるさるすべり	ねず
緞帳が下りて来さうな暮れの空	石鏡	数へ日のスイッチひねればチャプリン出で	さざ
つり銭出すオートマトンといふ学問	石鏡	数へ日の雑用買つて出ること	鳩信
散髪屋覗き一声「こりや駄目だ」	石鏡	数え日のもつさり顔が応対に	燕音
橋脚にへばりつく牡蠣歳晩へ	石鏡	数え日の本にも倦めば何とせう	宿好
		目につきし佳句反芻して数え日	宿好

数え日の眠気もたらす車窓の日	宿好	やどり木に逝く年の眼を止めをり	ねず
数え日の小遣いはたき買へる本	随笑	千両の実付きのわるき年逝かす	もも
数え日の蓬莱島に亀眠り	随笑	逝く年のぼそと暮れゆく男鹿の空	もも
数え日をタイムスリップして邦画	随笑	鳥の名を二三覚えし年逝ける	さざ
数え日の力が入る硝子拭	随笑	逝く年を括るに大き鍵括弧	ぱら
数え日の猫も私も目をよるべ	随笑	銭湯の逝く年映す大鏡	鳩信
数え日の日の入る部屋で耳掃除	随笑	逝く年の背をとんと突き鐘一打	随笑
数へ日を亀の正字の部首調べ	寒暑	ややこしきは皆先送り年逝かす	随笑
数へ日の朝の日に舞ふ綿ぼこり	素抱	巨人逝く年そこここに大き穴	素抱
潜水艦繋がれ数へ日の入江	石鏡	浪曲に魂揺すられて逝く年か	石鏡
東京湾数へ日の日を敷き詰めぬ	暮津	意地境地そんなもの無く年逝かす	石鏡
数へ日の銭湯に四肢伸ばしけり	暮津	逝く年の片棒担ぎゆくごとし	石鏡
行年 年逝く 年送る 逝く年	さざ	東奔も西走もなく年逝かす	石鏡
行年のアチャコ笑うてみせ呉れても	さざ	心しておくと答えて年逝かす	石鏡
行年の湯屋に遊んで高天井	暮津	暖房は茫茫と逝く年の音ぞ	石鏡
臍の緒のごとき句を溜め年逝かす	ねず	薄ら日のやうな一卜年振返る	さざ

やれやれと云うてまた年送りけり  
俳句莫迦通す一年亦過ぎて

随笑  
随笑

踏台によるけつつ立つ小晦日  
用足しつつ用思ひつく小晦日

ばら  
ばら

この年を締めくくる顔吾もしたり  
この年を評すに釦の掛け違ひ

随笑  
石鏡

小晦日買ひ足すものはメモにして  
大晦日 大三十日 大つごもり

宿好  
暮津

唯年を送る無策でありしかな  
大年おほとし

石鏡  
ねず

木々にあり大つごもりの三時の日  
じたばたのばたの大つごもりなるよ

ねず  
鳩信

大年のむらさきだちし夕櫂  
大年の日を載せ薨屈託なし

ねず  
ねず

銭湯が未だあり大つごもり月夜  
がちやちゃんと大つごもりのレジの音

燕音  
燕音

松ぼくり大年の日を懐かしみ  
大年の空見渡して引つ込みぬ

ばら  
宿好

締切日大つごもりと別にあり  
その内が来年となり大つごもり

随笑  
随笑

大年の空窺へば鳶の居る  
大年の雨のこのまゝ上がらぬか

暮津  
暮津

いま暮れて今年が終る枯木星  
大つごもり飛行機音のこもる空

随笑  
石鏡

小晦日 小つごもり  
こりこりと何を剥きぬる小晦日

さざ  
さざ

屑籠の影が伸び来ぬ大三十日  
大三十日昼過ぎたうたう降つて来ぬ

石鏡  
暮津

鉢物に土を足しやる小晦日

さざ

大晦日まだ起きてみて隣の灯

暮津

### 年惜しむ

物価高の一年杉箸割り損ず

燕音

### 年守る

その時はその時と年送り来ぬ

宿好

### 掃納 年の塵

夫婦して磨く玻璃戸の年の塵

随笑

### 年の火

浄闇に年の火爆ぜぬたて続け

随笑

### 晦日蕎麦 年越蕎麦

年越蕎麦鯁臭さが顔にくる

暮津

年の火にかざすパパの手こどもの手

寒暑

年越蕎麦鯁の小骨もてあます

暮津

背焙れば叩くが如し年の火は

暮津

年越蕎麦終の数なるこの三人みたり

暮津

### 年の湯

河内山宗俊もどきが年の湯に

随笑

### 年越

木瓜の枝のこんがらかつて年越せり

もも

### 年の夜

年の湯にしづしづと臍沈めけり

宿好

一病と年の関越す膝栗毛

もも

### 年の宿

年の夜を更かす蜜柑の皮積み上げ

暮津

年を越す鉢の金魚に被せ物

さざ

### 年の旅

もてなしに大き湯婆年の宿

ねず

ぎくしゃくとしたまま年を越しにけり

随笑

し残したこと年越してやればよい

随笑

赤城山一つ年取る面構え

寒暑

男鹿線男鹿年越吟行に乗りてことこと年の旅

もも

除夜

簡単に了はらぬ年よ除夜も雪

暮津

除夜篝火の粉の竜を放ちけり  
鈴しゃんと太鼓はどんと除夜詣

暮津  
暮津

鳴り物入り日蓮さんの寺の除夜

暮津

除夜の鐘

年越詣 除夜詣

除夜詣飴玉なんぞ振る舞はれ

寒暑

黄泉にても鐘百八ツ聴こえをらむ  
年の鐘撞く音色にも人間味

石鏡  
暮津

勢ふもの身ぬちに満ちて除夜詣

寒暑

年の外に追ひ遣らるごと除夜の鐘

暮津

除夜詣雨にうるほふ地を踏みしめ

暮津

除夜の鐘浅く撞きたる若夫婦

暮津

参道の歴然とあり除夜篝

暮津

除夜の鐘撞いていささか誇らしげ

暮津



鳥籠を日向にサトウハチロー忌	ねず	大海馬眼をしょぼつかせゐたりけり	ばら
ゆりの木の花たぶたぶと海風に	もも	カゴカキダイカゴカキダイに追いつきぬ	ばら
呆けし実を三つ四つ残しやぶめうが	もも	サギフエの乙姫さまへご注進	ばら
ユスリ蚊と正体知れてはしやぐもの	さざ	カーニバルサンバにのりてミノカサ	ばら
ユスリ蚊のかいぐり遊びはじまりぬ	さざ	カンガルーパーの木の花飛交うて	ばら
蕨手のによつきり南洋リュウビンタイ	さざ	ベニヒモの木とやぼおつとして来たり	ばら
何か実のやうな花付けポポーの木	さざ	覗くさへミミカキグサのこそばゆし	ばら
結実中カカオ色なるカカオの実	さざ	下田 石廊崎行 奥石廊アロエ畑の中に村	鳩信
すがれても姥百合背筋びんしやんと	ばら	浅草寺厄除け 病床に妻もたらしぬ厄除護符	鳩信
ヘコアユのきんびらごぼうめくが揺れ	ばら	車輪梅海匂ふとき匂はぬとき	鳩信
大海馬しるしばかりの背鰭振り	ばら	葛西臨海水族館 ヒブダイの佳人とりわけ歯が見事	燕音
毒針を何処に仕込めるミノカサゴ	ばら	竜宮の森を散策大海馬	燕音
マンボウのプロポーションに見とれをり	ばら	ふなばたを這ひて房 州法螺貝の脚	燕音
衣食足り何の平成俳句哉	燕音	ピーマンのやうにむくれて距離置く妻	随笑
シベリアが叩き込む黒埋葬図	燕音	青森檜葉半島の背をなしにけり	随笑
黒き顔黒き手眠るツンドラに	燕音	恐山黄泉の下見にあらねども	随笑
ツンドラの軍隊毛布を抜け靈魂	燕音	椰子の間百葉箱のやうな家	随笑
函を負ふ黒きフォルムは運ぶ人	燕音	露天湯に靈芝のごとき老いの尻	随笑
牛蒡サラダに軽井沢風コッペパン	燕音	宿木を見つけしこゑの高弾み	随笑
饅頭に押す紅しかと国慶節	燕音	聴診器こんどは背中初検診	寒暑
じゃんじゃらじゃん双十節の獅子現れぬ	燕音	護謨の木にぎっくり腰の愚痴零す	寒暑
中華獅子おどけ隣きしたりけり	燕音	湿布して氷河期迎ふぎっくり腰	寒暑
青龍の胴空を切る双十節	燕音	腰痛に利く温泉があらば天竺まで	寒暑
達谷窟 <sup>えみし</sup> 毘沙門天蝦夷に睨み利かす寺	宿好	腰痛に竜の落し子めく歩行	寒暑
蝶々 <sup>ミヤコ蝶々</sup> に浪花をんなの粹見たり	宿好	腰痛の一撃脳天真つ白に	寒暑
お菓師の広庭借りて弘法市	宿好	花摘みの鉢曇れり花渋に	寒暑
弘法さんの縁日みたらし団子焼く	宿好	山下清入ってゐさうな道後の湯	寒暑
ユスリ蚊に伴奏添えてやらまほし	宿好	木村家の庭に雨乾ぬ車輪梅	寒暑
鉄の肺二十世紀を駈け抜けり	宿好	朝の舟揺りつ浦人銀葉草搔く	寒暑
あかがねの亀とおもへば首動く	随笑	宿の膳こんがり焼きの黒ハチメ	寒暑

\*ハチメはあこう 赤魚

腸妻によき猷立牛蒡一点張り 寒暑  
 赤レンガ驛より阿房列車発ち 寒暑  
 ここ迄が咄のさはり幽霊譚 寒暑  
 「かもしか」の運転席のいと高し 寒暑  
 鯛生簀由良のきんちやく入江かな 寒暑  
 豚汁とんの豚を浚へる煮立汁 素抱  
 春節や人波の上の朝陽門 素抱  
 春節や銅鑼の巨濤に呑まる路地 素抱  
 春節の飯店気前よき盛り付け 素抱  
 春節の関羽煙たげ支那線香 素抱  
 春節の円卓ぐるりぐるりかな 素抱  
 豚饅頭ぶたまんを山積み春節セールなり 素抱  
 魚団子スーポの湯気に春節来 素抱  
 驚きのテツポウエビの衝撃波 素抱  
 大海馬背びれひらひら昇天す 素抱  
 リーフィーシードラゴン遊歩の迷彩服 素抱  
 カガミ貝縄文人も化粧ひけむ 素抱

昼食に煮付礼文の黒がしら 素抱  
\*黒がしらは鱈のこと  
 釣り上げしねずっぽ三匹缶からに 素抱  
 ピーマンに日は差しながら雨の降る 素抱  
 ピーマンを多めに妻の手製ピザ 素抱  
 七節蟲の単なる棒があるき出す 素抱  
 混浴の慈母観音に目の遣り場 素抱  
 朝市にミズの瘤買ふ旅の者 素抱  
 醤油瓶昔磨けりブラシの花 素抱  
 くさぐさの碑の中スッポン感謝之塔 素抱  
 旅先の飛弾に酌めるや薦豆腐 素抱  
 さうですか食べられますか野かんぞう 石鏡  
 揭示して句会の予告湯治棟 石鏡  
人体の不思議展 東京国際フォーラム  
 タブー視の垣の払はれ人體展 石鏡  
 北鎌倉始めての路藪めうが 石鏡  
二〇〇四年十一月一日発行  
 新札の樋口一葉長居せよ 石鏡  
 マイペース崩さずにゆく皮ブーツ 石鏡  
 靴音も路も単調皮ブーツ 石鏡

皮ブーツ一直線に路は伸び 石鏡  
 皮ブーツ肩に手をかけ試し履き 石鏡  
 花アロエ漁師臭さの脱けきらず 石鏡  
 燈台の足下からすのゑんどう咲く 暮津  
 パンパスの旗指物を雨急襲 暮津

ポーチュラカ何處かとぼけしその響き 暮津  
 ぢゃんぢゃんと火焰樹の花咲き継げり 暮津  
 網走の市にて初見オオカミウオ 暮津  
 匂に触れて何を申すか昼行燈 暮津

季題索引

「あ」

秋の海 327  
 秋の雨 344  
 秋に入る 273  
 秋づく 287  
 秋燕 325  
 秋微雨 344  
 秋津 319  
 あきつ 319  
 秋立つ 273  
 秋開け 382  
 秋高し 341  
 秋空 341  
 秋澄む 341  
 秋簾 322  
 秋湿り 298  
 秋桜 331  
 秋雨 344  
 秋寒 368  
 秋寂び 382  
 秋曇り 298  
 秋草 301

秋の蛇 324  
 秋の日 340  
 秋の燈 300  
 秋の昼 298  
 秋の浜 327  
 秋の初風 288  
 秋の初蜂 346  
 秋の初め 274  
 秋の蠅 321  
 秋の野 342  
 秋の虹 298  
 秋の蝶 321  
 秋の空 341  
 秋の蝉 286  
 秋の聲 343  
 秋の暮 344  
 秋の雲 342  
 秋の麒麟草 292  
 秋の川 348  
 秋の風 342  
 秋の蚊 322

朝曇 226  
 朝顔蒔く 109  
 揚花火 254  
 揚羽蝶 175  
 明易し 135  
 通草 358  
 通草の花 108  
 暁蛸 285  
 秋夕焼 298  
 秋めく 287  
 秋祭 362  
 秋深し 382  
 秋日和 340  
 秋日 340  
 秋早 287  
 秋彼岸 322  
 秋晴 340  
 秋場所 284  
 秋の雷 288  
 秋の夜 298  
 秋の水 339

石蓴 30  
 青栗 375  
 青胡桃 256  
 梧桐 171  
 青桐 171  
 青きを踏む 65  
 青木の実 27  
 青柿 256  
 青梅 150  
 葵 138  
 青嵐 172  
 アイリス 134  
 愛の羽根 339  
 あいの風 144  
 鮎並 61  
 愛鳥週間 114  
 アイステイ 216  
 アイスクリーム 218

青麦 101  
 青松毬 359  
 青葡萄 202  
 青花 334  
 青葉 175  
 青葉木菟 173  
 青嶺 202  
 青饅 61  
 青梅雨 141  
 青蔦 179  
 青大将 178  
 青田風 190  
 青田 190  
 青簾 186  
 青芒 162  
 蒿雀 352  
 青芝 179  
 青山椒 202  
 青鷺 182

秋来る 273  
 秋風 342  
 秋翳り 298  
 秋扇 322  
 秋うらら 341  
 秋袷 322  
 秋暑し 287  
 秋茜 287  
 秋 272  
 秋隣 269  
 秋近し 269  
 アカンサス 294  
 赤裸 245  
 赤のまんま 293  
 赤のまま 293  
 赤蜻蛉 287  
 赤椿 62  
 赤い羽根 339  
 青林檎 256

あめふらし  
雨虎  
雨名月  
水馬  
あやめ  
鮎  
鮎鷹  
洗膾  
あらせいとう  
荒梅雨  
新走  
荒布  
霰  
蟻穴を出づ  
蟻地獄  
アロハシヤツ  
阿波踊  
泡立草  
鮑  
泡盛  
行火

434 219 132 292 280 184 167 50 20 250 346 141 98 221 172 159 134 156 315 160 160

鮫鯺  
あんかう  
安居  
杏の花  
杏子  
行灯海月  
いかのぼり  
鳥賊  
伊勢海老  
磯遊び  
いたちはぜ  
虎杖  
一月  
一の午  
一八  
凍つ  
互つ  
凍滝  
糸桜  
いぬふぐり

47 55 19 18 18 135 37 1 68 76 93 8 132 104 248 150 74 133 429 429

伊予柑  
藺  
いかづち  
毬栗  
息白し  
生身魂  
勇魚  
藺座布団  
十六夜  
磯菊  
馳  
一位の実  
苺  
無花果  
一の酉  
銀杏落葉  
銀杏散る  
銀杏黄葉  
一葉忌  
一茶忌  
一遍忌

300 446 407 388 403 403 393 357 178 378 399 366 316 185 426 276 415 375 191 161 64

朝桜  
浅沙の花  
朝蟬  
朝寝  
朝焼  
浅蛸  
浅蛸搔く  
浅蛸掘  
麻  
朝顔  
葺  
朝顔の種  
朝顔の実  
朝霧  
朝寒  
朝霜  
浅漬  
朝露  
朝の虫  
薊の花  
海豹

58 111 307 305 398 444 368 316 360 360 291 291 267 94 94 94 232 105 235 158 85

明日葉  
馬酔木の花  
芦  
葎  
芦刈  
芦枯る  
芦原  
紫陽花  
鱻  
鱻刺  
アスパラガス  
汗  
汗ばむ  
畦青む  
遊び舟  
暖か  
熱爛  
厚着  
暑さ  
暑し

182 182 440 425 56 246 53 210 210 63 172 160 137 373 419 374 373 373 373 108 109

敦盛草  
あとずさり  
あなぐま  
穴子  
穴まどひ  
アネモネ  
油菜  
虻  
油蟬  
油照  
油虫  
あぶれ蚊  
雨乞  
甘茶  
甘茶仏  
甘野老の花  
アマリリス  
海女  
あまにう  
天の川  
網戸

186 276 265 250 154 178 99 99 234 322 166 229 235 107 102 98 324 131 427 167 126



雄日芝 尾花 お花畑 お花島 鉄漿蜻蛉 鬼やんま 鬼やらひ 鬼の豆 鬼貫忌 踊浴衣 踊の輪 踊唄 踊 お西さま お年玉 男梅雨 おでん酒 おでん 落穂拾ひ 落穂 落葉掃く

332 301 204 204 163 319 33 33 316 280 280 280 280 393 6 141 424 424 379 379 400

雄ひじわ 臃 臃夜 御水取 女郎花 御命講 万年青の実 泳ぎ 和蘭あやめ 御柱 おんべ カーネーション 海芋 蚕 買初 開帳 海棠 かひもちかき 帰る雁 鏡開

14 55 156 108 55 10 109 126 119 16 117 134 246 382 367 303 53 79 79 332

鏡餅 書初 垣繕ふ 杜若 柿の花 柿若葉 陽炎 風花 飾 飾海老 飾焚く 柏餅 悴む 河鹿 霞 霞草 霞立つ 数の子 かたかご 堅香子 片栗の花

40 40 40 7 64 97 64 149 20 118 16 8 8 20 65 124 136 134 64 9 8

炎昼 炎帝 炎天 炎天下 豌豆の花 豌豆 えんま蟋蟀 閻魔詣 閻魔参 遠雷 追羽子 扇 黄金週間 桜桃 お会式 大旦 大傘持 大桜 大つごもり 大年

455 455 85 265 3 367 150 112 196 9 191 256 15 309 125 104 227 227 112 227

お [お] 車前草の花 オーバー 大晦日 大三十日 大山蓮華 大雪 大瑠璃 お風入れ 拝み太郎 芋穀 芋穀焚く 芋穀火 置炬燵 翁草 扇燈籠 送火 おくんち 虎魚 納の水天宮 おしくらまんじゅう 唾蟬

235 24 451 161 322 284 274 97 434 277 277 277 310 405 173 20 129 455 455 126 442

鴛鴦 白粉の花 おしろい 含羞草 おじや お十夜 遅桜 お松明 御旅所 お玉杓子 男滝 落鮎 落栗 落鱸 落蟬 落椿 落葉 落葉掻く 落葉風 落葉焚 落葉どき

400 400 400 400 400 62 235 397 375 348 205 80 119 56 88 392 421 189 290 290 413

飾壳 重ね着 籠枕 懸巢 神楽 夏暁 牡蛎 柿紅葉 柿の蒂 柿落葉 柿 夏期講習会 夏期講座 鏡絵 案山子 返り花 帰り花 貝割菜 懐炉 蚊いぶし かいつぶり

450 440 211 352 425 190 431 387 355 403 355 251 251 274 348 399 399 335 435 169 413

門火焚く 門火 門涼み 蚊蜻蛉 河童忌 郭公 勝相撲 酢漿草 片蔭道 片蔭 数へ日 風邪神 風邪 風の盆 風死す 風薫る 風入れ 火事 搦布 鰻 樅の実

277 277 212 170 251 173 284 177 232 232 453 435 435 295 233 172 405 445 250 329 375

紙懐炉 髪置 神在月 髪洗ふ 神遊び かまどうま かまつか かまきり 南瓜 かぼす かぶらな 蕪 甲虫 兜虫 蚊柱 鹿子百合 蚊の姥 鉦叩 かなぶん かなかな 門松立つ

435 397 392 214 425 309 327 310 292 381 423 423 201 201 167 188 170 310 200 285 450

くわりんの花 雁帰る 空梅雨 枸橘の花 鳥の子 蚊帳吊草 鬢草 亀の子 亀鳴く 紙風船 紙雛 蠶螂の子 南瓜の花 蠶 蟹 要の花 門松 蛸蚪 松魚 鯉 蝸牛

108 55 144 78 152 140 103 145 80 105 48 163 140 144 145 152 8 80 160 160 147

寒雀 寒蜩 寒桜 寒鯉 寒紅梅 寒菊 寒鴉 寒泳 寒明 寒明く 寒 寒晴 寒の入 皮剥 川蜻蛉 蛙の目借時 蛙合戦 翡翠 蛙 軽鳧の子 歌留多

26 26 31 14 31 28 26 14 36 36 13 4 13 131 163 106 110 162 110 156 9

鴟 海水浴 海水着 海紅豆 蚊 寒戻る 寒牡丹 寒木瓜 寒暮 灌仏 寒緋桜 観梅 寒梅 寒海苔 寒の水 寒燈 寒釣 寒椿 寒潮 寒卵 萱草の花

413 247 247 268 167 38 27 32 26 98 31 44 31 29 14 26 14 32 26 14 139

竿燈  
カンナ  
神無月  
寒波  
干瓢乾す  
寒夜  
甘藍  
額の花  
賀詞  
賀状  
元日  
元旦  
元朝  
蛾  
ガーベラ  
外套  
ががんぼ  
がさ市  
賀状書く  
がちやがちや  
がまづみの実

381 310 449 449 170 442 180 153 3 3 3 6 6 138 259 445 259 407 392 294 275

蒲の穂絮  
蒲の絮  
雁来紅  
木苺  
喜雨  
其角忌  
桔梗  
黄菊  
菊芋の花  
菊植う  
菊根分  
菊の苗  
菊  
菊花展  
菊師  
菊作り  
菊人形  
菊日和  
如月

48 362 364 366 362 364 363 362 59 59 59 304 362 303 70 234 178 327 374 374

雉  
雉子  
鱧  
帰省  
帰省子  
北風  
さちさち  
さちさちばった  
さちこう  
狐の牡丹  
狐  
衣被  
絹莢  
菌  
茸  
茸狩  
菌狩  
着ぶくれ  
木五倍子の花  
木守柿  
キャベツ

259 355 69 440 345 345 345 345 125 316 427 103 303 347 347 443 251 251 131 56 56

髪切虫  
天牛  
紙漉  
雷  
神の留守  
鴨  
蚊帳  
萱刈る  
榎の実  
蚊遣香  
蚊遣火  
空風  
烏瓜の花  
烏瓜  
空っ風  
苧  
雁来月  
雁  
かりがね  
刈田  
カリフラワー

422 379 325 325 295 256 443 360 257 443 169 169 377 374 169 411 392 191 443 201 201

雁渡し  
かりん酒  
かりんの実  
かりん  
狩  
枯るる  
枯芦  
枯芦原  
枯銀杏  
枯枝  
枯尾花  
枯柏  
枯萱  
涸川  
枯木  
枯木風  
枯木星  
枯草  
枯櫟  
枯鶏頭  
枯櫟

419 417 420 418 416 416 416 445 419 419 419 416 420 419 419 417 426 354 354 354 325

枯桜  
枯蔓  
枯蠅螂  
枯葉  
枯蓮  
枯芭蕉  
枯葎  
裘  
川澄む  
かはほり  
寒茜  
爛熱し  
寒禽  
寒気  
寒暁  
観月  
爛酒  
甘藷  
閒石忌  
邯鄲  
竿燈祭

275 310 407 370 425 314 408 414 410 425 409 171 339 440 419 420 419 403 432 418 419



熊蟬 嚮虫 くっさめ 朽葉 くちなは 山梔子 葛湯 葛の花 葛嵐 葛 葛餅 葛饅頭 葛練 葛桜 樟若葉 葉掘る 鯨 くしゃみ 草紅葉 草萌 嚏

235 310 438 403 178 359 424 304 336 304 220 220 220 220 124 374 426 438 388 47 438

熊手 熊 熊祭 蜘蛛 蜘蛛の囀 蜘蛛の糸 雲の峰 海月 水母 栗の花 栗名月 栗 栗飯 クリスマス 車百合 胡桃の花 胡桃 クレソン 暮の春 黒揚羽 クローバー

67 175 112 41 377 129 188 375 447 375 368 136 248 248 191 164 164 164 426 426 394

クロッカス 慈姑 桑 欽形虫 君子蘭 薫風 茱萸 グラジオラス 啓蟄 鶏頭 鶏頭花 競馬 軽雷 桂郎忌 敬老の日 敬老日 毛衣 今朝の秋 罌粟の花

127 273 440 440 311 311 407 191 135 326 326 50 134 357 172 47 201 110 63 40

伽羅蔞 キャンプ 球根植う 旧正月 旧正 胡瓜 胡瓜もみ 凶作 夾竹桃 今日の日 虚子忌 霧らふ 雲母虫 きりぎりす 桐の花 霧 霧雨 霧の香 霧冷 切干 金柑

381 398 316 316 316 316 128 309 252 316 99 313 189 348 216 216 37 37 59 203 124

金魚草 金魚 金魚死す 金魚掬ひ 金魚玉 金魚ねぶた 金魚鉢 金魚屋 金盞花 金蠅 金目鯛 金木犀 義士祭 ぎす 岐阜提灯 擬宝珠 牛鍋 行々子 御忌 御慶 銀河

276 6 99 162 423 126 280 309 73 337 430 163 109 223 225 274 225 223 223 223 154

銀杏 ぎんなん 銀屏 銀やんま 銀龍草 食積 クーラー 九月 茎立 草刈 草虱 草取 草の花 草の穂 草の実 草の絮 草引く 草風船 草螢 草むしり

159 154 334 159 374 378 374 330 159 379 177 63 295 222 7 139 319 433 377 377

木の葉時雨 404  
木の葉散る 404  
木の実 353  
木の芽 60  
木の芽風 60  
木の芽山 60  
小春 399  
小春日 399  
小判草 177  
辛夷 75  
駒返る草 101  
駒草 265  
小雪 20  
濃竜胆 331  
衣更ふ 116  
更衣 116  
蒟蒻掘る 398  
昆布刈る 250  
昆布 250  
豪雪 20  
ごうな 96

96 20 250 250 398 116 116 331 20 265 101 75 177 399 399 60 60 60 353 404 404

ゴールデンウィーク 112  
御開帳 55  
五月 114  
ごきかぶり 166  
ごきかぶり 166  
極寒 30  
極月 448  
極暑 234  
御正忌 406  
午睡 230  
胡麻の花 256  
ごまめ 7  
胡麻 335  
ごめ 172  
御用納 451  
鮎 145  
ごんずい 39  
サーファー 246  
歳旦 3  
サイダー 218

218 3 246 39 145 451 172 335 7 256 230 406 234 448 30 166 166 114 55 112

サイネリア 98  
歳晚 452  
歳末 452  
冴え 19  
冴返る 38  
轉る 100  
轉る 100  
左保姫 65  
榊の花 137  
左義長 16  
桜時 84  
桜餅 73  
桜守 85  
桜 85  
桜うぐい 93  
桜狩 89  
桜葉降る 88  
桜草 97  
桜鍋 424  
桜の実 150  
桜見に 89

89 150 424 97 88 89 93 85 85 73 84 16 137 65 100 100 38 19 452 452 98

結氷 24  
華鬘草 109  
毛虫 201  
ケルン 203  
巻織汁 423  
けんちん 423  
けんぼなし 108  
夏至 172  
冬至 445  
月光 312  
月明 312  
厳寒 30  
紫雲英 67  
源五郎 156  
玄冬 390  
原爆忌 271  
恋猫 39  
耕衣忌 300  
紅梅 44  
河骨 158

【こ】

158 44 300 39 271 390 156 67 30 312 312 445 172 108 423 423 203 201 109 24

蝙蝠 171  
黄葉 386  
黄落 389  
黄落期 389  
紅緑忌 186  
氷 24  
氷苺 217  
氷水 217  
凍る 18  
氷る 24  
蟋蟀 309  
金亀子 200  
黄金虫 200  
凧 405  
木枯 405  
子鴉 152  
穀雨 71  
酷暑 234  
穀象 133  
苔茂る 256  
ここえる 20

20 256 133 234 71 152 405 405 200 200 309 24 18 217 217 24 186 389 389 386 171

小米花 108  
小式部 359  
コスモス 331  
去年今年 2  
炬燵 434  
東風 51  
古茶 118  
酷寒 30  
小晦日 455  
小つごもり 2  
今年 346  
今年酒 2  
今年竹 181  
今年米 345  
小鳥 349  
小鳥来る 349  
子供の日 117  
粉雪 20  
木の葉蝶 321  
木の葉 404  
木の葉髪 404

404 404 321 20 117 349 349 345 181 346 2 455 455 30 118 51 434 2 331 359 108

獅子頭 鹿踊 仕事仕舞 茂 しぐれ 時雨 しぐるる シクラメン 鳴 鳴焼 敷松葉 子規忌 四月馬鹿 四月尽 鹿 紫苑 四温 潮吹 汐干狩 汐干 塩辛蜻蛉

223 280 451 174 405 405 405 97 352 260 444 316 72 112 389 330 19 95 93 93 319

猪狩 猪鍋 蜷 蜷蝶 紫蘇 紫蘇の実 滴り 下萌 齒朶 枝垂桜 七月 七五三 七福神詣 七変化 七面鳥 しづり雪 シネラリア 紫薇 死人花 洪柿 縞鼻

410 355 325 267 98 20 447 137 6 397 187 55 8 47 206 335 151 321 52 427 426

四万六千日 清水 紙魚 凍む 注連飾 注連飾る 紫木蓮 繡線菊 霜の声 霜柱 霜晴 著莪 尺蠖 芍薬の芽 芍薬 蝦蛄 蝦古葉仙人掌 石鹼玉 三味線草 沙羅の花

267 68 105 447 130 125 59 175 134 444 444 444 444 137 76 450 8 18 252 206 202

桜紅葉 さくらんぼ 鮭 ささげ 笹子 笹鳴 柴螺 山茶花 挿木 サッカー 臯月 五月晴 五月富士 里芋 早苗月 早苗 実朝忌 鯖 サフラン 仙人掌 五月雨

144 261 362 131 48 152 133 315 186 182 133 26 59 394 95 427 427 293 328 150 345

寒さ 寒し 鮫 さやか 冴ゆる 冴ゆ 細魚 さるをがせ 百日紅 サルビア 爽やか 三寒四温 三寒 三月 三ヶ日 三鬼忌 サングラス 珊瑚樹の実 山茱萸の花 三春 山椒魚

145 33 46 380 199 73 13 48 19 19 338 180 267 266 39 19 19 338 429 414 414

山椒の実 山椒の芽 三色堇 三尺寝 三社祭 サンタ 三伏 秋刀魚 石榴の花 石榴 座禅草 朱欒 ざりがに 残寒 残暑 残雪 椎の花 椎の実 椎若葉 潮浴

247 124 375 136 37 287 38 130 381 110 354 136 328 234 447 119 230 98 61 359

白子  
白子干  
白菊  
白梅  
白息  
書を曝す  
初冬  
しよつたる  
塩汁鍋  
暑中見舞  
処暑  
暑気払ひ  
暑気  
精霊舟  
精霊ばった  
賞与  
樟脳舟  
焼酎  
狸々木  
障子  
小暑

61 61 362 42 415 251 392 423 423 251 284 252 182 284 347 449 225 219 446 433 187

新諸  
師走空  
師走  
白木槿  
白芙蓉  
白服  
白日傘  
白詰草  
白椿  
白縮  
代田水  
代田  
白菖蒲  
白式部  
白靴  
代蛙  
代掻く  
紫蘭  
白萩  
白南風  
白玉

259 448 448 290 288 184 199 67 62 209 152 152 134 359 211 110 152 139 304 171 220

自然生  
自然薯  
地藏盆  
ジギタリス  
森林浴  
新緑  
新涼  
新米  
新年  
新豆腐  
新茶  
新松子  
新雪  
新樹  
新じゃが  
新馬鈴薯  
新酒  
新春  
新社員  
震災忌  
新牛蒡

371 371 293 154 203 122 288 345 2 293 118 359 414 121 125 125 346 1 72 295 260

秋灯  
秋天  
秋蝶  
秋蟬  
終戦日  
終戦記念日  
鞆  
秋水  
秋思  
秋暑  
秋色  
秋光  
秋興  
秋気  
秋果  
秋海棠  
秋燕  
秋雲  
驟雨  
秋意  
シャワー

300 341 321 286 282 282 105 339 343 287 272 340 343 300 336 330 325 342 193 300 214

春塵  
春笋  
春愁  
春光  
春月  
春暁  
春菊  
春陰  
春意  
棕櫚の花  
修二会  
種痘  
淑気  
朱夏  
秋麗  
秋冷  
秋霖  
秋雷  
秋夜  
秋分の日  
秋風

54 109 106 101 79 78 41 80 65 127 56 93 5 112 341 338 344 288 298 324 342

生姜  
生姜市  
銷夏  
暑  
初夏  
諸葛菜  
菖蒲湯  
菖蒲田  
菖蒲  
正月  
春雷  
春夜  
春眠  
春濤  
春燈  
春泥  
春潮  
春昼  
春雪  
春星  
春水

335 301 250 182 114 103 118 134 117 1 50 79 105 93 79 58 93 78 50 79 51

雀の帷子  
雀隠れ  
鈴虫  
涼む  
涼み台  
納涼  
すずしろ  
涼し  
鱸  
すずかぜ  
煤湯  
煤払  
煤の日  
煤逃げ  
煤籠  
薄念仏会  
芒枯る  
薄  
芒原  
芒  
鮎

103 101 309 212 212 212 397 206 328 206 450 450 450 450 450 323 419 301 301 301 221

李の花  
相撲草  
角力  
相撲  
炭焼  
炭  
葦草  
葦  
すべりひゆ  
巣箱  
洲浜草  
素裸  
ストック  
ストーブ  
すててこ  
簾  
酢橘  
鈴蘭  
雀蛤となる  
雀の槍  
雀の鉄砲

74 332 284 284 433 433 67 67 256 100 41 245 98 434 209 186 381 139 370 103 103

雪原  
雪溪  
雪気  
咳く  
咳  
鶺鴒  
石炭  
施餓鬼  
セーター  
聖夜  
歳暮  
青畝忌  
青々忌  
成人の日  
聖樹  
盛夏  
ずわい蟹  
ずず玉  
スケーター  
李

23 204 20 437 437 352 434 280 441 447 451 446 32 18 447 226 429 360 25 150

自然薯掘る  
慈悲心鳥  
地虫  
地虫鳴く  
馬鈴薯の花  
馬鈴薯  
若冲忌  
ジャスミン  
蛇の髯  
ジャンパー  
十一  
十一月  
十月  
十五夜  
十三夜  
絨毯  
十二月  
十葉  
十夜  
十夜講  
十夜僧

392 392 392 139 407 434 368 313 339 391 173 441 177 268 367 370 177 310 50 173 371

西瓜  
西瓜の花  
すひかづらの花  
水泳  
素足  
迅雷  
甚平  
沈丁花  
人日  
次郎柿  
海霧  
女郎蜘蛛  
除夜詣  
除夜の鐘  
除夜  
除雪  
丈山忌  
数珠玉  
受験  
十夜寺

〔す〕

292 140 127 246 244 191 209 75 15 355 196 164 457 457 457 24 186 360 53 392

鮪  
冷まじ  
スコール  
スケート  
末黒野  
杉菜  
杉落葉  
鋤焼  
すき焼  
隙間風  
スキー  
すかんぼ  
蘇枋の花  
睡蓮  
酸葉  
水飯  
スイートピー  
すいっちょ  
水中花  
水仙花  
水仙

221 369 195 25 39 109 124 423 423 444 24 68 77 258 68 221 98 309 226 28 28

蓼の花 竹瓮 立佞武多 立葵 田芹 蛸 夙 猛り鴟 竹の春 筍飯 筍 竹の秋 竹煮草 竹散る 竹落葉 竹植う 田草月 焚火 滝壺 滝 田亀

293 398 274 138 66 132 104 349 329 124 124 101 264 181 181 130 133 433 205 205 156

魂祭 玉の汗 玉葱 玉椿 魂棚 玉すだれ 玉子酒 足袋 旅始 煙草の花 種物 種蒔 種袋 種瓢 種茄子 種探 種漬花 狸 田螺 七夕 炭団

279 210 151 62 279 294 425 442 11 294 59 109 59 382 382 382 103 427 52 276 434

大師講 大根引 大根 大根の花 大根畑 大寒 蒲公英 探梅 丹頂 誕生仏 短日 端午 俵麦 太郎月 垂穂 鱈 たらば蟹 たららの芽 鱈ちり 田村草 魂迎

406 398 397 103 397 30 67 31 413 98 407 117 177 1 346 429 429 61 423 294 278

千両 扇風機 仙入 剪定 柀檀の実 扇子 浅春 線香花火 セロリ 芹の水 芹摘む 芹田 芹 蟬の穴 蟬捕り 蟬時雨 蟬殻 蟬 雪嶺 節分草 節分

27 222 325 64 380 196 36 254 422 66 66 66 66 235 235 235 243 235 23 41 33

蕎麦 蕎麦の花 其色月 蘇鉄の花 卒業 そぞろ寒 底紅 底冷え 爽涼 走馬燈 早梅 ソーダ水 霜旦 早春 〔そ〕 薇 禅庭花 セラニウム 銭亀 銭葵 千両の実

373 334 295 261 64 369 290 415 338 223 30 218 444 36 66 269 138 145 138 27

たかな 田蛙 宝船 高山宵祭 たかべ 鷹の爪 鷹化して鳩と為る 田植 台風 大暑 待春 泰山木の花 〔た〕 雑煮 雑炊 雑木紅葉 蚕豆 蚕豆の花 空澄む 蕎麦湯 蕎麦刈

124 110 12 361 161 335 51 153 296 233 32 128 7 421 387 125 104 341 424 397

露の世 露寒 露けし 露草 露 梅雨晴 梅雨湿り 梅雨明 梅雨 梅雨の入り 冷たし 摘草 壺焼 燕の巢 燕来る 燕帰る 乙鳥 燕 茅花 つばくろ つばくら

305 370 305 334 305 141 141 189 141 140 415 65 96 100 57 325 57 57 68 57 57

手袋 手花火 鉄線 鉄線花 鉄斎忌 手焙り 木菟 石露日和 石露の花 鶴 蔓荔枝 つるもどき 釣瓶落し 吊し柿 蔓梅擬 釣舟草 吊忍 釣忍 吊鐘人參 氷柱

[て]

442 254 127 127 446 435 410 396 396 413 358 380 343 357 380 331 223 223 331 25

冬瓜汁 冬瓜 唐辛子 燈火親し 籐椅子 でんでんむし 電気毛布 出目金 出水 でてむし 出初 デコポン 出開帳 天道虫 デージー 天高し 天草取 照葉 テラス 手毬

[と]

358 358 335 300 186 147 439 223 144 147 13 423 55 41 199 341 250 387 199 9

茅の輪 千鳥 千歳飴 ちちる虫 父の日 縮布 遅日 高苺 竹酔日 竹秋 力草 煖房 煖冬 達磨市 ダリヤ 獺祭忌 ダチュラ 山車 濁酒 橙

[ち]

186 428 397 309 154 209 71 103 130 101 332 434 399 6 261 316 268 119 346 381

月の出 月 月見草 使ひ初 梅雨入 追儼 ちんぐるま 散る紅葉 散る花 ちり鍋 朝鮮朝顔 蝶 丁字 チューリップ 仲秋 中元 ちやんちやんこ 茶の花 茶摘 ちやつきらく

[こ]

312 312 188 9 140 33 266 400 90 423 268 104 75 97 295 276 439 394 109 18

椿餅 椿咲く 椿 躑躅 藿 葛若葉 葛紅葉 葛の芽 黄楊の花 造り滝 衝羽根 つくつくほうし つくつくし 土筆摘む 土筆 接木 月を待つ 月夜茸 月夜 月見 月祭る

73 62 62 111 54 110 388 59 78 212 378 286 286 66 66 64 314 345 312 314 314

泥鱸 獨立祭 どくだみ 蜻蛉 とんど とろろ汁 鳥渡る 鳥の巢 酉の市 鳥雲に 鳥頭 鳥帰る 鳥威 寅彦忌 虎尾草 豊の秋 蕃茄 トマト 海桐の実 海桐の花 飛魚

221 256 139 319 16 371 348 100 393 55 331 55 348 421 180 348 260 260 353 189 131

名越の祓 泣初 ながむし 長火鉢 流し雛 長き夜 永き日 長芋 苗札 苗木売 苗木植う 苗木市 どんど 団栗 土用浪 土用鰻 土用 どぶろく 襦袍 泥鱸鍋

〔な〕

186 9 178 435 49 299 70 315 59 64 64 64 16 376 252 252 251 346 439 222

夏枯 夏掛 夏川 夏風邪 夏牡蠣 夏終る 夏落葉 夏惜しむ 夏暁 夏 納豆 刀豆 薺の花 薺 なすび 茄子汁 茄子漬 茄子 茄子苗 梨

234 185 159 253 249 271 269 271 190 112 110 423 315 68 14 260 260 261 260 119 336

常磐木落葉 時の日 時の記念日 蜥蜴 通し鴨 十日戎 蠶螂 燈籠 蠶螂生る 冬麗 玉蜀黍 遠花火 冬天 冬帝 踏青 とうすみ 冬至湯 冬至風呂 灯心蜻蛉 闘牛 とうがん

124 149 149 178 156 15 310 280 163 399 335 254 409 390 65 162 446 446 162 49 358

歳徳神 年詰る 年玉 年立つ 年越詣 年越 年越蕎麦 年神 年惜しむ 年送る 年改まる 年明くる 登山靴 登山 土佐みづき 心太 常節 時計草 木賊刈る 木賊 朱鷺

6 452 6 2 457 456 456 6 456 454 2 2 203 203 68 220 95 134 353 353 349

海馬 橡の実 橡の花 屠蘇 年忘 年用意 年逝く 年迎ふ 年守る 年の夜 年の湯 年の宿 年の豆 年の火 年の塵 年の旅 年の瀬 年の暮 年の内 年の市 年取

429 377 129 7 451 449 454 2 456 456 456 456 33 456 456 456 452 452 453 449 456



煮凝 逃水 二月尽 二月 苦瓜 二科展 には鳥 には にいはい 蟬  
南歌の忌 南風 南天の実 菜を間引く 鳴神 菜飯 なめくじり 蛞蝓 波乗り 生節 生ビール

26 107 37 35 358 324 413 413 235 133 171 380 335 191 61 148 148 246 144 218

忍冬の花 胡蘿蔔 人参 庭燎 接骨木の花 郁李の花 二輪草 葎の花 入梅 入道雲 入学試験 蝮の道 蝮 日射病 日光黄菅 日蓮忌 虹 西日 錦鯉 錦木 濁り酒

127 422 422 425 78 77 96 257 140 191 53 52 52 254 269 367 195 232 211 388 346

根釣人 根釣 熱帯夜 熱帯魚 根芹 ねずみもちの実 女貞の実 女貞の花 鼠の尾 振花 猫柳 猫の恋 猫じゃらし 葱 葱坊主 願の糸 ネーブル ぬかご 蒜  
[ね] [ぬ]

329 329 231 186 66 420 420 180 333 126 40 39 333 421 108 276 64 373 63 492

夏の雨 夏の朝 夏野 夏の蝶 夏の空 夏の川 夏に入る 夏手袋 夏椿 夏空 夏潮 夏手套 夏座布団 夏座敷 夏旺ん 夏衣 夏草 夏霧 夏着 夏木 夏来る

234 190 176 175 159 159 114 185 267 159 246 185 185 196 226 184 176 196 184 174 114

夏負け 夏帽 夏帽子 夏布団 夏富士 夏服 夏深し 夏ばて 夏はじめ 夏始まる 夏萩 夏の夜 夏の夕 夏の山 夏の虫 夏の灯 夏の日 夏の果 夏の露 夏の月 夏の海

253 185 185 185 186 184 269 253 114 114 267 214 214 202 190 190 190 271 190 190 246

なまはげ 鯰 なまこ 海鼠 鍋焼 菜の花 七草 七種 ななかまど 七竈の実 夏行く 夏ゆふべ 夏山 夏瘦 夏休み 棗の実 棗 夏めく 夏見舞 夏蜜柑 夏祭

17 145 430 430 424 102 14 14 380 380 271 214 202 253 251 377 377 119 251 118 119 491

梯子乗 端居 稻架襖 稻架 葉桜 羽子板市 箱眼鏡 はこべ 葉鶏頭 白露 はくれん 白木蓮 白牡丹 白鳥 薄暑光 薄暑 白菜 白雨 白隠忌 萩刈る

13 213 379 379 116 450 247 67 327 305 76 76 115 413 352 119 119 421 193 446 374

跣 肌寒 裸木 裸 鱒 はたはた はたはた神 羽太 巴旦杏 櫨紅葉 櫨の実 鯊釣 鯊 はずみ玉 蓮掘 蓮の実 蓮の実飛ぶ 蓮根掘る 蓮 蓮の浮葉 走り梅雨

244 368 416 245 429 347 191 161 150 388 380 329 329 29 398 375 375 398 258 158 140

初景色 初句会 初吟行 初鴉 初鏡 初閻魔 初戎 初壳 初午 初伊勢 初嵐 初秋 初商 初明り 初明り 蜂の巣 八月尽 八月十五日 八月 蜂 跣足

5 11 11 4 10 15 15 10 37 11 288 274 10 4 221 107 294 283 274 107 244

納税期 野遊 ねんねこ 年内 年頭 年酒 年賀状 年賀 根雪 眠草 合歓の花 ねふた 俵武多 ねふた 寝冷 涅槃吹 涅槃西風 涅槃図 涅槃会 涅槃

51 65 439 453 2 7 6 6 20 189 189 274 274 274 253 54 54 54 54 54

海苔 乗初 野山の錦 野焼く 幟 野葡萄 野蒜摘む 野蒜 野火 ノハナシヨウブ 野の錦 のどけし 長閑 後の月 残る雪 残る蟬 残る鴨 鋸草 納涼 凌霄花

41 5 388 39 118 358 63 63 39 134 388 72 72 368 37 286 55 139 212 262 262

萩 掃納 袴着 墓参 墓洗ふ 南風 蠅虎 蠅取紙 蠅帳 蠅叩 蠅 蠅の子 蠅生る ハイビスカス 敗戦日 羽蟻 野分 野分あと 野分 海苔拾ふ

304 456 397 280 280 171 169 169 169 163 163 106 106 269 282 166 298 298 298 41

[9]

[は]

花の山  
花の昼  
花の鳥  
花の塵  
花の風  
花合歓  
花菜  
花時  
花とべら  
花堤  
花疲  
花散る  
花大根  
花煙草  
花橘  
花蘇鉄  
花芒  
花菖蒲  
花棕櫚  
花椎  
花氷

81 81 81 90 81 189 102 84 189 81 90 90 103 294 136 261 301 134 127 136 226

浜大根の花  
蛤  
浜おもと  
葉牡丹  
母の日  
帚木  
羽子  
羽抜鶏  
羽抜鳥  
花八つ手  
花守  
花筵  
花御堂  
花水木  
花見客  
花見  
花吹雪  
花火  
花人  
花冷  
花野

103 94 250 28 119 267 9 181 181 395 85 89 99 129 89 89 90 254 90 84 301

春嵐  
春浅し  
春  
春待つ  
春隣  
春遠し  
春近し  
春小袖  
春著  
春着  
針供養  
針納  
はららご  
はらふと  
流行風邪  
隼人瓜  
浜木綿  
破魔矢  
浜昼顔  
はまなすの実  
はまなす

54 36 33 32 32 32 32 8 8 8 37 37 328 397 435 373 250 6 177 381 264

初波  
初夏  
初泣  
初寅  
初燈  
初電車  
初天神  
初刷  
初燕  
初筑波  
初蝶  
初旅  
初雀  
初芝居  
初座敷  
初桜  
初秋刀魚  
初山河  
初氷  
初東風  
初声

5 114 9 15 11 5 30 7 57 5 56 11 4 11 10 72 328 5 414 5 4

葉月  
初漁  
初夢  
初湯殿  
初雪  
初湯  
初社  
初鴫  
初詣  
初昔  
初三十日  
初弁天  
初冬  
初富士  
初飛脚  
初比叡  
初日  
初晴  
初春  
初寝覚  
初荷

295 10 12 10 414 10 5 349 5 3 3 15 392 5 11 5 4 5 1 12 10

花曇  
花胡桃  
花屑  
花桐  
花南瓜  
鼻風邪  
花卯木  
花筏  
花通草  
花明り  
花  
花林檎  
花桃  
花ミモザ  
花三極  
花木瓜  
花貝母  
花種蒔く  
紫荊  
花辛夷  
花木五倍子

93 129 90 128 140 435 130 90 108 81 81 74 73 69 75 77 69 59 77 75 69

斑猫  
ハンモック  
バードウィーク  
海羸廻し  
貝母の花  
梅林  
馬鹿貝  
馬珂貝  
曝書  
爆竹  
芭蕉青葉  
芭蕉巻葉  
水芭蕉  
芭蕉の花  
芭蕉林  
ばった  
バナナ  
薔薇  
バルコニー  
馬鈴薯植う

59 199 129 215 347 294 294 266 158 119 119 16 251 95 95 42 69 366 114 199 199

晩夏  
万愚節  
晩蟬  
晩涼  
万緑  
パイナップル  
パセリ  
パイヤ  
パリ祭  
巴里祭  
パンジー  
日脚伸ぶ  
柊の花  
稗  
射于  
火桶  
避寒  
飛花  
日雷  
日傘

199 191 90 26 435 266 336 395 30 98 209 209 215 151 215 174 206 235 72 270

干潟  
日雀  
彼岸  
彼岸  
彼岸入  
彼岸団子  
彼岸花  
彼岸詣  
臺  
弾初  
蟾  
熊  
蝸  
火恋し  
藁  
緋鯉  
瓢の花  
日盛  
避暑  
鹿尾菜  
氷頭脰  
飛雪

20 328 96 250 227 257 211 101 370 285 426 149 11 149 55 325 55 55 55 352 93

春の雨  
春の曙  
春灯  
春大根  
春立つ  
春闌く  
春シヨール  
春驟雨  
春椎茸  
春雨  
春寒  
春さき  
春子  
春来る  
春霞  
春風  
春落葉  
春惜む  
春一番  
春荒

58 78 79 73 35 110 51 58 52 58 38 36 52 35 64 104 90 112 38 38 54

春の星  
春の服  
春の昼  
春の日  
春の雹  
春の蠅  
春の波  
春の鳥  
春の土  
春の月  
春の埃  
春の筈  
春の潮  
春の駒  
春の暮  
春の雲  
春の草  
春の蚊  
春の川  
春の鴨  
春の海

79 51 78 70 50 106 93 100 59 79 54 109 93 101 78 71 101 107 53 55 93

半ズボン  
反魂草  
半夏  
半夏生  
ハンカチ  
ハンカチーフ  
春行く  
春休み  
春めく  
春深し  
春日  
春場所  
春疾風  
春の雷  
春の夜  
春の宵  
春の雪  
春の夕焼  
春の山  
春の鴟  
春の水

184 294 187 187 211 211 112 53 36 110 70 54 54 50 79 79 50 79 51 100 51

瓢 福達磨 福寿草 福笹 菘 菘の臺 葺替 鱧 風露草 風鈴 風蘭 風船葛 風船 風船 [ふ] ピーナツ 枇杷の花 枇杷咲く 枇杷 屏風 ビヤガーデン 美術の秋

334 6 8 15 124 41 64 429 265 222 262 334 105 370 420 420 151 433 218 324

文月 吹雪 船虫 船遊び 蒲団 布団 懐手 太蘭 筆始 二日 襖 藤の实 藤の花 藤棚 藤 不作 河豚 福は内 ふくらふ 鼻 ふくら雀

274 20 249 246 438 438 442 161 9 9 433 359 111 111 111 348 429 33 410 410 26

冬泉 冬あたたか 冬暖 冬浅し 冬曙 冬青空 冬 冬牡丹 冬深し 冬の草 冬燈 冬隣 冬近し 冬薔薇 冬雀 冬潮 冬桜 冬珊瑚 冬草 冬菊 冬青草

445 399 399 392 408 409 390 27 20 29 26 383 383 28 26 26 31 27 29 28 29

日向ぼっこ 日向ぼこ 雛罌粟 日永人 日永し 日永 雛飾る 雛あられ 雛 雛菊 火取虫 海星 人手 一ツ火 単衣 旱星 早 ひっじ 未草 干鱈 鵪

442 442 127 70 70 70 48 48 48 41 153 249 249 406 184 234 234 389 258 61 352

冷やか ひやつく 冷索麵 ヒヤシンス 冷し酒 冷酒 日焼 百日草 百日紅 緋桃 氷面鏡 姫始め 姫女苑 日短 向日葵 緋牡丹 雲雀 火鉢 日の盛り 雛流す 雛壇

338 338 216 97 220 220 245 264 267 73 24 9 127 407 261 115 57 435 227 49 48

麦酒 ビール 鶺 広重忌 昼の虫 昼寝覚 昼寝 昼顔 蛭 蛙 鯉 ひよ 鴨 鴨花 氷点下 瓢箪 氷河 氷菓 冷ゆる 日向水木 冷奴

218 218 352 367 307 230 230 177 156 110 430 349 349 290 24 334 204 218 338 68 221

蛇 178  
蛇莓 178  
放屁虫 311  
糸瓜 334  
糸瓜忌 316  
へくそかづら 266  
碧梧桐忌 48  
プル 246  
ぶんぶん 200  
文旦 381  
文化の日 389  
ブロッコリー 422  
鰯 430  
ぶらんこ 105  
葡萄 337  
蚋 167  
仏桑花 269  
仏生会 98  
仏手柑 381  
噴水 212

178 178 311 334 316 266 48 246 200 381 389 422 430 105 337 167 269 98 381 212

宝鐸草の花 264  
鳳仙花 290  
法師蟬 286  
帚草 267  
報恩講 406  
ぺんぺん草 68  
ペチュニア 263  
弁慶草 291  
べら 131  
紅牡丹 115  
紅芙蓉 288  
紅椿 62  
紅支垂 55  
べっとう時化 443  
べっとう 443  
べったら漬 398  
べったら市 370  
遍路 72  
蛇の衣 178  
蛇穴に入る 324

264 290 286 267 406 68 263 291 131 115 288 62 55 443 443 398 370 72 178 324

螢袋 180  
螢火 154  
螢狩 156  
螢 154  
帆立貝 132  
穂芒 301  
星祭 276  
干布団 438  
干柿 357  
ほくり 40  
保己一忌 367  
朴の花 128  
鬼灯市 202  
酸漿 334  
鬼灯 334  
頬白 352  
頬被 442  
朴落葉 403  
ほうれん草 41  
菠稜草 41  
豊年 348

180 154 156 154 132 301 276 438 357 40 367 128 202 334 334 352 442 403 41 41 348

冬菜 421  
冬立つ 391  
冬空 409  
冬ざれ 418  
冬ざるる 418  
冬雨 445  
冬籠る 432  
冬籠 432  
冬景色 445  
冬櫂 419  
冬雲 409  
冬銀河 445  
冬着 441  
冬木の芽 421  
冬木の桜 419  
冬木 415  
冬来る 391  
冬枯 417  
冬鷗 428  
冬麗 399  
冬鶯 427

421 391 409 418 418 445 432 432 445 419 409 445 441 421 419 415 391 417 428 399 427

冬日向 408  
冬日差 408  
冬初め 392  
冬の夜 445  
冬の靄 409  
冬の鴟 410  
冬の水 445  
冬の日 408  
冬の蠅 432  
冬の虹 409  
冬の波 428  
冬の鳥 410  
冬の月 445  
冬の空 409  
冬の暮 409  
冬の雲 409  
冬の泉 445  
冬の雨 445  
冬の朝 408  
冬に入る 391  
冬浪 428

408 408 392 445 409 410 445 408 432 409 428 410 445 409 409 409 445 445 408 391 428

古簾 186  
古巢 100  
古曆 449  
古草 101  
ふらここ 105  
芙蓉の実 327  
芙蓉 288  
冬林檎 420  
冬夕焼 409  
冬休 451  
冬靄 409  
冬紅葉 400  
冬鴟 410  
冬萌 421  
冬芽 421  
冬満月 445  
冬帽子 441  
冬帽 441  
冬服 441  
冬日 408  
冬日和 399

186 100 449 101 105 327 288 420 409 451 409 400 410 421 421 445 441 441 441 408 399

繭玉 豆飯 豆撒 豆の花 まむしぐさ 蝮蛇草 マフラー 真冬 間引菜 真夏 真夏夜 まてば椎 馬刀 馬刀貝 祭舟 祭の子 茉莉花 祭 待宵 待宵草 松虫草

16 125 33 104 109 109 442 20 335 226 214 375 95 95 120 120 268 119 313 188 331

水草生ふ 蜜柑 蜜柑の花 実梅 三井寺歩行虫 [み] 万両 万灯 曼陀羅華 曼珠沙華 まんじゅさげ 万歳 万作 満作 金縷梅 まんさく マンゴー 満月 希典忌 まるめろの花 檀の実

53 422 136 150 311 27 367 268 325 325 9 47 47 47 47 216 313 316 108 378

水羊羹 水飯 水撒き 水引の花 水引草 水漬 水の秋 水温む 水鳥 水取 水つ漬 水澄む 水海月 水草紅葉 水着 水木の花 水涵る 水中り 水遊び 短夜 神輿

220 221 213 293 293 438 339 51 410 53 438 339 248 388 247 136 445 252 225 135 119

暮雪 暮春 墓参 木瓜の実 木瓜の花 ポーナス 防風 忘年会 ぼうたん 防災日 穂絮 海鞘 杜鵑草 時鳥 布袋草 ホットレモン ホットドリンクス ほっけ 捕虫網 櫛 螢見

20 112 280 378 77 449 67 451 115 295 374 248 332 173 258 425 425 62 244 433 156

マーガレット [ま] ポンポンダリア ぼんかん ポビー ポインセチア 盆休 盆の入 盆踊 盆 盆花 盆波 ぼろ市 鯛 鯛 小火 稲棒 菩提樹の実 菩提子 牡丹 牡丹雪

127 261 423 127 446 279 279 280 279 277 277 449 328 328 445 379 378 378 115 20

松ぼくり 松葉牡丹 松葉蟹 松の芯 松の内 松取る 松手入 松過 松飾る 松飾 松納 町師走 木天蓼 マスク 柁の花 負相撲 鮪 まくなぎ 真炎天 まひまひ

359 225 429 111 16 16 360 17 450 8 16 448 358 152 442 133 284 429 167 227 156

木蓮 木犀 毛布 面掛行列  
[も] メロン 芽柳 芽吹く 滅燈 芽立ち 女滝 目白 眼白 芽木 目借時 鳴雪忌 名月 室咲 紫式部の実 郁子

76 337 439 323 216 61 60 406 60 205 45 45 60 106 48 313 32 359 358

紅葉冷 もみじ葉 紅葉川 紅葉狩 もみぢ 紅葉 萩殻焼く 萩 ものの芽 木斛の花 餅 餅花 望の夜 鶯の実 望月 鴉日和 鴉の贅 鴉の声 百舌鳥 鴉 文字摺草

383 383 383 386 383 383 379 379 58 180 452 16 313 380 313 349 352 349 349 126

野外映画 八重桜 灸花 紋白蝶 もろこし 諸子 諸子魚 炎ゆる 股引 桃 桃畑 桃の村 桃の花 桃の節句 もみづる 紅葉散る 紅葉且つ散る 紅葉山 紅葉見る 黄葉

203 88 266 104 335 39 39 227 441 336 73 73 73 48 383 400 389 386 383 386

水を打つ 晦日蕎麦 鷓鴣 みそさざい 溝萩 糞 道をしへ 三日 三椏の花 蜜豆 緑立つ 緑 緑さす 虚栗 水無月 南風 実南天 身に入む 身に沁む ミニトマト 峰雲

191 260 369 369 380 171 187 375 122 122 111 220 75 12 199 445 277 428 428 456 213

麦茶 麦こがし 麦 百足虫 零余子 迎火 六日祭 海松 茗荷の子 茗荷汁 都忘れ 都鳥 ミモザの花 実むらさき 耳袋 木菟 蚯蚓 実向日葵 蓑虫

217 221 133 179 373 278 13 235 62 259 259 109 428 69 359 442 410 149 261 310

睦月 虫の闇 虫の音 虫時雨 虫籠 虫 虫干 蒸鱈 虫送り 無月 葎 無患子 むく 椋鳥 木槿 麦落雁 麦湯 麦蒔 麦畑 麦の秋

37 307 307 307 307 307 307 251 61 271 315 257 378 352 352 290 221 217 397 133 133



雪吊  
雪積もる  
雪達磨  
雪雫  
雪景色  
雪搔  
雪卸  
雪明り  
雪  
浴衣  
夕焼雲  
夕焼  
夕端居  
夕月夜  
夕立  
夕蟬  
遊船  
夕涼み  
夕菅  
夕桜  
夕霧

444 20 24 20 20 24 24 20 20 208 232 232 213 298 193 235 246 212 269 85 316

柚湯  
柚子  
櫟  
山桜桃  
ゆすらうめ  
湯気立て  
行春  
逝く年  
行年  
遊行忌  
雪割草  
雪山  
雪柳  
雪間  
雪まろげ  
雪の原  
虎耳草  
鴨足草  
雪の下  
雪野  
雪解

446 381 8 150 150 435 112 454 454 300 41 23 108 38 24 23 181 181 181 23 37

夜濯  
葭切  
夜桜  
夜寒  
夜霧  
余寒  
夜神楽  
洋梨  
養花天  
宵待草  
宵の年  
百合鷗  
百合  
柚味噌  
湯豆腐  
油点草  
ユツカ  
ゆだち  
湯たんぼ  
柚子湯

[よ]

215 162 85 369 316 38 426 336 93 188 3 428 188 381 424 332 261 193 435 446

柳蘭  
柳  
柳の芽  
寄居虫  
やつめ  
八目鰻  
八手の花  
八つ手咲く  
八頭  
奴豆腐  
奴胤  
馬陸  
焼山  
焼野  
矢車草  
灼く  
厄詣  
厄落  
焼鳥  
焼栗  
焼諸

262 80 61 96 430 430 395 395 315 221 104 179 39 39 139 229 33 33 424 375 424

山吹  
山藤  
山火  
山の錦  
山の芋  
山椿  
やませ  
山清水  
山滴る  
山桜  
山栗  
山蛙  
山芋  
破れ傘  
藪巻  
藪椿  
藪柑子  
藪からし  
藪蚊  
野梅  
屋根替

107 111 39 388 371 62 144 206 203 88 375 110 371 264 444 62 27 293 167 42 64

夕顔  
夕蛙  
夕かなかな  
やんま  
破芭蕉  
破蓮  
敗れ蓮  
敗荷  
夜涼  
やや寒  
守宮  
山笑ふ  
山若葉  
山粧ふ  
山百合  
山焼く  
山焼  
楊梅  
山女  
山葡萄

[ゆ]

257 110 285 319 374 374 374 374 206 368 166 51 123 342 188 39 39 152 132 358



あとがき

俳句を始めて三十六年になる。俳句は〈霸気ある裡が華〉と気張って作句して来たが、ここらで一服と振り返ってみたくなった。これ迄の句業をつづめてみれば、十二句集。

この内、4句集が既刊であり、残り8句集が未刊行分である。収録句は多く、緩選と云はれるかもしれないが、どの一句をとつても、自分史上痛くも痒くもあるわが分身の一部である。

それを快く読んで頂きたくと編んだ一集である。

入稿はインターネット経由でPDF (Portable Document Format) 形式で行い、費用軽減を計った。

尚、当集とは別に、十二句集を時系列的に並べ収録した「高澤良一全句集」を同時刊行した。

二〇一二年七月十六日(七十二歳誕生日)

高澤良一

511

著者略歴

高澤良一(たかざわ・よしかず)

512

昭和十五年七月十六日横浜市本牧に生まる。

関東学院六浦中学校・高等学校を経て昭和三十九年三月日本大学理工学部数学科卒。

日本電気(株)に入社。国内および東南アジアの官庁関係部門へのコンピュータ導入

・システムサポートを担当。平成十二年七月定年退職。

俳句は昭和五十一年俳句結社「濱」に入会。大野林火先生に師事。昭和五十七年「濱」賞受賞。師林火逝去につき松崎鉄之介先生に師事。昭和五十八年「濱」同人。俳人協会会員。

著書には句集「ねずみのこまくら」「ももすずめ」「さざなみやつこ」「ぱらりとせ」「鳩信」「燕音」「宿好」「随笑」「寒暑」「素抱」「石鏡」「暮津」がある。

インターネットにて平成九年自分のホームページを開設し俳句作品等を発表し始む。

平成十一年インターネット句会を開設、平成十二年「俳句検索データベース」を構築・公開し一般の利用に供する。次いで平成十七年「俳句例句データベース」を構築・公開した。

病歴として心臓病 僧帽弁閉鎖不全を患い、平成九年慈恵会医科大学にて「弁形成」手術を行う。その後 平成二十一年葉山ハートセンターにて「弁置換（機械弁）」を行った。

現住所 〒二三六〇〇一四 横浜市金沢区寺前二―二―二〇

季題別高澤良一全句集

二〇一二年十月一日 初版

私家版

著者 高澤良一

印刷所 株式会社平河工業社

東京都新宿区新小川町三十九 〒一六二一〇八一四

電話 〇三(三二六九)四一一一

© Yoshikazu Takazawa 2012 Printed in Japan